雅言集覧

よた乃部

837
13
79

ガラス使用

石川雅望先生輯

雅言集覧　三編

東都書房蔵

837-79

帝國圖書館藏

曽山文庫

根岸信輔氏寄贈

寄贈 明治八・十 帝國圖書

雅言集覧巻之七

○與の部

石川雅望　集

関　豊脩　補

よ　世【夕皃】廿三「さきの世の契しらるゝ身のうさに行末かねてたのみかたさよ【同】廿一「うきそくかくゆくへの代おもふくらん世も

ふりきちぎりながらみ【世々】【世千】ナドノ類別ニ出ス

よ　世。男女ノ【世の中】【世ヲ知ル】ノ類別ニ出ス【古今】（恋五　よみ人しらず）「秋のゝや世のうきにおとろへひと人の心の花と散

間ヲイフなり【和泉式部続集】「世こそなほあさましくあれ時ならうらきん物と思へるし

よ　世（世の世）【古今】秋下（よみ人しらず）「かれる田におふるひつぢのほに出ぬは世を今さらに秋はてぬとか【玉葉】春下（永福門院）

ことしきのうき人のけしきにやよそへて花のさかりをぞしる【古】雑上（貫之）「さくらちるとも

なほさきのいまをもみちのちるらん世のつねなる【続古】雑上（知家）「いろさまに秋の世のべなるさ

やなよひそむけどもかの身にして【続後拾】雑下（寂蓮）「たえてよびぬいさでいりもかくもあれよふうら紀物

ぞ山の端の月【続拾】雑三（上東門院）「時の間もなしゝけるをくさまへよみふてびもたむろざらまし【新続古】雑五

（よみ人しらず）「いづるにいつそむえそむくさもよしえよるらぬ不ありやは

よ　代【新千載】雑中（入道）「めぐりこしこのをまでもつかへきて五代とへぬる宿のくれ竹【同】（為昭）「九代のあとにつ

くさくさしをへぬる代にそのおひ出ゆきて【夫木】（読人不知）「我ながら友をぞたのむをぐら山あらねど

ふりにし三代の古松【古今序】いにしへの代ゝ常【同】とへかしこ世あまり代へとつきにあるなりける

よ　齢【拾遺】賀（よみ人しらず）「君が代をあまれ羽衣はまれにきてなでもはきぬいはほなるらん【同】（一条）「君が代も吾代

もしまとやいへしろの峯の苔ねといざむすびてる

よ 節。（竹芦ナドノ節ヲイフ）[後拾]雑四（大弐師経）「みどりはさしもかへらぬくれ竹のよの長きをや秋としるらん」[同]恋二（定季）「夕ふまはいくへ竹のふしごとにへだつるがまゝにしもかなしかるかな」

よ 夜 [古今]夏 月のおもしろかりける夜 [同]秋 七日のひの夜よめる [同] なぬかの秋の暁 [同] 寛平の御時なぬかの夜うへにさぶらふ（ゑ）[スマ]四 夜にかくれて [同]（十三）夜につみそいそぎ出るよ（付物語五）

よ ○世（中ノ世ヨリ溥シテ時又折ドイフ心之）[六帖]二十 [万葉]十三「よろづ代のひきつき世よりなれきされば我弟身にかゝる夕（よみ 五）どふ [枕]四十 ふるもひるを故上人のたゆみおもろふ [為光]二（院ノ葬送のよ）[続後拾]哀傷 たのみし 常縁 ふ代まるぐかなしさ [カゲ日記]上下（十三）とあるもいとあかゝるよふ中ねふや三位ふやなどころそあひをしるきの山も大空の霞にかすむよふてをありけり [夕霧]中四十三「白くとても絶えでめくるめしうたまひどよきいづるまたる人ありき [大和物]五 さて人ふかしましけるよふよびまりける時 [楼上]上四十 空の雲のさるとかしくらうがへしたらありそそてのこゝそのよふにねかんあんいときゝすゞかしを [信明]三十二「波しるく松のかくまるよふやあらんたのもしくぞらひまとこいふ [中務]三十（ゝらふ人の物のひまに）「うつくしも夢ともつきぞ明ぬる代いづまたよふうすへるべき [帚]十九 ねげるちやどぞ代そもたもくてんねるる世のやとまろかさのどかに思ひなさまでたてんもあらねど [苔のした露]十七 今ひとたび見まる世のやと命をさくとしねうみまてねんごろける代 [ワカナ下]二十八 人づてならでひとこと代もののあひゆぬる世ありなんや [後拾]夏「ひとといへとこえもうきこきもたのはまで大和撫子ちる世みしやへ [元世宣]五 おもかけたるよみなくひえつくろひ [明石]十三 おもひろげのえなるよふなることを [栄花八デゝ夢]二十六 めくたゆむよふうきたいのりのえるしゝやはや

[椎ノ本]（世二）浪ゆまのよもなくて

よ ○（テニヲハ之）[東屋]五十一 こゝとおねうなりと思ひもしもいふよ [紅梅]一 故致仕のおとゞの次郎なりうせたはひもしも右衛門督のさしつぎぞよ [竹川]七 かんの君の御子らかられ大納言になりなるゝよ [宿木]

ろ

四十 たえまふても物のえゑめにはなるよ [元世宣]九 見はしぞまちなへよ [かげろふ]九 後夜の御かぢふれ物のけいきえぞあるよ [実方集]「かげとほむに浦そくもらばよりそらやのしるしくけふまさむせびつく

よろづよ ○（ヨロヅヨケタルベキサマヲイフ）○人ノサマ。家居。門戸。書テ [あはれ]四十二 なちゐるもおさまりよろづよひくよろづひたふまて栖よりも落ぬべきりば [よもぎふ]十二 左右の戸もよろづひふまかけまぞたるのこどもおもてくおもけさるべ [仁徳]十四 豫屡戸志杙かんのみぐ 豫呂朋譬喩玖伽茂于羅愚破鮭紀 [夕貝]三 おのもおのもおやしうよろづひきむくしからぬものつまなどふ [王ろふ]十五 てへそうなぶさちてよろづみしれど

よろづ ○万事万端（何事ヲモ）[若紫]（三十三）いでやよろづおもかしならぬさみふおもしとのとありて [同]二十二 いとでおのうてつふぞぶ代志つらひよろづ代ゝくのへなり [枕]三十二 よろづよりハ牛飼童はなまし物おぼし志まぬべきゆんざめときゝてかうよろづの法あしつてのよろこそあまし（何事ヨリモあしくあれこ）[東屋]六 物おぼし志まぬべきゆんざめときゝてかうよろづのさしの学めんにぞあんなもくまし代のまゝぬ発ろめるふ [初音]十一 かみかよろづのさしの学めんにぞあんなもく [手習]二十 めのとよろづふいうでへなまし

よろづふ [東屋]四十二 よろづふえぐはんとおもと思ひしうくふみさんとえひいらまし代 [宇治]四十二 いづちともうくう世ふなりくよろづに発るれども方もしらばやうにけり [ヲトメ]二十六 よろづふゆかへどもかひあるべきさまもあらねば

よろづにつけ [総角]五 こうろうへよろづにつけ物しめやうふひえりあくる代 [竹川]二十六 後の物え世まし代とよろづふほけさく哀まきつり

よろづをすてゝ [楼上]上下三十二 いとおゆてよろづ代捨てく志づうふこのり侍りて [宇治拾]九ノ三 年比いのでまらんと思ひきくるまゐをけかちくよろづ代まとそてまうまはひつるなまし

よろづつゝまで [カゲ日記]二（三之）とあまいはばばちくよろづ志まさく上なる代いそぐ

ガラス使用

よろづよ 萬代 [万]二十八「たかてらすわが日のみこの萬代に國しらさまし嶋の宮はも」

[古]雑上 よみ人しらず「あづさ弓いそべの小松たが代にかよろづ代かねてたねをまきけん」

よろづのこと 萬事 [きりつぼ]七 よろづのことをなくなく契りのたまはすれど [帚]廿二 よろづのことになどかはさてもと覚ゆる折から時々思ひわかぬばかりの心にては [関屋]五 今はましていとはづかしうよろづのことうひうひしくなりにたれど [たまかつら]十四 よろづのうれへも忘てめでさせあり

よろづのひと 萬人 [堀太] 子日 師時「子の日すと萬の人のひきつれて千年のべの小松なりけり」

よろづのもの 萬物 [神代紀]上ノ十二 悉生萬物

よろづのあふぎきみ 萬兒君 おほきみ 。是ハ猶萬兒ヲカズスベテノ中ニテ心之 [栄見ハテヌ夢]六 摂政殿（道隆） よろづの兄君は宰相にて

よろづよ 下ノ **ヨロヒ** ノ所ニ出ス

よろこぼひ 。悦ヲ延タルノ [イセモ]十四段 よろこぼひて思ひけらしとぞいひをりける

よろこぶ 悦 。常ニイフト同ジ [神代紀]上ノ四 意所歓（よろこび） [夫]廿六 述懐 権律師永観「よろこぶもなげくもあだにさだめなき世のなごろはいとふなるらん」[同]同 他阿上人「なげきゆゑなげきはなげきをよろこびそのともしぞこそなげきなるなれ」[きりつぼ]十七 よろづの人のかひふかく物しうましよろこびはつひあるさまゆとも我をおひつゞり給ふ [同]十二 かくありがたき人にていめんしたるよろこび [夕顔]四 やくおそしはしるよろこびを又るそはにかしこまる [いせも]三十三段 よろこびてまつに [紅葉賀]六十八 の日をもおどろしんともよろこびきこゆ

よろこび 。仕官スルコトニイヘリ下ノ [詞花集]ノ哥ニテ賀字ノ心ナルコトヲ知ルベシ [柏木]廿二（柏木の任官のあふれにタチキリ給）なをかゝる悦びに いさゝかよろこびのやとあかとおもひ侍りつる [紅葉賀]六 上達部ちくは皆さるかたかたぞせのよろこびしあるも [竹川]四十一 此の源中納言に三位の君は宰相にてよろこびしあへる

[国ゆづり]中ノ十二 宰相になりてよろこびゆるさせあへ 宰相の中将の君こそびのよろこびをし侍りぬるこそ [続紀]廿八 朕一人乃未慶（よろこび）貴之貴岐御命受賜弁卿等庶毋共喜止弁為毋奈 [国ゆづり]巻ノ羽 よろこびゆるさるゝよろこびし侍りぬるハ任官シタルコトヽ よろこびにあるハタゞウレシク思フトニ

よろこびをそへん 。兼官スルコトカ又前ヨリ向シク官ノ進ムコトカ [行幸]六十八 此中納言にはなりぬれどよろこびそへんとおぼして儀にはさせあよ せさせ給ひつ院も悦び聞えさせ給ふ折からの人にあはるよろこびをなんいちそへやらん心地しはべるさひけしゆあよ [詞花]別 左京大夫顕輔が加賀になりてくだり侍りけるに云く 俊頼「よろこびをくはへにいそぐ旅なれど思へばえこそとゞめざりけれ」

よろこび 。賀ヨロコビ今モイヘリ [古今]雑上 僚にかうむりのたまはりてよろこびいひつかはすとて 右大臣通俊職人にかうむりたまはりける成やどつくよろこびいひつかはしけるもとへ [後拾]雑三 よめる [柏木]廿一 柏木ノ任官セシ時ニ大将の君（々キテ）云く 此悦にもまうでたまへ

よろこび 。何ニテモ謝スルコトミウレシキコトト礼ヲ云心之 [竹川]四十一（アネ中納言ニナリシナリ）中納言の此悦びにさえの内侍のかんの君にまうでたまへり庭の前にて拝しなりなん [蓬生]一 いとうれしうゆゑさせたまへり 拝伐なりせたりしよろこびの聞えさせ云く [同] 此僧にはよろこびのひとりなるとかや [蜻蛉]十六 此悦び義なりしおりからもいとゞなんなどいひよるよりなへり [著聞]十ノ廿 かの嵯峨大明神の法えうひふくくせあよ若えられぞ久清をさうくより嵯峨に法かう法つる人のあるまじくたのもしく覚えて後よろこびはゆべしとひきえしてけり [宇治拾]七ノ五 此桝子の悦びはいひおくれたる方もなきことども かゝる旅の道にくいうましとおもひなり のうへいゞせんあまりくんぎしたが伏さまとるなり〳〵にかほうばくあまし 此桝子なりよろこびをのべせんおとるぞ此ひとく [同]十二ノ九 此悦び義なりしおりからもいとゞなんなどいひふらよやぬなり

ガラス使用

よろこびなき ○ウレシ泣ク 明石 四十三 都の人も御供の人も命のぶる心地して行あひ悦びなきもゆゝしきまで立さわぎたり ミヲツクシ 十五 入道例のよろこび泣きしてゐたり

よろこびのなみだ ○ウレシナミダ 若菜下 十三 尼君もやゝもすればたへぬ悦びの涙ともすれば落つゝ

よろし ○常ニ同ジ ヨキ心ニ 雄略紀 十一 こもりくの初瀬の山はいでたちのよろしき山 萬葉 六 四十三 國はしもおほくあれども里はしもさはにあれども山なみのよろしき國

と 明石 卅 思ひてよろしき日見せて ミヲツクシ 十 よろしき日なりければいそぎしるしとゞひく 夕顔 六十七 あさてなん日よろしく侍ればとかくのことゞもいとかしこき御祈禱のあひだも侍るにいひくらひ延 侍りぬる 東屋 十三 云々 よろしげにいふ時に

よろし ○大抵 十分ナラズ七八分ヨキ也 堪忍ニ 蓬生 二ノ上 あいなきものゝあやにくに云々 将よろしきなるはしれかへりて も侍るなるを云々 同 三ノ上 あまたとしよろしうなれば 大和物 六 女子三人なんありけるを このおく をひるなれば 将世におぼしとうおぼさせとよはいひぬる 枕 三四 春ごにさくとらく様状よろしう おもふ人や有る 若菜下 八十六 ん御心よろしくつりふく侍る状 やどり木 四十三 人他もたやまりくのこ侍る をさよろしくひかへらんなどに何事もさてうりさひぬるけしきなるが 椎が本 六 そこよろ こなくてよろしうみえしこそよろしきうならば今様んじくなど行ゆく嘆えのへ 宇治拾 四十三 むげに かぎりとみゆるかどにもよろしうなりく君子状よびく

よろしき車 柏木 八 よろしき車よ だにかゝるまうれのうえにならぬやうなるさまざまなるをは慢しておもきにいひふるし

よろしき人とゐ **よろしき人** **よろしきなつき** **よろしきおや** 夕顔 十三 よろしき北をまうのひかきさそ 蓬生 二ノ四十五 いかでせん法車みづからあつかさせのたびえくよろしき人ならばそのやとひ侍らぬ唯今の一の人ゆく太政大臣も君にあへども世ぬ君ぞや 浮舟 十 さぞうりふて世に見たるもなかべくのよろしき人ゆへあらじ 帚木 四十五 あそびのなどやよろしく聞えし

人ぞうし 宇治拾 八ノ十 ただけふなくくいだいとかしきまでよろしき義あらばこそとて助かるらん方ともうまへやすまうへんとしたびにゆくもののおかしきやうもなき罪なきべいぐせえとりかに 蜻蛉 廿三 あまりてよくしうえづらしげなぞおそきるよろしき祝のおほひろしづらんにそたづ孫出さまあへまし

よろひ ヒトヨロヒフタヨロヒ 若菜上 四十 らぶんのつゞしをまなひふれとも和琴もおもてゞ ○鎧云日本紀 弓矢一具 国ユヅリ 下ノ二 をしきのたてまをそゑるへぞ例の雀二た志うよろひてあり私おひて

よろひ 鎧 長門本平家 十五 其勢いづく九百よきさ云々 よろひきたる者二百よき 和名抄 十三ノ七 唐韻云鎧 和名与路比 甲也 釈名云甲者似物之有鱗甲也 後拾 雑一 人志まだにれつるのこゞのまき状せよ みえのまくれにねむらさらむかし

よは 夜 古 雑下 伊勢 廿三 大和 五十三 風ふけば沖つ白波たつた山よはにや君がひとりこゆらん 大和 五十三 かさゝぎのわたせる橋の霜のうへをよはにふみ分けことさらにこそ

よはかうこゝろ 栄花 十六 ひろき所ならばたゞにおぼゆるに世の中こそあかるさまとおぼえしまし 世のなかありさまかうつくもおもひ出えさせぬわざなし 同 十七 あえまなるたのむけをいづこも世のなかうてをせとみづからもあさらしてめでたくなりさまざまいひて志らのまうん

よはだ 夜肌 六帖 五ノ上 ひとり寝の夜はだのさむきをさむくおぼえず 菊の宴 下ノ六十三 あやしくなどろ世なる事なるたる世とまひへしかの 国ユヅリ 中ノ六 えあ侍 昔の人ぞ今も恋しき

よをなるまゝに ふの世なる事たるにさくおもひのへなぐさむやとぞ云々 帚木 十二 世なる事たる法づらふごにえひかるまぬうし かげろふ 八 いと世なる事たるもとてありるらぬ人もあふさくえるえるもえせじ

よをやう 四方 二十千 大たなるえのよゐうなる中に穴のあえたる中より出る君の清くつめさきうす

よぶこ ○呼子 [拾遺]賀 仲算法師「すゑるくまさきの山ぞよぶこなるなるあめのしたこそたのしかるらし [續補集]「万代とおもふこゝ山ぞよぶこなるひさしき君がさかゆべしとぞ [千載]賀四 [敦政集]下二「山城のこづの里に妹ゐていくたび淀のわたりよぶこなるらん [万]五廿 里長が声は閨とまできたちよばひぬ [宇治拾]九ノ二 七八丁ゆくほどにうしろよりよぶひゞく 馬はえせさくるりのあま [夫]廿三 権僧正公朝「よぶへるもいづらへかへる松が江のまちえかしはね秋は来つく

よばひのくちる [まきばしら]十六 よばひのこゑの宿などひうとまらんにとまりけり

よばふ 男女ノユラフ **ヨバヒ** ノ下ニ附ス

よばひ 齢 [末つむ]廿三 つやゝの人にうらゝらもあるはよばひや [夕良]八 はよばひのほどくのなひゑめで吹えたるさまなど [同]十 女をいと物おもはずなるはべく物がしなめたるはなかざるあふくよばひのほどもあげるく云々 [古今]十五上（さるのおほきおほいまうち君）「年をへてよばひへしかぬこゝろへあまたど花を云々べぬるひもなし [東合]廿三 よばひゝらゞくつるさ待ちのぼり [若紫]卅六 いとむげに見るらぬよばひ乃まざゑらぐあらうへのおもむけるもゑしたまゝあらぢばゆかぞらぬるはなどゆく云々 [アカシ]十 のこゝまのよへひつむ盛えにゐ稲のくら町卅などゝ云々 [若宮]七 のこゝまのはよばひがねく物しきふらん [若上]廿三 のこりきこくなえよばひの方どはくはありさる然えへるまづさらせと命ぜでそなひつま [あくし]廿七 打わきあひぐぜあひねことうえはよばひのなどぞ [拾遺]雜下（みしりはこのなくまかりでゝ）元輔「いにしへをのがりやあらん吉野山やまよりよばひするへ [ヨトメ] 業平朝臣 いかゝあるゝはくるみえのよばひの末よんあるてもあはざるらんと吹えあふも [柏木]卅 ゑ十八を十どりえそたるはよばひたまどまよりねるらんむしあひく [新古] 寂定家「我乃然ものべえをはかるらんよばひたゆづまきしまの松

よばひ ○男女忍テ相逢ヲ云 [古事記]上廿九 佐婆比 用婆比尓（ヨバヒニ）云々 用婆比尓 [万]十三「他国結婚尓行て太刀が緒も（ヒトクニヨバヒニユキテタチガヲモ）未とかねばさよぞあけにける [竹とり]二ノ一 よるはやすきいもねずやみの夜にも

とかしとよりのぞえかいまろん はぐひあへゑさる時よりなえよばひとえいひける [妻つら]千 けさう人る夜にゆくまたるをしてよばひとへいひくれ [いせ物]十段 その国にある女をよばひたり [大和物]五 あまもおほれど仲納言の女のこと然来はよばひ名りのひく [いせ物]六段 女のえうまじかりけるを年をへてよばひわたりけるを [大和物]一 故式部卿のゝ宮の三然桂のこをせちによばひたまひけれどおはしませざりける附（○女ヨリモイヘリ）

附 **よばふ** [くら開]下卅三 えゑるはぞいへるどゆも出さじかどしてありけるに此仲忠のおほせちにけまく云々 [東宮]五十七 よばふ [イセ集]六 又同じ女然いふこともなくいえばこもなく年をゑへくよばふ男あり名大将をめ陸のかみ娘然みんよばふなるなどもさうあしてん云々や

よばひぼし [三代実録]一十 有流星自東南行西北 [夫]九 為忠朝臣初度「うらやましたまえ然まへらのよばひぼしふるれば出て光をまさるらん

よばひのつかひ [くら開]上二十三 春宮こと宮のそらのよばひの使はあけたくべ立めぐりく

よばひぶみ [忠こその君]廿 ゆくありめはくあまばゆまぐしけるを女人のとあらあんとまとるによばひぶみのやすらとあらぬなるへあるづらし むかうのありあひとろはくまくやくのあふ [同]四十三 いづこのよばひぶみのへしとうへひとさびゆるのあらん一ぴくの中にこぞ一あまもあめのあ

よに ○キット ハナシテ ヲサメ心 ○クレグモノ心ナルモアリ ○コト外 ヨモヤノ意ナルアリ [後撰]恋五「さぶら浪まなく立めるうら然ても世にあるとも見つるをとまに [後拾]離一 [横]君を方めくなるのそらはなくするとも世にあふの関のもゆるさず [初秋]上九 すなほどもさぞ世に人ゆへおそき稚さおもわしたまとえそられはあらじ [くら開]上二十 東宮の若君へてはアそおそろしきめろゝ世にあはまし。（よにあまの心 勅云アレソ心々） [夕良]五 げに世まよひくだおもしるべくらぬ人のほと年そど [三もつゝ]廿三 よたつはしけるるやえざまふく [同]卅 うき物にあのひおるまし捨り此しをうんよにいとわしう

帝圖

をひあつる[栄花]十ノ廿七 秋なればこそ世に似ずさびしかるらん、のがるゝ地し侍るなど啼へさせる[同]日廿六 さかのひつるかぞよにおとくさくえつけし宰相とそこのほどならんとおぼしつゝとて[大和物]五其 ふさなて世にえあへど、たゞ袖ゆくゆせよといひけれど[狭衣]一上三 さらびあえ法志といひながらには 事なさらば我もあまごとよにはりせあへど[同]一下九 さぞさぞくあるまにて月にふさびいひあてきて させばあるみまどくくしようにたくへ侍らじ[宇治拾]四ノ十 我は女世に稀なくありて此ほど何とかあらば 大殿の下家司のいみじき徳あるが妻になりく[いせ集]四十四[新古]別 山いろそらくゆあきんとせらん[初秋]上四十七 只今左近のあくゆてはあえ志去とのかく出来とありつる 此よにもまうでし[宇治拾]九ノ一 世ゆく御ころにあてあしありつる郡司のまあ此うしろめさなれ るいとをしなまこ[桂桂]廿四 よゆへんとけねはのてあしはよくけし死あし[三代実録]十二左 然止毛件輩波世 系毛不在止思保之食 天那毛 ○[世に似ぬ][世にゆく][世にいへぬ][世にあらじ] 別ニ出ス。○ 是ヨリ下ヲ略シテ記ク 波ヌ心 天下ニトイヘルガ如シ コトノ外

よにいる

[堀川後] 賛 大進「梓弓よの月くらし諸人の夜にいるともあそびつるかな[まあむ]廿 おとで夜にいりてはうぞあへに[夫木]八 法性寺入道前太政大臣「うれしさくもりさ雑ぞおりる白髪るゝ中ごと夜にさらぬちかくさるゝあれらん

よにゝず

[竹取]十下ノ五 かくや姫形の世に似ずめでたかる事を御門きこしめして[吹上]上ノ上ニ 吹上宮ヲいげるあべし世に似ずとあん侍りける[国ゆづり]上ノ九 こぞの春人にきゝ世よく おぼかで法師のまつりあひきやる世に似ぬ物あぐ見ゆるちゝなどのあはれなるよ ○男女ノコヲ ○アナタコナタニカシヅラレ知ラヌライフ ○世ニスレヌトイフ心ナリ

よにへぬ

[後撰]恋五 女に物いふ男二人ありけりひとりにかへりごとしてと申して今ひとりがつらくへしけるへ「なびく方ありけるものをなよ竹の世にへぬものと思ひけるかな[同]门 女のかへさりぬべきを申さく 法のそこなる「夜にあはでぞ久しくなりにける竹の世にへぬ我ぞふしぬといへん[いせ物]昔 男女いはぢ世をはなれおぼえたる人のほかりにて志のびて物申けり。後わがへくゝ男おこし

附 よにふる

[古今]恋五下 小町「花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに[後撰]恋五「忍びてよるぞあそうたれし竹の世にふる人のいのちぬなれぞ

よにかくる

夜ニ隠レ。○コレヲ世ニカクレテト源注ニアルハ誤ナリ。○夜ノ間ニカクレテ之[家政]十上 清少志のぶる昼々ぎ ありまたまぬ夜にかくれてと何も思ひくらん[六帖]五[貫之]廿上「夜にかくる月をぞまちつるひろくあくらちぞの俗[同]にあまくもておぼさるゝかな[国ユヅリ]中ノ五 コモリ君ル宰相ノ消 やくおかりくゝのやまの世のかなるをいのでろうゝよらざらんこそ夜にかくれをく出たちあへ[スマ]四 おほいどのに夜にかくれていたりあへり[かげろふ]中 夜にかくれて出させあへ[発心集]四 月くまぬまなく夜よかくれて使よそへ来つゝおきつ[落窪]十ノ九 おほね子夜にかくれて面のひろさ六七尺だろうなる石の四方なる夜あまて来りてかのまんの口より出て[玉かつら]十 けさうへは夜にかくれたるをこそよそひとそいひくる[十訓抄]一ノ三 夜にかくれ、あんへ出さく[長門平家]十一 ひるまなく夜人めちさく夜にかくれてぞ入る

よにつき

[スマ]十三 ひるもあまくなければ夜につきてこそいふそだ出あへ

よになく

○又ナク無類ノ心也[桐ツボ]三 世になくきよらなる玉のをのこみこさへうまれたまひぬ[同]十四 母后世になくかしづき聞え給ふ[空蝉]四 むべこそ夜の世になく八百よろづの[illegible]下ノ四十四 たゞ此女夜世になき物と思ふにめでたかるかぎりなし[同]上ノ廿六 此義ハこき種おほく里てえなへぞ世になくいろめかしき様なりけり[楼上]上ノ廿二 世にならびなき風吹白ましくり[紀補]十四 人香こそ世になけれ

よにゝなく

○死スルヲイフ[玉かつら]六 夜世になくなりなはひさるまぬりとおひなるもいゝゞくのとなん

附 よにつみひと

[若ばな]四十二 今ハ世になき人の御ためよからぬをかひあべしおのずからあればひかさらひ申へあひさく

ほ

よにあふ 。時ニアフヲイフ〔蜻蛉〕五 それも世にあひたるめでたくはそ

附 よにある〔景八〕さぞ世にありと人にしられしさびしくあらましたらんむぐらの門は〔あづま〕芸 ゆく世にあるものと思ひねおやまのまつけそ〔秋篠〕（拾遺 先後）「たとへくも光まさねばやどの妻の世にあるへきつましみなる らん。是ラハ世ノ中ニ生キナガラヘアルヲイフ〔後拾〕秋上 赤染衛門〔家集〕「今秋こそ世にあるべきにゆかしれいつともかくや月をそふらん。是ハ時メク人ヲイフ

よにみひく〔アヅマキ〕七 いかにもく世にみびたるへらんをあるみちにそのまゝ見ゆかへりて猶のみをもしらびこと

よにのせて 。月ホノアトニハ乙数之 漢語 衆月 衆夷 衆夜トイヘリ〔紹忠〕五十四（うちまどにむかへらましく常ならんとそ輦こゑどおぼらぬあやくまのとあさく物のたるま）「あまのとのあくるまでにゆるさまでほど哉まのりてうへまねなるうる

よにふる 。世ニヘヌノ傍ニ出ス

よにある 。世ニナキノ傍ニ出ス

よにあふ〔さごろも〕六 世にあひ花やかなるわろくゆく

よにえぬ〔幻〕十「このまへの山吹をぞ猶世にえぬ花のさかりなるを

よにあらぬ〔相撲〕廿 世にあらばさとるかしこくおもはましバ〔枕〕六十三 書はさましるあまへいみじく定まさし夏いは世にあらずあつた〔帚〕四十三 世にあらぬ傍人のはうさも〔花の宴〕九「世にあらぬ影なくこそさしも有明の月のゆくへをそらにまはなくて〔楼ノ上〕上ノ廿一 ごくれあなたひとつをおもはず夢みてひたすらへ世にあらぬとそらにきこゆるひびく

よわろ 。足ノ折カゞミノ處〔和名〕三ノ廿 腘 和名与保呂 曲脚中也〔仁徳紀〕廿三 腘踵〔語系〕〔正字通〕膝後曲節中也〔楼ノ上〕下三 八九ッたなるをみなるそのこご髪もよわろそかにゆくゝ云ゝ〔同〕下十六 若君あくこはしゆかあるまゝたあへりさむまはいとおほゆなりけり〔同〕上廿五 いとあいしげなるワらはへのさけ四五人

へ　と

たらぬやど髪よわろそかにく〔栄花月宴〕大 八ノ宮ノコト はづかしげなるくよわろばかりにおか浅に〔宇津保ルハワウヒ〕七 おぼつかなよわろそかにく思えたる姿のきよらなるあり

よわろ 丁〔武烈紀〕五 發信濃国男丁ヨホロ〔金葉〕賀 参議家経「みつぎものえこぶよわろをかぞへしに〔夫木〕廿一 泉浦 家集「みつぎものえこぶよわろをかぞへしにおぼつかなさもさりあへにの里人数そひにけり あふさかの関

よべ 昨夜ノコトイフ〔蜻蛉〕十 よべまうのぼりしかど〔夕顔〕廿五 よべもはあそびにかしこくのとあまらせあひて〔枕〕一五 よべもかくまし君ひとくあるまりけりとおもまにくおちしけるに侍りなし〔同〕五十四 いてはここにこまして見ゆるはよべ侍りしそくんほとるくとひあかしてゐる〔国ユヅリ〕上四十三 大将あつしきのこれをとのあへぞ よべ我だにかかはまひよひぬ琴ふりぞよう見えやとのあひくふしあひて

よど 淀 水ノヨドミタル所ヲイフ〔新千〕哀一 恵信「うつしえの袖にせきとぬ瀬のつせの中ふぞ淀みありしもるえ〔六三〕〔万〕三 廿六〔新古〕冬「よしのなるえ(三)ぬ川の川淀にかもぞなくなる山かげにして〔古今〕哀一 よみ人しらず「たきつせの中にもよどみありてふ我がこひ家哀の寄せともる見〔同〕哀四「淀川のよどむと人をみるらめとながれてふかきこころあるものを

よとこのみ 一生涯ニ〔古今〕哀二〔貫之〕下四「よとこのふに流まきくぞゆく涙川袖もひらぬまるつとなりける〔後撰〕哀二「よとこのふにあへるまゝ川の遠くまにぞよそながるかげ我さぬぞひし見〔同〕日 貫之「しらずさぬ海とゆきぞやよこしのふにするめかくして年のへぬらん〔同〕雑一 中興「よとこのふ苦へふりしくありのあまゆく雲のさへりまにぞありける〔拾遺〕雑上「よとこのふあへいけらの松ふる浪我のしこそよるとしるらめ〔敦忠〕廿〔拾遺〕哀〔貫之〕十六帖 三「松をのこひときそれとおもへ（小町家集）にようこの小るのがまいつくもどりなりけり〔貫之〕十六〔六帖〕四「よとこのふ我ぬまでふさくるべよそふのさふるあるとやなりける〔貫之〕廿六「よとこのふ看の細そる衣ひまバのんえからん 無我見るおとふかふかさく君我子と世とぞあか

ガラス使用

とゝろくへもなし［兼輔土］［新古］［朗詠］「晴るゝよもあるゝよもよごとよごとにそのふることたらぬ［元輔］（も 朗）
「君とりは世の中はよとゝもに涙の水もあらせてしるる［宗于五］［後撰］（異本）「うらむれどこひしまどしも君が
よごとのふみそしぼるらん［若紫］昔 よごとのふみそしこの花のあとなしをもしおほし出
るわのやとこぞうちもさまにたりろを吹出るを［宇津保］下九 うせあひにみる心方をよごとの心意吹え
あひて［柏木］十 よごとこのかおそろしとおもひけるのむくいなめり［落窪物語］四 よごとのふ心ばかけてる法
あるりなま一ばそうろうしとゐるまど耳をまつりて［大和物語］十一 一生に男せでやもめにていふもこよごとの
いひける［若紫］廿七 宮もあさましかりし世おもひ出るたびよごとのは法とふうる我［源氏］五 それは
まことなまじよごとのことぞきにありて［散木］中三（田上に侍りける比八月ばかりに風のけしきも身にしみけるよ）「草のそぶ風あと
つまでてよごとのかみぞまちてもる秋のそらかな

よどの 夜殿［履中紀一］入室開帳（ヨドノニ）［和泉式部集］下「ひけだこそのゑのつまなるあやめ草さらぬよどのにあふをと
らぐむらん［夫］廿三［新］六 六 和泉「今も又よどのにむきしふすしも枕さだめ人へのちやくさなるらん
［和泉式部続集］「うた稀ふやくて秋よどのもえぬかへるさまてなみてわあやめかやしるる［後撰］哀五「おくあれのあはり
つれおきはおもりぶどおもふよどのへとかへれまにせけしや［後拾］（ハイカイ）実方「三日たえ秋のあちひらくそのとつづらえし
きけばよどのにそさこつむな［千］哀傷江侍従「みぬきてあやめのみもありたがらよどのはあまらんねぬとやみ
みし［皇極紀十］取馬骨投置内寝（ヨドノニ）

よどむ［続後撰］哀一 行盛「物おもふ袖にぞとる滝つせのよどはさぐめるかへすさるなりけり［万葉］一ノ廿七「さざ
浪の志賀の大わだよどむとも［同］五廿一「松浦川かはせのよどはよどむとも我はよどまず
君をしまたん［後撰］秋中「天の川さがらみなけくらでめるかあすどかりたり月やよどむと［散木］十六「ちはし
つのなをくとくいそふにちよどむとも雨をみちてやせなかなるらん［夫］廿五 俊頼「あぶしるることの湖をも
ぶみにあらしてよどむあとのせきけ［同］五 家房「こぎいでるふねさへよどむなかしてぞ堀江のくるづまがる

ち り

かり［古今］哀「たえずゆくあすか川のよどみなばこゝろありとや人のおもはん［若紫］五 あまこしおそろしき山
風ひやゆらに吹くる小滝のよどみもはさりて音高く吹出［夫］九 寛平五年云々「ゐせきる瀧のよどみにうち
そそぐあまごの蝶の羽ぞ吹たる［散木］十五（白川にてよみ侍り月よのどかなるをよめる）「志ら川のよどみにやどる月みればなびく藻深
ずくもとゞまりける［夫木］廿六 西行「甘くごとにてなかりし渕のあふよどみこよひむかしなみもる処涙かな

よどこ 夜床［好忠］八月中「ちはつる夜床も山となりぬらし秋の夜ながくぬる人もなく［夫］廿七 寂蓮
「よそにだによどこも志らぬの猫のうくねたまにそこあるは人［堀川後］余寒 兼昌「まだ
風のおぶむしろをやさしぶた旅のよどころさへかこそさえ［千載］哀三 教政「人ならさまらぬよどこのみ
とぢめつるかくけそきまに我すゞらめ［夫］廿三［新］六（冬夜）「ちゆりて竹のよどこのさむけきにわるに衣のうへや
きさまし

よとでのすがた ○夜戸出ノ姿［袖中抄］夜戸ヲ出ルスガタ之［夫］十 夜登 内大臣「七夕のよとでの姿見るまできりたちこそわたれ
秋風ぞふく［万］十三「わぎもこがよとでの姿見てしより心そらなりつちはふめ
ども［夫］廿一 為家 戸「つらかりしよとでの姿その手に今もさすさそまつがるしれ

よとせいつとせ［土佐日記］あるへおがさのよとせいつとせ

よぢりすぢり［宇治拾］五ノ九 ハコヲコリタル所ニ 左右の手につく尻をかくいふにせんくとよぢりすぢりて
まろぶとに

よぢかく ○［細流］ヨハリチカキ心之［万］十下 十二 朱雀院の今へむげに世ちかくなりぬらん也しくりのに
かぜ紀伊

より［夫］十二［和泉家集］下「風吹けば下葉の上になりしよりうらさえて秋は岩の秋萩［拾］六十二 其柱と屏風
とのあとによりて我もしるまりみよ［同］四 柱のあとよりぞ見せる

より ○文ノウハカキニカケリ［落窪物語］一 十四 入江の姫君の御方よりとて御ものあへり

より 明石十 又見まほしきまでくまなきに月のかげもやえん 帚七 うきまくの上までよりも非参議の四位どもの世のおぼえ口惜しからずもとのねざしいやしからぬが

より ○ニ心ニ近シ 梅枝十七 いはけなくより宮の内よりおひ出て身づからもはかなきことも（[illegible]）せく 竹取 おいらかにあたりよりだにな歩きそとやはのたまはぬといひて 宇津保十八 花より

より 小ニ通フ也心 ゆくへなき初瀬川といふ所より出 大和物四 芦になひたる男のかたゐのやうなる姿なる車の前よりいきけり 枕二十六 あじろ車わたらせける人の門よりつきたるをふと見る所ぞなくもがなく供の人ばかりぞうる

より ○比文字ヲ人ヘテイヘリ依テ故ニノ心也 夫三 能宣家集 「さしてゆく山のはもすぎて花のあたりのかりぐらしより 六帖 一ノ上 「君によりうきねの物思ふ人の心もなからまし ぬるよしを 後拾 廿 ○小兵 「誰ゆゑに我こそ秋のつゆとぬれけれ 夫十 和泉式部集上 わ さどと思ひし宿の花よりはつのもとにてさかりなるかな 後六 廿二 あけぼのにてなべてしらぬ山里よりいそぎ出るひね 紀貫之 十六 世の人のあらし吹きけりしによりて坊にもえまほしかるべきしを

より 時ノヨリ三 同ク度心 崇峻紀 五ウ 軍衆三度驚騒 持統紀 十七ウ 作仏殿経蔵行月六齋 信明 廿二 さえて後朱あるまじきによりて後れ出したる男の心をておほしかけず人のみなはかりてまかりねたるを 万代集 夫 十六 にほふかたの山里のむら雨によりて帰るなる

より ○是モ度ノ心ニヤ 同 小侍従 恋の二より 夫 大法性寺入道関白 「くもゐにともろともに花のさかりのころにより 同 六 ませかすかに見ゆる月のいくよりあかせくらしつ

よりどころ 華廿 初 よるべなき身をたのみしかたの思ひにひかされけるかな 拾遺三 よりたてぞあるべく

志たはうしろめたうおぼしてあるとなきを猶よりはなくいかでおぼしけるを 橋姫 初 おほやけにつかへ給へるかたにもあらぬうへに子どもの人なれども親のためにはしるべくぞありし 椎本 三五 人こそあれ子どものなき宮にあるまじきやうにぞ見えけるしとそこれに思ひよりけるにかあらむ 蜻蛉 四十六 宮人どもは まつりたるけに見えなどもいとかなくぞきこゆ 夕霧 四十五 草むらの虫の声ぞよりかたげになりゆくなるを

よりそ 白文 公七 天十 羽相 一つくるさの袖ぬらしらし鵲のよりそふかたる天の川波 方によりそひて木丁どもにまさりなく 夕霧 四八 さうしにまかりておはします 寝覚 廿 おもかげくまなく見るに思ひそめし我がよりかかりて経のうちひぬれば

よりうる 潮来一従 攬 三

よりうくる 拾遺集 上 廿二 「夕まかるさすがの花もあはでこそ刈るやのごと思ひしまゆまそり 古今 春上 貫之 「青柳の糸よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける 同 通服 あるさ ○糸二イフ くれどり糸よりけさへ志もをみにもぬけるまとの柳か 夫三 代二織への糸だたへとぞおりすまでにいとよりかくるも柳のみどり 同 三 「さそふ山に柳の糸をよりかけていまのまに風ぞ吹くなる

よりく 遊仙窟 時々漫語 同 頻々相脳 古今序 けくく我おぼえもぐさふたるへをいえ 竹の世にあへ 片糸のよりくぶたくぞありける 夫 世一 為家 「妹がうるいと井の里のたぐひ出よりくるに出づるなる

よりさけ 堀川後 隔一夜玄 兼昌 「白波に中らさせてくるより竹の一夜に後つるの日数を 同 廿二 後サガ院 「末の世ともよりぞびしよる竹の一夜も寝ぬか千代へん 夫 廿八 後京羽院 「西の海あら磯浪によりて竹の一夜にへりぬるの日数を 同 ○目 三百 後京極 「よる竹の君によりけんとぞうち一夜のうたにねのみ泣かれてきりそぞ笛のねをもたくる

よりつく 後撰 恋二 よみ人しらず 「ふかくて君が住むやし白いとのよりつくかぞ元袖にぞありける 桂 廿八 おそろしきに思うつつかげ

よりね 拾遺愚草 恋六 寄二へぬるやとぬいづる稚のみとよせあしなもまけあそらして

よりく 【夕皃】卅一 うしろよりよりくる心地も 【蓬生】六 此君をべうようの袖にふまとぢくよるとぞうたれば 【寐覚】初 むかしの罪ある

よりふし 【末つむ】九 袖ほしくえしこゝろ地してもまさまずげにくよりふしたり 【やどりき】卅六 かのまそうしづまるなる人こそ心地よげに見ひそぞれて さまうえやそよきふしあへり よりふしならんうらやましきなゆかりし 【更級日記】 袖ぐりしてよりふしてあるに 【夫木】【新六】五 光俊（ひとよりぬ）「さり 次の路さくは後によふせわが翁をさふぞるよしもなし

よりて 今イフ（仍テ之） 【三代実録】十三 十六 逃退多利仍テ其身侍留限波 【同】五十 十六 歡崇此所念行須因テ今礼代乃大幣帛乎令捧持奉出 【千載集】序 伝教大師を我立つ杣のことばをのこせりよりて世々の帝も此の集をてあそばざるをや 【仙洞滝川歌合序】 後れ 古えにしへの道今の世の法作きくるまでもんよのこるゝみなしよりて近き年より此方ふかく読る歌々ちりこえりにけれども云々 【新古】序 ゆめらし又及びぬゆめもあるべしよりて古今後撰の歌あらためにぞ云々 【九条大将家和歌序】 秋篠家 慈覚大師を月日の過るにより歌志らしめあめつ 【神皇正統記】 ひさかたにる人とす あひがたべあるしつこのあへよりて天上にのぼりすゝんで云々 天下を経営し葦原の地を照しあひたりよりて大日本国主の称とも大地主ともいひ云々 三年になりぬよりて名なし 雉をつかはして云々 天にある物日月よりあきらかなるはなしよりて文字を制するにも日月をもととへり 【懐風藻序】 菅原実枝 此一巻あへるまざるべしよりて懐風藻と名づけるにぞ

。よそ 【額向愚向賢注】 訓強をとうけまど 【貪相老養記】 跋 ふかく慚愧の心を生じて和歌の広学をさむる英宗にあふといへども古集覚えをそあそびて晨夕老を忘るとて書蔵を義堯と号ス

よりあへせ 縫合 【拾遺】恋 天暦御時 三年 「琴の音に峯の松風かよふらし 【新撰】廿三 「青柳のまよの糸をよりあはせてこそもみづくら鶯の声 【夫】十四 よりあはせてなくなる虫の声のおね 【同】同

る

花山院「よるあらせなく虫のなくこゑぞひとくひとなくてうなる秋のよるべに 【同】同「下露やむまだほるらんむし此音のよりあはせてもまるぶるかとうるな

よすき 。よすか カヲヲル之 【後京極】 十九 百万の神七万三千の仏にはあらしはてぐらをまつるぞ仏神名よりきまつるなん天女とやさもゆりゆしなかん 【きくのえん】下 廿九 そんざし只此るゝあり天地佛神よりきまつるあかでともふ

よりひと 寄人 【夫】廿五 家長（乾尼）「和歌童乃音の路に立つりまうれ浦にぞ浪のよりく人 【十訓抄】十ノ大 兼房 まで後のごとく和歌所の寄人あまた出でて是より歌後鳥羽院より給はりけれど「志づきにたよるさゞらつみうら波によせくるやよのいまのまでふ

よる 夜 【新拾】恋三（よみ人しらず）「あかくてもなぐさめつよるぞうびしえまとりぬる身まで 【古今】恋一（よみ人しらず）「思ひつゝひるはかくてもなぐさめつ」 【後撰】夏上（よみ人しらず）「あかくてぞ世をれまりまへるかなくらしよるは蛍のもえこそわたれ 【同】五ノ十「うつゝにはあふよしもなしぬばたまのよるの 「我やどの梅の初花ひるは雪よるは月とも見えまがふかな いめにをつげてみえこそ

よる 寄（波のよるを） 【後撰】雑二（よみ人しらず）「人ごゝろきしやあら波たちけまべよるんるなさぞぬ孫くるなし 【後撰】恋五（よみ人しらず）「こゝませ夜のうらの白浪立ちはそてよるかどもあくかずぞありうる 【新葉集】冬 後村上院「志賀のうらや月ぎぬるさざ波のよるかたにちどりなくなり 【新勅】秋上 小侍従「あきつ風ふきひの浦による浪のよるとも見えぬ秋の夜の月 【新後拾】雑上 よらじやよせんあまのせとて示 【後撰】恋二 大輔「まちそれにの波に かゝるる 【金葉】秋 兼盛「ありあけの月もあかしの浦風に波ばかりこそよるとみえしか よみ人しらず「あしのねのいとまなくも見ゆる波ゐぬなりけり もすの玉もの床によるよる娘のよるとなりふねさゝぬ袖ぞな 【六帖】三

ガラス使用

白波はまくらによる月ぞさき【好忠】雑一 小弁「よをはなるよる浪は中ぞらふかよるもなきなげきをぞせし」

よる 寄

【万】二十四「秋の田のほむけのよれるかたよりに君によりなゝこちたかりとも」【同】四五「今さらに何をか思はむうちなびきこゝろは君によりにしものを」【万】廿七「うらさらゆく月のまち男かさなびめゆくよるともよるよもみし」　あひさくへやとおぼせど【蜻蛉】八 きぬ衣ゐりてよりあへるに【夕顔】七「よりてこそそれかとも見めたそかれにほのぐ見つる花の夕がほ【若紫】五 ありさまえあへによりて侍りしかば【赤染】七 やがて大殿にもよらで二条院にもあらでひたすらにゆひろを【狭衣】

撰集抄 法師「いとあはれのかなしくともいひなぐさめつゝあひかくもあそびなきさる

よる 侍

【花のえん】十三 女一の宮女三の宮のおはしますとひんがし戸口におはしてよりゐあへり【紅葉賀】十五 あづまや衣すびやかにひきてよりゐあへるに【帚】卅三 さしぞくによりおはした。

○**寄ツク** **寄来** ヨリクル **寄臥** ヨリフス **ヨリカヽル** 皆已ニ別ニ出ス

よる 縒

【万十四】「うちよりにさよ五日のよるあはせとが花橘をぬかんとおもひて【六帖】三「よくまつ人ぶよらぬいとえ川浪のさざらくへもぞよるとこ【浮舟】十三 火あかうとりて物ぬふ人三四人あつまりつらへのおかしげなる糸をぞよる【拾遺】八「むすぶて抱えあひよる。○抜キレンコヲキヅカフニヤ【古今】春下 素性「をしとはまさにひき乱るえどもよるぞなかなか【拾遺】雑下 ゑんにん「よるそのつく糸にやかゝるらんよるへもなき滝のそこに

○**よりかゝる** **よりあはせ** 已ニ別ニ出ス

よるとなく 倚ョ啼

【いせ物】夜「ねられたのむかもひさるに君が方にぞよるとなくなる
十四ノ四「我かなふるさとよりなるゝやの世のたのむのあさなの門かなとまらん【夫】二
素良「霧のよるとなく鳴る蛍をかぞくらもぎ山の杉の門のと【同】五 ちの「みよしのゝ月ぐたのむの方を

や花咲くらむもよるとなくらん。古注十ノ声ノヨルト●フヤウニ聞ユナリ。契云 屑のうちむまくひとかくにゆきさておりぬるをよるといふ

よるはひとがら ○次ノよるひとがらノ傍ニ出ス

よるたまりて 【早蕨】五 萩にまりて衣げしう咲出る風のけ衣かすご色めえてひとさむげに

よるたよりて 【土佐日記】夜ふりて物ふへいらんとおもへど

よるひるたゆ 【順集】三十二秋「むさとびかし白露は衣うつりのみなぶかるひるてふ色もかはらせん【夫木】八 蛍 仲正「よるひる衣あかひとりたえつれはかぞり申くるゝなりけり

よるべ ○ヨスガ之 ヨリタノム意也

【後撰】恋五 人にまとらるゝで侍りける時「ねるのねる身ハ浮草となりなんいつもよるかたに【古今】恋三「よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君がかげとなりにき【玉かづら】九 おのくかたの身のよるべとたのまんにいとたのもしえ人まつる【続古今】雑中 小町「よも我のあまの【夕ぎり】四十七 たまさかにはよるべにおもひ咲へあらん【同】十三 ゆのうとたちも年にへるよるべおもとてに法僧のねみへ入ありけり。此よるは 【帚】九 皆妻ノコヲイヘリ 前ノ内ニモ猶可考 うらまぐ舟の楫さへるよるべなき身ぞかなしかりける。此ひとかひきぐむ名えるよるべともだへりにおみずんは我かり生まれるほど【同】三十一 静かなるんのおかむきならんよるべ衣そつひのたのもしきにゆへおもひおく色かりなる【同】廿七 此人衣そまりにとも思ひさぶめ侍らぬよるべとはおもひねがふさまぐしくて【さのり】九 年比つかうまつりなまつるくのとうえよるべなういとゆかしげなる

よるべのみづ

【奥儀抄】四 【袖中抄】四二 其説クハシ 神社ノ前ノカメニモリタル水ヲイフ
【奥儀抄】四之十二 古哥二「神さびのよるべにたまるあまのきさかのうつさいの衣もぬねぶる【古今六帖】十六

よるべのみつにすめるとかさよ【夫】二十六 和歌名「神かけて君もあらがふなれはさかへのよるべにたまるみとこひらず【同】月夜「月かげはさへまたらしむ神がえやよるべのみずまつらくぬる

清ぐ 同 後九条内大臣「身にちかくよるべの水はかげるをみましどよそにあふひの草の名ぞうき 同 家隆「かげうつくさぞやすみなん三年ぬるよるべの水もちとせとぞくむこころも

よるとひるとの経　落窪 下四十二 夜昼経仲正いそぎ此時の人なりしかばよろづの人も及びしへ為家みづから年ごろありつる代ひるなにとひてよろこびあり

よるをひるに　栄花 さくら二「そのころ洞院殿もよるをひるにいそがせ給ふ　竹取 子安貝ノ所二 よるをひるになしてとらしめ給ふ

よるひる 夜昼　源氏 手習四十二 やうこうがよるひるといへばゆくかた 帚三 よるひる学問をもあそびをももろともにして 若菜上四十三 よるひることひ給へるに 風雅 恋五 「すずしきよるひるをのうつしみも参らなるらん 五四ノ四十八「秋ひるといふまだ志らびゆくよるやそれこそ 新古 神祇 盛衰「神路山いづる月日や君が代をよるひるまもる光りなるらん

よるべ　うつほ下 八十五 あれがからぬ筋なりどよるべこそありや 後撰 雑一 すそ「峰遠くたどりよる波をもあまてうき波に中宮よるべもなきなげきをぞせし 山家集 下「波よする洲もるや

よるべく　枕 十ノ二 釈シカクス ここそろに、よるべく家の内の土のおりて千内にまかせたてくここ 夫 五 為家 「うきねする家のこまりの浪枕よるべく夜の中ぞなきゆく 月清集 上「露ゆくきとよりぞ庭のまにしくよるべく出乃おとづれ後すれ 続後拾 雑下 為子「うづらなの床ぞうつりひてつくさきらんよるべくみやる夜のうきこえし

よるよるのさうにん　栄華月 廿二 清くて猶たびごとによる夜中つくびきらせ給ふ　円楚王ノ夏 十九 よるよるのうすうらびまつくとそこびらせしとのくいふられば

よるのにしき 夜錦　ハエナルカヒナキコトノタトヘ 史記項羽本紀 富貴不レ帰二故郷一如二衣レ繍夜行一誰カ知レ之者アラン

古今 秋下 貫之「見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉はよるの錦なりけり 後撰 恋二 よみ人しらず「あやなくてまだきなき名のたつた川わたらでやまむものならなくに 同「人しれずやみなんとこそ思ひしかたつ山のしづくに衣ぞぬれぬる 拾玉集 五「むつまじきいもとねなべき夜もすがら玉しく床の月も見るらん 加茂保憲女集 二 かばかりの宮のおほひに雨ふらばあさけのまにも思ひしりなん 新続古今 亭子「ぬのびきの滝のしらたまなにゆゑかなきひとの名をもらしはじめけん 夫 五 紀伊より京へのぼりて 紅葉 ちらぬはちらんまで 夫木 雑二 浦紅「すゑのよにたゆる紅葉をちるらんやけふのかざしにとりてかへらん 寂蓮集 下「紅のうすくれなゐの錦にて月はとまらぬ宿のしたかげの山のかげにいろいろの葉もなき山かげによる錦とぞ人やみるらん

よるせ　古今 恋四 業平「大ぬさと名にこそたてれ流れてもつひによる瀬はありてふものを 六帖 三 海「みなもとのおなじ流れになるとても人のよる瀬にみえぬまで 大和物語 五十五 大ぬさとなりぬる人のかずはれよるせもあらず　続後拾 恋三 為明「よるせなき身のうへになげくとも大ぬさならぬわれもゆかなむ 新続古 恋二 為教「身をよせしかひもなみだにうきしづむよるせもしらぬ我が身なりけり 新拾遺 又教 後字「よるせなき川の岩波なみにたちてよる世もなしとよめるなりけり

よるのおとど　年中行事歌合 寄夜御殿恋 良基「立よりてひきさくれぬ思ひのつまにつまごひせしのおもかげ 小しぐ 廿三匹 夜のおとどれをだかいとりしとこのうたの文めでたし 相模 大 人目成おばしてよるのおとどにのぼらせたまひてもはばかりませ給ふなし 年中行事歌合注 夜番 よるのおとどとりしとてめでたき天子の寝所おはします殿なり

よるのさま　お ノ部

よるのやど　いざよひ日記 傍よりさやかにかくるけしきにいとむつまじう白ひるまは秋のやどなるべし よるのやどを秋のゆめとしひとつのおもかげにのみなりけり 白文 二十三 縛戎人 夜臥二腥臊汚ヲ床席一

を

よるのころも 夜ノ衣 古今 恋二 小町「いとせめて恋しき時はむばたまのよるの衣をかへしてぞきる」同 雑上 方たがへに人の家にまかれりける時にあるじの衣をきせたりけるをあしたにかへすとてよみける 友則「蝉の羽のよるの衣はうすけれどうつり香こくもにほひぬるかな」宇つほ 祭ノ使「人々さんといふにつけてもうらしきの衣の夜の衣おもひいでられ」続後拾 冬「くるゝよりおきてあくまでうつ衣のよるの衣に山風ぞ吹

よるのもの 夜物 いせ物 五十 友だち見をまくいとあはれとおもひて夜の物まで送りてよめる

よをいとふ 新古 羇旅 遊女妙「世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ」

よをそむる 夕皃 四 かく世をそむるさへ西にむかひ…

よをへて 天十二 延喜十三年よみ人しらず「かきつばたの…」新拾 秋下 よみ人しらず「長月の有明のつきにはるゝ夜はよをへても…」

よをとほす 拾 七八九 浅のおしたりのあまの…ちかへるらんさまる夜通して昔の…

よをり 節折 江次第 七ノ十 節折装束 節折蔵人 公事根源 二季之 拾 八ノ五 ○世抄のいふかるものの… 職原抄 後附八 節折蔵人 候二神祇官申 内侍宣也 … 注 …二

年中行事歌合 廿五番 秀長「…」

よをへて 新古 恋一「…雲にまがへつゝよをへてふる…」

七ノ廿二

よそになる 夫 卅 光俊「道ふかくたが世かはらで竹あむ門のまへの水鶏」続後拾 雑下 亀山院「さてもげにいつかはれんよをかへて…」同 同 哀傷「うちつけにこゝろぞうきさ…世をかへて…」拾遺 哀傷 よみ人しらず「我のみひとり浮舟のこがれて世をわたるらん」

よをかさね 元輔 千六 教実がもとにはまかりてつかさの…「世をかさね…」

よをひさしく 旬 八 ナキ人ヲ シタウ心ニ 世を久しくても対面せぬ…

よをとゞめ 夫木 十二 新六 鴨 夫木 八 部 公今略ス あかひ 甲 六「…」夫 廿七 太良々「萩原…」

よをこめて 千載 秋下 太大臣「夜をこめて…」堀川初 照射 河内「夜をこめて…」

よをそむく 夫 廿 後徳大寺左大臣「世をそむくかどで…」帚 十九 同 いとゞしく…世をそむく… 初「…」新古 雑下 行尊「…」

よをつむ ろつせ 二 「あながちに世をばむさしにいとゞ…」

よをつくさ 雑カ本 十五 こゝに世をしてんとおもひとりあへ…

よをへるらく 後撰 恋下「かくながらちらで世をやつくしてむ花のときはもありとみるべく」○毎夜 万 十二 八日 …トモイヘリ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』請求記号 837-79

ガラス使用

堀川初 秋 （俊頼）「夜なかなべ妻戀ひかぬる鹿のねをいかにせよとかふけゆくらむ」 淺茅物語 四ノ廿八 つまもまどろめばおそろしくぞおぼえて涙ぞこぼるるめがありしはさるなからにかふるなくて

よをうむ

古今 恋三（よみ人しらず）「おほかたは我名もみなとこぎ出なん世をうみべたにみるめすくなし」

万代 雑三 無動院法印時母後縁ほとく ひさしく侍るおと我おもひとくよそになりぬる 好忠「よさの海の内外の濱にうらさびて世をうきわたるあまのはしだて」 後撰 雑三 業平 いせ物語（六十六段）「なにはづをけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟」 同 雑 小町「あまのすむ浦こぐ舟のかぢをなみ世をうみわたる我ぞかなしき」

よをのがる

続古今 雑中 世をのがれていひ室にこもりて侍りける比（云々） 夫 廿四 西行「かくしてもあらでにゐるぎのミ世をのがるるその身によそなるあらひに世をのがれて後も賀茂の社にまゐりけるに（云々）

よそのことも

夫 十二 為相「霧ふかむ庭ハ遠くなく虫の声かげのよに秋のこともなし」

よをこめて

後拾 雑二（清少納言）「夜をこめて鳥のそら音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」 後撰 十五「春しくば川せの音に秋をこめて立くらずぞあかしくもえてまし」 後拾（法師）「めにみえてなつ見ゆ桜花はなれし秋をこめてちりにけるかな」 夫 十五 為家「こしかたのたけのこのりよをこめてたつみ秋のあさぎのくもりよそになりにけり」 拾遺愚草 下「霜もけさことしの世をこめておきまさるまでうすくばかりの夜をこめてきこえけり」

よをこもる

拾遺 世ゴモリ、トイフ詞ト同シ 夕顔 廿 世をこめたるさまにてかつひはいつごころなくなくぞ侍る

よをさる

世ヲ去ル ワカナ上 廿一 世をさらんきざみかしくもさかなのためにもあさからぬわざにかえあるべし

よをそむく

○男ヲ見ステヽ 夕ぎり 十二 世をそむきたる方のんやまもとにすみにおくれのめうとももよきましょう

夕顔 十六 やつびたる有らば世をはゞからぬゆゑもあらん 帚 四十二 むげに世をおもひしらぬやうにおぼゆまじきうんことつらきとうらみられて 世ヘヌル 世ニヘタル ノ類別ニ出ス

よをひびかす

附 よのひびく

紫式部日記 四 楽の声つゞみの音世をひびかす あさひ 初 おふしにさわぎて物のあそびごと好ましう世のひびくばかりせさせたまひつ

よわる

弱 夕顔 四十二 いとくらうよわりゆきあひて二三日にわたりぬるにむげによわるやうにしゆく 若紫 廿二 尼うへいとよわりゆきあひ「見」ハ 夫 十四 後成女「みむろ山柴の尾花末枯れてあらしのそこによわるむしの音」 同 十 家隆「荻の葉も枯はてにける声にまじりて宵のまがらぬ有明の月」 千載 秋下 後成「さらでだにそよぐもとよりむしの音もよわりはてぬる秋の暮かな」 拾遺 秋下 西行「きりぎりす夜寒に秋のなるままによわるか声の遠ざかりゆく」 忠度集「さよふけて鹿の音ごゑもよわりゆく嵐や吹よわるらん」

よをあかす

○独明ス夜ヲ見ステヽ。○今ノ案ルニ恥ヲステヽノステヽニ同ジク夜ニモカマハヌ心ニヤ 松四十四 朝ホノ暁ノ露ニ志 むしやなどさまよふたてていりぬる

よるそそる

拾玉 三「住よしの松吹風も神さびてよるそそる月の影さけにけり」 万 三ノ廿四「こよろぎのいそぎてまをきらとねだゑのよるそる月にきみひあかへるも」 夫 十七 為家「おちこびて千鳥うくなく鳴り/いづみ川よるそる風のさえにや志むらん」 夫木 秋上 人丸「天のそら雲るえそらにねだゑの秋のよの月のいろまくもみし」 拾遺 秋下 家持「更ぬけば月かげさむしかさゝぎの渡せる橋にをやさむらん」

よるそる

あさひ 十五 よるべに出きたるなどもかくしゆらとざまあらへる

よるべ

やどり 廿五 袖のけなどもかるよるべにまるありけれは衛まさえいりて

よるし

弱 夫木 四 為家「なにあきの花の枝に咲出て咲るべよるまきさらだの風」 夕顔 廿五 よろぼく

19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54

ガラス使用

めんなりゆける［きりつぼ］六 日〻におもり給ひてたゞ五六日のほどにいとよわうなれば［後カゲ］上廿丈 病ひづきぬ父よりく見ゆる時に病者のびてはやう［さかき］十三 [illegible] よわりはてたまへれば地ゆもまさりぬ 作る代かへりく咲させぬひとく［天］十五（俊頼）「いにしへの世の末の虫の音もつゆよりよわる秋の くれかな［古今］秋下「秋のなく霧のねざめそよわりゆく山の井のかはづの声ぞかなしき［中務卿］四 今ぞえ あえぬ仏のみよりよげになく［同］八 いづらひ侍る人猶よわげに侍るは［同］四十二 よわげにみえたまへば［玉鬘］廿五

後撰「まひもさもつきざるやとくにもよわえもて袖のなごりなりけり

よわえ 夜川［六帖］三 貫之「かゞり火の影しうつればぬば玉の夜川の水の底もえたり

よわる［いせ物］十八段 世ぞかり時つりにければ

。**附 よもすがら**［後拾］哀 後冷泉院の御時いとあつしくおはしてつゝしに侍りけるほどに世も尽きぬとおぼえて

よがたり 世語 ［若紫］十六「世がたりに人やつたへんたぐひなくうきみを覚めぬ夢になしても［蛍］丸 かく めづらかなる事は世がたりにこそなり侍りぬべかめれ［まきはし］「ありがたき世がたりにぞ さゝめきける［手習］十三 世がたりにても人の御けはひそんなるをきかせぬべき［栄花］十九 くちぐく世がたりにもまつべき年のありさまにこそ［同もとのしづく］一 ふるき人の御物語のはしまでぞ世がたり にくぐえさせめるを

よがれ 夜離 ［後拾］哀二「あはぬころにもわたでつらかりしよがれしとこのちりをだにせよ［[illegible]］ほで かくつらきよがれの程ぞおぼしよるべきことを［古今］恋四［六帖］六下「誰里によがれをしてかあさにしもきたるらん［重之］廿二［夫木］「ゐる衣川はてつくるまにまをゆるにつけつゝ夜がれのまさる［後撰］恋五「まねかぬよりの後のみかなぐしもののはぢがれせざりし［散木］上六八「おぐての まぬしめ中さてよがれせる山のけしきもそらくららど［夫木］廿一 季経「小男鹿の秋がれつまをかぎりさく ふしなれ棚くよがれざりける［新千載］恋二 家「ひとりねぞかなしく袖のつまぞくよがれしもののさこそ哉

急に［東屋］廿六 ためらひながらよがるゝくかよひ給ふ［紅白］十六 二条院に夜がれがちなるを［続詞花］恋中 紫式部「夜 がれせし山がつの垣ほやどへぬもつゆはざりけり［後撰］恋四 公雅女「かくらどもいひしかひなくいのちの疑 里にさくよのまさ夜中にたえるらん［拾玉］十七「うらうへのいかとしんぞひまもなきよの床に今夜身にしみてよ

よかめり 。ヨクアル ［落クボ］四 我がたの大いなのうへにゆかひてよかめりとのたまへ「まゐりたる家の人は世に見えてまほしけに侍るとのたまひしをよかめりと［帚］廿四 中川の しかれ共ずのがらひたいまつべからん事とのなか

よからぬ 。ヨクアラズナリ ［垂仁紀］十一 蛍古之風非良何従ヨウ［タキリ］十三 かくまでのひつる法師原にようらぬつらべ ならぬまきたのひのきしてんや。オノレガ娘ノイヲ卑下シテイフ ワラベノ而ニ出ス［まとま］十三 い ける世にえげによからぬ人のいひおれらん［ヲトメ］十四 よからぬ人のみたつれてきはざけくおかりのなよ もあらきなく［同］十三 よからぬもののうへゆくうらめしと思ひ咲えさせつゞけるの出すうできさる を［紅良］五 ありつるむらくのんげさうもよからぬもののつねのさひよろ咲しと見え出られでをり うん［ヲトメ］ノハイヅレモワガ子ノコヲ謙シテイヘルカ［あふひ］十 つたぐよからぬ人のせさせたるなるらん

ようぜ 夜風［夫］廿三［現］六 後一条院入道関白「うらうらやの堀抵のさすぐは夜風をさむそ系よあまるなり ［続千］冬 為相「あはの川の音ふかしむきそ出のようぜ吹かむそらどふらし

よかず 夜數。逢夜數［カゲ日記］下上十九 あやし出るやどにおいるう

[illegible]

いまかくおもひあれて数にいとありしなり里とおもひあまりてたまさかにこそ いまもまとめぬ世にもと逢ひもかいしほどに

より羽しなる了「雁時にかひし数のを数ぞふるにぞ志ぎのはし羽も〳〵さぞをなく

よゝ 代々［新千］雑上 紀忠「代〻のあとをまもるとすべらせたる菫の露のあさぢの秋のよの月［新勅］貫之 「つみをしとよらの夜につみて世てよそをへねまどえまむめくさだ［続後撰］実順「昔よりきも かえらぬ川竹の代〻をむぞそろそなさらん［古今］序 くれ竹の世〻にたつてく人のようくさらへ

ガラス使用

むぞありける **夫木** 十九（五百番 大納言通具）「此きみにあへぞうまれし千代〱の風吹くにまかするまろのうらなき」**拾遺恋五** 上「庭のおもの条のふしぶしてあまえてよくふりになる竹あめるかき」

よゝ 世々。（是ハ男女引ワカレテ別々ニ世ヲ経ルヲイフカ）**夫** 廿八 兵部卿元良（ある女にふみおこせたり竹姿さぶらふそ）「志の竹のふしぶしあまきにみゆれどもよにうらくもあるはさるうる」**古今** 恋三「白川のしらずともいはじ底清ミ流れてよゝにすまんと思へぞ」**いのちも** 廿ノ辰 おき〱 さへひとよもとおのがよゝにありにゆるがらくなりにたり **後撰** 恋五「節竹のよのとのある程もかゝるさもおのが世々にならじとやおもはなん

よゝ 。泣声々 **夕貝** 廿二 かのまもよゝとなきたまひぬ **うきふね** 四十五 えゝとよゝとなきまどひ **大和物語** 二 かへしおともせでよゝとぞなきける云々 **同** 月 云々とよゝとなきけれども **かげろふ日記** 中上 廿五 いとゞしうさまもよゝとなきて云々 何せんにかゝる世にもはじめけん、とて、いみじくよゝとなきけば **同** 中 廿 云々 とのみぞのらくもせでさくりもよゝとなく **同** 下 廿九 うしとおもへるさまに涙ぞさくりもよゝにこぼるゝ さて云々 **栄花** 夜ノ錦 廿九 このおまへさくりもよゝになき給ふ **六帖** 四 雑「君ゆへよゝなくくとよゝくとなく我のきかぞうぞよくしくに **万** 四十五「かくしつゝ世に在吉ゆくよゝむともつまひとなれどなるもまゝしとも（コレハ涎ノタル、サマナルベシや）

よゝ 。涎ノタル サマヲイフ **よとぶえ** 六カボルヲサナキ子ハ皆トリチラレクヒ玉フ所ニ 志づくもよゝとたひぬらしなへば **ツレヅレ** 八十七段 ひたちけくゝよゝとのたまね

よゝ 夜々 **千載** 恋三 長能「やゝうらにぬる夜もみえてつめぬるよゝの手枕いつかまとはん」**同** 月 成尋「かよはせぬるをぞしがふ我みえにもちくあまりけるよゝの数うす

よし 夜好 **古今** 恋四 よみ人しらず「月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たりまたずしもあらず」**玉葉** 秋下 小侍従「あかでもめでも経まろほえん月夜よしよしと告ん人しなければ **拾玉** 七「君がためさえすゞめける月夜よしよしといへばたれかこざらん

よよ 四代 **新千載** 春上 雅孝「よよしはで四代かけきぬるあふひ草たえぬ契りの神やうくらん

よどり **神代紀** 上廿一 淀（ヨドミ）

よどち **玉葉** 旅（入道前太政大臣）「秋あけの山ふ夜ねまてなりふゆたよどちの旅のまくらに

よくぞ **奥義抄** 五 あまるものにひとよどいはよりとあまるどのふとせてはぬよてはねさるかざるらん **同** 恋二「よぶごとく我やあへしつ時ぞともなく我でなくらん **古今** 夏 貫之 **六帖** 六ノ五 五月夜のそらもとゞろに時鳥何ぞさよしもさびて蔵でなく **拾玉集** 六「ほとゝぎすそらもとぞろになかなく袖のよくふる。古瀬云、夜声にて我なきとゞむとのよもとぞふくに同じ

よだけく 。契云 十ヨ竹ヲ 十五竹トモヨメバ ユダケクヲヨダケクトイヘルカ **万** 八ノ四十九「あはやうらのその長歌ならする波もぞうく君我なよけむ。宣長云 倍言ニタイサウナドイフ意ニテ云々。世ニ高キニテ世ノ人ニヌケ出テ並ナラヌ心カ **源氏** 七 何くまで我さしなかなは いとあなもほさぬるをぞふおのづからよげけく いのめしくあるを **同** 九 あかやけゆかつくある人とせもあるてまの宮侍るまでかうひくしうよげうりはくく侍る **ワカナ** 上四十八 女宮いとらうたげにをさなき程にてれまつらひなどのよげなしきふうづかへ何ともなくあやうなる注ならどにく **源氏** 古 る限りありてよげけれはうすひとへどよみがら志さしきわざほうそのほいのみひなしもひと志がめあひてこそそららひあしあえなとうんうらあし哉おくかるべき 候とゆへあへば **せきむし** 十二 うるやしかるべき哉おもしの心世くよだくなきぎしきをつくしてかこうに法説せられ恋あれ **夫** 廿三 長久二年五月云々 祐子内親王家の歌合 つくるいのまへ（よみ人）「つくるいの池のはらまたなきもわれまろきに志さしうまゝにれなり **同** 廿六 言述 西行 **山家集** 上「みかせさやなつのふ士にぬ（のむかし人）のわらをこひてよだゝうけなきるがへぞやく **せしひめ** 十四 かぎりあれはまの御どよだけき我いとゝへしきますべくのとなにしとおぼしくるまがゞ。今案ルニ 二イヘルハ皆宣長ガ説ノ如クタイサウナル心之 **源氏** 七 **同** 十七 **ひろる** **せきむし** **源氏** 九 **ちりひめ** ノハ オツコウ キウクツノ心之

ガラス使用

夫木ノ芦ハ西セマレト大ヒシデルサマ 一 糸ノ煙ニイヘルモ心ニミチクテバイサウジタル心ニ依テ思フニ全ク亦セキト類語ナルニヤ

己ニ「せくむし」ト八詞ヲカサ子テイヘリ

よざけ 山家集 下五十五「よざけたる袖ふたぐへて志のぶなる袂の滝に落るなみだ哉」

よさび 四度 新千 雑中 二品法親王寛尊「おのひきやらぬたる松のおとうけてよさびさぬる名残」云

よそ 智度論 三十四 復次諸摩訶衍経多在耆闍崛山中説余處説少 寿量品 七十二 我常在此娑婆世界説法教化亦於餘處百千萬億那由他阿僧祇国導利衆生 万 二十九「よそにのみ見てやはやまむ身のほども君がせば」

初門記「一冊 よそにても風のたよりに聞ども」 うつせみ 三十「おもかげよそにてもうつろひいらくなどりは志さまよの」 夕貝 十「よそうつりはんはどひの世うにあるかぐちうつるかたもいうつるかぶろとみえ」 古今 哭 恋二「秋霧のともにたちいでゝわかれなばはれぬおもひにこひやわたらん」 後撰 恋上「柿のもとによそにおぼえらるん なぞのこゝぞとふむだかりのまるふもかぞしめ」 三代つゞし 十七「よそながらもあけくつまにつけて万におぼし やまとこふらひのみ残るのこふで」 夫 四 家隆「白くただあさくらの山のさくら花由なくても花をしらぬよそのゝはで」 狭 二下三「よそのへのやうに情なくぞおんよなるとたぐうらこにうちらさずるへだ」 同 四八「何とすゝをおうびおもひてがくしなしありてさぞかうつりかりし人残よその物にみしつゝぞと思ひつゞけあに」 古今 恋五「あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめにはみゆるものから」 狭 二下二 大将殿女三ノ宮ヲ見テ「かくあるときはしつゞいとくよその物にかへしなまらずらまし」 堀川初度 閑居「常なるでをちにさけどもさくら花ちるをばよその庭とやみゆる」 拾古 冬 義家「かみの[illegible]とおのが深たる色ぞかしよそげにおくる冬の夜あらし」

よそく **よそ〳〵う** **よそ目** **よそ耳** **よそ人** 各別ニ出ス

よそわし 巖重ナリ 松くせ「いとよそ〳〵しくさしあやしきさまなれど」 あさひ 六「ひとめもなうきよげにうたるによそ〳〵しうひえつぐなくさうづらう」 三代つゞし 十五「るゆゑの情そら人みごまとおほ七瀬によそ〳〵しうなつる」 繪合 六「おもかげはまてなかしもやんごとなくよそ〳〵しきまであるづりゆゑおぼされて」云 相ぶ 六 そ

やかましはひゞきにおとさせのなどて 栄花 楚王ノ夢「はし〳〵さそのおよそ〳〵しうれはありしいかいでさせげなり」 同 玉カヅラ 九「かくて今のかへいたうげとりの西へおやしまもぎこゑあふしかくあやぐるゝまでよそ〳〵しうさぶらひきことゝきえの後おりさゐふうりたれと」 枕 三「いとねく〳〵きよげによそ〳〵しげに下ざまの尻ろぞくそせくきよらひまる」

よそあひ 大方ヨソヒトノミイヘリ ヲトメ 廿九「中宮のよそおひこふて見まあべるに」 下ノ廿九「おのくいどはくつきったる」 夫木 十九 暁 為家「こよひやあのはるる月のよそおひにまづあけくみるなつげかな」 よそおびども 堀川後 恋昌「望月の山のふもとのよそおひに雨ふれどもひらる秋のそらかな」 玉葉 冬「冬こはさく月文ひかぐるもよそおひにまじる山風の月のよそひに」 上人

よそぢ 拾玉 五ノ廿五「下さかる袖までもゝひ出ればよそぢかさなる君のたのむを」 玉葉 尺教 公什「書かあうえも今こそ白ひもよそぢあまりのつれ山風」

よそぢあまりのとせ 千載 序「たゞかゝるよそぢあまりのとせの内残出だしてき」

よそへ ○ **よそふ** ノ西ニ出ス

よそとせ 後撰 雑二 後太政大臣「今までに身ごろへ花のさかぞしくよそとせあまり手ぎさりなる」

よそめいり ○平兵書之 土佐日記「ひくよのつまでのなかに君の日残よそのみでのまへいへなり」

よそく 土佐 三「一二日の夜にとそく小あくしらにまりくぶ」 うきこ云 六「君がしにてもよそくにもひの外ろまよらひゝ侍らんがやまとうずも侍るぞ見ゆる」 元服玉 四十「よそくもてならひあくるかまみどうことさうさそ」 栄花山 廿七「はつまさもよそくにてあいようしろやしさて大納言いとまあ中の仁参しのうへぞなく店とるゆるさせのひて」

よそ〳〵し 狭衣 二下 四十 大将殿源氏ノ宮ノ御悩ニテリ玉フヲ「いとかうぐしくよそ〳〵しかりん法のしなしにといのぞうへぎりあらん」「今もながらくやるべうらんと」

ガラス使用

よそめ。物ニヨソヘル也　相采 十七　花も紅葉も音にもよそめに見えし方ぞそのかみ　拾遺 恋一「うちはらふ人もなきよそめには[illegible]たのまれぬかな」　枕 三十八　草の花はすゝき　秋の末すでにいと白くおほどれたるをもしらで、むかしおもひ出がほに風になびきてかひろぎたてる人にこそいみじうにたれ　よそふるにこそあらめ　素性もよそめには[illegible]　古今 序　富士の煙によそへて人をこひ　能宣 五「よそにても[illegible]白雲をよそに[illegible]　六帖 一下　貫之「[illegible]　続後撰 秋上「天の川[illegible]たびたびあまのみ[illegible]　六帖 五ノ下「[illegible]八重山路をよそにのみ[illegible]よそのみぞする　和泉式部集 [illegible]　弘長 廿二「[illegible]よそにのみ[illegible]　相采 廿五　あやしくよそへ[illegible]　帰 十五　[illegible]　後撰 [illegible]「わが宿の[illegible]よそへつゝ[illegible]　六帖 四「[illegible]よそにのみ[illegible]　貫之 下ノ廿七　[illegible]　新古今 十七「よそへつゝ[illegible]　やどり木 恋八　いとよく似たりあり　久々開 十六　[illegible]

よそふ　神代紀 下ノ四十　企瑘我瞢贈比志多輔弼勾阿利訐利　古事記 上ノ二十五　余曽比斯　天武紀 下ノ十六　僭属等威儀及法服之色　万 十二　[illegible]よそにも妹が使をさへぞちにける　夕良 廿二　[illegible]西のたいにおはしてよそひたまへり　古事記 [illegible]　七一 [illegible]よそひなどよそほしう見ゆる　あつし 八　[illegible]　佐衣 麻都夫佐に登理与曽比　清寧君 四十九　[illegible]　万 十七　雑洩 [illegible]よそひて[illegible]　同 十四 廿九「みるはゝもの[illegible]ひしと[illegible]　相采 十七　[illegible]妹の[illegible]

[illegible]　帰 二　万の[illegible]よそひ[illegible]　赤染 廿六　古代のあづま[illegible]　[illegible]よそひ[illegible]　あつし 九　舟[illegible]よそひ[illegible]　古今 十四　かの山里の[illegible]

よそめ　散木 上ノ廿六　遠見卯花「卯の花のよそめなりけり遠近に[illegible]　同 廿九　入道一品宮王京助「[illegible]　夫 十七　[illegible]　散木 上ノ九　次郎 桃「[illegible]山もとの[illegible]　千載 夏 卯花「卯花のよそめなりけり山里の[illegible]の尾上の花のよそめ[illegible]　拾玉 一「松の枝の[illegible]

よそこゑ　好忠 九月上「よそ耳に[illegible]の声を安しよ[illegible]

よそひ　よそよ　ノ下ニ出ス　万 二十ノ卅八　舎人将東西

よそひと　拾遺 冬 兼盛「時雨ぬるよそ人[illegible]　あまひ 四十　よそ人に見え[illegible]

よぢ　攀　万 八ノ十二 長歌　攀てたをりつゝ[illegible]

よつにわかるゝとり。俗三四五ノ別トイフ　カゲ日記 上ノ卅八 [illegible]　孔子家語 五　桓山之鳥生四子焉羽翼既成将分于四海其母悲鳴而送之　将門記 非鳥暗成四鳥之別

よつのへ　次ノ　よつく　ノ下ニ附ス　よつろそじ　ノ下ニ附ス

よつのしみ　蜻蛉日記 上　中納言のせうへて四の[illegible]

大輔うごいてまぬまじ

よつのとなり 四隣 [夫] 廿 光俊「四方にさえよつのとなりのかきごしへだてといふもゆくらぬかな [同] 同 中務のきみ「いかにせんよつのとなりの音たえずかすむ春の人ぬうき世を

よつのとき 四時 [夫] 九 為家「春ひそめきよつの時ゆへ花の春をまちにもまちあけがの空 。四ノ時九カヘリ人九年之 [古今] 序 あめの下しろしめすことよつのときこゝのかへりになんなりぬる

よつのを 四ノ緒 [式子内親王集]「つたへきく袖さへぬれぬ波の上よふかくさしこし四のをの声 [新古撰] 秋上 義仁法親王「雲の上のよそべの月にいかれてやよつのをまでもまよそふきむらん [夫撰] 雑三 （四のをの声もたぐひことふたたへするまき） 入道前太政大臣「道なき世につかへつるひまにてよつの緒の絃の手も名なきをぞあげぬる

よつのおきな 四翁 [夫] 廿五 中務卿親王「深山より出でや君につかへましよつの翁のためもありせば 高山にかくれし賢人左右に在て漢の恵帝をたすけし故事 東園公 綺里季 夏黄公 角里先生

よつのうみ 四海 [夫] 廿三 十五首 小侍従「よつのうみの浪もしづかなる君が代に法士の命もうれしかるらん [新六] 一 衣笠内大臣「四の海浪 [新楽] 帝王 百錬鏡 四海安危照掌内 百王理乱懸心中 [夫木] 廿六 行家「よつの海をたゞみのつるにてらいてよ君やくもらぬかゞみなるらん しづかなる代々のまつりごとよろづのくにゝもたえずなるぞ

よつのふね 四船 [万] 十九（四十二） 公卿「よつのふねふなのへならべたひらけくはやかへりきて 。遣唐使ノ乗ル船之大使副使判官主典ノ船之 [あさし] 四 西風雷の声三「かくつゝ世をうたゝねがほにやとおどろかさるゝにこそ [さゝき] 十三 よやつにねらんとてかの方をみやりつゝすくよかにこそあめ

よつく 四盡 。世ナレタル 推言ニハ イロケヅキ タルコニイヘルゴトク通メイロメク 大方ハ男女ノ道知リソムルコトヲイヘリ

よづく 。世間ナミ 世ヒレタルヲイフ [国ゆづり] 上 十五 （山ゴモリ幸ヲ世間ニ交ルコトヲイヘルナリ） 故度のいとゞふむとかとのあひし物を

かく世づきて物しあへるよろづのひゆきさとのあひて [後カゲ] 出て四方も行けむとつらひはる人今まことにうつぶ世づいたるあをうかえん山の宿るもえづらしとてうこたけしゆき孫ば [若紫] 十六 やや世づいたるかどもと見へせるこそおかしからん [末ツム花] 廿三 例のあひさる事よりハけけるひもそあを見えよつかいこう [同] 四 女のれさうこそくうちやよづきたりとえむるハあの一宮の人宮々式さるさまがら押りたり [少女] 上 廿一 博士ふもとしもよづきもあらせんとそえん女子のうちまつりしにあねづくいかの人のおもいふこそへふれかせまゐらるまし [同] 上 五十 さこたちのよづきたるあのさるをいたさとおそくしきせらにもあり [同] 上 五十一 宮ゝ女子ども若とけなくひねびつゝ人げちかくよづきてぞえゆふ [紅梅] 六 まつらにさきうの世づきたるさまをひとろげにもあらねけしきあるまじうゆくまらんとはんぶるしかるべし [アゲマキ] 四十六 大君ノコヲ称 かるさまにそよづきたる方ばあやにひとそなくおかりたまひてかくとかえ [夕顔] 上 十六 かの君も今は世づきてあひにたまへばまうでたりしにもいとけぢかくねびまさのあひき [末ツム花] 十三 おほくんにいらへまるんは孫くひくるんとそ地とりさへぞやうやと世づけるかたるまでそのあまりたるそのこにいでやまず物ぞ給ひ [手習] 大 まやぬましたるひさしのすだしつうち出あしのこえせてこゝろしこのあまりひそつくろひせめどもさつ例ならぬようひきてあひて 。大方 世ツキテ 世ツキタリトイフ

附 よづきしう 。是モ色メカシキ心ナリ [手習] 十二 かごうつあておしむえんとおかへしたるに世づきしうかゞへしは名のみたちのへむべきをおろかなるらむとあるしるけろ

附 よづかぬ 並ハウレ 世ナレス。イロノナイ（大方ハ世ツクノウラナリ） 世間ナミナラヌ [栄花] 栄ゆうくノ別 四十四 承香殿ノ女御ノコヲ うとくひとをきもいとあやしうまえゐれいかたゞ物も見えぬ方のさゝこ流しまいしいとあやしうよく人すくなくゐてあやしくえもいはずいへどもうるはしくはあるやうなりとのさらず世のふに水つきも世にもまきて法服でおかまいにあかまりて例の人の様よりもむげによりも世にあひぬ

[負] 大 いざいとんやきえ亦にてのどうに咲えんかごかさうひあへが称あやしうかくのあへどよつかぬ法あて

ち、

なしたまはゞ袖ぬれそぼちくらしてこそあはれといとゞわびてのたまへば〔末摘〕十二 光源氏のこゝろにもあさましく咎めたまへど強おがつらかなるのちたまはゞ世づかぬ心やすくうちとけてやまずの君心ざへそひて〔同〕十一 なで大人しき君物づゝみのうしろめたさに世に立てまつりぬとき心えやすくつまもなとみゆれぞそこそ世づかぬところまじり物おもひしきはしたなど引く人もなまめいて世づかぬかたくこそさまうにかゞやかしきまでになりたまひぬ〔紅葉賀〕十一 はさなおもけれども人のうちにうちとけてあるそれは後の内の人もあまやしとおもひたまひつゝ世づかぬ法そひふしたるらんとはやしくぞありける〔朝顔〕六 よづかぬ法ありさまは年ごろにそへてもおもふくのみ引入なひてえまえたるぬをも〔手習〕十 世和あはつかうまつりたりしをまたおもはれと有がたきも世はづかしきうひくしや〔椎本〕廿六 かの昔の人の朱雀院の后の世ちにとりこめ給ひしおりゑだとおかれし出までさしあゆみたまふまゝにはかみもとりつゝ世もあはれなりける〔十訓抄〕八 仁和寺皇太后宮始て院号定年世なかりけるに修理大納言成通の卿ありたま佐といふ女房にあひて物語して女の院号は何とか侍るぞと問ひたまへば皇嘉門院とこそ申すなれと云ふに次に女房小法の袂のひとつ向かれば何ころやようつゝねやうなる皇后名の世とかといへるを云ひちらしのの心に言ふと感じあひたり

よつま

夜妻〔古今集顕注云〕忍ビ妻ニ〔万葉〕ニコラガ名ニカケノヨロシキ朝妻トイフハアラハレテ妻ハヒル向ヒオルニテ朝ハ日ノヨレヽ忍ビタルハ夜ノミアヘバ夜妻トイフ〔催馬楽〕何為（上 廿三）「いかにせん」あやはありともさいふあらよつまはさゝめつやさきんでちや〔蜻蛉日記〕上 廿二 長ちまち かげだにみえずなりしよりうとむるぞう死そのかはしたまうよつまこあるしえいふるをの事のおのれどもいふこれこそそうてあるし

よな

○テニヲハノヨニ通ヒテ歎息ノ詞又大方ハ人ニイヒシメス詞ニ〔頼政〕下 九「さりとは」よなよなかくてもおなじことなるしされはなくてよりおもひくさぞ〔撰集抄〕五 大納言大臣にあひさ世成はよな大織冠の位吉にほうでなひしるに大臣祿法宣ありていふ〔平家物語〕十八 維盛出家の段に「さてこそ」より八島へ参りて人々にゆきえせざるはよな且法弟などもひしやうに大方世のゆもいふく〔同〕二九 入道相国あへのすなりを見る法の上ハ奈良大蔵大夫の忠成をよびいできかせよと申させけるがまた新大納言成親卿以下近習の人々此門を亡して天下をとらんとするむほんの企あり一々にからめとつて尋ね沙汰せよ〔よな〕巳上二六 希有の狼藉なる四部の弟子なればよな比丘よりハ比丘尼ハおとりて〔平家〕二 四七 善神もいかなる因縁をもてなしまんのいろくづの縁をむすびとぞ世にふらんといひければ人名をさもよる大やけ徳王の事三のひぬるや指義良のまといあやくなり

よなか

夜中〔万〕七 廿「さよふけて夜中の方におほゝしくよびし舟人はてにけんかも」〔相模〕八 夜中おちぶるゝとにわれへしそゝてあひぬるもやるかさまげだ

よなかあかつき

夜中暁（此四字テ云ヘル也）〔うたゝね〕六十一 夜中暁のなかにものうちしみかくて侍ふとおもはして

よなよな

〔古今〕物名（やまがきのき）「秋はきぬ今やまがきのきりぎりすよなよななかん風のさむさに」〔後拾〕恋四 能因法師「よなよなは月のさやけくなぐさて誰かふよなよなたどいかのそのびてく〔夕顔〕廿一 おもひやるんやゆえておもろらん〔かげろふ〕廿 おんちはしよなよなのありさま〔狭衣〕二下 廿 大将こゝちの月はをなぐさむ心てうちとけてねることよなよなもありけるハ〔同〕二 廿（大将ふして女二の宮の）女二ゝ おやしと思ふやしてすこしみやまあへるにはあさしくおもひかけざりしよなよなにかえらねば〔同〕三 廿六 大将ハ女二の宮を姿のやうかりしよなよななるのふりぬの法にひきさうでやゝ給ひしハたゞ一夜のみぞ伴ひ大将女二の宮に一夜なるぞハ逢ひたまひぬれば〔後拾〕恋三 相模「たち袖にゑくさゝねらなぐらん夜よなよなのまはにかくしてせつ

よなれ

世馴 ○男女ノ間ノ事ニナレタルヲイフ〔夕顔〕廿 おさなくあはれなれどもあやしう世なれたる人ともの見えねハ〔蛍〕十 此世なれたる物語などそかまへてのたまひそ〔末摘〕十八 まさ世なれたる人のありさまにたるとみせたるがしなかなか〔こてふ〕廿三 まして世なれたる人のありさまをふのかたりあはねば

よならひ

世習〔夫〕廿六 為家「いかにせんうきやぎりの世なるにこのまゝは生けるかなくくハ

む　ら

よなき 夜泣 夫廿五 万十二之廿一「わがせこにこふとにしあらしみどり子のよなきをしつゝいねがてらくは」 抄八之七 くるしげなる物 夜泣といふわざする児のめのと

よらる 狭二ノ廿九 木丁どもも奥よりみな出しくだしくみなとたてさしもおしひろげ給ふものよりかゝれるをさとひきかくしひき出人々かへり立さまよひつゝくりひきさわぐ 夫六仲四「蒼浪よするよらるなましば雲のはるゝぞなきてる松ぞとぞなる」

よむ 詠 ○詩歌よむ或の外 ○数ふるのよむ の外 よゝ何の類列に書き 土佐日記 よみてんやよまんかくなれやの人もといふ 栄花十六 亭子院のみかど世おひて伊勢集之によませ給へる大和ことのはをもものゝこれおもしろくも 伊勢も九之 とよみたりけれは

よむ 読誦 ○経文之 よもぎふ七 今の世の人のすめる経おはよみ行ひなどいふはいとはづかしくおもひて

よむ 蛍十五 あはれなる事をよみいとかうあはれなり 同十六 女房などに時々よまするものがたりきけば

よむ ○誦スルヿニイヘリ 枕八之十六 ○誦信 いまだ三十のごにおよばずといふ詩をことひとは似たりともおもふまじあふ など 清か いへば宣方なれどころそこにおもしろくはさりてこそせめてよむに いみじくよく似せてよむに

よむ ○数ルヿ 古事記上之廿五 欲計族之多少云々 介吾蹈其上走乍讀度（ヨミワタラム）云々 万十三之廿五「家ぬちよら銭よまゝひもあへんとも」 同廿之廿七 家持 夫「月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春たちぬとか」 古今 序「わが恋はよむともつきじありそ海の浜のまさごはよみつくすとも」 後撰 哀四「住の江の目にちかゝらば岸にゐて波の数をもよむべきものを」 後拾 雑六 ハイカイ 僧正源覚「としをへてまつの松かさ木をぞ木とつあなよくよめるゆへあらぬかるへし」 夫十九 寂蓮「君が代は八雲のそら風そどめよりよむともつきじ星のかずかな」

よんべ ○よべ 万四之六「あまつゝみつねするきみはひさかたの昨夜（ヨンベ）の雨にこりにけんかも」 土佐日記 よんべのうなゐ

う

もがな銭乞はん 同廿一 よんべのとまりよりことどまりをおひてぞゆく

よう よくノ音便 よくノ下ニ附ス

よう 用。入リ 宇治 国ゆづり中之廿七 ホンヰん之 後撰雑二 枇杷左大臣よう侍りて楢の葉をもとめ侍りければ千兼が家にまかりて 用之 宇治拾遺二ノ五 えうなきものもなし鯉もるごと用ありげなれ 栄花 さゞかのほどゝみにてかくれ ようりやとのことのへけるほどさうぞくひとくだりはさしあげのてらどめく物ども人のあ やどり木五之十三 ていく まうようにも侍らばさゝらんにまさらひてぞとく 竹トリ九 つばくらめの巣くひてぞつけよとの御事を承りて何の用にかあらんと申す 国ゆづり中之廿二 法門の実あるなるを今は世にもて法師のやうにいふ人々何の用ぞいふさがようあるべきと侍らるまゝ 同下 人の用あるべき人をつかひの人 同中之廿七 実衣 かくいづく人にて侍るべくつかさあのようも侍らねどはんざうへつらせんいとかしこく侍る 同下之十六 よべの雨よりあつま物ごもえんかへれらありおほせあへる事かゝる物の用あるとき儀にまいりつゝかしこまりゆえあるふ オチクボ廿六 物の用にもたゞるにのえうしあることもこすらしどうえ蔵人侍る クラ開上之六十九 そくのものごもは飛鳥のほぞのにあらんものをば用にもあらずひて物かせにもあねば 国ゆづり下之廿三 車イラヲ こて出へたなさむるつるゝまれて千鳥用にもわなれりけんいとゞあり 宇治拾遺二ハカマダレノ条 廿二 十月ばかりに只ねの用あり也とて夜さしこしまうけんとて 同下之十七 あうの雨に馬など用なる物どもこそありきまてよりてをるうずやんえ世のひとをひくれば 同下 きぬや頭などこそ用ゐ侍れ云々 田などは何にかはせんずると思ひのまゝなるの御用あるべくば侍にこそまゐらめ

ようい 用意・ハヲ用ル・ヨウイガケ 東屋廿九 げにさのみあらばと思ひやりふかきよういなるにとだえいとへ咲くなふ すゞりせ五 さるまじきさるものにてかしこの用意など 同 月 くちをしうかねんの用意のもごろつねと云々 かげろふ記中之十三 さるよういあべかめれば精づひ数をつくして云々 かけろふ下之六 さるべきつゐで侍らん折にはれ用意なくてへするぞかくにすえん 同廿三 いとようゐて表つゝみたるうへなりけりべへ 東ヤ十七 かうたにこそぎめらるゝやうなるにそゆくれこ 霊せゝ六 何のかべさくいとふかき用意もなし 初秋上ノ卅 述べてあしこ

につかうまつるべき女房ども仁寿殿にさぶらふ座をようゐしてあり 同下八廿七 やんごとなき[illegible]
しの給ふのようゐせん 楼上 上卅四 おほしまさんさきのようゐせんとて [illegible] 卌一 かゝる人をいださるを用意して
むつびさぶらふことのあひなれば 蛍十一 用意しあへるぞ[illegible] 枕一ノ三 粥杖[illegible]と用意して[illegible]うしろを
[illegible]したるもおかしきに 同 六ノ一 えの北方に（レゲイ舎ノ）[illegible]せうそこ[illegible]
[illegible]ことに[illegible]女房なども皆用意したり

ようゐなし

後撰 恋五 ・無用之 えう（トカクハ誤リ之） センナイヿ ムヨセンモナイ センナイ アリガヒナイ 不用
あさよりの[illegible]年比せうそこかよはし侍りける女のもとよりようゐなし今は
おもひわするゝねとぞいひてひさしうなりにければ [illegible] 下廿 [illegible]ようゐなく[illegible]もとおもひてせば
ようゐね ホツム 廿六 そらのごとひをまぐて又かこそ[illegible]まねようゐなきことはさびしうなりや
[illegible]のつりて人の[illegible]をおもんぱかる[illegible]とおもせど セキヤ 五 もとさびごとぞようゐなる
おもべと（のせも） 九段 千男などをようゐなき物にぞひなして京にはあらじあづまの方にすむべき国もとめ
にとて出けり 後カゲ 下卅三 見然（ハカヒテ云詞）かのがみのうちに[illegible]しみなんにようゐなき物あらば施したまふべし
ようゐなくてわびつくよろありくんまなくてこのさくらの根をもはらん云々 ツレグ 百卅段 其外の鳥獣さとだく
用なきものゝ之

ようさり

ようさりつかた

夜 ようさりノ傍ニ附ス

ようめい

容面 ワルクトレタラ
[illegible] 十三 ふかいときゆうざくうりつる人のはようめいのるを
浜松物語 三 ようめいけしうはあらぬ人々侍りしかど

ようせぞ

ヒヨツトシタラ 帚 廿四 ようせずはわれたるあるものやありなんや 枕 テ八 [illegible]ようせば
せんべうまどろみどもえひありきぬべき人の状ぞちのひるねしたる 同 四ノ卅一 雪山のこと
げに二十日もまちてようせばこそしの初雪にもふりそひなまし [illegible] 上十九 思ひなぐさむぞろ

王[illegible]やよくせざば法師にもなりなんとせられて

よゐ

夜居 標秘抄 中廿六 御持僧事云々東寺一長者多候夜居山寺各一人必可候 アゲマキ 廿九 わざと
もよゐなどにもさぶらひて かげろふ 十五 よゐのが持の僧などの能もなど 枕 六ノ廿三 [illegible]よゐ
の僧 サカキ 廿六 まかろなるどみやうきてよゐの僧のやうにえ侍らんとすれば ヤドリキ 五十七 のやのことをおかろしそよゐ
の僧の世に見えまじきを

よの[illegible]

[illegible]ノ下ニ出ス

よのたとひ

浮舟 廿五 世のたとひにいふこともあれば ・ 絶 たとひ ノ下ニ出ス

よのためし

後撰 恋六 業平 「ことひとびてこそねてよるはごろもあるを世のためしにもなりぬべきかな [illegible] 初 世の[illegible]
吹上 下十三 田舎においでもせども我見ては世のためしにもなりぬべき
続後撰 恋二 読人不知 「恋しぬるものとはなしにさてもなほよのためしにもなりぬべきかな

よのつね

・一通り いせ物 十六段 時うつりにければよのつねの人のごともあらず云々 むかしよかりし時の心ながらよのつねの
こともおもはず 蓬生 五 そこそとよのつねの事などまですべて 帚 十六 よのつねの山のこずゑ
水の流も同 いちはやき人の家居ありさま 栄花 十四 時々はよのつねのある[illegible]を見えたや 栄花 初 よの
つねならびおもしろかるにさびのやなりければ 枕 二ノ廿五 中納言の法師にあらなひにしてこそ[illegible]
のちりぬるも猶よのつねのありや 同 八ノ廿五 雪月花の時と奏したりけることをいとめでさせ給ひければ 村上天皇
などよほんゆへよのつねのうりかう折にあひたるもなんのひがごとにこそ[illegible] 栄花 十二 女のん[illegible]
なるとかしえくらまぬなくべよのつねなり 初音 十四 古里の妻の描出なる[illegible]よのつねならぬ[illegible]をみるる[illegible]

よのつね

是モ同ジ 但シ甚シクイフ時ニ下ヘソヘテイフ詞 俗言ニ いかもおろかトイヘル 制ンおろかナド 語脈同ジ
枕 二ノ十三 ふくしとへよのつねいとおいきあうるし 同 三ノ二 桐ノ（ヨイヘル木ニ）はしして琴につくりてさまざく
なるものいくるなどおもしこそへよのつねいふべくやはあるいとくどうことめでたき あやひ 廿一 あさまし[illegible]よの

つねなり［ヤドリキ］四 いまだにもよのつねなり［総］十二 のせちまつりあまたたびあらためあさまし あらけせうぞそもよのつねなり［同］二十 笑笛（コト）ニツしてそのあそをおかしくふる世のなべて猶いとゞうめでたしと いふもよのつねなり［狭］三上（世ノ今姫君ノ母代ハサマ） かゝる目あひてくび筋引きて をれる一間く ひく そばかなの みそはすきてこゆる人なからしなどもよのおもの ゆきをとこらしく

よのなか 世中 ［良文］六十三 人間（ヨノナカ） ［万］五 廿 世 さとりきるなかのる世なるのは ［帰］九 さまざかしとしとてもひとりふさ 里世中なすまうりごうらうかなるかる旅ぞ ［拾］離別 ちかく「わかれべきんやへつらん大かたこの 世中むつかしきものなりかし

よのなか 常 ［古今］宜長云 世ノ中ハ男女ノ中ノ一ニスベテ男女ノナカラヒヲ世トイヘル例多シ心得オクベシ ［古今］恋五 よみ人しらず「なかれてハいもせの山のなかにおつるよしのゝ川のよしやよのなか ［定セ之］八 世中 をすごさひとたるなどよりへざりしをえだたる方にて

よのならひ ［天］十七 恵美「こかよきえ草かかるのうちの心ちのこ絶えるもの折りし世のならひかな ［粋詠古］雑中 雲雅「うき身のむねいとあはて大かたこのよのなかひとすぢ思ひわびるかな

よのおとろへ ［かげろふ］五十二 かくなるみ世のおとろへをさるにて

よのま 夜間 ［拾遺貢外］上 廿二「用ぬるより秋のすゑの風にさそはれて梅より句ふまきの花ぞその ［土佐日記］ 白散をある そのよのまそてふるやくにさしえさありければ ［拾遺］十六 元良親王「わがせずかきてぞえつる梅の花よのまの風のうしろめたさに ［四条大納言］「きのみでをしみなむ中山桜秋のまの風のいぶかしきみ ［兼盛］五十 よのまれ風もうしろめたくなん ［新後撰］夜 後嵯峨「風さそふくのまだの竹にあり月のよのまだくりぞるもちぶらし

よのことして ［細流］世間ノ習ト云 ［ワカ十］下ノ百七 世のなかとし歌をべ雑なる物にあきたまりて ［竹門］三十九 世の ことをて数ならぬ人のあはひゆものとも ことうまさへ方にこそあはいろかなれ

よその人もかゝるよにまてふかざなたまじ ［雅家本］十五 世のこゝろをつひのわざをのがれぬなどあやしご

よのことわり ［風雅］雑下 院「めぐるちかなくのあとにおぞろけば世のことわりぞとうにうつしき ［続後撰］秋上「秋風のふけばさそとかはにくびしきかはよのことわりとおもふのなから ［拾遺愚草］下「うき世のあはれ 道もたのまぬはよのことわりにまづそかなし

よのさが ［をしむあらは］廿二 五 よろづかくるいとをあそびも身るも世のさがとおもひなべしるを ［枕子］哀傷 忠源「あまと うれしく猿き人のかたるもひなき世のさがにこそ去ひてもなくめき。猿サガノ和ニクハシ

よのさかえ ［うつぼ］十五 うれしく世のさかえもなかぶ人なし

よのきこえ ［いなも］廿八 まのびて名めりなる猿世のきこえありなきが

よのそしり ［白宮］九 さるいふまじき世のそしりも出来ぬべくうかしなくもなくせにもまひて

よのひと 世人 ［万］五 廿九「うつせみの代の人なれば大きのさかとかしてそ ［同］四十ノ廿「神とそよさまたゝへば人とそかれ よの人のことひにあまえをいかにせよとてぞ ［続後撰］神祇 為氏「神ぞふにも我なりまつのみはそころも絶え うかとめ人こころかかるうときも ［新千］恋二 小町「思ふる海をなきる身べ従るかりそのし世の人ごとはきりとい人 きる

よのありさま ［いなも］二 廿一「出てのまがやうらしとおもひやせん世のありさまをとくみそあらねば

よのすゑ 世末 ［うるさき］八 いかどうかある世の末にさる猿つが娘どもの方ひく人にわたしてしくる

よく 善悪ノ ［後拾］二十 大義 法覚「さけうなの松をそぶ一千歳まさにのたふよくあちこのあはねんなるべし ［若紫］ まづよううわかぎるぞうくようをあねどよむげにかくねことそわかるまし ［ワカ十］下ノ四 よく咲くらん まへたる義の花の友にかくてかくこそるいひらぶるる絶我がうけの心絶そしゆく

よく ○宜シカルベキ心 ○ズイブンヨカラフ ［若紫］四 かはかしのきぬかえよく侍るとゆるまるべ ［同］四十三 さとしまのんおかかあし絵やき かえにつきて世あかるんとそもよくは侍るべかなる ［同］二十二 さてえかうの人のけしきはかりてもありし

ガラス使用

ませよ僧都のかうちゐみづからいとようありけんとおぼしくて 宇治拾 四ノ七 こよひさかり也と思ひつる程に
といふよく侍りなん入りておはせとのみ

よく ○イヤウニ○ヨシナニ 末松 十五 いとよくいひなして 義経記 十七 ようして守もてくい奥経ことうらに腰の?して

よく ○ズサブン 松風 五 いとけなうならん法師共のいとようかなひぬべくなん 三曲先 廿九 いとよう思ひかるひなむ
聞もありなん

よく ○カウイクバロガ（ラクニヨクヅ） あかし 八 よくぞかゝる所もありけるとみどりさのしも思ふ事ありしと覚えかけたり
くぎりなし 狭 三ノ上四十二 内にいかにきこせかえしとまらんよくぞせうのふところも我なる
いまもそあぞうなる

よく ○折ヨクノム 床夏 初 さらぐしくねぶらうつるおよく物し給ふなる

よく ○レガタイコラ（ヨク） 帚 十 いとよくものそくそくまひけるなり 夕貞 十四 いとをかしくしたりと思ひて 帚 廿六 さもこと
さるるかくのにいとよくことを人の上ありしかなかまことゞいふも 若紫 五段のよのつとあ
もいとよくして

よく ○フタギニモヨク奇歎ニ 若紫 十一 此世なりのどもかゝるあやしきのをしてよくさうありし人をもえ
つくるかりなり

よく ○ムラ用ヒテヨクイレカト（トクト○ヨウク） ワカナ 上ノ五十 ふくおかしたさしめてこそよく侍らめ（是ハヒカルベカランノム） 弓箭 廿三 よくさるべからん
あはり我たてゝ今集りてこゝめあへ 藤のうら 四 又よくもえあまつたねに名さき
うたへ人をなぞめ年月物んもうしろめたうなりし 総 四十五 さまでいとよくいひあはせ給ふ 玉兼 六 よろしもある
いせぞうるびたるなかつくるとのなり

よく ○十分ニヨクスツパリト 盛衰 四十五 又是頼は別の時ぞかしよく天狗のつきたるにこそとなり

○**よし** **よき** 別ニ出ス

よく ○詞ノ下ソヘテイフ（レ易クヨイト云之） ワカナ 上ノ廿 さもかくも法の道にまかりたらんすがたにまなりよくかんあるべし
桐ツボ 初 内にのみさぶらひよくしなひて 落窪 十 佛ひとりも罪うらみとこそ
まちびえよくしゐ宮は 狭衣 四ノ廿七 又今めかしき方に乗りてくるしきそこさとりけるや

よく ○ヨクルヨクト（今モイフ） 古今 冬 六帖 三「宿のはにきしによる波やさえや夜のかげひちくらん 後撰 秋中 六帖
一上「空遠き秋やよぐらん久方の月の桂の花もかゝらね 兼之 廿六下ノ 六帖 六「うまさえて夜埋
本あるを春も雑花の中りによくなそせぬ 同 十五夜 十三「久方の天つそらより照る月はよく照るる秋乃
秋の月 狭衣 三ノ上ノ三（大将ゆりも妹せ也を通り玉つ所）「かくありし時にかくをせむ山も見えかくの我きかや 後撰恋五 先 さきよりある夜
人の治ら世あへ実書にぬしよくともんや之 ○按宝ハ持主ニエリキラヒソ来ラヌトイフ也ベシ 万 十二ノ廿三「君が代ひあが
こひまくへあら玉のたつ月ごとによく流ひもあらじ 新古 羇旅 東歌「つきかとの旅寝の衣うすまえ
おどよみてふりなえまんの山風 今撰和歌集「うらみても乗り方やはするらんつきなくよぐる袖にぞ有り
ける 万 九ノ十二「春雨のよぐまてよま我ぬらしまちかも人が 奥風 二「あひしてよそ縄たゞちあらべし
おとりれ秋我ようなる 後撰 七 秋下 藤方「秋の世にさそのまぐる人ぬる袖そ人の高我ようなん 兼之 一ノ三
六帖「あけのの出表かしてよもたなばた人目もしまへようぞあらはし カゲ日化 下ノ院「ねまつも悉
きえそそよるくにまへ見しぞあとめへざりなん あまひ 廿 傍小ゆとゞろしげに侍るをえひきよくで
つりえとあるを倒のゝかつけとらんの袖から 五「大かたにふく秋風もんあるが袖のの萩の葉末
よげ 菊の宴 五十二「山づともやそれべえんなう万まつゞもあれがつる枝のみもつなる 古今 秋下 素性 三六帖 廿六
「吹風にあつらへつくる物ならばこの一もとはよきよといはまし 古今 春下「春風は花のあたりをよぎて吹け心づから
やうつるとみん 元補 土風猿（射江 文童） 年とよのはくる者のまんがよのあるもよぎよくのさえと 拾遺 神楽廿五歌
「さ山に鳥やくどのこりのまへる山桜はよぎてふけ 元三 十三「里とよぐてまつものなるめ時鳥あの
うえるのもつてふ中にばし 守一メ 四十九「ゆくとうつのぞは大きさの宮おなしまにとくすどもぞてさえらひきてえ

ガラス使用

さもあへざらんもなさけなかれば【六帖】二「みな川の人をもよきぞとなく蛙鳴夕かげにかをしくやかはらぬ【帚】廿二

よぎぬべからまほしきが【万】七廿「ここのさえわたりのそでもそへば浪たちぬいづこよりかくれんよきかくらまでも

【同】十三「あをざえのたまうるかぜ人のかよひそありつも君がきるさんのえだにせん【枕子】三四　殷富門「逢

なはもへぞてぬ実とみえりのを今さへるやのんめよぐらん。く文字濁るねをよしとす宣長いへり。【万】二

ヨキハ曲道トカケリ通リカハアラデ外道ノ心ニ【六帖】三「衣手川よくかなることぞてこそいふそのなきもまへ

よきまくま

よくだち　【後撰十三】「よくだちにけるまだなく秋生の清見のさとに風やふくらん

よくしん　欲心　【宇治拾】四十五　法師行動　此女房我をみてよくしんをおこして

よくわかること　【手習】五四　さらにいとよく鳴琴も侍りとのひつげく

よや　テニヲハ　【梅ヶ枝】三　このよのこのりの香どもを移ねおはさば罪と申しまゐひてよや

ナリ【ツレく】平定　あるはけなりや猫またよやよやとさけべる

よりひごと

よりまぜ　夜交　【夫】十六　隔夜かけ【六帖】九ノ十一　夜へ「ぬるよ中に松のかげを花の落ちまぜにえん君あたのまず

【枕六】五　秋　一夜べうら　去夜「山路のうきあにかさてかの花の中をまぜかなぞてあひんとあ

ん【盛衰】廿九ノ十九　重衡捕食向ノ条　二人夜ごとにまるべきまどふも秋まぜに参りて宿仕せよ

よげ　【あさら】十一　いとよげにあひつく【藤衰】十二　いとよげに今をとしさくべきば【東や】十二　伊豆守とのいと

おほくよげにひつくるに【同】十三　仲忠　いともくよげにめそたしと申されハ

よけん　【万】十二ノ廿五　うかのつてさくにし将吉【憎る末】こそきろ宗何よろしあかびさざをとりせよん【帚】

廿六　何よろしともえらけあるらんとかしこまりてさぶらふ

よろく　【古今】ハイカイ　よしみ「浦めのまでなぜかよろくかりるやのまでまてあまてとおしろくよる

よぶ　呼　【ヨバフ】已ニ別ニ出ス【ヨビ出】【ヨビトル】ノ類別ニ出ス【夫】五　さむく寂集「音のみに山にこそしけよぶとど里

よぶこえへ人にはけびてやすべし【夕貝】八　きよりのあるありて侍るものよびてとませ侍りしど【土佐日記】うき

のたちよりよびにおはしてありしまですぐいけりて【末ム】古今婦をよぶせかへ【後拾】雑三　遍照「今さらに寂かへる

滝まつてよぶべきかぎとぞさかる【同】集中つのえ「寂寛のあたにみなえそてよぶこゑるよぶひありて花もくらき

◦【附】**よびかやる**　ことをつくし　十二　よびかやりてみせ奉らん

よぶろし　夜深　【拾遺】冬歌【実見】「いづすかはなぞくやくらんはるる淀のよきりのまで秋ふる夜に【夕貝】甲夜ぶ

ろえ底ありきし状【古今】冬　友則「夕月る小ちらひをまばやしきぎと秋ふく鳴くいづち行

らん【いせ】西　秋ぶくまたにえればせ【うせ】初　秋ぶるかまみへむ【物語古】文　天暦御製「いつぞかくらよくろかく

かきてぎきと秋ふくめにてゆせやうせね【古今】冬三　よしへ　まかじ「あしげあるべきみかなまねべき秋ふくことを人

えらろも【後拾】冬いせ「ふく夜をよびとみかなしにかくてぎきと秋ふくめをもさあしつつる【いせ】百段「あひ

あまるまやしをのあるおそんよぶくえんべきまむきとびせよ

よぶね　夜船　【新古】雑上　兼仲「このあかるちぶくのうらの沖つきにようねこぎくの月のさやけさ【千載】下秋

名国「湊川秋舟こえ出る追風に麻の葉さへせとするなり【夫】十二　後京極関白「月のてる

ちちえの浦のまぬの秋舟敷そふ秋つうまぶる【拾玉】二「月かげのくまなる秋のよどまよぶねまぐらん

あゆとろらおや

よふく　夜更　【うせき】七　秋ふるるのなのよろさをのあよ【万葉】三ノ廿一「つよきけんふる村もよばえる世山

いつもえんよふけにつ【夫】十七　彦主内大臣「小秋中とよふけぬらしまのまの川あすまて

よるるすくぶのり【新古】恋一　元長「我わころもとけぬるの池によふなでばなくをしれ一巻。是ヲ並ニ

夜ラフカス　十ド猶更フクフノ部ニ委シ

よぶこどり　喚子鳥　【夫】十五　お葉にあるの葉ありたる歌　恵慶「お葉えてゆらんくも覚えぬ我さぶこゑるさえみなく山路かる

万 十六「とこふゝにあよびとよめて呼子なるさゝの山べ我のかりくぶりに 古今 春上 よみ人しらず「をちこちのたつきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな 万 八ノ十四 鏡王女「神なびのいはせの森のよぶこどりいたくななきそ我恋まさる 同 九ノ十三「滝の上の三船の山の秋津べにきなきわたるは誰よぶこどり 貫之集 十ノ九「いひしらぬこともこそあれと やまびこの山ふかくなるよぶこどりもなくやなかなか富る あらなくに 後拾 春下 法来法師「我ひとりきゝてあるべらばよぶこどり二声まではなかせざらまし 六帖 六ノ下「朝霞たつ山こえてよぶこどりなくやなかなかこひしき 夫木集「世中はなぞやとのひてよぶこ鳥家なく森をこゝにやきくる 万 八ノ九 坂上郎女「よのつねにきくは苦しきよぶこどり声なつかしき時にはなりぬ 万 十六「さが世と我なる世の山のよぶこどりよびえ世我のふけ ねとに 後撰 春中 列樹「家宿の花ゆゑなるそよぶこどりいづくにゆきてひありて我もこゑなくに 同 恋五 寛遁法師母「あふなれ人中のゆひのよぶこどりいづくにそひとろるらん 夫木 三十五 慈鎮「わがむかしてくならんくてもあるべぬを よぶこどりさへなく山路かな 岩丹集 前大納言「我恋のしのぶとまさめぬ恋をきゝよぶこどりはや 玄孫集「咲まびてうまりとぞりくまゝでさへあらびてや猶よぶこどる。契仲が説にてまりことよといふ鳩也但かくしがうてまゝるそれと定めてゆゝしにあらびの及べることなき 古今剛云 呼子鳥は似まぶことるといひてこそかかりくと呼子鳥は集にもあるをもよみたり田舎人のうちいふ即これなりかんこるといふも喚子するのよこなりくるなり同鳥をさるぐさになづくるはのことぞ元は鳩に似てかしら尾のけて落果なりそち白くにさする赤き氣有てさでし鶴のそくざるなるとさまほらちえしは鳩のごとくなきし落草し足とうまぶあつゆて鳩よきもたうし。契仲云或秋ふよぶとなるへでよぶことりといふなるのまあるにことそあるなると見てその実の名をよむなるそれば疑なるなり口傳ありともうくもみえてあるなる一瑞の法説もてまほにあるべし云々

よごろ

散木 十六 毎夜待時なる「かくきさど我ほに我はそぞろにかのめりしつる 同 上ノ十六 八月十五夜云々「空も見月も我ごろの月なるまどあやよひふなるまでは光りくるなり 山家集 上「夢我つで我ごろ

たのほでるときんさらでおさだえ見えなるくに 月清集 上「冬の夜の行の天まふかぐる起し雲もよはへぬまゝ氷こぞそるる 拾玉 四「冬深しこのほのまゝのこうつりがも我ごろになるまゝべきぞさるらん 拾遺愚草 下「池のおりへゆやまんそぢそよる我ごろの松を又しかさねむ

よこばしる

横走

夫 廿七 仲正「よこばしる芦屋の里の雪ふるまゝばおるみさむげにやいそぞかゝるく 同 卅六 仲正「いつはせまをぐちはゆでおしがらやよこはしるまさる人の見我 兼盛集「よこばしま清見が関のかよひぢにいかといふことどめかくそでめつ 廿三

よごと

毎夜

いせ物語 五段 そのよひぢに我ごとに人をまもりてほめのりせまゝば 後撰 秋上 忠之「たなばたのつまし一日より秋風のよごとにさむくなりまさるかな 新勅 恋五 業平「こぬ人を月にならさむやむなべのよごとにまれは紀をぞふそえ 廿六

よごと

孝徳紀 廿五 白雉元年二月奉賀（ヨゴトタテマツル） 天智紀 十年正月奏賀正事（ヨゴト） 持統紀 四年正月読天神壽詞（ヨゴト） 続紀 廿九 延暦五年二月奏神吉事（ヨゴト） 延喜式 中臣進就座宣祝詞（ヨゴト） 竹とり「今よりのちは色一節我だにうごのしまうしとよごとをまちて見ぬかくく老ひなすか 万 廿ノ卅三「あらたしき年の始のはつ春のけふふる雪のいやしけ吉事（ヨゴト） 餘其騰

よこどる

まゝどろし 廿六 鳩まより法げしたあらんをひらてぐ捗どりあらんまくでぐるなるそことおおかれに

よこをりふせる

古今 かひうた「甲斐がねをさやにも見しがけゝれなくよこほりふせるさやの中山 夫 卅六 古来哥 家持「たび人のよこをりふせる山こえて月にもいくよのまよふらん 拾遺愚草 上「足ひきの山もよこほりふせれどもなふのくひがねよこほりふせる山をみてゝ 土佐日記 東の方に山のよこほれるを見て人にとへばやはたのみやといふ。独山ノ形ヨコタハレル之

よこたはる

遊仙窟 二 高嶺横天（ヨコタハル） 後のうらぞ「なほことでたびまさる松の木のあきこゆかあらぬに 拾 七ノ一 むかしあるおほきなる木の風にふきたふされて根がさげてよこたはりぬる

よこぶえ 横笛 夫廿二 六百番 隆信朝臣「ゆふまぐれ吹の里なるよこ笛の音にたつまでもあはれなるかな」

よこね 横寐 夫廿九 代実「いたづらにたてりし杖ぞふる松のよこねがちなる老のならひ」

よこなまる 神武紀 五注 訛此云與許奈磨盧

よこなみ 横波。逆波（フカ） 夫廿六 為家「あとたえてほのかにとまる路によこ波たつなりうら風」 散六 三 行家「うみをこえてみればかぎりもなくよこなみつよくたつなみの浦なる」

よこぐも 横雲 夫十九 永久四年百首春曙 兼昌「山の端の横雲わたりてまつほどにみどりにみゆるあさぎりのそら」

よごゝろ 世心 いせ物 六十三段 昔世ごゝろつける女いかで心なさけあらん男にあひえてしがなと思へど云々

よこあめ ヨコサメカ 夫十九 信実朝臣 建保八年三… 散六 村雨「窓うつも風にまかする横雨のあまりいくたびかあらしふくらん」 夫十九 民部「夕立の雲ゐる峯のよこ雨にくもりもせぬにそらぞかゝれる」 同 権僧正光経「ゆふべ白雲が山のそばのかけぢの横雨にくもるいとまだゆふぐれぞなき」

よこざ 横坐 江次第 三十ノ十六 新任大臣大饗尊者着横坐 宇治拾 十五 横坐の鬼 同 十ノ十二 イ十三ヘ ノ六 いちはやく白髪がもとにおひあがりなるさまゆゝしく横坐によりゐたり（イ本横坐ニ字ナリ）

よこさま 狭 四ノ廿三 日のくるゝまゝに風のおとあらくもあらくよこさまに吹入るあられのおとも物おそろしきよ 拾遺 恋二 夏の白雲よこさまにさえわたりぬと見えてしるぞかゝりけるものを

。是モ雲ニカケテスヂカヒテヨコサマニスルヲヨモイフカ 。狭衣ノモ常ナラズ吹入ルノ之

よこさ。正道デナイ ワカナ 上三十三 よこさまにいまだえたゞならひしも 桐ツボ 古人のとねまふく法あり やもとゞもおほくあるものを横さまなるやうにさまざまつひにかくありけるねまゝに

アカシ 五 今後のむくいはちらさまよこさまなる波風にあはれなん 同 廿二 横さまの罪におちてこひしけれどもゆかりなくあひぞけるをかたじけなく ノワキ 八 乃の中ど横さまなるいとひやくなるかな

よこぎる 夫十二 千五百 保季朝臣「風ふけば雲ゐのこぬ山の端に月かげよこぎる初しのゝめ」 同 二度集詠「あめのふる日の外山をわたりつゝ旅よこぎる秋のむら雲」 同 七 六百番 家隆 四 寂蓮「外山なるはしのあまぎりのたちわたるそらだにもののとかつくるらん」 新撰集 上廿七「さむしろの刈る月の光にて横ぎるてりわたるさむけさ」 万 四ノ四十四「青山に横ぎる雲のいちしろく我とゑましてひとにしらるな」 後葉 冬 為忠「里のよそのまゝる雪はちりもせでよこぎるあられはげしくなりぬ」

よこめ 横目 清輔集 夫木 廿二 人にをさなくてといひしをぞ「さかしらをひくあしのあまりてあまたよりほかによこめやかたる」 浜松物語 三ノ十六 中納言殿のおほきさの姫君の世のためにかへりみぬひに宮ちかひて横目みであり つかひたる姫ぞくに 同 四ノ三 殊に横目せずいくらかうちかけむとおぼえはべる 字治拾 九ノ三 そのちるひやすくて又横目さきおりてもまたさきれがたきものをつけのゝしりて

よこし 歳本 上十五 人のうらみ恋歌をとてつゐにも「君がためしぞいつあり七夕のちぎりのあれぞとてこそのびすけ」

よこしぐれ 横時雨 夫十六 永政「旅の空にあわたゞしく横時雨ちらす心もとなくひとしきりなり」 同 日 兼実 拾遺 保実朝臣「風さわぐさやの中山の横時雨あめのまなくもつれなかるらん」

よごゑ 夜声 うつほ物語 十八 あるなたまへまちたふれしぬるものから 今昔ノ五ノ夜ノ男ヲ見出シタル母代ノヤウナル 狭衣 二ノ上 十八 ゆくへを思ふ心のよごゑまだはりきこえ さまざまのたよりしたまへる給 勅勅 第十五 ひとつ給ぬ ふくるまでふえのぶ（?）あしげなる夜のわたりに

よごもり 世ニ別ニ出ス ことトレルスラナリ あゝし 十八 かくおびしらみとらぬいもよごもりてもいづれ年月をあさごのまへにうちかへしてもよごもりたるわがよはひそこにしもあれば 世をことよするなる 権大納言 十二 よごもりくらし もゝしきのいそのかみふるのまへのおどろおどろしくありて

よごのまぐ 。夜ホノクルワイフ 宇津保 三「まてのあけゆくれぞまたよごのまるん所こそなし」 六帖 五上

ガラス使用

万四ノ四十二「我かくのひろる袖を月しあらば出てこゆるらんあなかしこありけるも」万 万 三ノ廿三「あらしはしの山桜たちこえ

よくたちに出る月のあさのまき 日 出る月のくらきちかくえ 九ノ四十二。夜トナリテオソク出ルニテ 夜深クトイフカ如シ

万四「夜くてゝトヨメルハ夜ノ末ノ残レルヲイヘルニテ今トハ異之 万 九ノ七十五 欲其妖理（カシヤリ）小なくわとてざれ

よごろ ・数夜ト（イフ之） 蒙求（ノモ夜ハニテコヨヒ之） 落窪 一ノ四十四 よごろは三日の夜のまはいとさいかにせんとおもひのちひいろでさるつき あがなきとよめ 初秋 上卅五 今宵よごろの法ありかりて 帚木 廿 紀の家にはよごろえいてつりぬれ ところえ侍り あふひ 四十七 その夜ごろねのこのもちひ気せてり やどりき 九十 その夜ごろおんえぞまでき世なり ゆひろる

附 **よるくより** 芳ノ院 上之 三月のよふさりまゝもえたるおんある大納言宰相のあつまりにのびてあしらへ

ようさうつくさ 枕 十二九 ようさりつくて式アの院の御せんだ参りたりやがてよさり参へ世の御もしは仕ふまつらん と宣旨侍りつとて

附 **ようさりつくさ** 宇治拾遺物語 ようさりつくる月のゆるゆるに

ようさりつくさ 芳ノ院 上十二 さてようさりなくこゝろよへくて吹へあそ

ようさりつくさ 土佐日記 十六日ようさり ようさり方ようへのかる

よさむ 後撰秋 四 好忠「秋せこが衣小ゝる中したりようさむるさの秋ぞうるゝ 詞花 秋の夜の よさむによさむなるまにおもふにのもぞ秋さむにかりすさるゝる 拾玉 四一「冬の夜の 秋さむのなかあるのりかな

よさま ○ヨキヤウニ あふひ 上八 人の心たゞゆへよさまのゝ我しもふひ出ぬ世よさへ 由ぎり 十五 人の心をよきさまにおひ ゐをまへ人ひちく紀のをり 同 若菜 への心表はよき思ひとひ出えへ人へかうたりのなり

よさむ

よさまに

よき 斧。 和名 二八 除ヨギ 又善ヨキ ヲカ子テヨメリ 好忠 二月中「若山小木こるまとりの捜小さんよきつきまや斧の

あさりゝ 新拾遺 下十二「あさる人稲もろくに来のきうえ稲は紫の紫のよき何かんせん 宇治拾遺 三十三「わしたぶの生ひわりゐるえ 世中にまきにもらきてつ世しのふなせん

よし 善

古今 雑上「よしくらべ のすへのまづのをこまよいやしとらもよとしもよさうへあはどのなり 帚 四十六 いで およそげくるてえいそねぞよし まもぎる 十二 よし車にのりておのもちしえいもそこりこに 千載 哀下 堀川院の御時紀後が家にまる山吹ありと聞てのれば よく よし よけ 名別く出ステラレヌルベシ

よきあど 新セミ 初 よし水もどにかくてるのあくえと聞ふあらう

よぎる ○立寄之 著聞 十 傍新抄 よぎりおへしまけるよし只今のえ人中に蕗る紀そがらそふゝよべしきをさ

よきをとこ ○美男之 撰集 中九五 女房たちむまにて社家は神の社に仏るゝるいさおやしたるやまさんそくれ

よきうま ○ムツマシキ 拾 八ノ十六 かの名に紀馬の御へとろとらまにて 参伝宣房卿 よし中なるれどきら世てくり 後 あうろ ノ西えルベシ 男あへとやまと我聞て

よきやう ○ 是ハ貴キ ワカナ 下八十九 よしやうとてもおまりひくおのむ紀小あれでるにあてるる人ち世の世あ 方ノカ さまも本ちび 同 九十 よ紀やうえとひろみがらあまりやめとみくおくれろ

よきこと ○テヨトヨイ あくろ 廿八 帳君のこころ知しあなさるぐし紀にふ紀てえる 宇治拾 九四 仏師よ紀のとこ

よきにまは あうろ 廿六 あぐおのとそやよ紀さるあにまちび紀あへ おめひて

よききぬ 美服之 古今 序 いそぢあ紀びとのよ紀きゝぬさえらんごとし 土佐日記 みゆへくまなるあく よ紀きゝぬきび

よきひ ○吉日之 あづま紀 廿五 廿六日ひぐんのえてゆてよ紀日みりくまぢ 三島紀 廿 十六日ひぐんのえぢあゆく いとよ紀日えりろうちくろなよ紀日あしとあろぐへ中なる内に 栄花くく別 四 そのはよ紀はして

かのくこの基をたてに [同]カヾヤク藤壺 「よるひるしてあそぶものども命婦くら人（云々） ○よろこび月 トモイヘリ別ニ出ス

よきひと ○貴人 [万]廿六 「淑人のよしとよくみてよしといひしよしのよくみよよき人よくみつ」 [よもぎふ]六 さるべきよき人あまたかよひ [拾遺]六 大方さしむかひてもよめ給へ」 [同]八九 よき人のはぢかしげなるありさまなどかくさむとてよき人の心を

よきひと ○美人 [玉かつら]十五 當代の御母后と聞えしと此姫君のはかなきとを見るに

よめ 嫁 [さころも]六十六 いはんやそらそらひ給ひしよめのきみはしらなかなるもよめにてぞ [日本紀竟宴哥]五 倭姫「わがきみは……」 [落クボ]二 車よせて皇にはかなき中の君尾の上よめ [栄花月の宴]六 （四の宮為平ノ御内ニ オクルル方ノ事ニ） 法門后の御よめ

[俊頼集]芦垣 ところけるとのひのおとよめ [拾]四ノ一 あふさかにおのれ（云々）よめの君

あるひのひどいとおかしう見えさせたまひける

よめのこの **こぬさく** [和泉式部集]下 （人のよめの小式部の内侍 うみける日けさるせ） あるかなしとおのがかるる [夫]十七 （小式部内侍のなくなりて後 法性寺入道関白） 「よめのこの小嵐いかがなりぬらん 嵐の振りちりさりる

よめ 夜目 [狭衣]三ノ下四 紋なしよまく織りまかされてる夜月おぼろくしろききもの [夫]十七 （家隆内大臣） 「奥山にとむ山ぶるの月のまに秋月はそれとくるとさめ [ホツム]廿七 秋月はまたよめにはきもてる [万]十八 「紫のいにしへのことにあれ 春日山霞たなびくよめにみれども ふるもよろづかくろべるなかあられ [狭衣]二ノ下 秋月ふかしけしき [夫]大和泉式部 「天の原かくてふる雪たりよめにはありまほしの空 中ねしかとよく似てりしか [クラ]尾 十二 上ツフ 彼の物もいとよろこぶるに中納言などのよとひのへ上のなと

夜目にもしるきすがたかしはゝ [狭衣]二下八 秋月にもまさるさまぞりあれげなりと見給ふ 髪のかかりなど

も今もめでたけれど [栄ユフシデ]廿 白いかさねかさねよくあざやかに [同]栄花四 御使のろくよるなどもいとげざやかにみえける

よめぞま [クラ]上ノ二 よるの人ゆゆしく見え侍らぶるに物のけさきつくものなりけるを [夫]十二 （伝実朝） よめぞまやうに見え侍る

よみそさらる [夫]十二 （伝実朝） 「水ぐきの岩の湊にとぶ鳥を清くさくらに夜はこえて

よみぢ 夜道 [万]十八廿二 「ぬえねずとき我夜道の月あらしとどめの」 いつものやうにて夜道まねびて

よみぢ 黄泉 [万]九廿三 「ことつちに黄泉のさかひに [国ゆづり]中六 四宰相をおくり侍るもよみぢの道もやすらく もはやるまじく [あづま]十二 つらきのまのあるはおくにさきしよみぢの旅かれにおもむかひ ゆうくすくうえまことに侍るのひつくるなべ [夕ギリ]六十六 （玄井の宰相あたりの誌 ） よみぢのゆくえこそ契り侍へしか

よみぐる [白文]一ノ廿二 得氷猶可藾（ヨミカヘル） [元補]九 「かくるえふいらえてもえなる物あるらべしよみがへるこそ稀やうなれ」 [夕負]四 いむるのあるしたよみがへりてうえ [同]廿五 からきまはむるほけなどしそのあたり まやよみがへりてたりしを [まなら]五 りあふたりけるをもてたてるかよみがへりたるとい ふ [あり]十三 よみがへるさまあるど申すものかは

よみつく ○ロツギ心三ノ十オシガヨミ列ス細ニ出ス [玉かつら]四十七 「よろづのさきし前稿（云々） その月の稲をとり出るに

よみたかで [今物語]七 満座感歎しておもしろきなりて立ち称美の声まに人のおひとらせてかへせまつり 続つへる筋ことあいまうかへらざるべく

よみがへ [ほおろ]一 廿四 人このおとよみきたまどのちろしつ

よみがへく [狭衣]二下廿五 我爾時為現清浄光明身あざんにはまらせてよみがへく [同]二下廿六 皆如金色 従阿鼻獄とかきたるをよみがへらせたまふ べき

よみならふ 讀習 [宇津保]十 法文などよみならひ給へむ

よみあはせ [古今] 雜上 屏風の繪によみあはせてかける

よみあぐ [ヲトメ]十 こゑづかひものものしく神さびてよみあげけるなど

よみびと 讀人 [蓬生]七 歌をもよみ人をもあらはし心えたるこそ見所もありけれ

よし 善 [延喜式]十一大政官三 凡諸司諸国申政之時史讀申己訖辨判曰云々畢即史仰云継（讀曰与志） [万]一ノ廿六「よき人のよしとよく見てよしといひしよしのよく見よよき人よくみつ [いせ物]廿三段 田舎人の言ふにはよしやあしや [土佐] [illegible] [帚] 四十五 よろしくいひえ人なきに [illegible] [東屋] 六十六 かうやうのこと [illegible] [松の雪] 十七 [illegible] いとよし

附 よのなし [いせ物] 十六段 まづしく經ても猶むかしよかりし時の心ながら

よし 。ソレナラヨイヨ（火トシ冬フテタル付又ホフテズトモソノマヽサレ益ナキ付 マヽヨ） [古今] 秋上 萩の露玉にぬかんととればけぬよし見ん人は枝ながら見よ [帚] 四十二 よし今は見えたるかぎりそとて [拾遺] 別 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] 廿三 よし [illegible] [名間] 下ノ廿一 [illegible] [帚] 四十六 いとおかしと [illegible] [同]卅五 よし [illegible] [総角] [illegible] [かげろふ]八 [illegible] [椎]五十五 [illegible] [宇津保]四 よしさらば此昔物語も [illegible]

。**附 よしく** 。[illegible] [初秋] 下ノ十四 [illegible]

見おへむと [あさひ]四十七 霧の [illegible] [椎]一九五葉ノ二 [illegible] [同]九十五 [illegible]

附 よる 。見せたなやかくさシテ軽キ助語之 [椎] 六十一 四十八 [illegible]

附 よや 。ヨヤモヨシ近キ助語ヘ [古今] 哀傷 吉野川よしや [illegible] [同] 六帖四 流 [illegible] よしの川のよしや世のなか [六帖]四 [illegible] よしや世の中 [同]五下 [illegible] よしや [illegible] [若菜]廿四 いとおもしろ [illegible] よしや [illegible]

よし 由 故 子細 趣 [竹取] [illegible] [大和物語] 五十六 [illegible] [落窪]一上 [illegible]

よしもなし 別ニ出ス其余モ順ヲ追テ見ルヘシ

よしばむ 。一ツモ故アリゲニ見スル之 [夕ゝコソ]九 [illegible] [帚] 廿三 よしばみ [illegible] [若菜] 四十 よしばみたる [illegible] [紅葉賀] [illegible] [あさし] 廿四 [illegible] [東屋] 十六 [illegible] [葵] 六 [illegible]

よしく 前ノよしく傍ニ附ス

よく [さかき] 十 [illegible] [初音] 初 [illegible] [あさし] 廿七 [illegible]

きこえて【東ヤ】十四 北の方ハ人見えばいとゞたちてくゝのさうぞくせさせたてまつらひなどよくしつゝ【手習】
五十六 法師ハ見えばいとよくきよくうつくしげなるさまをそのかたちどもを

よづく

【夕良】十（イタヅラ サ珍シク）けしきよげなれどよづきたるなどぞありける【宇津保】四 きんをぞ、父ぬしきこえさせ給ふ方にいと
よづきたる人もありけれど【大和物語】四 きこよみのひさしうよづきたる手にかきたれど
よその人もいとあやしけれど【三代つぐり】六八 かの大臣の宮をよくものしたまふうちによくつくろひたるまでみやび
かゝるまゝのひさしうよづきたるまでおもふりくてよき女房などおほかりくもいふさくへのつとひあそびて

よしなし

○手ダテ 手段ガナイ 元来故ノ心也【いせ物】四十段 歌よむ女のひとりありける男血の涙をながせどもよるべなし
のなかにありてもさうさうしき川袖のかひなうておもひもなし【同】ハイカイ【古今】十三 よしなしごとにつけて
【いせも】七十八段 あるなどものそふぞかゝりつるを【拾】五下 いでゝゆかん
人をとゞめんよしなしや かの都の方に鼻もひねるる【いせも】七十八段 あるなどものへぬこゝろを
ませんよしみなかれば【万】二四 あはれとなしや【宇治拾】八ノ三 さてもとの國へ帰らんといひけれどよしなし

よしなし

○センナイ ヤクタイモナイ サセルコトモナイ ワケモナイヨリ轉ジ来ル【宇治拾】七ノ五 此馬京にゐて行たらんにみありたる人ありて盗みたる
なとかりけれども、よしなし【狭衣】下 よしなき物あつかひ好みたる
やどに【枕】二ニ まつへおほかるにあらぬよしなきものゝ名のりしてきこえさするとてさきまうで
とかの中にもかくまじきことなりけるよしなりけりとてまどへり

よしなし

ふゆり【松玉】四「うしとてもよしなくてあるべきにもあらずよしなしごとによろづのうき身にてはかなき
○是ハ縁ノ字ノ心十二ヤ【狭衣】二ノ十四 よしなくしてたれかゝゝる袖に似たるものなればそのそでにぬれけるも
にとにかく【風雅】十三「うらめしきはよしなくてうきよにあはれくもありけるそのかけし人の哀
徽安門院

よしなごと

里を
○ヤクタイモナイ心之【続紀】卅九 晝も夜も念持天在不得由無久（ヨシナク）聞之年車不得（コトエズ）
【わか菜集】上 つれづれなるまゝによしなごとに見えし こと【三百九十】四十 あるひと

ひ

するにしたがひても侍らずかしこまりあれども、なをいとおぼつかなきこそかへすがへすもあはれなれとかや【宇治拾】十二ノ五 なにごともよろしくあらんこそ
侍らずときこえ給へるもいとあはれなるぞ

よしなしのかぎり

【狭衣】三ノ十七 今宮の三の宮の御ため 今ハ只佛に向ひまゐらせむとてのみのこりさせ給ふを世の中よしなし
物語もはかなき世の中を侍らで

よしのくず

吉野国栖 【延喜式】卅七【宮内省】式 凡諸節會吉野国栖獻御贄奏歌曲毎節以十七人為定十一月新甞
會各給禄

よしあり

○一クセ 故アル之【源氏】十二 けはひとんごとなくよしありて【帚】十五 かの女ハよしありてことなるをや【桐ツボ】三 ふ
しつゝのよしあるふく【源氏】七十 よしあるまのひとあてなるを【若紫】十 うゑの女房などもあ
よしある所々ハあれどもよしあるべき方にて【アゲマキ】五十九 よしあるべき
ねさるほどござるべき人などもなきまゝありけり

よしあり

○是ハ故アリテ子細 ワケアリテ【初花】三上 女房あまたさらひなどしありてはかの國のうちとのあたりにまつりて
【末ノ】十三 姫君の御ありさまもゆかしくよしめきたるをも【源氏】二十五 あふこともかたけれどあはれにもかりそめなれどあさくてはあらぬなり

よしめく

○一クセアリゲニ プルマフナリ よしめきたるまでこそおほせられもしもあはれにもあるべし 小耳もあたらしかりければあと

よしもがな

○手ダテ 手段ノ【万】十一ノ二十六「あがこひの君がためにはよしもがなひとつの事いはむよしもがな ○万葉ハカナモガモとあり
【古今】十四 こひしき人の「いとせめてこひしき時ハむばたまの夜の衣をかへしてぞきる よしもがな【同】ハイカイ
「おもはぬのやまとさへいとゞいはぬこそ我もよしもがな【同】 よしもがな

よひ

宵ハ初夜ナリ【允恭紀】八「ワがせこがくべきよひなりさゝがねのくものおこなひこよひしるしも【万】十四 奥山にすむてふ
まことにたのみてあはれなりける ○こよひの初めのころなれば【後撰】二十 暁と何かいひけんわかるれば宵もいとこそわびしかりけれ

よびいる 呼入 後撰 恋四 人のもとにまかりて侍るによびいれねば

よびいづ 呼出 若菜 十一 僧都の坊にて惟光をよびいでさせ 東や 八 はかなううれしく出入人もとときけどまへよび出ぬべくの人のなかりければよびいづるわらはと

よびはなつ 呼放 ◦多ク中ヨリハナチコナタへヨビヨスル也 蓬生 九 兵衛のぞう（尉）あまりあひてあそぶをよびはなちまかりて人に見せ奉り あべ 真木柱 大 君だちぞよびはなちて見奉るめる

よびかやる ◦よぶ處へ附ス

よひと 世人 古今 恋三 業平 「かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ （こよひ イセモ）

よびとる 竹トリ 五 今までにもひびつる侍つかさひきゐて翁をよびとりていふやう 翁云々 松風 三 高の里のやうにてある人をよびとりてうらよ

よひとよ 夜一夜 土佐日記 日ひとひ夜ひとよあそぶやうにてあけにけり 若菜 二十九 秋ひと夜秋風ふきあへるに

よびとよむ 古今 （スミケチ） 貫之 「秋くればまだきひくらし足引の山の山彦よびとよむなり

よびくへせ 夫 五 家持集 春歌 「のこりなく家の桜もちりにけり杖よびくへせ山の山きえ

よひく 霄くたり 古今 恋一 （よひく　あたりて） 「よひ〳〵に枕さだめん方もなしいかにねし夜か夢に見えつる 同 恋三 いせ 五 「人しれぬわがかよひぢの関守はよひ〳〵ごとにうちもねななん

よびよそ みくろう 廿 三条のきさいにゆきとよびよする女をみまへ ヲトメ 四十二 せうとのけしくいく秋よびあててふかそ とこそべ 三のり 十三 涼タキリテ よびよせ奉りたまひて 万 五六 「沖べより舟人のぼるよびよせていざつげやらん旅のやどりを

よびたつ 呼立 万 九 廿八 ますらをのさつおとのひそてよびたてゝ

よひら 散木 上六 （夏萩の月を よめる） 「あぢさゐの花のよひらにもる月をかげもさながらをるよしもがな 同 中六 八条泉家 ゆそ三 「あぢさゐの花のよひらへさそはれてつまぞこのめのつまさけぞけりそ 拾遺愚草 上 「あぢさゐの

も

きてぞふきでゝ雪我がよひらの数のそよぐをぞみる 長秋詠藻 下 「夏もなほ心はつきぬあぢさゐのよひらの露に月もすみけり

よひゐ 霄居 末摘 十三 さむくしたよひゐるごとにそれほどぞふさうへこそともだえりゆるそかりけるに ワカナ 上四十三 あまりひさしくよひゐも例ならずば人やとがめん 更級日記 つまでゐるひゐあよひゐ あぞふ 末摘 廿二 おそけれどよひゐのおどやきらりありひて 夫 三十六 言語 和泉式部 （和泉集） 「こぬ人をまつはしきよりつもつびなれへ為家ふころのよひゐなるかな

よひまどひ 総角 十三 よひまどひをしたまふ物も えゆるさでやすらひてこの君のやどりもあまたいびきこそうちかけつゝねおとゞをおどろかし まどへ 手習 四 （かた） いふくめでられて宵まどひもせずおきゐたり 同 四十二 よひまどひはえもいはず おどろ〳〵しきいびきしつゝ

よびこゑ 夫 十三 家持集 （長方も） 「むこの海にあまのよびこゑ[illegible]あまのあこにおびきこゑゆくも

よひあかつき 霄暁 続古 雑下 信実 「夜をのこすやそぢあまりの鐘の声宵暁もあはれいつまで 宇治拾 二九 宵暁に出入るかたのよびしともたてゝかうせよといふなるをきゝて 後拾 雑二 業平 「あさき まねゝそのかりとまりよぶに暁とこそきこえ

よびあつむ 玉かづら 十七 京にまちりがひきたるなどもたよりにつけてよびあつめさぶらはせしも

よびすう 竹トリ 五 かの奏せしたくみらをばかぐや姫よびすゑて 翁云 同 六 翁云 ためひてよびすゑ なきまでもかくよび居て 真木柱 十九 君たちは何心もなくてあそびありくを母君みなよび

よびとこ もとまゐりて

よも 末摘 十三 人のまうでたる夜もよもあかずおぼえぬるにへまどひてあへ 蓬生 十 人のまうでたるもまうでこずなりにたれば（ジョウカラ） 後拾 雑下 和泉式部 「いくとせもよもすがらにもさだまらぬよもかくありなむと 若紫 四 傍ねはよもさらにあらじ 末摘 十五 あまたのまうでそ見てまぢかにてあへ よもまちくしきもありがたきひとのさいはひまことにありがたくよくなむ

いひおこして 續古 哀傷 信実「つひのまちきのいる道をよもすがらおもひとくるぞみのりなりける

よも 四方

夫 十七 家集 家集「雪ふる夜八十のうちもよもへのうらはしわ山のかげとしまれ 山家集 下「なぐさめもなせちうとものたにあけてよもはなち人もかよはざりけり 続千 夫上 為家「なかはへやあこもりせし梅うきとよのふところの浪の汐風 千載 冬 冬光「かさゝぎのはしもつらき道に四方のそらをしらみかつるゝ

よものうみ 四方海

白文 十二子 四海無事（ヨモノウミシヅカ） 堀川 初 祝 散木 十ヤ 金葉 賀「君が代の松のうは葉におく露のつもりてよもの海のふちとなるまで 夫 四 波集拾「よもさとその廣沢流水にてら浮日のあまほしかげ八四方の海まで 夫 十九 定家「よもの海も煙あまだち浪ひきしくさみ代に君ぞさかへん

よもつくに

神代紀 上 黄泉（ヨモツクニ）

よもやま 四方山

拾遺 ヲグラ多 神楽「四方山人の宝とする弓は神のみ法にかゝる 堀百 炭がま 紀伊「四方山の寄のなすまに小野の炭がま煙たちはと 夫 廿四 隆季「神さびてよそろれわされ丸寄るみつこの四方山の人の寄のりく 栄花山 三 こと今の世の中にかざとひ人の心出来てよりやまの人上下やすくの坊るに 同月の宴 十三 たゞ天下の人為の寄りより四方山の権勢の云ひとえ中るも義をにかなん 同くものまづく 九又もおさく「祢しておやすらあくいよも山の名しるあつめよりあひろかにろそせぬへと 同衣の姫 五十七 左 四方山の弘ごまを祢つ

よもぎ

和名抄 廿八 蓬 一名華 文他 和名与毛木 本草云艾一名醫草 万 十八 廿「おやかぐさ余母疑ぐうらきさかつたあそびなまご 夫 廿六 後成「あさとて麻のよもぎの名にあらじぞきまてあれのべのるゝや 新勅 雑二 業時「世中に秘く事となりにそらんのすゑのよりぞのきして 和泉式部集 上「かれうきてなすべうりのと我宿の蓬かもしらるてらん 荀子 蓬生麻中不扶自直

よもぎがその 蓬園

堀太 蛍 師時「五月雨に菖蒲にかり我宿の蓬が露に蛍とびかふ。別子細ナシタゞ草イキヒシゲルヲイフ下ノ 宿 門 垣 窓 閨 ミナ同じ心ゝ

よもぎがには 蓬庭

続千 秋下 俊成「たづねてもとはれし月の影ぞすむよもぎが庭のあきのふかさを 新後拾 雑下 延全「つれづれと待ふる里のころ哉よもぎが庭の月をながむる

よもぎがそま

拾穂抄 五 伊勢物語 五 ヲ四十三 長秋云 蓬が杣とハ蓬のむらだちたるに似るなりとあり八雲御抄にも用ひさせたまへる猶く上 拾穂 後拾 秋 好忠「鳴けや鳴けよもぎが杣のきりぎりす過ゆく秋はげにぞかなしき 堀川後 放く 常陸「蓬生ひ蓬が杣とあれにける 拾遺百首 好てらす中里もて人影もせで 盛衰記 光 いつまでか蓬が杣にまかせてはよもぎが杣の 下「うらがるゝ秋の白露をのあやさくよもぎが杣の わとのまかさを 夫 十四 後京極「たのめこし人のふかき秋ふけて蓬がそまにちつゝあるくなり 新拾 秋下 為秀「きりぎりす床の中かぞまにみよもぎが杣の風やさむしも 月清集 上「庭蓬に秋立もとしていかにぞよもぎが杣に秋風ぞ吹 拾玉 三「八重よもぎのをわけよもぎが杣の虫のねぶよ 夫 廿六 信実朝臣「山かげに蓬のそまつくりねざめ 同 同 家隆「きりぎりすなと庭の蓬のねくらにあなふえすよふ末の声

よもぎがねや

蓬閨 夫 卅三 壬生百 忠岑「おきあかす蓬が閨のひまよりもてらす秋の秋風ぞふく

よもぎがやど

蓬宿 新続古集 上廿五「あきつる庭に菊の花のとの蓬の宿にこそ 堀川後 兼房「ひとり住む蓬が宿に秋来ては蓬こそそゝにるたれ

附 よもぎのやど 後拾 雑二 さうそく「この葉につけてもよもぎふのざらん蓬の宿のねわしもを

よもぎがしま

蓬嶋・蓬莱（ライフ） 夫 廿三 中務卿のよ 張仁「いかにへもよそのよとひのかへつる海の蓬が嶋を思ひやるかな 夫 廿七 堀川院御時百首 権僧正永縁（永縁僧正かと云）「すまひにや蓬の嶋にうつふらんつゝにのきてひかさかへやら

よもぎのかど

蓬門 夫 廿 為家「あれむすぶ蓬の門のあさとでにえさくさしある月のつき 好忠 四季百首の序云 蓬の門にとぢ籠て出つるてこのつきの身ひとつあひ 三十 夫木 十七「あれぬまのあやめ八そこ更ぞ

みえべしともよのさかりはすぎたるともあるらん［夫］廿［此因］家集「世中ハあるハ行かへ人もいそぐる道のかぎりに

あはれなりけり

よもぎのかき 蓬垣 ［曽丹集］冬十月［夫］廿 五代 好忠「あけぬとて蓬の垣のしたにこそ虫もさへぬなのはなさきける

よもぎのまろね 蓬丸寐・洩蓬の名なるべし［兼輔］六十 かくよもぎのまろねにつゆひたるねてちかふなりしけるも

あるなり

よもぎのまど 蓬窓［夫］廿一 家集 家「音して岩ふたたゞる故ぞ蓬の窓のあとなりける

よもぎのまがき 蓬籬［夫］廿二 好忠集 六月初「ふるえ杯と蓬の籬もくればあれども の若をおひろひつつ

よもぎのせき 蓬関［夫］卅八 登蓮法師「家につの風のまよひぢたつねとへよもぎの関をいかでこえまし

よもぎふ 蓬生［拾遺］上 母の行 かく庭のよもぎふの露けりぞあやふきそもえ

［源氏］四十四 年経のよもぎふをまどはるもさまたげはんかぞう

よもぎふのあらし 蓬生嵐［夫］十九 家集 和泉式部「様かきてあるべき世とつかはのよもぎふのあらし吹なそらなからん

よもすがら ［欽明紀］廿九 通夜周守［和泉式部集］上「よもすがら何ごとをかは思ひつるまどうつ雨のおとをつつ［拾遺］秋［力モリ］其ハ 後秋ハてをわざと秋の［一因］

［スマ］卅六 よもすがらほどろまでふつつりあかしあか

［同］月を［同］はのの空にも［同］あるらん

よせ 寄［説文］託也［廣韻］附也・上モ下モ多シ。スル職ヲイフ・倚頼ノ心カ［続紀］八ノ廿 元正 詔曰朕之肱股民之父母独在
按察寄重務繁輿渥群臣異之［三代實録］五十八 陪朝臣安仁抗疏請解大将曰云々 此職任当肱股寄重ホ
牙［同］五十九 寫以将軍之職寄重責深［文粋］五ノ六 返随身表 況復喬輕寄重［朝野群載］上ニ 勅符 其寄最重 其階
昇［職原抄］大納言云々 凡當官者人臣之重職也云々 而光頼郷以来為諸大夫輩久任之 然而至今為重寄［桐火桶］三
中宮の女房の後にまた世おりく［さごろも］四十四の名からの二所ありそり世の人のおもへるよせおりく［栄花］上ニ
にしつかはり［泉のくら集］十九 大方のよせあるべくよりそひてあるべくてかつぬ心ありさるあなくちるうを［東斗］十られ

よりまもひ給ひの八位高く時世のよせ今よりまさるへかんるひなさべくおひてそのもびけ我べてぞるる君なりの
なり［桐火桶］十三 無品親王の外戚のよせなきにてはただようさて［盛衰記］十二 左大臣大臣ハ別当の孔おかく儀刑の君
あやけれバ［白文］四十八 雖厥邦之寄重云々

よせ 寄［ヨセ］ノ類次ノ［ヨス］ノ所ニ出ス

よせくら ［和名］十四 馲駝桂也 柳ハ与勢波之良［宇治拾］ニノ七 かわらにおきてよせくらふみたてて身我をてうち殿やうのほとる

つけて

よせつる ［夫］廿 家集 ゆう涼とりふるを 光俊「風ちろくよせ結へてさしや船にてぞ尼まりととへむかへあり

よせくるなみ ［風雅］雑中 よもりへ 家「家づとに身我ならとあまるよりよせくる波ふ衣をねるね［新千］秋上「風つしる
やどる我身の我名かうよせくる波の秋の汐風［同］雑上 のまえ文「あらのその浜松ろ枝ふきく風やよせくる
波のおもやうれんば［松玉］四「清ろまさんも我をく人のひろけてよせくる波の底のふふき秋 葉華「たのまぬかなしる世の中我かなき

よせと 寄 詩ノ其三寄スト人（注）［後撰］雑二 同クス人モヨセカハス心ナ つひらげふおよる方をいかにせん

よせと 寄。（心右ニ同じ 寄進レ人ニ）［千載］十五 業仏のそぞ世をさかあるものの人のたよりに。秋寄進スヘキヤウナルニモニテナンテ

よせと 寄。（心右ニ同レ）［伊勢］七 あぶちちハちさつくれる琴うちあふ背ひりあらそひある桜をかけあふて三ざん
ふかきとひろうちあふ方にあなをよせてんとただるな至ろそふ山あるほ

。ある題ノ方ぞ 寄我ナドイヘルニ［ワカナ］下 五十三

よせと 寄 まさぶさねど［詞花］雑上「主意ろにとある方やつの至のかのうつのの
わうなるらん

よせと 寄。（入ヲ側ヘヨスルニ）［万］卅九「かつしかすのせこのなまこともつましすよ世とにふまのてこの子を［後撰］雑一 中務
「白川の滝のいとまあれどもぞりな人をよせしあようや［少貞］卅六 為人の舟もちし

ガラス使用

十七

よせてはなやかにかゝるより我奏せし衣のふ 枕（因ノ於ニ出）

よせ 寄 【あこき】十九 衣をかけてもとニしよりより 【宇治拾】四ノ三 極に火のむくろふそくして火の車をよせん
器をく 【枕】十七ノ七（女房ノ車ニノルホニ）今ひとくせんをのせんとするにめづらかなるやうに驚かれて車をよせさ
せまいが 【式子内親王集】まじきつむぐちの川舟よせびぬ半のあつくもうつわびぬ

よせとる 【新勅】冬（えゝ余）「まのわまのさぞわねやどもうつれねよせとる名ぎさのものあら波 【新古】冬（いせ）山風
おき吹けどふろねごまる波のよせとるいそねかへりかり 【新勅】恋一（あこがれ）「いそみがくきらゝぞふれ
沖つ波よせとるたまのふうづりて身の 【壬二】下「あさなぎのうらのさましるぶ波によせとるふねへさきつむらし」

よすが 縁 字ヲヨム。ユカリ 縁便リ 便ニスル 【欽明紀】八 任那若滅汝則無資（ミマナモシホロビバヨスガ）。又因處トモアリ 契玄因（ヨスガ 日本紀）
【因】三ノ本ナルおか つきもなきぞいちゆし出我因康とぞ思ふ 近おかへうつせみれ世のことに
あらまべくよそかひし出ますや今る因ある者へん 【同】夫ノ丁五 余須すのまとえて まのかん 【帚】廿七 頼ある人のよく
ふかくて侍るつべ 【枕】三ノ機ノ行五ノ三 郭公のよすがとこそへなへふや輕交わのへ死やあらび 【狭衣】一ノ筆さま思べ
がらんふ柔の寄よりかにあるへう死を為出でよすがともう思ふ 【同】二ノ上ノ四ノ三 ことノハ のりこすする筆装も侍
らむよすが衣へ出たづねさせあへ 【蛍】十三 ちゝぬよすがふてえんそあわねるにやあらん。源ノ辞ニテ見シハノ心ナリ
出ありひね

よすがる ○タヨリ 【帚】四十四 人まとねばんふへいとむゆいてことづてやらんよすがだゆるうをとうぞべりこそちらと

よすが ○ 主ニモアレ夫ニモアレ縁ヲイフ 【とはずがたり】一六 若君のためのよたちさうねくても年比のわざはうてちらぶろうるべきる
さるべきるにはまうでよすがつけゝる我あがる盛るにさへれひくへみれくきりねべし

よすが ○ 妻ヲイフ 【帚】廿六 まづきにやんごとなるよすがさだまりあつることそさるべしとみ思 【あさぢ】八 娘ども
もをのこどもへ所ふつけゝるよすがども出來て名まつれふぞり 【帚】廿四 さる方のよくが
ふさひても有りぬべきふ 【同】廿四 暁くゆそもさる所ゆまくつれよれねよすがとせきあへゆへ

よもすがら ○ 是ハ紫の法様ふ子のうそをいふ 便宜ニよそべ入子のるあいよふ 【胡蝶】六 いつりもまの光りをあめあつる大殿の宮どん我つくるよすがのまゝ
今えをあわねこと申おぼもくへしもありうる

よもすがら 【後拾】秋上 為良法師「ふりうかあさぢが下につね出てよもすがら虫の声我の音ぞなく 【拾玉】七「うつへかる
ろりやまねるから衣よもすがら袖ふ露湿の 【月清集】上「屋さまとうひの白妙の藻枕よもすがら雪
をそらひをつ

【附】**よるはよもすがら** 【古今】恋一（よみ人しらず）（おもふ事）「恋しきとよるはよもすがらしねどぬのようふよすがらにあはむらへつ
【教補集】「ちぎりるえやよるへ出ぬとのもぐらんよるもよすがらにうつり一ぐる

ガラス使用

○た

た 田 〔秋山〕二 老後「今も猶てら由にのこるそほづなむ秋をそねむ死せるかみなから」

小ー 小山田 たのもとー 門ー 山ー 山の裾ー 沢のをりー

湊ー そこゐの小ー まきー かりー うゑー ふかー

袖のまー あらー 川そひ小ー 沼のえのー あさー 遠ー をちー 神ー さー そともー まきー

鳥羽ー 拾 さのー 壬生 のー 仙 さるー 錦 〔以上 夫木 廿三〕

た 他 〔初秋〕上 十 二月は六左右兵衛大将中将少将とまひのうをのこたのほかく月のちかくなるまゝに いそぎ日々に参りあへ〔国ゆづり〕中 十二 大いまうち君のまゐりて侍るとてよび侍りしかばまかで侍りしかばたのみかさまど実忠の朝臣のよそをみえくなどく中侍りしかば〔宇治拾〕十五 法このこの僧ゆく他の事にあらず仏法を信ずることのみに

○〔附〕**たド** 他事 〔宇治拾〕十二 ただ囲碁をおりて他事なし

だ 攤 〔杜詩〕白晝攤錢高浪中 箋注 攤錢蜀人賭錢之名 〔和名抄〕四 五 雜藝部 意錢 後漢書注云意錢（世間云世 近字知）今之攤錢也 芸苑 珠叢 秘云以手有所按 謂之攤 〔国ゆづり〕下 十二 こよひは助ぞこゝにありしさきのあとこそよくもてなさせまうけせまゐりてこそ ごて戯りつきしかば〔くら開〕上 四十六 かくて内外ごうちあひて攤うちけるたびかうりて海よ死ぬどにさしあひつあげまごとうごけんあとあるうちのことはいよそうあかくよりさま さうるかうどしづぞ女房達いたまうりける〔あて宮〕十五 だうちあそびさるに〔栄花初花〕六十八 上達部ども殿上人初めまりて攤うちあそ〔つれづれ〕百十七段 攤をとばだらくんなどやふ

たい 對。（今も内裏にあり對の屋なり 女房の住む處也 長局之）〔若紫〕四十九 このおとゞろべかしにつそいちひさきうかぞうことさまに参りとありまゝば〔いせもの〕四段 西のたいにすむ人ありけり〔かげろふ〕廿九 ぞうなるたいども庭のきこのほとちくをり〔拾遺〕五二 本院のひんがしのたいのまへにまうりのそうひとく

〔浮舟〕十五 たいの御方ゆいとよう寝入たり〔同〕廿三 ものゝたいの上にまゐり侍り

だい 題 〔蓬生〕七 ふるきうたとても題をもよみ人をもあらはし心えたるこそいみじうもあるべき〔いせもの〕八十段

〔同〕同 あすの川のほとりにいさる戯歌ゆて〔古今〕雑上 露ぞ削またてりといふを戯ゆてよみせのひける

法皇風の絵の流流ドなるに滝おちたりけるを面白しと戯歌ゆて云ふとよみ侍りける〔拾遺〕秋 花のむらのよるの たゝとひの題をよみ侍りける〔後拾〕夏 祐子内親王家に歌合し侍りけるにまちくさあたど題をよみ侍りける

たい 臺 〔宇治拾〕十八 佛臺のうへにあたをうちさげてまゐりたり御中なるひの盤にすうるさとこれば佛盤つよ

〔宇治拾〕十八 臺をかぞへたりつゞ死て佛臺さげてまゐりたり御中なるひの盤にすうるをこれば佛盤つよ 自死千尺三寸斗ほ切すて十だろりありたりそれー鉢のおせくにひろらるが風かしらおろ戯して ぶりおりくるに大なる金まりを見しけり後世に舟なる人の侍大なる銀のひさげ小銀のそひを たておいげおて参りたり金まりを焼ながかひなと拙をまとひつくるそうふおやきあげてそなふる戯せをと しいれて参らせたり後臺を引あはひて金まりをとらせぬくるに。（是は飯臺なり）〔後拾〕雑六 入教 ぼ大宰大皇大后宮 東三条にうふりなひさうろに牟ほ蔵宮治部大殿の庭の侍りけるにのぞつけ侍ける

たい 弟 〔拾〕四 六 ぞうのそる都深月の弟一の国おくる人〔同〕五十五 弟一の人ゆ又一にゆんきんとこそゆかあと侍らてもいとあらー

〔新後撰〕雑下 西園寺入道前太政大臣弟まゐりて弟三年の秋ごろ（君六三年君の子ときこえのほと叙方ふりくりてらむべし）〔同〕同 源時長朝臣弟まゐりて後弟三年の春ごろ

だいなん 臺盤 〔スマ〕ノ注 ーーハ 侍臣ノツキテ用ル盤ニヤ〔同〕十 だいなんともかくしちりぞくるていみ所とひき 久ーたり〔拾〕四十七 だいなんの上におやしぬめのありしをたゞそりにとりてくひまがらいひふ

だいなんどころ 臺盤所。（女房ノサブラフ處ヲーーートイフ）〔末摘花〕廿二 臺盤所なりゆきのぞみあひて〔蛍〕廿二 だいなん所の女房のなかゆりーるなび〔アゲマキ〕四十六 だいなん所の人にくるはしまりつれば〔拾〕四十八 おほにだいなん所の人々とみぐふとひてくすぐ御やたやとのひおかくうらせたまへ

だいばんどころ 臺盤所 。是ハ大臣ノ内室ヲ今御臺所ト申ス是ナリ古クハイハズ 〔平家物語〕一ノ八 其外御娘八人おはしき皆とりぐにさいはひ給へり一人は桜町の中納言しげのりの卿の北の方にておはすべかりしが八さいの年御約束ばかりにて平治の乱以後ひきちがへられて花山院の左大臣殿の御だいばん所にならせおはして公達あまたおはしけり 〔宇治拾遺〕一ノ廿八 或時だいりに大だいばん所の物をきりにさせてやませおはしける

だいに 大貳 〔職原抄〕下廿八 大宰府聖武天皇天平十五年始置筑紫鎮西府先是有太宰府号有權帥者一不任大貳任大貳者不任權帥雖無其謂已爲流例多是以名家人任之

だいにのきそ 〔栄花衣の玉〕廿七 このごろ大貳のきそとなりたまへる 〔同 玉のむらぎく〕三 かゝるほどに大貳のきそ[illegible]いふのおほやけになりたりければいまもとくとのぜ[illegible]ありたるに此中納言[illegible]てんりうの宰相とあがりしたちて 〔同 かゝやく〕七 かくまでやどにだいにのきそそたびくなりまゐのぜむ人数あらびにおぼえたるに侍従中納言三位の中将の法あつらひのへいりとくへきにのぜこのへぞふたびとみくなりあひぬ[illegible]大宰大貳がそのつぎ[illegible]辞せんとするを[illegible]たゞめかせまゐらする[illegible] 〔古事談〕一 忽召國盛令進辭書とあり 〔朝野群載〕七 源資通請罷大宰大貳職状ありそれをとゞめてあるに近比和刑桑といへる者にて[illegible]大貳の[illegible]換と解く食物のことをせる分けにたとへたる[illegible]とあり

たいげんげだう 退凡下乘 〔平家物語〕二ノ卌三 退凡下乘のそとばも苔のみむして傾きぬ 〔つれぐ〕三百段 退凡下乗の卒都婆あるるハ下宗内ある退凡ありけり 〔西域記〕九 如來御世垂五十年多居鷲山廣説妙法摩訶陀國頻婆沙羅王爲聞法故興發人徒自山麓至峯岑跨谷凌巖編石爲階廣十餘歩中五六里中路有二卒都婆一謂下乘即王至此徒行以進一謂退凡即簡凡人不令同往其山頂

だいとく 。三ノ智ノ巻ヲ見レバ貴賤トモ僧ノ通稱ニイヘリ 〔釋氏要覽〕上 僧史畧云助唐代宗大暦六年四月五日勅京城僧尼臨壇大德各置十人以爲常式此帶臨壇而有大德之字爲始也 增輝記云行滿德高曰大德 〔著聞集〕十八 比叡の山に教待院の千禪師なる大とこありけり 〔大和物語〕一 其の[illegible]寛甚大とくといひてはなむさうらひける 〔同〕六 ふるき大とくおはきさて云〻 〔てならひ〕四 つきぐしき程の下﨟法師に火ともさせて云〻此大とこぞうちもみくおほちかさまにてちうくよりて 〔夕がほ〕卅八 大とこの[illegible]とくて經よみたるに 〔若紫〕三 いとたふとき大とこなりけり 〔玉かづら〕廿四 こゑあるべきこと[illegible]大とこよびてさぶらふ 〔同〕廿五 あけぬればしれる大とこの坊におりぬ

だいどうじ 〔栄花初花〕八 花山院の御車ハ云〻御後に大どうじのかわきやうにさしねびたる四十人

だいり 内裏 〔アカシ〕七 かゝるついでにだいりにも参りぬべきこともあるによりてなんいそぎのぼりぬるとて 〔後拾遺〕春上 長暦二年内裏哥合によめる 〔今物語〕七 此歌人ハだいりの六位をへてやさしき歌人といはれ（どもイ）けるものなり

だいかい 大海 〔[illegible]〕下卌二 学生秀房詞の綾にかむるのつき大海ふみがゝるをたすくる子もなし

だいかうじ 大柑子 〔宇治拾〕七ノ五 柑子ノ部ニ出ス

だいがくのみち 大學道 〔をとめ〕五 おもふやう侍りて大学の道にしばしならはさんのほいはべるにより

。〔細流〕ヤドリ木注不可然事ともヲ用ヒヌケダイナゲヤリナドノ心ニ聞ユルモアレド畢竟ハ細流の注宜シ スベテアルマジキノ心ヽ 〔大和物語〕五 翁を述へ[illegible]翁のうせさる中を奏しまふ時に左門おもの

たいだいし まうけんそゝたいだいしとおぼしけるなりけるとされもあらぬ嫗して 〔竹とり〕十一 汝が持て侍るかぐや姫奉れ顔かたちよしときこしめして御使たびしかどかひなく見えずなりにけりかくたいだいしくやはならはすべきと仰らるゝ 〔[illegible]〕廿五 かくこまかにはあらでみえぬけはひのかよはれたるやうしき奏しすべてこそたいだいしく侍れどもこれも[illegible] 〔あづまや〕九 まけど竟に怒をあゝせぬものをさとも志てんとひおぼしかぞ[illegible]中のこのかみの[illegible]後の介なんあやいとたいだいしくあさましくなりたるなりとて 〔ゆふぎり〕廿六 今ハ国のかみも侍らで下ならぬ人一宮の御のかみも見ゆ人あづまのべき人もはべらずいとたいだいしうてのみぞみゆるを 〔うきふね〕廿九 あやまちしてるものをいひてかうはんとて国の内をもおひはらひぬまでがたいだいしきぞとて舘の内にもいれずあづまの人ふゑて 〔同〕六十八 あへなくたえさせんもなんたいだいしき 〔初狀〕上五十 慈政さへ隠するのと仰らるゝたいだいしきことなり

ゆふがほ 廿七 なるにてあせんとのすゝをいとらうぐしきさまとおもへど 浮舟 六十二 志らぬ所の人にふやうになんきこえし めでたるあるらうぐしきさまなりとのゝふさうのものどもハそのあるはをひろくてなん やどり木 六十七 はしたん殿をは後まで るふつけてなんうごれハしまきらんひとへのらうぐしきさまなり きりつぼ 十九 世中のことをもれなくしまてさやうにあり やうにとらうぐしきさまなり てならひ 七十 此大とこしていざきいまさせなふ所でしてもらうぐしきわざなるはさうわづらひ まふ人のはあさりによろぬものとさりいまでけぐらひかるのにかまるなんとまそとかなくもあり てならひ 四十 心を むさしのふるどハつよくおぼせど年月ふれバ女の身といふものいとらうぐしきおふなん さぞ 十九（スケ宗後言スル前ニ一日） のさゞれとかくのことありとハおぼしめしてまやお子の方へをかくとり中なるこいバられど 大鏡 六十 いやう なるはなくちぞるらうぐしきはなりもあるべき 蜻蛉日記 中ノ 横法師 所にもいとらうぐしく强き人などもあるハ なでうとぞとなんのなりし

だいぐ 代々 続紫 六 代々のくふだつきなど 口ヲナ 上廿七 宜陽殿の所おにて代々に第一の名ありし所琴を

たいそうのおびやうぶ 大宋屏風 建武年中行事 一 四方拜の所装束云々 大宋の所屏風座に立めぐらして 江次第抄 画唐人打毬也 宋国ノサマヲ画キタレバ然ヨビツケタルナルベシ

だいぐわん 大願 初秋 上廿五 角力 左ハ右ニこのまけさのこなハゆうつねをこのこて大願をたてかへんることをねんじ わかし 四 おやくの大願をたてゝあり むぐら 廿一 むく人ハ祖云々 後にてもおもしまさんことをきなんと 大願をたてつまど 呂氏春秋 九 此孤之大願也

だいぐわんりき 大願力 竹トリ 大願力にやまふそよりきのふすん訴まうてきつる

たいまつ 初秋 下六十五 たいまつの光りに中ねたるにまうして更まり

たいげんのほふ 大元法 釈書 三 常曉傳云 曉兼和元年入唐謁花林寺教講徳元照受大元師秘法明年帰 申官於小栗栖法琳寺修之 公事根源 三 此師の字をよまずで大元法とよむが 口傳にて侍るに 栄花そめ後 四十一 大元法とりふるまハでおほやけのこぞ昔より行はせおひける

だいふくとく 大福徳 後かげ 上 九 此本の上下上の所ハ大福徳の本なり一寸をもちてむなさき去ちさくに 一万順河沙のさらうまきさ出べきゝ本なり 同 月兆七 子生し 流あつかうなれバ貪なる人のさめにもいとよし 是は 大福徳ふおもしなんあさくうげふつきておもしまゝまことわらりわりく

たいふ 大夫。 四分配當ノ大輔ニアタヅ 六位ノ丞ノ五位ニナリタルヲイフ 枕 八廿 大夫ハ式ア大またちつ大史の大史云々 かうふり得て何の大夫権の守などいふ人の云々 ゆふがほ 十七 惟光ガコトヲさらふを疑ひなかゞら 若紫 四十三 さうふもいとなるなりふゝあらんとおぼしたる息子

だいぶ 大夫。 細流 中宮の大まぐ。是ハ四分ノカミニ当レリ かしは木 十 官つかさ大夫よりはじめて

たいごく 大曲 河海 琴之大曲之春ハ角夏ハ徴秋ハ商冬ハ羽土用ハ宮之律ハ寒呂ハ温ゞ又云琴有二大曲中曲小曲一出二大平御覧一云々 吹上 上十六 仲忠七人の人なくべきなるたいごくのてさむをひく 口ヲナ 下廿五 おもしろきたいごくどもの日まにつけてかけるべききひきさそうのさむきさめるさまとそのへ出て

たいさんふくん 泰山府君 琉河苑 哀傷 王郎令にめしうへよとしーにゃなるなどにいきりて浪娘のまきける

だいさく 題策 後カゲ 上二 おなじく作まる題さくのおもふ者に莫さる題策のみどもおもしろくけらあるて

附 **たいさう** 對策カ 後京の君 大学助詞 世界にふせうそくのまぎ京とおもどなくして後なるらん人 ろでに孔きてはじ岸にも入りまうさうし 及第し学 官料まけりこそ

たいきやう 大饗 をとめ 十六 所々の大饗どもはてゝ世の中の所いそぎもなく 枕 八ノ六 えせ物の所なる 折のる大饗の所のあ也云大饗乃日の史生 宇治拾 七ノ六 此大饗の日ハむ有のるす るまごども後の花りみじくおかしく作アそて

たいめん 對面 皇侃論語疏 有一而言 遊仙窟 誰知對面恰（アタカモ）是神仙（ナランコトヲ）。賤シキガ貴キニ向ヒテモイヘり こころつ 廿七 はじめんのおどさしはじむべからるるどもあらんは きりつぼ 廿二 かくありがたきへにはい

めんしつるよろこび【拾遺】八 参りまうでしかバ命婦中納言の君中務などやうの人々たいめんしつゝ【竹川】四十三 かんの君たいめんしたまひて【夕霧】廿三 さうじ口にてこそたいめんしたまへ【竹取】さやうの使にたいめんしたまへといへど【いせもの】四十六段 あさましくたいめんせで月日のへだゝりぬる事【狭衣】三ノ下 大将の殿へまゐりたるに中納言のまけたいめんして【吹上】七 ひさしうたいめんたまはらざりつるになりにきぞ【口】十 ほどもひさしくなりにけるにかくてたいめんなどもしたいめんなはりぬるぞうれしたり【帚】廿 えたいめんすまじきね【よもぎふ】十九 侍従の君と出てにたいめんのえうせんさうふ【をとめ】をさく對面もえせずなりぬるを【続拾遺】恋一 来對面後といへる心を 俊成

○【附】

たいめ

【貫之集】廿下 源さねのべ日にたいめしたるにいふる日にのちはたいめせざりける時よみてたてまつる【いせもの】九十五段 いかでものごしにたいめしてと女忍びてものごしにあひにける【さらしな】十 世中定めなけれバたいめするやうもあらんかくなど書きて

たいし

大子【タヅノ村名】三 帝初東宮イ子ヲ大子のさだせられんに八

だいじ

大事【延喜太政官式】十丁 凡應差使遣諸国者太政官先以狀奏聞大事臨時奏勅定名中事大臣簡奏小事令辨官仰式部【朝野群載】六 一分除目是年中大事也【吉御記】治承四年十一月廿一日法住新院御悩此両三日頗令増給世間大事只在此事歟【法華經方便品】一 九十六 諸佛世尊唯以一大事因縁故出現於世【項羽本紀】諭以所為起大事【落窪】三 大事と思ひてしきに【落窪】下 十五 政教が大事と思ふするなかでおぼしくおしまふべくはいかがはしまん【紫式部】十 なやらずていぬきごとをこぼち侍りにたまはでつくろひなるぞとていと大事とおぼいたり【ゆふぎり】六十三 いささかあやしくおもひて、またいへば、いとおぼいていまめのふ【うたふね】四十六 大事におぼしまうけるにまで【帚】十五 大事とてまたことうるはしきんのてうどのみづから宮まゐるやうあるおとゝく【さごろも】七十八 わたくしの大事ハはるかにまさるはあはざ【帚】九 さてハでおしうるべきえたいもなんかくでおそる【栄花村菊】廿八 まいてかえじき大事ものあらはれバ【桜上】下 廿三 ことこそハ一生乃大事ともなるなりたにおひゞきて【宇治拾遺】四 十六 病ノ 一二 ほさ院御倒するぬはよまうに大事にもてなしますべき時【あふひ】十九 ふしたやすき大事

元八のさうじ元大事によくはすからでぞさるべく心つかうはつる【枕】四十六 里まゐでもあつる出きだゐて大事と絵大事にしてえせにやる【宇治拾遺】十八 大事におもきおぼえて【帚】廿 たのもしげなる死疑ひありんことを大事なめる御文これ【さごろも】七十八 あまたそこはかとなき大事ぞしてむつかしきまへるなりと申しかけるはかしこまゝ【同】七十九 上四 かく大事にしておせらるゝに入大のりに奉るを

だいじん

大臣【職原抄】上 五 成務御宇初号大臣 一云 皇極天皇四年 己巳 始置左右大臣【竹取】七 大臣ノ子 かくろえ中むこえよ大臣若ハむそく【若紫】四 大臣の後にて出で かうかしくおそろしけれへの世のひがものにて【ねこぞ】十五 三条殿 あるものの大臣せバ【若菜】上 二 あるじ大臣と申するにもおぼつかなくもおぼしめすて【あふひ】十三 大臣の御後をりとめんとおぼし給ひて

だいじんめし

大臣召【トリカヘバヤ】四十三 甚と云 大臣めしありける大将ある内大臣になりたまふのおぼひね

たいぢやう

怠状【江次第】五十一 儒者依不参進怠状例 ○【著聞】二 多ク見エタリ 今ノアヤマリ證文也 ○又アヤマリ入ルトイフホドノコ也【保元物語】三ノ上 廿三 何とりのものにこそ後そあと怠状を書きかけれバ【愛護記】六ノ廿二 さるべく怠状ゆるされり【若菜集】一 廿 くら怠状して世にするとかや

だいしやうじ

大床子【延喜式】廿四ノ九 大床子一脚 長四尺五寸 廣二尺四寸 高一尺三寸【相撲】十九 大床子のおものしえるかおりめしたまはバ

たいしやく

帝釈【花鳥】梵天帝釈の人間をつかさどる天之【うつほ】五人のいえじくをしかくべいやくもなしさまふかり

たいしや

大赦【平家】五 廿二 大赦をこなはれて大将もありしかバ

だいひさ

大悲者【続後紀】十九 五十三 五種乃宝雲波大悲者乃千種乃御手乃人乃世遠【あかし】廿三 大ひさハかくにぞてめさしつ【枕】上ノ四 おそろしさえれバ

だいもん

大門 大門のかたのゐるのこしの楽さく【宇治拾遺】三ノ九 二階あまたありて僧正小門よりあへる

は

音もせでくちらひて大門へ出さく

たいせち 大切 [栄花玉村菊] 十八左 ことにみかどとうへ宮の御方への御ためにたいせちのものにぞありける [宇治拾] 十八 門をたゝきて志くたゝきけれど中より出きてかくあるにありていはく人大切の事ありといひければ

[平家] 五上三 遠路の間で候へば土産粮料ごときの物も大切にさふらふ [盛衰記] 三十廿 大切にし今度盛衰の時の粮たちよりあへとて使者をつかはされたり

だいせうのこと 大小事 [さごろも] 十二 侍りつる世にそらば大小のことをへだてむ御事もはらしうざとおほせ [源] 上冬 大小のことにつけても内々のさう事の相談などのついでにも [三宝絵] 十七 あなやけれのことにつけそんのえぐこそなく大小のことの時へ頼せ

たいき 帯ス [竹とり] 十四 ついぢの上に千人屋の上に千人（云々）はべる人々も弓矢を帯して

だいしゆ 大衆 [国ゆづり] 中十七 政親子どもあつまりて侍れど僧どもおほかるをしうおほせてふ事とべきは侍らねど だいしゆにまじらんにおもくしく侍るべきなれどかくへのあそびせん所には弟子の僧あまたばかりのみぞものいとむしんにさく侍りからうじてこそ御車にすぢらひてもはらのそのあたりしぬる形（アイ）してまいりくれ出で

○是ハ大勢ノ人中トイフ意ニヤ

だいしゆ 大衆 ○是ハ法師ノ衆徒ナリカ [義経記] 一左 大衆の中にも志らせおどろしく（云々）

たいず 大呪 ○[除魂] 阿弥陀真言ハ [もどき] ハあまごの大呪といとうつくしくなのぐ聞ゆ [拾] 九上 経はあまごの大呪 [狭] 三中七 院も法華の法会仏の法にいでは忍びてさせなへべあまごの大呪もよませ給ふ いとたふとく聞ゆる

たはる ○戯狂 [古今] 八手一 秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひと時 うらわごの大せゆになびきて風にたはるる女郎花かな [六帖] 六上 つぐ世もみ代なあらめや [夫] 十五 根るもまたたはれやせまし君の見るところ [夫] 古来集 歌仲頼 たはれもの程にそれまたせもひし君のむら

萬花咲ひとり [小町集] 十七 ももくさの花のひもとく秋の野に思ひたはれん人なとがめそ [後のうら集] 六 おかしげなるこゑ なまめかしうたはれてあざれたる方ありし [さごろも] 一 は中納言殿万にたはれ給ふ中にも人より殊にかくれなけれど て見さるるよしも見えで御方にくるしけるにも

たどる [神代紀] 上第八 遠慮 ○タドリ ○分子 [孔子家語] 八思案 [大動] ス 相談ノ心ヲ [竹とり] 上 かくや姫のやうなるをたどりたてまつりて [かげろふ日記] 下中廿 おもひかけずたどりまどひありつつ [若紫] 十五 いつくしうたどりて出ぬ [夕貝] 五 おのれもまる見せさせたまふこそいとうたどりて難波わたりにて出ぬ たどりぬいとうたてあるくて [竹とり] 九 子安の貝とらんとおぼしめさばたどりたまふべ [空蝉] 二 たい面もべくたどられ [いせも] 七十八 よるのおほしのまうけせさせたまふにかの大殿出きくたどりまかりやうにこ [大和物] 六 立出て廣幡の中納言のもとに行かんとしける時かくるるえあり我のうたもべきとてたどりあひたり [後かげ] 下五十九 いつかしてむつかしかのことおもひたどりて我方くへもてつらあへば [帚] 四十八 おぼしたどりつつたなどまでもまるくへるをたづらおぼしたどらるれど日ごろ思ひね [松風] 十二 いづれの人のおやも大殿は深の上のものを見せて（明石の人のおやも大殿の上の心をそれぞれのみあるたどる） つきつつたどりて夕はぐれのまよひに對面せさせたまへり [薫のえん] 下中午 人の命絶たまりくとおぼしてたどりたまへ

○[附]

たどり （○ハカラヒ ○思案 ○手筈 ○ハカリゴト） [うつほ国] 上二 かぎりなくれはおくべきたどりをこしつ琴をあけさせたまへ [芳滝] 十五 れさずをあるやんごとなき所にとりあるべくとやそれこそいとおそろしきたどりなる

たどりあるひと [竹とり] 三 くらもちの皇子はこれたどりある人にておほやけには筑紫の国にゆあみにまからんといとまませてそ

たどりごと [竟宴歌] 一 思ひえたどりまでをせざり世の天のいえたちてひらけざりし [蜻蛉日記] 中二十五 生えたるたるついでにたねるたどりごとをもせばやと思ふは

たよ 上ノタヨルノ下ニ附ス **たよ男** **たよ様** **たよ家** **たよ約** **たよ女** **たよ人** （コレラス別ニ出ス）

ガラス使用

たはれを　［古本和名抄］蕩子文選詩ニ行不帰漢語抄云蕩子太和礼乎［万葉］二十六「たはれ男と来へのゆる
を宮のさきでつまぐへせりあそのたはれ男（ミコトハミヤビヲトシレト云説アリ）［夫］十五 久安百首 兼輔「かくばかりいとふにあそ
あらしくみなかくしらんおそのたはれを［堀太］あふ 部律「たはれをが秋にかゝるわが宿草秋よげなりとや人の見るに
え

たはれね　［天］十七 言［好忠集］五月上「すみなれどが衣うちきてみえようたはれ縁せどと思ひけりゆえ

たはれる　［好忠集］八月上「遠つ山かぶ木がらの荻の上に秋あそぶるたはれをぞ

たはれじま　［夫］二十七 堀河院中宮御方歌合 よみ人しらず「草まくら栗津のそべのたはれ島よそにいとゞ思ふ度さと也

たはれめ　［拾遺集］下九 遊女「おもひとゞめりもやるとたはれめあらまほしと川上に女びきとあづさ［六百番歌合］
二番 右 遊女 寂蓮 題指「波のうへにうかれてあるたはれめも我もむかしのうたの手まねして

たはれ人　宗さまぐ三たいの法方いとうめらる世のたはれ人にあるひとそれ出でるに

たはなは　不賜之　**たぶ**ノ略ニ出ス　**たぶん**ニ同

たはら　俵　［類聚国史］［著聞］十八 十 米の俵をあまた吹上げるに［国ヅクリ］下 廿 米代あげひと俵にあまそきぬ
五十足たはらにいれて［源石］六 下 十五 食物のたはらあまたくらづき並べたるをあるを見たちら
を一つぬきとりてあげるりの走つりて［宇治拾］八 五 式辛に一俵の米で飛ばせたればものゝつゞきたるやうにのこりの
俵どもつゞきたる村雀などのやうにとびつゞきたるを見るに［神祇式］下 二十（タハラ）一俵

たはむれ　ハ　**たはぶれ**ノ略ニ出ス

たはやすく　［欽明紀］三 新羅怨曠積年不可（タヤスク）軽尔而伐 云々［浜枕］三［六帖］二「霰降る山の里のさびしきを
きてたはやすくとふべきや［行より］上 そのあたりの垣にも家のとむもするべきにたはやすく
入るを得ずやさしくいもねどやその秋にも 云々［赤染］十五 かくのたはやすくあれはするまひなければ
なごりえをあとしにくゆかえあんるきこゆせと人人ハ［浮舟］大 えもゆくりなくたはやすくあひかたさん

るをみごとにおかしく

たはぶる　［拾遺］六 九 集りてたはぶれにねざりのありし［ちひろ］玉 例の人のさゞめくるんだくるなどたはぶれ
にてもおかしきのみぞあり

たはぶれにくし　○ザレコトラズノ心ト意シキ心ト二義アリ ワヌル時［紅葉賀］廿八 太刀ぬきたるかひなをとらへていと
いたうつめれば たはぶれにくしと えみてぞ笑ひぬるすゞいへりければ よなよなたはぶれあく
あやなくてはなかりきさんとのくまで［浮舟］廿六 かのさきぬくもひやうにかりたる心地して広馬にのりあへほど
ひきく人をやうにゆさはしければ世の人いとたはぶれにくしと思ひてたゞいとそゞしにいそがし出れぞ
かまへふもあるで出るひね［竹河］十三 あさましうすぞうらこゝるがく八式部中もあまりたはぶれにくいと思
とおもひく［古今］ハイカイ「ありぬやとこゝろみがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき［帚］廿 いとたはぶれ
でなせしあひぶにいとにくと思ひるげきてえう形くなり侍りにしがたはぶれにくきまで思ひ侍りし［明石］
廿六 たはぶれにくてもあるまじきのびてやむる人なりてまーとあぶしよるゝわくあまたご［朝良］七八 二条院に
よりまーさう秋のいたなか女君のたはぶれにくてのゝあがおき［夕まり］六十八 その秋もたのもしあらまほしたはぶれにくて
めでうとうりとゆえぞつてーあるへ［アゲマキ］五十 あさーにたいあーしあふたはぶれにくてあるうるかくそのまやと
いかーくうらくゆえあらへ

たはぶれぐさ　［紅梅］四 えつけのおゐかんしまとあーたはぶれぐさにしあら

たはまうさ　歌［夫］三十七 家集 西行 さびしきをまとるふにたはぶれおくへよみうるに「帰るを云く
［夫］廿一 西行 たはぶれあるとそようとけるゆふに「月まもさぞ夜の古殿の浮あそびさく
おもひたてる身にこそありけれ

たはぶれごと　［帚］廿三 丹あるべたらぬ事人のもとにたはぶれごとなどのあひつ［夕良］四十三 それるゝあくへに
たはぶれごとにいかも称せうまりあーし［挟衣］三 乍五 に法くのたまふ抱りるみなどりの娘

さまのたはふれことのうちにもあらぬど　是ハタハフレ言ヘ

たはぶれごと　葵 四十五 そのうちたはぶれごとの中にもうつくしき筋ある事なむ 推手 十七 たはぶれごと

るまゝまことゝもおもふトんふみのぐさあかそふてゑしかふ

たはぶれごころ　初秋 上 十五 見せたはぶれんふこひのまこと笑ひて出さぶとうつね

たはぶれごゑ　紫日記 六十六 ゝかくゑたはぶれ声

たはぶれあそび　ラトメ 六 たはぶれあそびを好みてんのまつりうる官爵よの所りねまべ

たはぶれびと　タラ角 下ノ四十二 よろ状のきみ女ひてさふらふたりあやしきたはぶれ人ばらくありける中に

タラ角 上 二十六丸 おとぶさの紙にくめ見りけるへしとまめなりとうる袖をるんとなへとにおほくしつる云々

たぢろぐ　○今カバフト云詞之 此比中世ニ見エズ後ニ云出タル二や 盛衰記 廿ノ廿 与一どの何とたぢろぎ給ふぞ 同 廿八ノ五 義経たぢろぎ給ふべからず 同 廿十 佐殿の先生賢定もある身をさればこそ我をもたぢろき給ふ事これを見て君どもが軍の中にこそたぢろき給ふべき後ハ猶様々をうつくしうもてなし給ふべし 〔同〕廿六 それえきか背ありき後目にてたぢろひ乗にようちし今度やりかけてたいのを見きべし

たゝさむ　万 十七 長歌 「そこをたなびきつゝ」しまがこやをたゞさまくく 万 十六 夫 廿二 「まちつゝをのとも 矢たゞさきらむろひいる事よと云ふるにさかや云々 袖中抄 云々 童蒙抄 云々 くれたゞさきとも二も 三もりわふたぎてもねえてゆるといふ

たどしる　源氏 胡蝶 初音 「人めゆへあれたどしる身が袖を我につゝむ思ひきやらん 夫 廿一 夫木集 遊覧 「たどるたぞふおやしきゆくたそがれにあれたどしるりけのまこそよし 玄玄集 「うちそれ 恋ちこそせねたびごろも袖にたどしるなきのあれ 夫 廿 夫木集 霞 「音ちしくて見にたどるあれこそよの ほどの友となりけれ

たにいし　夫 十二 拾六 伊勢集 「見ゑんくざけおちたるたにをひきかへす人のあとかへさるべし 紀

たにそこ　夫 三 完明寺 入道 撰政 「初瀬山たにそこ見てそ枚ひてしたふく風に梅のかぞそまちる

たにぞこ　拾六 三 完後 「牧ゝ世にありそてたる身のほどはいまとこそもまるしたにそこの菴

たにつた　夫 廿一 為家 「谷つたへそひにまるまえのやうへ向ふ人にむもとぶきうしも

たにのいへち　夫 廿一 安元二年 嘉応元年 「さふようの岩の苑が手ておと絶ぬべきこ山べのさと

たにのくさ　夫 廿一 寂蓮 「谷の戸状松のまるまのいさづらに谷のくさこそふくちのてるらん

たにのそこ　蜻蛉 松 基俊 「さんの木引人もまさしみね松が枝あくたにの底出て年むふなり

たにのとぼそ　夫 廿 為家 仲実朝臣 「こゝろもや岩のこぬとにかくる風のよきたちそる残たるる

たにのむろ　夫 十九 永久四年百首 殷仲 「たにむろしの風しやま旅がよてのにおきろがつらにふれ見波ろ

たにふところ　散木 上ノ十二 洞底の苑といふ ゝるをよめる 「いのせ山岩ふところにおひちさくあられそむ苑をこそま見る 同 上十 深山桜といふ事をよめる 「山桜谷ふところにこもりゐて風をよそにて見のとむるかり

たにあひ　夫 廿 為家 「たけ山のそむひの谷のいにおひやる夏をそ風のつうぬまもえし

だに　○俗語ノスラ又カリトモ デモ セメテ ノ心ヲツヘタルモアイ 上ニヲラスとヲツクヲヌくヌくザルモ心同じ ▲ ヤウく 是バカリ 外ヲ不混 コレバカリト 訳スヘキアリ 古今 恋三 「あるとばかりはなちたにせで徒しなんその紙ちりりとらぬ名の空にたつらん スラ 拾古 恋二 後撰 「今年は木の葉もぶらしてそ我だにおなじかとあらんのスラ 花 後撰 三 今ゆるしだにあのせうえのスラ 上モ 同 四 数まるなかけまさぶに女もてまつりくありくあんあるをスラ 同 三 中納言家のおもてをぶにさびかへしに人ゆうあへどさうらにいはまだにゆうきどいへぞスラ 相撲ふ 九 女ふ上だにもせびかりねるがあらぶんちをしうおぶさるまにゝ今一きぶきの位をだにとてかくをせのふ々りかりのスラ 自余ハかけだにもてのかねを 帚 十六 それうるえりるだにかくこそ侍るまして 同 大八 かゝるんぐにうせ もかびと家とうるんおりよ紙けハ是バカリ 夕貢 西 今だに名のりしあへ のセメテ今ナリモ 末ム 廿二 かの岩のうのきりたゞさりあひ云

そのうちにもいひつゝあひて宮にてうたにぞかきはさうみえ人めきてあまたゝる者どもあまたにおかしきこと
たらぬなからねうきぞまさりける。スラ 夕ぎり 六十六 わすれてはうちなげかれし、ありさまは女だにさしもあらじと
うちへもたゞきて。スラ 花 三七 たらしなどいふもののまゝにて見やま木の中にもいとけざやかくて三位二位のうへ
のきぬをむすぼふれたりぞ葉代ぞふくのもなる。バカリ 同 八十 さくむろしえ御人の子うちたる男女とて、きうま
かしく見人たちさうらうの出世ねげそのきはぞふきうるかり。スラ 同 十三 海士の子をもやきてそのことぞふせバねりありねべきを
女もおぼつかなげのいひなして（セメテバカリ） 同 十九 ろうさうこうまうもまたに心ぬねしなどふうるまし（セメテバカリ） 同 十八 面白かる
ねのをたゞしくめでうるべえるにもあまたにまつぎのうひかへくらちをさきに。是モバカリ心之。（ろうぶふしもあれバトモバカリヨミシドモ下ニ下アル故訳ヒニ）
（シク） スマ 廿二 えぞあかりあるへし。此格雅言ニ猶アリ。（トモ） 并 後拾 廿七上 橘元任「あけバまづ蘇ねむせうん山桜見えのりでふ人ふ
おくれてや。（ヨリ） 皇極紀 九「ゆそのバふ小猿米やくこふ多你毋たげてこふらせかましの友ぢ。スラ 源氏 四ワうた
をたぶこそはかなきにえまつる

たへ

たへ。絹布ノ惣名也 雄略紀 三「おふこのこゝろ多倍のえうま我七重をし 庭にたちてあせかひそがすも

たへ

妙

古今 序 又山のべの赤人といふ人ありけり。うたにあやしくたへなりけり 拾遺 上 たへなる池とよりのふ
よりてこそ見するへくもありけれど ワカナ 上 世 方の物のねさへのへらぬたるへに中おりくうゝや
きえかすでおく

たへなるのり

妙なる法

新続古今 釈教「あらたなきびしき山のゆふまでたへなるのりのへだてなくぞありける 義式子集
たへなるやまた五月そのりのまきのあへるえのりも 散木 中 三十歌数 いかく
ふたへなる花のちりかひはあまのこそらやまたらるらん 風雅 釈教 赤染「これのえありとやいふるいづくも
たへなる友にのりのこえそきけ 続拾 釈教 常雅「さえゆきえ我身にくさ名えんえ見るのりのたまたのあ

たへ

堪。（コラヘ）

相栄 十二 かふえさ年ずくるいすへ 竟せ三 十 よべまうのかりしかど猶えさ年すくうえと
うまこ 土三 夫 廿 ありつ法思ひハ月日ふそへてまさり身ハようくありつえさ年すしく

え…ぬべ 古今宮 八 後撰 恋五 一 ねまつもくるとえんしゝ友引のてびえなたへぬものやありなん。（キレヤスキ麻糸ハ今コヽヌハクル糸ノキレタルカト也）
元真 十一「恋しびてえぬ涙の玉なれバつひかへつとおふをやみなさん 後葉集 廿六 袖にまたへつるかうえでつひぬ
万七 廿九 今もえたへでくづるさうのことさてさしいまてう 夕顔 廿二 えもえたふかく よりうれしきむも おかさ
まうる 土佐日記 上 女子のためにこそそうしきあつるある人もくかええるび 夕顔 八 雁ほつれるさらびるさゆくを
えびめえもたらねさをきとりわれえぬいえたへがたくも思ひくもなみね 土佐日記 かくさうきの松ありさうきてゆと
ごに彼方より世ねる每に鶴ぞ飛ぶる面白しと見るにたへずして舟人のよめる歌 同 下 かくまいバたゞ昔の人（女子）
をのみ恋つゝ舟なる人のよめる歌 とかへ 十六 うちへり
たへがたのもしゝ答へしめさせしん地たえし侍る 万 二 十三「うつせみし神ふたへねバさかりゐて 新古 冬 淳綿
「なにをあさこと恥ぢきしこれと思ひしをたへずかなしき妻のみぎも 中書 廿一 かくて猶うえふ命のたへ
うつせバえかせきて我もつまうりけり 玉葉 下 十三「ふと世ほぐ命たへずる身
拾遺 雑下「いつふせんりがたくでまるの子舟のあぞぞ玉の命たへなば みづら 六 こうつぶら命へえどのりぬる身と
うしろやすぶる 名良 四四 命さへたへなばとありや後 よもぎふ 三 女どちの命たへぬもありて月日にそふつひて
やましものへ数さくゆくなりゆく 振武 四「ひえ志のぶへやかうかん山里ものへあれまのきさくなり

。附

たへがたし

ひとも 十三 たへがたえん地しゝる 相以ボ 廿七 ゐへるゆ息病のえ年 ろぞとおかりしまるみうかへき
をんづよくねんじくさせまふ 弓長 三 いとたへがたくこえひなたくへし 相 恋 おくりむかへのへのきね
のまそたへがうはさるえるぞもあり 美濃 古 たへがうかひかりしたも

たへ

堪。 （任能ノ二テ物タリ出来ルイフ）

初秋 下 五十五 ふてうあり てに身にたへぬ名にえるまるでつらうまうくえぬうなもべそその
よく我こそ参し侍りる 宗や 九 への こうのさとたのも吟しえんにえなぐ命 彼芽人を
えらびゆて 祭り使 里 たへたるまるおへに身の志づむさかう主（へとまるる我こそとりありや みつら 十二 おゝうむヲ）
又よまんとおへ主どもたへだやありなんいぬめり 己ぞ 九 おゝコラヘ 身まれるへへえぬみやありなんとやうにそくえ

ぬれにつれてもなき玉し [かげろふ] 其（カホルニ浮舟ノコヲカタルニ） 其筋より外にはあるまじと思ひよるにも又侍らひなん見などの限り
ゆゑもなきものから勝る所も侍るなるをたゞてるなぐさめもなし

たへこもる 堪（タヘ）カ 姑ク 絶（タエ）コモルニ出シオクノ [ゆくる] 十五 入（コモ）リ さてたへこもりおはしなば [同] 十九 さてかのたへこもりにける
再考ルニ 猶タヘナルベシ 山住みにひやるのみぞ数まさるに見ゆるなれ [拾遺] 十六 いかにしてたへこもりにし人の
たへこもりてなほざりあらんとあとに [同] 五 はしも女はさる方にたへこもりてもいちじるく [夕霧] 廿一 めづる山里に今ひとたび
思ひたへこもるやうにも見えなりなれど

たべ 賜（タマ）ヘ [たまふ]ノ所ニ出ス

たぶ 飲食スルヿ [たぶ]ノ所ニ出ス [たべ酔] [たべゑひ]も [たぶ]ノ所ニ出ス

たとへ 譬 体語 [たとひ]ノ所ニ附ス 次ニ出セル [たとひ]トイヘルニツカヒザマ同ジ・是ハ俗ニ云フ詞ノヤウニナレハ別ニ出ス

たとへぞ ○[古今]序 たとへぞ旅にかけるをうちまくらいにしへよりつたはるにも動きもとがごとし。[千載] 雑下 短歌 俊頼 へびひとりながらへてるに、ぞろりるとかども及ばざるん地して、むまり行ころにとうたにじ [いせ] 九段 その山は、ここにたとへば ひえの山をはたちばかりかさねあげたらんほどして

たとへん 比類 [たとふ]ノ所ニ附ス

たとへんかたなし [風雅] 雑上 行宗 「かくことはまつ梅は咲にけれたとへんかたもなき我身かな [拾玉] 雑中 よろこびしらぬ 「田子のうらの波をのどかし我袖にたとへんかたのなきぞかなしき [夕良] 三十 大方のむかしきさたとへんかたなし [後撰] 四十九 つくしある秋はたとへんかたなし [相ボ] 廿六 雅白そしとさへたとへんかたなくうつくしげなる代 [山家集] 下 月 おのがある梢の雪に月さえてたとへんかたもなきものゝちぞする
○シレラマヲヨクラキニサグリ行クヿ。ウロンジヤカラシカトシレリタク思フヿ。ダドカゲルヿニモ。ウロンジヤカラヤグリ

たどる 尋 [拾玉] 五 秋 「家思ふ山のたとひにさすらふもののづくも霞むまゝのうきに [宗長] ハ人ぐるとたど

まてたえんも [夕ギリ] 十 らうたげのそこはかなさもたゞ雪をいとゞうたどりてひきこぞめありつ [古今] 秋上
[六] 一八上 「天の川浅瀬白浪たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける [文良] 廿五 かくはでたどりあるまじかるもおぼつかう
[同] 甲 う見せざりし秋やしなりしかのぞかくたどりあまたあぶらん [帚] 四十八 見さこのかりけ入てかきやうくそ
たどりきこえ [よもぎふ] 廿 あらぐうんたどりよそで侍りつる [ゆくる] 上九十二 入今又かくいふしへのなををたどりしかり
あひねたど [小町] 十九 [松風] 五ニ 廿 わらかわこそあらぬとのこたどらるゝを思ひかへしより [相ボ] 三 老やすらん
思ふとのこたどらるゝ [手習] 廿七 たのもしき物のやうにたどらるゝてあらぬ世ふるもまたてんへいかゝるんも
いと見え侍るに [浅揖] 三四 [大和物] 三 墨染のくらまの山にいる人はたどるたどるもかへりきなん [拾遺] 後撰雑二 雑上 [業平] 三
[六帖] 一八上 「五月のこともよくあるに山ぐらくたどるくぞ出て秋ける [宇津保] 十五ニ 沢もたきあるねば五六日ふぞたど
るぐおりーつれわるる [帚] 四十五 思ひきこえん心地すらかくしもてなされ [浅揖] 六二 業平「ものおもひて寝ぐくおもくやうやう明
なくれたどるくもみてありけれり [うつほ] 九 たどらんへるんなどつべきれど。○是ハ何事ニモアレ其事ニカヽヅラヒカヽグリ
居ラン人ハノ心之

たどり ○上ノタドルヲ体ノ語ニシタル之 其外其纂ニーリテ 詮議穿鑿ノ心之 [ワカナ] 下ノ九十七 いふ人よりのふるふれ心もさごめすくるるかなど ほかにかとるるかたにこみるひかにてまつ [同] 叙之 其たどりなる所への [こころ] 十九 んいかなるたどりのまと
みるまるりたどりのなきも

たどくし ○トガクスルヿ。又ハキトセヌ又ハキトセヌ又 [橋姫] 廿二ハ山里人ノ憶メハヅカレウオドクスルライフ
あるねもて [椎本] 入ハウラヤマシキモノ 下ノ廿二 あつかひ同もたどくしく今の世人侍るを稀むるしのやうに逝れるなどに宿り給ひき
よむにき [宿木] 三 夕なきものたどくしげなる [よもぎふ] 廿 ええ思ひなひよの侍らねばあがりつるくたるとなど
ぐたげに咲へある [ちかづ] 十六 いとたどくしげにあがめおもひてんむくあるまひとつぞゆくやかなひつ [椎] 土
廿 歌どもをやうにおもゆるへのうたひなどに歌はす火さのきと浮ども人のとうかにや火桶の火をかき

みあげてたどたどしげにみえぬたらちねも物しまし給ひ【ちりぬる】十二 山里びたるわかうどもはさうざうしくやとおぼえではあやしくねびまさりてたどたどしげなり【すがはし】十一 夕ぐれの霞たどたどしうおもしろければ【アゲマキ】四十四 ことに文字にさるべきくものゝたとへにもおぼえやしてはかなくせさせたまふにもたどたどしう【夫木】廿七 衣笠内大臣「一葉ある小野のかげろふへは大かたのたどたどしきに【同】十三 定嗣「関こゆる人はたどたどし白川の山べ残るともあまり秀るも【栄】十四「はるにふるたかさごやのかみもたどたどしくぞたちかへりける【万】四十五「夕やみはみちたどたどし月待ていませ吾がせこその間にも見む【夫木】廿八 家隆「みんなさせ世べあしたおもふかげりのたどたどしきにぞたのみつる。コレラ一本ニタヅタヅシトイヘリ【帰】廿二 わがまみなかいひてつま音なう見えしさまよりこそたどたどしかるべけれ【万】十一「かひなくおもひこそやりつれかりにかなくなりしつめたるにうちまちがひぬるかほを

たよ【拾遺】哀 スヱヨ「さよふけて人の今だにたよりあらばむすぶごとにおけばつゆかな【夫木】十五 秋霜似鬢年空長 野「秋の萩のまねに立たよへるたゞ年のむかしくもなかりけん【万】二十 廿二「世の中をなげくたよりもなかりせばすさびならぬはことぞあらまし【拾遺】賀 元輔「君が世をなにたとへんさゞれ石のいはほとならむほどもあらじや。昔ヨリ身の程なでも【後撰】雑四「たよへる糸とよしきみが命なりけりといふべかりける。

露ニタトフルヲタトヘクルトイヘリ

。**たとへ** **たとひ** 体語 **たとへぬ** **たとへば** **たとひ** **たとひるる** 皆別ニ出

たとへなく【うつせみ】五 たとへなくはかなきひとさやうの物もなかりけれど【拾】十六 実をたとへん実はえぞあらじとよみけるこそ覚ゆれ【同】三ノ廿九 夕たとへなき物とよく見えけるとよみける

【東遊】ノモ 鹿鳴ノ萩ニムカヘテイヘルカ 枕草子ノタトヘナキ物ノ所ヲ見ルニ 殊ノ外ニタガヘル物ヲイヘリ依テ思フニ

【夕貞】廿二 たとへなくこそ見ゆれ【かげろふ】四十二 人の恨みつらしたりけるほどにまたあかつきのほどいとたとへなくあはれなりける 【乙女】七 かゝるほどのいろひにしも東乃方さるおほやけのおぼえもたとへなくありやましかりけりとおぼゆ【わかな】二十 良ふかくかゝる

なりのおぼしめしやることゞもはまづたとへんかたなきまでこ

たとひ【拾】三 三ノ二 梨花イ 釣ニ 猿丸「たなばたの見えぬ所もありがたきにたとひのかぎり見えたまへりけるたとひ【栄花疑】十六 世にめでたき物にて伝へ世にはとなふべきたとひのやうなれば【元輔】五十一 よろづくあつむ・たとひにさらにかぎりなきを【帰】四十五 うちとけて伝へなどせばやな世のたとひにもなりぬべき【かげろふ】八 昔物語のあやしき物の中のたとひにもなるべきものゝあはれ【ゆふぎり】十二 昔のたとひのやうにひとしなみにおもひ【すゞむし】十六 耳ちかきたとひになるやうにいひなさせ

〇附 **たとへ**【ゆきぬ】上十二 いかにもくの世のたとへにも

たとひ 〇是ハ用語ニテ たとへば 人の之【古今】序 たとひ時うつりことさりたのしびかなしびゆきかふとも【うちとも】三廿 假借ノ タトヒ
かゝる法師のまねにたとひかうまゐり侍りともなにのくるしか侍らん【神代紀】上 假使

たとひるる【後撰】秋【伊勢集】卅八「たとひなる物にそありける我が衣あかぬうれへやそらにたつらん

たち 立。 縣井 立【コ】

たちそゝぐ たちのぞ たちのく たちやすらふ たちまつる たちそへる たちそまる たちうする たちよる 立波

〇たちさるぐ たちかくる たちきゆる たちまさる たちのぼる たちつどふ たちなる たちおくれ たちまがる たちくだる たちぎゆ たちまどふ たちかへる たちかへし たちさらぬ たちくらぶ たちむかふ たちわかる 立別る たちまよふ たちあがる たちきり

たち 〇助語へ たちの下ル たちまさる たちおくれ たちまさる たちあつむる

たち 館

【土佐日記】廿五日 かみのたちよりよびにおこせる文もてまゐりけるとてくすし【あかし】いで

十二 此度のたちにはやとくおそくすれ【ゆかうら】六 この人々のこゝちのみむすぼほれ【後拾遺】

雑五 つくしよりのぼらんとてさるにまうでたちの菊のおもしろく侍りけるを取りて【和名抄】十之五

館 唐韻 作館 和名 多知 一云 元知豆美 天文本 知作呂【ゆかうら】廿四 大郎のみたちのうへなる【枕】五十六 扇ノ絵ヲ井 イフ所ニ その中将は

まうけなどりふさまいとわろしくかきなして [宇治]三ノ廿四 甲斐の国にたちの侍りけるものくだれにたち抜いでく

たち 達 [いせも]五段 せうとたちのちらせ給ふるとぞ [桐]廿四 さふらふ人々はうしろみたちはせうとの君 親王のみ子など [同]廿八 王子たちの出産の末に源氏つきまゐて [帚]廿七 まうと君たちのつきづきしくときめきたらんに [夕ぎり]四十四 [若ぶし]廿四 [若菜]下廿七

たちふ [夫木]九 ねまするに有名なるたちふといふ瓜をきざみなるさぎしにはへるとて [和名類]瓞 瓟（経典三音 和名小瓜名之 多知布宇里）

たちこむ [あまた]十二 くもの雨もかくたちこみゐたり [同]十五 女房くの出ふらひの侍るなどたちこみて と多くえつなど [栄音楽]三 けふあやしのものどもあまりゐるまであまへちうくとまちこみたり

たちえ 立枝 [拾遺]春 兼盛「わが宿の梅の立枝やみえつらん思ひの外に君がきませる [末の松]廿六「ふる里かるの花ぞあやなくうとまるるまで梅の立枝はなるらしなれど [散木]上八 [手鏡]「咲そむる梅のちりてに雨の中花もさかるる数をしることぞなき [夫]廿九 [新六]三 衣笠内大臣「あはれ昔宿てこらへる山のしろつあかる宿のたちえもひこえぬ水なり [夫]九 俊成「小春さしまねて袖にうつしえたまひのたちへの春の末ら玉 [同]廿六 素性内大臣「あまたやと麻のたちえに春きさる冬の末きえに雨きる玉なりそ [秋玉]三 山里の梅の立枝かうらんたちえむらさきよそにもづて

たちあかれ 立別 [こてふ]七 世ちにまかすへかえらちあかるるにて

たちあづる [あかひ]廿六 おらへえちあかりあらば

たちあかし [和名類]十三ノ九 炬火 俗云太天阿加之 東「薪灼也」[万葉緯]今按部 つい立くさ立ばの末のゆくて多天阿加之のあらさのよ [栄初花]廿八 ところどころのかがり火たちあかしの人のこととぞくれば [狭衣]三中四十一 たちあかしの昼よりもあかれ小若えの生直衣などあざやかにえたちのしいき本へるなど更にまことにゆかしの中しきた [かしく]廿二段 そのも寮の人数たてらいふべき我まさ遣あらくせよとのひ

たちあざむかる [うつほ]上十五 名高くくやしきさまのとぞえねどもかく経立欺かれて

たちさまよふ [しもぎろふ]九 あやしの宿の庭ひにくくたちさまよふ [スマ]四十九 ゆかしくもおもしろくそこばくたちさまよひくり [小町集]古（あしのやのこやのをざさに ゆきおきて あぐたえつつも）「ちはやぶる神もゆるさぬあまのとかいのひろちにたちまへ

たちさはる [古今大歌所]「あまやたびおけどもせぬ神などのたちさはるも庭に神のきたるも [続千]賀 伏見院「とをとよくまさにたちさく荻浪のたちさはる中くるよものあるる

たちさる 立去 [あかし]八 ゆそだのあまりぬるをぞたちさりあひぬ [こてふ]七「あちふ草をまがつへやるは芸へ花のあまり我たちさらぞえよ

たちぎく 立聞 [月語] [ホツム]六 あまぐくとちかうきこやどのくまひとまぎてせまさせよとのあへば [いせも]廿段 こざうか我 男立ぎて

たちきる [新後拾]秋下 法皇くばくまさ大弐「かげうるまうへ涼よ山姫のたちきる袖の露もおぐまも

たちめぐる [新千載]冬 法皇あらめ 俊成「うきまつむ万車の輪をみよそたちめぐる煙たさちそせね [うけらの]廿 こさくしく我ふたちめぐりしてのあへどりうんさがあなど [やうの床]九十五 やうくく暮りさんはでたちまさくさあへどく人のけ左ひ世とて程らどうぞやすまれ

たちすくむ [新六]三ノボツ 衣笠「くおぎよね山田のそかへさのしやえまどうきても世なべつくさん [栄音楽]十四 このえれすまのくさちをくみかしちうくさうあのけうおぞえずくるしきに

たちそく [廿衣]三下 いのせんるとにやあらんらちそきさとるくのきさてみげあそく [拾遺]神楽（イニシヘ菓子二用ヒシ例ヲノミアゲルハ）「まろうねのあぬきされちをさげりきて乙うれお乙ねうハまでヲ乙ぞ [花山]卅五 まあちげなにつもきてしめして八は乙うまもそうめおさてあさきまうらあけまとふんぞそげるのみあんくさせまへで [マキ柱]卅七 うんどまちぢるふやうふまぎらそして

たちぞふ [蓬生]中四十二 まちぞふと大いなる栗となげ出しくり [イセモ]六十段 さりるなうをもけら

をちばなをとりて【サ衣】三上廿七 いとあやしくなりてちる花などをさへ見入させ給ふほどぞ
【落クボ】二 あをきころものつまにこがねのくちなはいまして

たちそなふる

【帰】士二 むかひてえんがうの たちそふるまでもをさるべきものもなひなり【権西】二「いかにせん
よひやまさのひまで たちそふるかげなくぞふかも 道【形状提】離下 晏「あら世ふもかくやそひ
あかげのたちもそふまぬきのかよふる【於翫古】離別 上東門院「いくぞうら代世の舟にかくるぬまのちえあるとも
なびころん

たちそら 立腹。ケンドンナルトムカ

【落クボ】三 おのがかみ姓たちそらにて思ひやりて【トリカヘバヤ】三 給ひてうかて
たちそらにおきとろおぼゆく比姫をなぐくやうどきそつあでぬるね

たちはしる 立走

【古事記】中八 其美人驚而立走伊須々岐伎。【狹】三上廿八 さてくだらへの旅人にゆきさんとて立
ちまて【同】旧里 又立ちまふおきそふ行て【万】五十三「ゑゆへづくに嬉しきそねときこえ
こひひもとなさけて立ちまそん【為兼】廿九 中らうわらべのつらはつりたくぬ雑役まてもくちそうまえれ
くまごひむかえつおろぶをつくて【万】九十九 たまつげまとひらきに白雲の峯より出てくさことよぶまで
ひえねまへたちそしてさるび神あるとひまつひ

たちご

【末摘】十二 車のかごにてそこらみまくる物ら年経ふるたちごろうたにおしあり みとぶれ
ねがんりとあつてこでちの立人ねうり【為ろう】廿八「ふるさとの杖のたちで我為ねにべふる川の
べふるえなまや【夫】廿六 言語つのむこ 和泉式部「なふよりのわまの我やぬるがくん雲のたちどの氷をもとまて
【夫】二 雲 是家「こよりのかきの露のたちごゆてきえぬにきゆる嶺のあら雲【為光】七【夫】十一「まる杉の尾上の萩
をわつまべ麻のたちどやうらて嫁らん【拾遺】夏 貴之【夫】【六帖】三 五月山まのもやとふにとおと火まで麻
のたちどのあかくなりたり【同】若菜【月輪抄】「あやしくも麻のたちどのえぬるみまがらの山ふ我やきぬらん
【こゝみ】五 まうどのつまりひまるある車のたちごふ使よまて為こさうくきてなり【紫】上ノ十四「在さゝぞかり

あさ坂の娘の弱のたちで我とひつぞゆく【りよう】下廿一 さうの里ともあるるぶとなるれど猶かく物ふ合せるおの
ものべ少つけてあとぢのくちびるづろくものなり

たちとまる

【マキハシラ】廿二 るるまさとえひ思ひりつとあるふよりたちとまるべるほとのたちのもら込と【古今】春下
まみぢ葉八面とみるとも見へまさりてゆるけ我への立とまりそて我つそうらん
あもせじ【ヲトメ】廿五 男君八立とまりたるんちもいと人のうろくむるふさがりて【ワカナ】下廿一 おまふいあまり
我立とまりて見るふ【よもぎふ】四 いと物うおもそろしうちぬ波後ゐふおもかりうつろひかへちとまりさうよ
人もいとたくがこしうそ御あまりとど【同】六 立とまるけまとどふなし【あげまき】七十一 とまた他ほもいとぐ世ふ立
とまるべうも見えぞ【万】三ノ五十四 せないえんまとべせんまとべあちふ徘徊たびいそりーにき

たちどころ

【神代紀】下十九 針鉤立得【延喜式】八ノ廿五 遷却祟神祝詞 高津鳥殃尓依弖立處身亡支【続古今】序
さ世おもんかしけまえ たちどころふおもひうかびておのくちつーのまとなるこえ八【宇治遺】三 十九 たちどころふ見せ

たちわづらふ

【大物】一 かつらのみこのはもとふよし 猶のきうろけるを云夜ひと立わづらひて

たちわかる 立別

【みつうら】廿二 ゆくいとなかたくしくてたちまとろる 【古今】離別 行平「立わかれいなばの
山の峰にあふるまつとしきかば今かへりこん【金葉】十七 旅觴「おのひやもめぐり逢べき
まだふも立わかるくむなしそのの【古今】離別 よしざね「かへる山ありとは聞ど春霞たちわかれなばこひし
かるべし【千載】又教 寂然「かりだふ並でしたなびけるへ山たちわかれじゆしかへりこてまでん【月清集】上
をまつそうもくまっど 横雲の立別まぬるそきの嵐ふ

たちぬるつき ◦先月云

【為家】廿五 備物のくあまどのさありたちぬる月の廿日のほどにるえつひふ
むるしくそまへなーて【りよう】下廿六 たちぬる月より

たちかはる 〔拾遺〕春 重之 〔重之集〕〔六帖〕廿五上「吉野山峯の白雪いつきえて今朝は霞のたちかはるらん」〔ライメ〕十二 子のかたみぶりに秋のたちかへりきし由くれは〔綺語〕六 うへおもひおもはばなざりは立かへりさしまゐりし屋形を

たちかへ 〔弘長社歌合〕「ゆくさぎやとる夏の山の松かぜに春は霞ぞたちかへりける」

たちかへり 。是ハカヘリゴトヲイフ 〔カゲロフ日記〕下 廿六 たちかへり「家にても今はけたる煙のゝに」〔拾遺愚草〕十九「ゆめたへぬかやかもとの屋」おやとあやふさに花田の帯のそのてだにかへびに 詞林 たちかへり「君にかくしるかとよ」まぬる帯の玉だかくてたんねるゆとろこたん〔椎が本〕廿三 いつぞの浜辺りを漕ぎんとかくも恋の世のへど 後朝 たちかへりことそまつるゆとのそげだいとかりうて〔中務〕廿五 よべも波あひこびにかしくのとちも舟をせあひて泣けしきさいのく侍り然と思へあひくたちかへりまゐるのゝかるにかくらせまかぞや〔ておもひ〕三 いとうちをとてたちかへり奉り 思ひえなむ 歌ありけり〔枕〕七ノ七 いと深く侍りそめ心はそまさりてんはやさきことはれば立かへりまさう君の居所に忍とめてこんかしこ宮寄侍るめとう思へるえ云〔源世〕七 院にありぐる和歌まゐらせんとてむさしの大綏澄れがつくりたることよ号 みちのく紙につみて書きつけられがりいとめづらしき和歌りとてたちかへりまゐらせられるぞ思ひ侍りし〔実方集〕女さうしよりてたちよるあくよとりくにかへしまで甘でたちかへりさく〔万〕十五ノ廿五「たちかへりなけどもあふこともみなく思ひつかれてねるよう」どあかれ

たちかへる 〔拾遺〕春 素性「あらたまの年たちかへるあしたよりまたるゝものは鶯の声」〔三代集〕十九 同侍のかんの君鶯鳴えしひとつちうえかはてこりが手にたちかへるはなのものぞあやしき〔手ならひ〕廿四 猿たちかへり猿ねむさうべき木のもとにこそ見し出しあへり〔九条家歌合〕三番 寂蓮「たちかへりくるさとしうきぬやえぬらん雨霞うまる木の松山」〔後撰〕恋三 貫之「思ふことつるわぶもなくにおく波のたちかへりてもここ清くかきつ」〔大和物語〕二「立まさこそ由えるまで手にきえぬをやたちかへるはずもあげぬらいかば」〔後撰〕春下

羇旅「いとふかく白ひしこえる浪のたちもどりて見てる由よろ」

たちえだ 立枝 〔夫木〕廿九 侍従幸一「御山の桜のたちがれ枝をみるとおのれぞ白き雪もたまるび」〔蜻蛉日記〕中 廿四 巣のみ飛て木のたちかしこに今はとのことのちぎりやくいとほどきみをあはれつくづく覚ゆる

たちかくる 立隠 〔拾遺〕哀傷 よしいへ あきがひに「春はる花秋はもみぢにたちかくれこの世のもとをも」〔古今〕ハイカイ 月「白いとよのんのてまでとふをたちかくる見るようもがな」〔古〕春上 貫之 雑 あけもそなたで参りつる春の霞にたちかくれとまらん山の桜を

たちうる 〔続紀〕廿ノ四 今年田租免賜久止宣

たちさね 〔続千〕春上 ゐえ「衣手の田上山の朝霞たちさねてぞ春もきにける」〔玉葉〕秋下 日「のそおるて秋のうれしきたちさねたる衣手のをかり」〔拾玉〕罕 手振 薄衣たちさね冬ししのびおもひしのみぞほどに〔新葉〕春上 中書「さゝの姫の袖しの浦の朝霞たちさねてもまゐる哉」

たちよる 立寄 〔安康紀〕十四 やく多智豫羅泥（タチヨラ子）〔古今〕秋下 遍昭「里ひとのすゝき尾花へとなるとのまのもの旅うくのにちちりたり」〔帚〕廿 けうせうえ縁にたちよりあへ〔花鳥〕四 弘徽殿の細殿どのに立よりあへれば〔後撰〕恋二 清蔭「さてもなほ中がきの露のむりも立べくちらまりぬべくもかりなるらん」〔同〕元方「言ることやるらむきさきやいろごとありのたちよるべきもまゐらぬ和歌へ」〔ヤトリ木〕九十五 からうくして香きまへど又田のたちよりくてまつゐ〔後拾〕春上 選子内親王「春もなほまづ霞にとよそよりの見るら」〔玉葉〕秋上 式部「さきはしけれまたさるひとわれやたちよるからにかのなきまきぬれ」〔相〕十三 さしこうれしくわもぶしいきうちいでよのことちよりぬ〔匹物〕

たちそふ 〔千載〕秋上 摂政「秋のくるゆきの松の下風にたちそふものはあはれなりけり」〔中務集〕四十一 わびどもなくまさきそひぬづたがへちをしくもあるべきかな〔新千六〕五 泰永「たちそふ今にて思ひおもかげの人のこひし秋のさゝらが」〔新千〕哀傷 伏見院「消えそし煙の末もおもかげもたちそふ中」

のふもとの山

たちゐがら 宇津保 八十 たちゐがらまゐりあへり

たちゐまち 立駒 白氏文集 十三 ひろき庭の内にあけはなつまゝあれなむ あはひ 四 けんかゆゑみぞ今までたちゐまちさぶらひつるになるくころやうやう見ゆる 拾遺 恋二 よみ人しらず「ふるさへやよそにこひつゝおもひけん のちまちかねつらん天の川波

たちならび あはひ 初 たちならぶべくもあらずおぼしげなり 源氏 九 今は少くたちならびぬひとへん 桐壺

たちならぶ 立双 秋 ならびてはこのころのさかまさりなり 拾 哥四「わかすすやわかさきの山のたかき あはれならぶ数もなしともみえぬ 拾遺 廿三 うだかりへ風にもつくらぬえのみにすかちならぶべきかりなりけるもの

栄花 十二 女房車にのせさせたまへるを並ぶべきもみすのうちにやよひの末つ方上にたてる

たちならべて 立並 と三所たちならべておはします

たちゐ 立居 万葉 十五 立居するわざもあらずしてもとも妹に告ねばしらぬ使もこねば 同 十六「たちゐもたづきもあらぬもてなしなつかしう思はるゝくに 源氏 廿一 立居のけはひたへがたげにて 拾遺 秋 貫之「秋風に衣のかえんゆくはたちゐの程もおはしつくに ふけゆけば天の川には河浪のたちゐることをまて 栄花 玉の台を立てなぞむりて 紫式部日記 四 わが人の袖かくらふ姿まだちゐにつけてあらぬとはにきこゆ 類聚 云云 舞二八 立居スレバソレニヨセニテタウニツケ井ルニツケテモ アリシヿドモ思ヒ出テ哀ト見侍リキよし 万葉 十六 八「たちてゐてのぞおもふおもひもしそひのかし姿を いせ物 四段「たちて見ゐて見れど 源 雑四 大臣女「ゆふぐれにせきくる雲の衣手はたちゐにつけて物ぞかなしき 拾遺 恋 式子内親王「あけやすき山にゐる雲のたちゐにかゝる哉 夫木 二百「ゆふぬやまちゐるまちつる露の我のちよの事ぞ守つる 同 廿六 云法 後徳大寺公「住吉のきしのふるく我のあんぐ浪のよることをたちゐをぞまつ 同 廿一 九条 新古今 二 慈「まへのなぎさに我のたちゐに今もわすれね 拾遺 哀三 よみ人しらず「あしびきの山かぎり山にゐる

雲のたちてもゐても君をこそおもへ 新古 雑中 人丸「秋さればかりのはかぜにたつた山たちてもゐても物をしそおもふ

たちのく 栄花 十三 かゝることもたちのきて只今あるさまにとてちたちきそかし うきふね 六十七 たちのきて人まのをのこ残りとまりたまへば

たちのぼる 宇津保 廿 せひのゆのいろともみえずたちのぼる夜はなきのみぞ 続拾遺 雑下 よみ人「いのちせんひとをのすゑならでたちのぼるかたちもうきたまり 新拾 恋下 よみ人「吉野山ふかきこの桜ちりぬらじたちものぼるかきもる白雲 金葉 春 顕季「さくら花咲ぬる時はよしの山たちものぼらぬ峯の白雲 新後撰 秋下 為氏「月きよみあまの川原のくもりだにたちものぼらぬ浦風ぞふく

たちおほふ 続紀 廿八 瑞雲起覆（タチオホフ）夫

たちおくる 後（タチオクル） 花のえん 十三 人にたちおくれたる人ぞひろくかゝる今めかしかるけと好みたるなり ゆて 帚 三 よろづの学問をもあそびをももろともにしてをさをさたちおくれず すべてゆうなる 槻 卅六 柏木ノ弘徽殿女御ニヨ 女にあいかうやうなるさまのひと まことはけでもすゑゞもたちおくるまじきを見給ふるにえなん侍れば

たちさる 椎がもと 大将ノ 我ゆゑたちさるまじきをせ給へば 落窪 七 法車ならでもたちさるなり おもかげさりがたくおもほゆるべきを

たちやすらふ 帚 廿 なでしこにたちやすらひかたちにはえなでさくはゞねど 続後拾 秋下「木の葉ちるかつらの月の影をしもたちやすらふにさやけかりけり

たちまち 今ト同じ急（キ）ニ織（ハタ）ニノ心 但 狭衣 一ノ上二ノ下ノ二ツハ雅言ノスナハチ即早速ノ心ニ近シ 同 三ノ上六 フトシタノ心カ 古事記 中二 倏忽（タチマチ） 安康紀 十五 懍忽怒起則朝見者夕被殺 神代紀 上 忽然（タチマチ）不見 ワカナ 上ノ五 めやまれなるにつるむべかくてもあしうさぞなりとえ知らでなどたちまちにふとおきつけたるわざなん

ガラス使用

程にさへまじらざるべき人もあるさぬおのづからの遊びのさまにてあるなん女の身にはまさりてうるはしとおぼ
ゆるさざりける 狹 一ノ上 忽ちにぞしぬけざりきとあはせてんをもちぬと難るらんかひがくしうるなれ 同 一ノ下十八
今かくたのむ傍ののひちきうたれべえやすむまじうてたちまちのうけひせねど 同 三ノ上十五（今姫君ノ乳母ガ女院ヘ今姫入内ノ）
（タノムトコロ）年のつもるは、ゆく世中もくるをたのもしうもとあえたちまちのほまぐくのまざるにゆもさるべくも
みな思ふなどはへさせさせあはれが 夫 廿九 後京極「去年のあかのりふのそりつたちまちふむせぶおのひを
こふくのうた

たちまちのつき 立待月 ○十七日の月をいふ 中むかし 廿八 たちまちの月さし出て
枕六帖 たちまち 家良内大臣「ひよがな門にさしのぼりひてねるをのこさぞ立待の月もみるらん

たちまじる 横笛 十七 宮（ヲサナキホドニ）たちまじりたまでも見ぬさへうちゑみなど
○世中ニ立マジリテ物事ヲ成シテフルマフノ心カ 紅葉賀 ノ八舞ヲカケテヨメル之 紅葉賀 三「物おもふに立まふべくもあらぬ身の さかき 十七 見えりけるよのうきに立はまじらぬも見さるなど 狹 四ノ下五 今ハかくのぞ

たちまよ さめぐみつけてたちまじるべき様ぞせさせあへざりける 柏木 初 つひに從世に立まじるべくも見えぬ物思ひの
月清集 下「玉たれの川べにさらへるけふの立まじは袖に見えさるまで ○雲又生類ニイフ心ハ同シ のきも 六十七段
「きのふの雲のたちはひかくろふ花の梢をらしとぞ見り 風雅 雜下 定家「まこともこえんまよふなこの空し
みる空まふことりありぐく花世に 夫 四 為家「咲にけり雲のみえまよふ山花のえやしの雲のあけがの 同 十二
後久我太政大臣「たつる山ましぬふえけしきもあからしにたちまよふ森のまつの夕ぐるま 同 十五 如願法師「ゆふぐれ波に立まよ
浪ふる松ふく風に寺かろく

たちまさる 古今 三 たちまさりける人のかれがいありて見えすらふとも 帚 廿一 さて又おなじくまうけのよひよ
もたちまさりんぞせはことに故ありと見えぬへく 夫 十六 永基八年云々 六波羅「雪のうちにのこまる菊のおもしきま八
たちまさるべき花のなきかな 同 卅一 現六 「昔にもたちこそまさる民のとの夕ふりにきこわふ讒らる

る　ぬ　り

のさせ

たちまじる よもぎふ 十二 たちまじりも見るにあるまじさぞやまさうりなる あげまき 六十五 このたびはいかく
うるるめを見てんへの世の中にたちまじりやすく まきの 下二十六（此巻ハ）人々方のひびきに立
まじらんもうさはらいさし いきま 三 さるんぼそうるん海づらの浜風より外にたちまじる
る人もなさるもんに 夫木 廿八 為家卿「なきさひ草枯れたづまのそりもあやそてうつる花
とは見ちかまじりそ 新勅 尺教 式子内親王「けちかくき人の思ひに身をもくくは花
わすさへやうぎよじるらん 拾冊 八ノ十三 日られてくらま所ぞれふぞ思ししる人々皆たちま
じりぬらく

たちもらさる 新勅 秋上 西行「小倉山麓をこむる夕霧にたちもらさるるさをしかの声
壬生二品 上「秋のよの林藤枝こむる霧にたちもらさるる秋のよの月

たちも 垂足皆 充 ノ部ニ出ス

たぬき 和名抄 十八ノ十六 狸 和名太奴木 搏鳥為粮者也 夫 廿七 寂蓮「人すまで鐘も音せぬ古寺に
狸のこそ鼓うちけれ 平家物語 六 祇王女御の条 忠盛内く思ひけるはそのほしく
そはけきこそのとそ見えば思ふまゝ狐きさぬきされしもまはふそぞるらん

たぬし 夫 十二 慈鎮「早苗とるおのがはらぬ秋の田をかりにきぬとや田ぬしとがめん

たる 垂 ○宣長古傳 多流ヤト訓スルハ非也自垂物ハ皆多流トコソイヘ多流ヤトハ物ヲ他ヨリ令垂ニ云之
夫 廿六 為家「玉ぐ袖の雲にいつぐくうらべりんまもたるゐの水はすくあれ 歌枕名寄 未ハム 廿五
かさ且さえんゆる雨ものは鼻ありけやまきさ紀の方まてこしたりてまづきたる

○附 **たれ** 堀初百 九 好忠 公実「袖たれてをまどもぬれまぬまぢ頂へ卯むもはなる垣根ありなり 継後拾 九
さくらのえおびの武須弥陀例きく 拾遺 春よみ人しれ「袖たれていざ我そのは若菜つまづ

たひちらす梅のなかりん［落久保］一ノ上廿八 いとせばきに縫はれて見ゆるわゆみかくれまで月そばみて兼誠

まれうけて［枕冊］二ノ廿六 おれいとつやゝかなる袴ぬの衣紋にくしめやかたるとぬぎすべして［同］九ノ二

はぎのやうに人くからぎぬきたれるわどろあり［同］九ノ廿下 すだれもなくてひとへうちたれるをして

［拾遺］夏 みつね 郭公をちかへりなけうなゐ子がうちたれ髪のさみだれの空

たる 足 此詞末にも多く出づ ［男子］ノ八 人の形の上にいふ

たらひ 足之別ニ出ス 垂タリ 足タリ 皆［名］ノ部ニ出ス

だるし **うゐさるき** **うゐなだる児** 共ニ［力］ノ部ニ出ス

たる 足 ［松風］十九ノ此名上 イヲ 女をやぎたることはひ法子たらといはんにも足ぬ袍し［ヲトメ］六 こと笛の声とぶちのわらずさすべきくひとかと思ひめぐらすにたらはでわしうるべき太るかどもるんかずにおかる［同］九廿バき のうちにたらぬ事ありてさなかめるまうに［出雲神壽］初八十日 波在止毛今日能生日能足日云々［古今］羇旅 よみ人しらず 武くゆく鳴で鳴るのるはきてこし数をたらでぞかへるべらなる

たる 足。齡 此日本六 齡ノ上云 ［狭衣］一ノ十二 古に今ニツぞうりたりまへざらん［文一賀］廿八年八六下にまそこしらぬわどるれバ ［蒿雲］廿四 やうく法よりひたりおはしまして［細流］今年菩薩院の御年四十九此年五十に満見り［ワカ十］下ノ廿三 此たびるもまうん年あ来てらぶてやとおぼりして［同］同百三 院の法よはひたりまふ年なり

たる 樽 ［あて宮］十三 一石いるたる十に酒いれて［国ゆり下］廿三 酒樽にいれてまゐて

たるむ ［拾玉］七 梅がえる土につくはでふる雪に松の梢はたるまざりけり

たるひ 垂氷 タリヒ ［未出］廿六 朝日さすわのたるひぞけぬらしなどてつらゝれむすぼるらん［堀太］氷 顕季「良さてる宕ハひやまくるひて山とぢたる山川の水［堀太］冬 師仲「林の葉にもてぐるたるひのまた風にむとけてなく鶯の声［夫］十七 永久四年百首 兼昌「ゆふづゝのこぼれにしるや

を

こぼちらんたるひづくひにまづくおつなり［うつほ宮］廿八 垣のあとにあむらきえつ今も岩なかりつゝある日さ出でわのたるひのおりあひたるに人の法服もはさるゝ絶えとき［枯］十三ノ十五 月比ふりつる雪のふさ八世そ風などのいよう吹はまべてるひのいゑどう志ぶり土などをむらく出のたま屋のうへるこには氷真の衣をといひはやゑやうしばくなぶくえどかくこゝさちかけうしたるとみえていよいよあまりてめでたるたるひに［風雅］雜上 太上天皇「ふりつむ雪に日数ふる枝の落たるひぞまぢた山かげの影

たをる 手折 ［千載］秋上 公光「をゝみなへし洞にまや遊をるたを玉べいちぶ袖の志ぶりて［古今］春上 よみ人しらず「いそむつる滝みくもがみさくら花たをりてもえんえぬ人のため［新續古］春 ［万］八ノ廿一 皇が君のみてしこの花さうりなりみおりてひとあ三せえしてもうも［後撰］春中 大臣「かざしてなりうてみむと思りながらたをうれ寄たる山桜かな

たわく ［中務］廿 みそ中にたわくとして［うきふね］六ノ十四 このみおかたところにふをくとえまとに［狭衣］一ノ上十五 さしぬきのすそ上へたわくとあてほつまめかしうきるいあへり

たをやか ［文選］三 西京賦 要紹修態麗服颺 青注 謂嬋娟作姿容也［遊仙窟］四 玉體逶迤

たをやか ［帚］廿一 この方のたをやかならはしもぞとえむし

たをやぐ ［帚］四十二 人がらのたをやぎたるにつよきこゝろをひてる人くまべ［末ふム］廿四 君もさこしたをやかなるけさきうそつけあへり［紫式部］六 女もすこうたをやぎでもてなん人もまぬかるべし［あげまき］廿三 人のくもたをやぎぬべき法さるゝなる形

たをやめ ［古事記］上廿八 手弱女人也［和名］二ノ五 日本紀云手弱女人 和名太平夜米［神代紀］上四 婦人反先言乎 タヲヤメ ［垂仁紀］廿四 吾得手弱女［万］一ノ十三「采女の袖ふきかへす明日香風都を遠みいたづらにふく［夫］四 播磨 比名相「青によし奈良の都のたをやめがかざしにわし〽金櫻かな［同］廿五 巨房「たをやめが夜をうらみて枕やたつあかとうにちかえいうぎの山［同］同後「たわやめの袖うちかへし村ふしるやもか苗の

ガラス使用

うゑをうちやまど 同 日花宴歌「あをやぎをおさへてまどりもたをやめのそむるなかの春風」

たをやかし 枕 二八（三手物ノ不）「あしう手をまげてさしつれどもたをやかしこそめゆくこそあるなれ」

たわ ・契沖云今ノ山中人謂険隘撓曲之処為也麻多和 古事記 中 卅一 無仁段 山多和・契沖云 山のひきゝてくぼみたる所をいへば今もさわとのみ 万 九ノ十六 七分 山のたをりにたつ雲の（堤モ）

たわ ・髪子也 阪 十四「あまよりおりてゆるくをりのおくれる髪のねでつるのたわ」 金葉 恋上（あらはれてゆく女の髪をうちたてゝよめる）

津守国基「船の綱様髪を枝にたわゝつけてみさふきにふりつゝて見ゆる 拾 六 五 秋下「人ごとにいつ

そのべんね様ぞさきゝに枝にたわゝつけゆくそり うつほ 中ノ廿六 おほぞのめぐりのゝ如しなさせるひとゝもてでも

まらぬ見ゆる事とのおもりゐるべ法でにたわゝつけてつかるなど

たわ ・タワムナリ 後撰 六帖 拾遺 「こゝろにしてふ見てる雪ぞとも見ゆる上に咲く萩もたわゝに咲ける卯の花 元輔 廿五「卯しや

いかゞふ花なんもろもたわにやまつゝまつ 散木 上ノ五 堀太 卯花「卯花も神のひもろぎとなりてよりかつらくさしき

くちとけぬむぎとみやきの小萩もたわゝにむすぶ白露 兼盛 十五 詞花 四 「こゝ山ちかくあらしや

なほふゆふけてゞ見る 兼盛 十七 「枝もたわゝに八重山吹を咲くまで井手の河辺をおもひやるかな 散木 上ノ四十七「露をおも

ミゆとでたわゝる萩をふくんでさかりえもかくるかな 同 日四十八「枝くあふふまちへだてゝあまりのをたわゝる萩

ふ秋風ぞふく

たわゝ トヲヽニ 古今 秋上「をりて見ば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白露 人丸 九 六帖 下 拾遺 冬「白

さかくさ 同 「いかにいかせまゝうむ雪をも惜しからか此枝もたわゝに雪のふりつゞ 家持 六 万 八 新古 冬「秋萩の下葉

くふくあをの月さへあけぬとのふれ出あや 家持 六 万 十八 六帖 上 「あふねけきえは消ゆ秋萩のちれもたわゝにおけ

る白露 新古 秋下 素性「白玉ともふうろうんところ初あきのたわゝにおそる白露の花

たわむ 朗詠集 柳 春 嫋嫋 黄 珠 嬾 柳 風 序標 六 たわむ木をあはれふちたちとだ 唐の事 七 かたむれんそよ

たまのひなつかるはおふくつめまでにたわむべくもおもしのかなと 詞花 雑上 和泉式部「秋あさくさみおふ

わるゝ萩の葉もまたなびむとあなもるきそら 拾遺 十九 かくまとてたわゝにあくるあけぬれを 万 六ノ十六 ありやあ

のおもひたえまで 新六 三 夜寄河氷「あしかきの世のみなもうづる清き波のたわむけしこともさえぬをうる 壬二 下五 中古

雲の清きのとぎしの花のえぞたわむさくらのにさきる船影

たゝら 梁塵 下八 催馬楽 ゆるぎかそらにまがひてよする海津の浦のさくるさとのめぐりぬ鶴（契太理 古）

とらさん やさきさんたちや 同 下十七 たゝら山に船もなしあけておくれるさもさなおくれるさえ

たゝら 金葉 雑上 「のかぞらうすまるの雲の夜更にさきをもさでくれしつまる（月の上白に尋まうつろの鶴をとよ）きろつね 廿九 ひさしのうつき

のたゝる花入なかの雲とまでゆかりの 。 荒鶴 それやむさ わしたゝ こそや鶴 桂鶴 はなしたゝ 忍び

たゝる鶴の鶴 引てる鶴 。 しのぶの鶴 たゝるの鶴 いとうとの鶴 やくしきの鶴 以上 夫木

たが 。誰ガ之 古今 秋上 素性「独りしねろうくさにもね秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも 同 恋四「緒

古今 秋上 友則「秋風に初かりがねぞ聞ゆなるたがたまづさをかけてきつらん さ衣 五十二 かそともあへしらずそとこえ侍らん

こともかう今はかたがはやもの思ひはなかたのまん のあさ倹 四十三反 新古 恋五「山とのしめぐらにのまど

わのゝじかたがかよひぢと人ゝもて見るらん

たかい 他界 宇治 五上ノ六 生死おのみらにつくべしとよくおぼひ契らぬ一人他界して家に帰て見そくさ

たかのびき 平家 五ノ廿三 あたりにふるゐのびきこそぞ外たりなる

たかいは 高岩 夫 廿六 為家 新六 三 「入海のせとの崎なるたかいはにおもふ白波こしてあり 汐風

攝州書見 方 九 雅ニハギコエテ久大ナオホカノ、タカバカリ、ヒキイオリセリトハ 山跡庭間往欲大我野之竹葉刈敷廬為跡者 堀太 旅 国信「立つくへり船の行

たかうな 竹葉 冬の夜のみをくらへてそるゝかりけるひとりねすや 夫 廿一 五百 政昭 「ゆふそねかたゝそかりあけしながむ

雪ゝ吉世のたけにまつこふきね

たかは 田川 夫 廿七 為家 新六 「あまきそたがはよたてる名車 水のらきびおちてゆり

たかひ 保中よで 十四 おとでも私もきえいるなかりゆそれしあへるにしのはおかしまてわでやるかせんとせし

ガラス使用

なきせたまへば是れにもあらず紀のかみあひてたぐひしてるにの世なりあひてあまうせたまへど一のさふ例よりあらざ
ゐるうちにも仕縁しておほくをきせのみ我女御をりなきせあひて同じくゝん挑せさせたまへど

たかべ 鷸 [和名抄]十八 九 鷸 多加閉 貌似鴨而小背上有文
[万]三十之「人こがずあらくもしるしかづきするをしとたかべと船の上にすむ」

たぐへ [うち栖] [いさよ]ノ夜をぬく 因 片世 声まねけども
[探太]雪 [夫]十 匡房「さりともと世の中のあみのおもげくぞ空くる舟のたぐへずもせねど [夫]十八 後成 名盛

たぐる 「あふつるのたぐくる舟もいかならんかりその小世の雪くれの空。袖中抄云 あまのやうたるたくの舟うひめ
まふつるをいふ

たがへし 耕 [夫]十七 為忠「世比の祢がたがへしかへすとしのうへもちらちるの世や。田ヲカヘスニ一ヘル、[加]ノ約之

たかどの 高殿 [万]二十九 高殿乎高知座而 [日本紀竟宴歌] 時平「たかどのにのぼりて見れば天の下よもにけぶりて今ぞとみぬる」

たかがき 高垣 [夫]九 俊恵「山がつのそともたかがき枝もせにやふるあまりきろひくに
[夫]五 仲正「狩衣まきたるたかえもまちつけずするたちて鳴きこゆる。舟鳴ゆて舟つらよ

たかさえ 附をいよかえたまひ附くとも人いつり

たかがひ 鷹飼 [いせ物]百十四段 行平ノ おほたかのたかがひにてさぶらはせたまひける 武十段 拾二モ [拾遺]物名「鷹がひの
まがもこそくふつるなめのとまてゆんさきまつなど [夫]六 家隆「きてにそろくるの
めのとたかがひ ふもやりあかせらしつ [蔑のうへ]鷹飼人所のくるがひ

たかる [古事記]上 うじ多加礼

たかつき [延喜式]式 掃部寮 七 多加須伎 [いせ物]八十七段 女方よりそのさかなをたかつきにもりてかしはをおほひて出したる
ひく出たるかしこにかゝる所 [柏木]十 ゆふぐれやかひよの衣のきたつきにさかなどを

のんぢくも [拾]九ノ たかつきに盛りたるあやこの油をあぶら髪の筋みぞもゆくひるよまへけせられなんては
だいやまご [やどり木]八十七 紫たんのたかつき [国ゆづり]七 こしたかつき [万]十六 亮蒙 高坏にのり机にたてゝ母に
まつりつや

たかね 高根 [万]三廿七「田子の浦ゆうち出でゝ見れば真白にぞ富士の高根に雪はふりける [詞花]秋 良暹
「天つ風雲吹はらふ高根にていりまで見つる秋の夜の月 [新葉]春下 内大臣「山の端にあさ
ゐる雲やみよしのゝたかねの花のさかりなるらん [月清集]上「うら風に花やちるらん志賀の山たかねも沖も波
さゞ波 [夫]十九 為家「初への山さる根風のうき雲に雪ふりかへるしがのうらなみ

たから 宝 [江談抄]三 故師大納言常談云 随身公家之寶也 [山家集]下「あさやさるあらひのうらを
つゝまてたからのあらそひさるにとるなり [拾遺]カグラ歌 [神楽]「四方山の人の宝とするみ弓祢の宝
へみさまる [夫]廿二 為頼「たからこそあまたもまんば世のためにあさを聞ゆるうそのみゆり [同]同 後京極「えん
世までもえたからとなるあちて佛につくることぞ之なり [拾玉集]中宮亮顕仲「大和にもまつりのみこまかなだの
はるぎへみのたからなり [拾玉集]四「ろみこそうしろそへのうへにこそへてたからのはに宝祇ぞ見える [つれゞ]下ノ六九
いやしく象しみちのもたかえ世にあらたゆりたからにあづくり世にゆるさうくたぐひあふりなり

たからのいけ 宝ノ池
「そちさと咲たからの池にこぐふねのまづ拝もうげにうびねるらる

たからのわう 宝ノ王。長者ノ心之 [うつぼ吹上]下二 かまうひのたのまつとにのせの来くぎりみるたくらのわうゆく
[うつぼ後かげ]上ノ卅九 たからのわうぞとて此にかさ…げてやしろの [栄月宴]六 故来
雀院のほたからおもる只比宮 のことそあん見ば此宮ら喜おそきなる玄くたからのわうにかりなひかえとことそ

たからのうゑき 宝ノ植木 [捨古]今哀 [夫]十四 花の盛極楽をおひ 花山院 中々せあひなるにおの 「あごふちりえなるだゆもある極楽たから
のうゑきおのひとつぞやま」 [如来神力品] 衆寶樹下師子座上諸佛

たからのくらゐ 宝ノ位 [夫]廿五 元輔 家集 いそひの谷「みや濱のいさごのさまとるつぐ君の宝の位ゆらぐへやんくし。宝祚ノ心之

ガラス使用

たからのやど 宝ノ宿 【好忠】四季恋雑の序「きゝのみえしたからのやどもくちはてゝとおもひゆくて。徳人福者ノ宿ノ心カ

たからのやま 【智度論】一廿「復次經中說信爲手如人有手入宝山中自在能取若無手不能有所取」云々「無信亦如是入佛法宝山都無所得」云々【平家物語】康頼ノ巻「十三人の智徳おのくたからの山に入てむなしくかへりぬ」

たからのきみ 宝ノ君（タヾ大ナルトホメテ主君ノ人）【落窪】二「思ひつゞけしかぎりのみをせさせなへげにおぼえけるより　たから君となんおもひまゐらするとのみ」【大鏡】「野ハ猛家がたからの君に」【栄花山】中納言ハ守宮神かしこきの古ゆくふしまろびなひて我(?)からの君ちいづこにおはしまさせたまへるぞやとふしまろびなきたまふ【ことのかえ】十八「万にめづらかのたからのたから物えたまふべきもつかさくらふり」

たからもの 宝物 【うつほ雲】廿「たゞのとよりのなるたから物ども」

たからか 【落窪】一「中方をとうまで思ひてきぬ　たからかにおしあげて落くぼにいひて」【日】三「ゑみさゝろらかふのまへど」【狭衣】三上十六「いとたからかに打笑ひて」

たかんな（タカウナ　トモイヘリ）【神代紀】上十三「化成筍（ナルタカンナニ）」【詞花】雑上 冷泉院へたかんなたてまつるとて　花山院「世の中にふるかひもなき竹の子」

たかのこ 【堀次】猿 俊頼「たかのこはいともあやしとみまし(?)より猿まろをしもえんぞこそや」

たかく 高シノ変シ也

たかくさ 【夫】廿六 為家「法かうべきのみゆせへせまたかくさがくれ折ふるとかなり　。高草隠（タカクサガクレ）」【同】九 後九条内大臣「星かゝるあげの森のかくろへてふしのとこのまにあるたかくさ」

たかやう（ヨルラカニ同ジ）【帚】廿「此香うせるは小峯よりあへとこるやうゆのに」【狭】三上廿八「こゝにいとあやしき也」

よのあやしとたからやうふいかの【同】四下廿八 児ふそう いだきてけふまちし何ごとかおぼえつゝ我後たからやしかなき【中務】八呼「たからやうる萩ふつけて」【うつほ】下七「いと白くからたる萩をもやうふゆぎて」

たかまがはら 高間原 【神代紀】上七「二神坐于高天原（タカマノハラニ）」曰云々【夫】廿四【万葉】読人不知「八百万四方の神たち集まりてたかまがはらにふきてたくしてき」（しき集）

たがふ 違 【万】テ廿九「あめつちとをのれをへんとおもひつゝ仕つかへしこゝろたがひぬ」【夫】廿四 久安百首 針祇 実清朝臣「ちぎりだにたがふな世にてうらみの寂しくやれよふりまし」【桐栄】廿二「そのおたがふべきとのみそはかくもたがふまじかりけるとて　まよふにまかせもあかせいかりけりといひて」【あつし】九「神の御さしたがふなれ」【たまの】六「此ほひをきつりせくせたがふ」【帚】八「いとくそくこのうらけをとやすらふやるるなかもしくやきまゝるさぎもるゆえ」【たま】廿七「ひとまにともかくすみさせてんさまなるたがへ侍るはしくろん」【松】四十六「いそくともはくまのもてそうろわるかのまへり我々ものぞりたがへるにやといふまあやしのたがへおやかのゝとにさるおつかみてかくるへやふあるる」云々【同】五ノ十四「たまかぎりはしうねひこりと知れてのあひのさえ」云々「ぬひたがへのくのげに生さむ」【万】十四「おそくやも汝我こそこれむかうをの椎のこやてのあひのたがへど」【夕貝】九「此世の人にはたがひて」【大和物】一「かゝるほどあらしなかにはあるまじきこまのまぬかれたるあろまれさふへとてもひかれどたがひつゝあやまきこゝも」【宇治拾】九十六「さりとて兄弟の中たがひぬべけにあそび」【同】五十「故殿のおほ せしほどにたがひのせたかしますをがあり おほしくて」

【附】**たがひめ** 【うつほ】廿「その中にたがひめありてはしよせのまかとゞめ侍るとのみに」【栄日】三「かゝるたがひめのあるをいのにおぼすとらん」【うつほ】上九十一「ものゝたがひめありて」

たかさ 次高シ　ふたかき　たかきひと　類モ

たかさ 【散木】下十三　たかさとのやまきてゐる男のそのさかけふの上を何とて　津守国基「たかさごきてそさかけふりよ難つる」

たかさご 高砂 【奥義抄】三【坂枕】中「山のはいひくいひてそふるかのきの桜をりてかざさん」。是ハ播磨ノ高砂ニ非ズ

山の一名をたかさごといへるはすなごの畧也 [後撰] 冬 よみ人しらず「[illegible]秋のよふけゆくまゝにたかさごの峯の松風ふくかとぞきく [催馬] 二段 たかさご「たかさごのさいさごのたかさごのをのへにたてるしら玉しら玉つばき云々 [古今] 秋上 敏行「秋萩の花咲にけりたかさごの尾上の鹿も今やなくらん [後撰] 恋六（鹿のたかさごのなき たるにつけてつかはしける）「さをしかの妻なきこひをたかさごのをのへの小松きゝもいれなん 返し「さを鹿のこゑたかさごにきこえしはつまなき時のねにこそありけれ。案スルニ[illegible]なるたか砂の浦トイフヲ清輔朝臣の判コトワラレタル [夫木] 廿五ノ十三ニ見エタリ △いづれも山をいへり。播州なるたかさごは地名なる故に爰には載せず

たかきにうつる

[貫之集] 下ノ廿七「こち風にゆきとけぬべき鶯のたかきにうつる春を告ぐらん [詩小雅] 伐木篇 伐木丁丁 鳥鳴嚶々 出自幽谷 遷于喬木

たかみくら

高御座 [続後紀] 十九ノ十 興福寺法師等奉賀天皇四十長歌 天津日嗣能高御座萬世鎮布 五八（イツトセ）能春亦有氣利 云々 [内匠寮式] 一 凡年元正前一日官人率木工長上雑工等装飾大極殿高御座 注 蓋作八角 角別上立小鳳像 下懸以玉幡 毎面懸鏡三面 當頂著大鏡一面 蓋上立大鳳像 惣鳳像九隻 又鏡廿五面 即位朝賀蕃客拜朝等時飾ルイナリトゾ [夫] 十一ノ八（入道大政大臣）「たかみくらくものうへをやゞそのかるゝのひもおはするる [因] 十八ノ廿二 多可美久良あまの日嗣と天の下しらしめけるすめろぎの神のみことのかしこくもはじめたまひて 云々 [続紀] 十五ノ十五 恭仁宮高御座并大楯 [三代實録] 三 十四 此天日嗣高座之業乎 [因] 十八ノ卅八 高御座あまのひつぎとすめろぎのかみのみことのきこしめすくにのまほらに

たかし

高 タカキ タカケレバ タカサ タカク タカウ 万ニワタリテ声ナドニモイヘリ [いせも] 八十三段 比えの山のふもとなれば雪いとたかし [同] 八十七段 其夜南の風ふきて浪いとたかく [土佐日記] 風波たかければとゞまりぬ [夫] 廿二 [西行家集]「磯によする波のまたかくきこゆなり沖のなごろやたかくなるらん [夫] 廿七 [堀川院百首] 家季「ゆふまぐれ潮ころしやみつらんあさりもせずでたづ鳴わたる [夕顔] 初 けたかき心地ぞまじる [末摘] 廿五 かたはとみゆるものは御鼻なりけり云々 あさましくたかうのびらかに [拾遺] 雑上 大江為言「かぐやまの白雲かゝる峯にてもおなじたかさぞ月はみえける

たかく

尊ニイフ [絵合] 十 かぐや姫のこのよのにごりにもけがれずはるかにおもひのぼれるちぎりたかく [帚] 六 もとのしなたかく生れながら身はしづみ位みじかくて [夕顔] 四 位たかくやごともえるする人 [紅葉賀] 廿二 あてにおぼえたかくあるなめり [ミヲツクシ] 廿五 人がけはえのよへたかきいやしきあまたあり [よもぎふ] 九 男女につけてたかきをもくだれるをも人の[illegible]おぼしあまるゝさまぐあり [アゲマキ] 廿五 たかきをもてまじるも [狭衣] 三ノ四十 世にふある人「たかきもやまもるも[illegible]あらん [ましや] 廿三 たかきもみどりきも女どのかたのへ [幻] 廿五 たかき身のへまじるかぶら [あげまき] 六 あやしきあまどもたかき人おはする [illegible] [同] 廿一 [illegible]

たかどの

高閣 [illegible]

たかしこ

竹矢籠 [illegible]

たかひざまづき

[枕] 三ノ二 丑寅のすみのかうらんにたかひざまづきといふゐずまひに[illegible]

たかせ

揚姫ノ注 箋タカセハ高キ瀬也浅クテ舟ノコレガタキ所也此高キ瀬ヲコリシ料ニ舟ノ底ヲ浅クヒラメニ作リタルモノ コレハ高瀬舟トハ舟ノ名ニ。今ノ舟大キナルヲサセテイフナルハ高脊ノ心ニヤ [三代實録] 四十八 元慶八年九月十六日癸酉令近江丹波両国各造高瀬舟三艘其二艘長三丈一尺廣五尺ト云々 [山槐記] 十 治承四年八月十三日乗高瀬舟差廻堤上望見南海件舟乾田四郎則久所沙汰進也 [揚姫] 廿九「揚姫の[illegible]たかせさし竿のまに袖ぞぬれぬる [夫] 廿四（名翁）

ガラス使用

よ

「むつ田川岸の柳のうら風に竿さしかく波にうつ瀬さしとをり　同　十四　いそな集　「こゝかしこの山もうつ瀬のあさきあはぢ
しそせの海も渡るくらひ　同　十三　光連法師　「難波津にいくたびくだせたゝせのこゝを棹にいくたびもちぬるものむかふる
玉葉　旅　「旅にて侍るさてたゝせ舟にのりてよみ侍りける　能宣　「おくともさしてひきゆかばたゝせ舟うき世の中を
ゆくへしらずぞ　散木　下ノ廿七　「世の中はうらみてたゞよふるたゝせ舟うき身をそへてうらみこそあまとあり　夫　廿三　久安百首　季通朝臣
「さきのちきりをうけてそめたゝせ舟あま人の身をさせるしるしらば　同　同　崇徳院　「たゝせ舟ゆりしふりたてよ大井
川きしにれ松葉をいそぐまで浮ぶ　同　五　永久四年雅仲之　堀次　「たゝせ舟のむかふ蛤江の水をあさみてそかくれ
にて蛙なくなり

たけすがき

竹簀　堀川初　夫　廿七　散木　中十四　遇不逢恋「山城のあしやにかけけるたけすがたふしふしとものおもひ
けるかな　堀川注ニスガキハ竹ニテマバラナレバスキマアリテソヒヨラス物ナレバ云々

たけてなご

夫　廿五　光俊　新六　三「次ニ鳴る浦の見渡し近けれどあはでくらしつたけもとゞろごうる

たよせ

夫　廿四　家集　嘉応元「たよせとへ思ひざらるゝなるそこつ海にいのるかひも神ぞあるらん　同　上　家長「武蔵
のゝそらちのなみたてあぶらかのたよせにぬさ奉る　同　上　久安百首　花園左大臣家小大進「思ひわびぬつまあら
まし武女郎花たよせに折と思へばうとまる　同　卅四　嘉応元「白雲に名を見え海もふりてそ浪たよせにかけよかのこのうへ
此歌ハ障子の画に次テ名の浦のうきまたるに神の社に舟より除へて波のえる風ニハたよせにそゞろ奉る所とよ
めるとぞ云々

たより

○是ハツイデノ心ニハアラデヨルベノ心カ本の意ハ同シ　貫之　上四十「青柳をたよりとおもひて春の風はど
里つりまする所なりけり　蔵玉　十六　おのが身につけたるたよりともおもひそでこそする涙じう
ありへるを　いせ物　十二段　年経るまに女おやなくたよりなくなる侍くに　ミブタヽ　卅六　もとしあはれ方
によせぬるまでもむるたよりもあるものを　大和物　四十　京のみやりてあづさをもせよ云々あくしひちぢり
てたよりの人にひつぎて女も京にきにけり

たより

○ツイデ、俗語ニテタヨリト云リ　廿六キ　ノヨキ便ハヨキ都合　イセ物　八　ツテキ心之　貫之　上廿四　六帖　三　ころ　茶
つむまのたよりに年ふきべきつむむこそそびしかれ　貫之　上卅六「あさぢふ年のたよりを
出降のたえまびひちる君かそこぞ　拾遺　十五　貫之　廿六　六帖　一「柿えそくにふうか里てそ白きのたえるのたよりに
をらるかまうかる　貫之　上廿　同「すそ出て見のたよりとぞえてみぶらんの内にありのを　貫之　上卅　風雅　上雑
「えゝこの月のたよりにかゝるへかりけのをかあらじとぞおもふ　六
ようにふぼりつむべえ　准皇后宮集「えぬるまで雲の声ぞ風のたよりこぞ　貫之　上卅四
「中入のたえを見かけたらけゝのたよりのかへにふ我ぞくくぞ松のた
るべし　帝　卅九　いとよく隔らずとゆくにかのたよりを
三よまで侍るそへ　兼盛　卅六　をさるかへにはとのこのりてなんこそうのと衣をうう美せとさせあへるとの
をべ　元朝　五十七　はつのぞゝみさうり蛍えでもきうのもてきへ出ふにはえさうりとおうのとめぐら
まを侍ぬへ　之儀　オトヾ物ノツイデ二十七五ヲ後ハ涙カヘリ灰羽　一日ハ覚ヘヌたよりなくし残ぬんめぐらし給ふ
せうものなく物しきまへり　おくで舞るたよりのなごと　大和物　三　雑上　たえぶるる
ませそぞ　同　乃ろそもてやそ蛍に蛍うもへてたよりのかにす　消元　雑上
まどころなくみせたにふさひぶけにまうでまうくま　拾遺　別　鳥羽
らん　万葉　五十　あきらにぼちるのきにえのれのけんすりにあくさるゝ　後撰
まさこちるぬそるやうがんのちたよりにつけてわらじ　ワカナ　上十九　おのづからたよりにつけて
甲斐するにくく侍りしかばたよりにつけてつかはしける　紀貫之　イセモ　十三段　いひそめしよりたより
てみらるゝ中へんぐらやりもあり　狭衣　上廿五「うきをふねのたよりにゆくかなとほくつきのそことよ

あとのしら浪 トシカゲ 五十四 物のたよりに立よりて 夕貝 五十 「夕霧にひもとく花は玉ほこのたよりにみえしえにこそありけれ 年經 ホツム 三 風のたよりあるときは 紅梅 二十 風のたよりをすぐさまし やれ 推本 五 くるたよりをまぐさだ 口 七十 のきしまるおのたよりに山がつのうきねさるとぬ ゑるゝのしび人

たゞ 是ノミノ心 相栄 十四 人の心ばせはげなるなへあるじとやふるをたで此人故にてあまさるまじき人のうらみにぬひしてそくへ（ハミヘ外デナイ） 堤紀 廿六 大保波乎 多他仁卿 止能味波不念 夕貝 四 「もてげる花身なえどまそがくて思ひをつくるへたゞかくおまへにさぶらひ給らんぜらるゝのつり侍りるんるゝをはとしくや言なるたひしつど（外デハナイ之） 同 十四 たゞうえにちとあらせて物るそどのようるなおのとの侍るを 帚 廿 かのへにくゝにまれ侍らんたゞうけのみりぬるてえ出侍るに（外ノイナレ二） 朝顔 廿七 続千載 「世のけへてゞくゝのことおのわえてあへまむ臣にみりのやりらん イセモ 七十八段 此石の年しよのへのるへ婦まりこれをたゞにきるへたゞろなるを一さそ文くふおよ手世のよ（ユレノミ 何ノイナレ一）

たゞ 。俗ニワヅカ氏ニ云多ツタ 相栄 六 「見くにおのりあひてたゞ五六日のやどにとよるうるまべ

たゞ 常ヨ常ノ心之

たゞる **たゞ人** 下ニ同シ心之 イセモ 六段 「さてのとうくて后のたゞにおわしける時とや（后ニテナク 常体ニ） 大和物 六 云 更にかねるりとおもひてたゞゆもさらひしけるなりけれど（何ノ手キ コリニモ之）

たゞ 。イタヅラ 多ダ 六帖 五上 「君がたなまてこざりし月だゆもゆのぞろたゞにくる物らへ（入ラデ逢ズニ 夕ハハノ心之） 。宣長云カヤウノ夕、ハ今俗言ニチキニトイフイニ之 ワカムラサキ 八ノ左 惟光たつり侍従まて のぞきおへがたゞこの

たゞ 西おもてにしも持仏すゑまて紹る尼なりけり 。ボッキ此西ノ心之 平家物語 十ノ廿六 たゞ見より八島へまりてんぐにゆさんぜるるよる 。是モワカトザカレドチキニタダチニ今スグテ心之。スグサマ心 枕 六十九 初激ノ秋 うきる事どもなうとてそおくとやよりへたゞ高に出くたるせてにむちばくよ出残さすくとかゝるさるなるとどき（多ク） 万 六ノ廿六 「直越のこれかみにしておしてるや夕まへのうみとるゝづけらるらしも ヨユブ 十四 とうかゝーうらうたけるる泣ひさひ髪いひつたのおかしきたゞ児の

やうにみへおひて

たゞ 。ヒタトナドイフ心カ ヨトメ 廿八 遍照 ハ外デハナイト訳メ心得ヤスシ 家基 八 「音にのみせで谷陰ゑまする山吹をたゞこゝにのまふぞありる 六帖 六上 朗詠 「やうにこそもらへのえうる人まき日此ばたゞまの日に偽のせたらるえ カゲ日記 一 たゝむ月にと思ふ我さまでがふゞふしはりせねべのらでふて九月に思ひたつ 遍照 大 相云く 誰ならんさく（ミヽ おミヽ）さのへるこそ我おミヽといへるたゞ出ねるなりなり ヨトメ 廿五 めでたくとも物のえじめの六位をぐせよとつぶやくも此の嘆きたゞ此屏風のうしろにたづねきるくながくうなりなり 同 廿八 うるやましげにさくそひをみもたゞかの人のはるどもえて 六帖 四 いせ集 「一枝の業をるうらにあら出の金と君へでに偽ぬべかりなり

たゞ 。此タヾハヒタフルニトイフ心ニテ 俗言ニ イツソノコトニトイフガ如シ 。是ハ不用意常ノマヽニテモトキコユ かゝるんのわたこもなのまで 同 后 後成 「うれ身我でつまでぶふいとふいとへたゞそをだにおかれしんと思らん 駿古 巻二 雅経 「きえ絶たゞ志のぶの山の峯の雲

たゞに 万 四ノ五十三 「やきゑこそかゝれ衣にきてて直にあふまでつまぬがめも 古事記 下十三 道をふべ多陀迹波能良受當藝麻知表能流 景行紀 十九 麼羅小多陀珥霧伽弊流 云々。直（タヾチニ スグニ）ナホ人ノ義

。**たゞる** **たゞの宮** **たゞ人** **たゞり** **たゞあり** コレラノ類皆ヨノ常。常ノ心之

たゞさ ヒタスラ 常ト 二様 皆別ニ出ス

たゞ 是ハ次ノ詞ニツケテイフヒタスラノ心之 東や 八 守おいそしくもへえ志まぬのうりたゞいきふちの為とりくま案いみて 枕 八ノ九 橋姫語 いさてのくるしげもなくおまてくとうへたるものぞものであまふだちてまうづるいとうらやまし 由ぎり 十 たゞいひふいひそるてば 藤条 四 越前たゞそらごちふあるだちて 同 日 たゞそらだちにそらぞちのことを物おもひのひるるれ 同 一ノ十 風にたゞそやふかる波くふいふ中せぬしと思ふに のうえ 七 たゞまるえかりるえおま 枕 七十 あかきそ花のこおにたゞよりによりて引くはさりて あげ巻 九十 たゞよりにうえとうとせのなかりし ヨトメ 廿三 顔もりこげありでたゞるえのこるえおそ 狭 一ノ上 四十四 たゞうえにのころえまさる 枕 五ノ廿三 あかりて袖もおぞろくしうなりて足へば物も覚へでたゞおちうしふ

ガラス使用

おのれ若きのほどすゞしへ菊まで見せかはしにまゐりてはべりしほどに 同 九ノ十六 はぜんじも此ありにおりゐくしる車どもたゞのけふのけさ見せて おぼつかな 四十七 たゞくまふくまでふけにける秋のよは 宇治拾 四ノ八 同 たゞに見てくらくるまでぬるまでば 柏木 廿九 涙ノコヲ たゞふりにふりおちてえそでぬらむ 枕 十二ノ二 風いたうふき海のおもてのたゞあれにあれまさるに 夕霧 十九 秋あるたゞあけにあけゆくほどあはたゝしくて 寝覚 一 三の君の方にたゞはしにはし出づ 枕 五ノ廿二 車ヨリ まゐやうふるまひ並ぶるをのこどもにいそぎぬるつ 枕 七ノ六 たゞせめにせめゆきてうらうらとはべるく 同 五ノ十四 面白き萩をも見てぞ残り桂てする種に長びつにつる御かざしさげてたゞありにありまさくいぬることをのびしらぬる事

たゞいま 唯今 九

桐壺 廿一 たゞ今人をさぶらはせ給へど不晁多くありて 枕 八ノ廿九 遊ノ二 たゞるやうにて目もこまうはじめるのかまへが身に只今まゐらるがやと見えし〳〵 ○是ハタヾ今ノ心ニテ桐壺ノヨリハ心キビシキヤウナリ 東や せちにそしまいらせくあまし待る事ぞ只今見えし給ひてうえ 此東ヤノ今モシハ未来ヲイフ今ニヤ可考ノ

たゞへしく ミテツクシ 廿二 いのつかれんだら ○眠木ニ 河海ヲ引テ たゞかしまんざうらトアリテ 紀タヾハシ 嚴重也ト記セリ

たゞやしもかやとはしれ タヾニアラヌヽ タヾナラヌノ下ヘ出ス

たへ タヘノ下ヘ

たくゞと 神祇式 八 稱辭竟奉（タヽヘコトヲヘ） ○此詞中ツ世の書ゆ見えず

たゞち ○直道 ○道路ノスグナルヲイフ ち濁ルベキカ 字鏡 徑徑同太々知 和名抄 十ノ五 徑路 多々知徑遅也並道也 後撰 雜二 たゞちともたのまざらなむ身にちかき衣の関もありといふなり 奥風 二 わるゞしてるりろましたゞちあらゞことしぞうれしきよふゑ 夫 廿六 和泉式ア あふくまとたゞちるりなり桜井と名のみぞきるぬるなる 同 十三 仲実 見るもをしたゞちにたてる秋萩をあをませさせるあのあがらみ 同 三 信覚 青柳のかつらき里の源ぎりみちのたゞちに春風ぞ吹 同 廿二 為家中 家隆 いまさぞ浪のたゞちにゆめのたよりにつけしよへの一ちぎ 古今 恋二 恋わびてうちぬるなかにゆきかよふ夢のたゞちはうつゝならなん

貫之 下ノ廿三 六帖 六 たゞちにゆく君がこゝろのつゆけれどこゝろ残みゆでゝうつろひぬべし 万 十ノ十四 月秋よきのめすあれをたゞちうるまたゞどもよそにふけゆる

たゝり ○糸ヲクルワクノ一之 ○方ナル居木ニ柱一ツ立テウヘ紵ヲ引カクルモノヽ打麻ハ美キ麻ノ也ト ○令集解 二 多々利トイヘリ ○此二説万葉略解 神祇式 四 金銅多々利 万 廿ノ五 をとめらがうみをのたゝりうちそかけうむ時なしにこひわたるかも あげまき 初 むすびあげたるたゝりのさぶ糸のつまよりのこゝろびふあはぬくえにけるべに 六帖 五ノ下 たゞあまのまどもあけぬ又ひきやばのたゞりにつけてぞふる〳〵ん ○契云此哥絡梁ニ崇ヲ多々利タリ 令義解 線柱 和名抄 十四ノ十三 絡梁漢語抄云多々理云々 古事記 下ノ廿一 太陀理 神祇式 一 風神祭二座ニ云々 多々利一枚麻笥一合加世比一枚已上三物並金塗 延喜式 八ノ十二 竜田風神祭 金能揣 契云 和名ニ揣ノ字タヽリカタノトヨメリ 若揣ヲ誤テ揣ニ作リテ假名ニカケルカ

たゝり 崇 **たゝる**ノ本

たゝる 崇

古今 ハイカイよみ人しらず 拾遺 恋四 いそのかみふりにし恋の神さびてたゝるにわれはいぞねかねつる（ねぎこそ 拾） 金葉 秋 散木 上ノ六十二 おもひきやそのかみやまの神もたゝるらん身にあらぬこゝちのむけられば（そえ 金） 後撰 雑二 大和物 三 あらのえのそのりの神のはしらたるもとさぞそをりしたゝまさる〳〵 夫木 廿六 和泉 のべのみて まつるまでとみぞしてし関のゝ神にぬさまつる 拾遺集 ちはやぶるいつしか我の神の給やあるのぞやたゝりあらぞとる 後拾 雑四 赤染衛門 挙周（タカチカ） 云々 いとゞ給ひけるを住吉のたゞまさのこへ佇りたるに 宇治拾 四 物のけ神につゑていやうおの事へたまの物のけあげて侍らびうれて正通ひつる称あり

たゞる 欄 彩撰楽記 雖牛頭欄一日無休 [illegible] 下ノ十三 月給さえのごとひたゞらして

たゞゑ 只顔 ○タヽヒセ 又常ノカホ 去り 濱松物語 四 年比治ひおやつしそそあひてつくろふあるたゞゞごかのめづら

たゝかふ 戰 神武紀 十四 いのちをすてゝあらそひ多々迦陪磨（カヘバ） 竹取 末 かくや姫ぬえたゝかひこそめびるゝぬるを

ガラス使用

あまぐくと奏して［イホヌシ］かぜのたえまひしたる所こそ［夫］廿六庵主「うつ波にみちくる汐のたえまなるそが濱とこのはなぞありける

たゞよふ

漂　〇雲舟波又入（イユニモイフ）［神武紀］四　卒遇暴風皇舟漂蕩（タゞヨフ）［遊仙窟］汎々（タゞヨフ）［神代紀］上二　洲壤（ツチ）浮漂上三［古事記］上二　多陀用幣流［推古紀］四　河水漂蕩（タゞヨフ）満于宮殿［東がれ］五十　此などまでハたゞよひける我のづまのふさごまりておのむくらん［あし］廿二　思ひかけぬ世界にたゞよふも［後拾］雑一小兵「岸遠くこぎよる沿ふ中空にて（於本）よる方もなきたゞよふを心ぞせし［散木］上ノ九「白雲のかゝる梢こそ風にたゞよふと思へハ谷に花ぞちりける［万］十ノ廿八「秋風のふきたゞよはす白雲のおさまる山のまつはほうも［土左日記］光ゆく雲もたゞよひぬとぞいひける［帚］十三　あしたんふもたゞよひぬべくぞ見ゆる［illegible］玉いふ心つくゞの節をもえんぢてたゞよひたるうたごゑもしりがほに［竹川］廿二　ふむそらもおぼえでよひありけく［てならひ］十二　いとかなる世にはらまはでしめてたゞよはしおもひしわどに［illegible］上ノ四　まさしてん後の世にたゞよひさまよはんことといふをしろめて［桐ツボ］十三　光る親王のげさくのよせあんまでたゞよはさし

〇附 **たゞよはし**

［illegible］下ノ五十八　たゞ時しろくなくさたゞよはしくおもしまさへよりへ［同］同七十七（此事ノ病後ヲイヘルニ）色ハさを白くうつくしげにもえたる坊にたゞよひたるうたごゑ世にすてぐらうたげなりのぬけたる虫のからなどの坊ちにすごいとたゞよはしげにおそれ［同］同八十　あくにいけうえおもひをへまよをはせいとたゞよはしきけうちしんぞそたる坊に思ひてもいつ更にいとわしくうゑ

たゞくと

［宇治拾］二ノ五　その女をうちまちせえうに出家もとくやるやうになりてぞいつくにとけてらぐ出ちれおり

［礼記］委（ダヽカル）［古集］二ノ五　たゞいたゞくる婦姫山の　〇［万］八ノ八山

たゞうる

［祭使］廿六（李房ガサヲ）かゝりたゞよへりつるぞこのきゝねやまじくつまあそぶやまで［祭使］八ノ冠ニイヘリ大方ハ髪ニイヘリ

［浜松］四ノ七　ふしあへる傍ふ髪ぞいとこちたくたゞよへりくる［同］四ノ八　傍ふたゞよへりくる髪のぞ出のへまへいうごたゞよりもこゑすでおくりまたる節あつく［狭衣］一ノ上ノ廿九　またそへやむてうしろとひそしうひかれのえてもち

たゞたゞうちまたゞとこそのとゞましまのいく世我ほりにあひ出でんとまさらん［義びらえ］上ノ十九　ほどぐしけるもにすといぬかとおもてやうしうけなるごとして白えはぞふむまゐくゆりけらまさへりよのまたりし裳にまたゞぶえれたるいとめでたし［枕］二ノ廿六　髪の方たゞなえりてゆらくうるのるわど長さなどしへらまへたるほ

たゞなるよりまへ

〇此タヾハ無事ヨノ常一通リノ心ナリ［若紫］四十三　うしろやとをつくりほつほしんをさうつくしをありまとのあなせつもものいとおかしうたゞなるよりハかうるほどえでとも見ひ出られ侍りつれなきどのひて［枕］九ノ廿一　たゞなるよりハおかしとみゆるわどに（ツギ名男）軒ノ引きそ出る雨のゆく男ノ「峯にまろうととといひたるもおかし［あし］十四　妹の人もたゞなるよりハのひしふたぐへとおぼさんもんそつうしうおかしさるまへべ

たゞならぬ

［東よ良］十　たゞならぬにえよしづえでてるなどぞおのある［若菜ゆ］七　そこのえる御ものゝむつかうるどのおもひてたゞならぬおもわしたり［うつせミ］初　よえんどふかくてとぶめてんと思ふのうちたゞならぬおもかちうつり［さかき］九　ほどかれかどよりへおかしうもおそれ御まうれとたゞならぬ［枕］廿六　小夜清といふ名あおなるたるを心ぞまたむまとべたゞやとのへんだ実方のほねよりてつくらよはたゞならぬ御文ニ［同］六ノ廿四　えづくの人なご我々くらひてたゞあおふ路のたるありさまなどをもまちでそこぬるよ・［枕］廿ノ八　ケサウスル人［内］八ノ　孕メルヲイフ　皆常ニ通ツナラヌヨリ万ツニワタリテイフナリ［拾遺］別　よみ人しらず「まてむともなきれかなふ衣さとかつりとせぞたゞならぬる［大和物］三「大方もたゞならぬるみる月のまへまへにまづるとおりへぞ［末ツム］七　いづちゆゑんとたゞすべいまもかた方あまごおとにつぬくうぐひすり［アヵヒ］四十四　たゞならぬうきとおもへるをいと哀にまぎてつえせて

たゝら

［神代紀］上ノ四十二　蹈鞴此云多々羅［堀太］不會衣　仲実「たゝらたくさけべ猿ぢもまくあゆゑふさけせぬ人やあふゆる

たゝらめのはな

［花鳥餘情］政事要略衛門府風俗哥云　多々良女の花の如いねりこのむやけしむらさきこのむや［末ツム］廿二　たゞ梅の花のいろのこと

ガラス使用

たゞらまと　今爛　たゞる　ノ下ニ出ス

たゝむ　○山岩石　又波ニモイフ　夫木　八モ波ニヨセテイヘリ　夫　廿六　新六　三　信実「山さかしまきびしくたゝむ岩角に年経ぬる道の滝の糸ある　夫　廿四　涌出品　西行「夏山の木陰だにこそきこえ絶えぬるたゝみのさゞろのうへぞ　同　廿二　集　法性寺入道関白「九重にたゝめる雲のまよりもあく月の影のかゝるゝる　同　十六　慈鎮「峯の白雪はだれもそれら中にたまべ春までたゝむ衣手の　同　十三　家集　西行「岸ちるれゝあらし此せとに風ふけば氷の上にたゝむ白波　拾玉　四「大井川波の外なるみちずやたゝみのこせるみちのなるらん　帚　十六　もくよろぬ山のけしきまぶしく世に立てたゝみつし　兼名　雅兼卿記曰　云々　金岡以墨疊山十五重廣高、五重也　夫　八　家集　西行「時雨るゝ霧の波のうへにこゝたゝみおく志賀のうら風　同　廿七　襌貫野「浪あらき衣の浦の袖貝をあるひに風のたゝみおくかな　紀家　廿七　ひたよせ春風ののとり　ようてごとくとたゝみよせて　夫藤　三　屛風もそのさあしたゝ中庭にたるに　同　七　風吹通せとぞたゝみひろげてふれ。（左ヲタヽミテ右ヲヒラキこ）　古事談　三　脱袈裟衣等タヽミテ其上ニ廳宣ヲ置テ

たゞむき　和名　十三　太々無岐　一云宇天　神紀　三　臂　古事記　上　廿一　斯路岐多陀牟岐　仁徳紀　廿五　ちー於朋泥泥士漏能辞漏多娜武枳（オホネネジロノシロタダムキ）

たんつゑ　○東月ヲイフ　後撰　三　恋んごとなきかたよりて遠き所にはなりてたゞん月だにうつるるまつらのかへる　釜えとのひてはるまゆきたえりつらしゝる　拾遺　恋一　葉盛　力子モリ　廿　あるかほかさゐぬぞうきるみどり子のたゞん月にもあへりとやもとる

たゞうど　（タダビト）只人ノ下ニ附ス

たゝうがみ　江次才　一ノ五十　重明親王記云暫願来路此事問中故二条殿被仰云若疑懐中扇疊紙落有砂跡歟　狭衣　二ノ上　大将女二ノ宮ニアヒ玉ヒテタヽウ紙落レ玉ヘルコトアリソコニタヽウ紙トモ又フトコロ紙トモアリ。契説カ　中務　七　女たゝうがみにいとうあらぬさまにかきて　さころも　五ノ上　たゝうがみのやうなるひなど

あたる塩凡帳のめどふおちたりけり　拾　三ノ廿七　みちの国紙のたゝう紙のゆるやかなるが見ゆくしうかねゝせどこしあわひうつまたるも本丁ののとにちりかひたる　同　八ノ十七　内の法物見つる日云々　たゝう紙にかさねておこせてる状なればさ月　云々　発心集　八ノ六　名扇たゝう紙やうのものをむけあまねくくばりけり

○　附　たゝんがみ　後撰　雑別　たゝん紙にかきて

たゞの　○皆常ナミノ事又何々ト名ヅクベキ物ニムカヘテイヘリ　○俗語ニモシカニ　拾　九ノ七（あさり良かれる　あの日に）碁をおふさむらうとありぞふくつけさは又そこのふかくあをふことをさまで目もみくしておかくもあいいたるもうれしからくやあさりくにおそい只の猪よりへあつかうなり　同　十ノ十八　たゞの紙のいと白うきよらなるよみ筆あらたあたしきちの国紙なぞえつまば　花びら　下ノ卅二　仲たゞ笙（サウ）の笛行政ゝでの笛　仲れひちりきを　同　下ノ九　式部卿の宮さうの法笛太のふでたゞの法笛ひちりきふ吹合せて。○是ハ横笛をいふか　禁秘抄　下六　爾ニ云　衣　唐衣体也結申但近代只衣結中着唐衣ニ　[illegible]　十　その世の人ゝ八四あくまでの人あまでをむしめなりてせくつきあふ　栄花木綿四手　三　法めのとうぞやぶん方あく曾したゞの人などおもともあらぬわざを　枕　十ノ九　まての女房女官ふらふ人の法めのとのなりたる　云々

たゞ衣　たゞ人　別ニ出ス

たく　○門戸又手ナドニイフ　夫　十七　後京極「清水ゆる谷のとぼそもうちとけて氷をたゝく峯の松風　うつせみ　三　かうしたゝきのゝありてゐりぬ　同　七ノ卅　いぶかる妻戸をたゝきている　拾遺　恋三　よみ人しらず「たゝくさて宿の妻戸をあけたらば人も枕のくひなりけり　イセモ　卅四段　此戸あけたまへとたゝきけれど　夕顔　七　まてゝけば山彦のこたへするはとうるさし　同　廿六　くゐなはたゝくのへだて　かげろふ　十六　かうしつまどなどおたゝくるうづくらんことうれしかるべきを　後撰　夏　夕月「夏の夜もうくてねがたきあけるはしたゝくくひなのまもみゆるせば　後拾　雑様　夜寒「いつりしほのたまかわおくるとひびしごと状様もそれよ　帚　四六　おびくおたゝうせるども世にふぞそるまでをそく　古事記　上　廿三　あらたゞむき曽陀多岐（ソダタキ）多々岐麻那賀理（タタキマナガリ）

ガラス使用

たゝふ 【堀太】春雨 国信「ふりかゝる雪にしほやたゝふらんしろたへのあまのさころも【山家集】よ浅匝人の水やたゝふらんもえわたりまにふかくおもへるを【夫】十四 春上 題不知 大臣「きよみ川出る湊にたえてへせられてたゝふ浦の入海【万】十三ノ廿八 もち月の多田波思なんと五戸れのよミこのミ上云【新撰萬陽池泉制和歌序】四方の浦をんふ海この世あへる池の名をもたゝへしめあへる我法絶せさせんとて

たゞこと 【古今】序 たゞことな

たゞと 【竹トリ】十二オ かぐや姫例も身我あまきずりぞひてまども（流布本へ）ひとつも。（同図）ことるりて只るやふも待らざりのまぐくなり なげくるあるべし

たゞあり 。ツダス 体也 【こてふ】十三 さらいくゞる中ひあくしなどりこそたゞありにあらざりつる方のミ入見へあひかくまゝへのありさま我えまりあふまにいとさまようろよび。ぐふけさうるぞもんかしく あそつけあぢきなべ【中ふぎり】十二 たゞあれあそつけ人たゞ孫ざりしねぐえのうしなを

たゞざめ 【拾】ノ秋引テオハセシガ火影アラハナレバ引ヤミテタヾニモタセ玉フ。俗ノタヾ居ルトイフ言ヒ上カズニタヾソ心之【九】ノ廿二 常平地ヲアリクヤウニノ心之【拾】五ノ十一 このあかたるぶあなゐをまへ琵琶ノ佐寒我たゞざめにゆけば せあへり【同】九ノ廿二 沢水もぐふたゞひと青く見え玉たるに上ろつまあく草あひちずまてる我みがくとたゞざめにゆけば

たゞきぬ 【たゞのきぬ】巳ニ出ス。是ハ唐衣ニムカヘテ常ノ衣ヲイフ 此【アテ宮】ノ八 拾【アゲマキ】細流ノ説ノ如キカ【アテ宮】二 からあやたゞきぬ ひろうません皆あう色【あげまき】罡五 いとれかくもえまり集めあへざりつるゆやあんたゞる衣 あやうあどあさゆへいまかくしつ【細流】染モ子リモセザルナリ

たゝみ 畳 【[illegible]紀】其明朝天陰雨降云々 或戴畳甃臥深泥或着筵落入堀川【釈氏要覧】僧祇云若在道行得長畳中畳安衣嚢中至本處當敷而坐【允恭紀】十二 和餓勢故餓瀰由瓊太等鳥許曽多弥等異絆梅和餓兎摩烏由梅【万】十六ノ廿五 其皮我たゝみたさしてやへてこと【同】十四ノ廿七 みこもへぞてあまみせかよひせぐうのしぞまあひさてなし我【スマ】十 たゝみをひたくうしけり【枕】二十六 いとつやうろ我あえしちらうあぎやかなるたゝひとひらかりそめにうちしきて【同】八ノ二 いやしげなる松はこそいつもむしろのたゝみ【同】十ノ十九 まうらゐのまえれむしろをうひろかうがぞそにて【同】四ノ廿一 二日ばかりありてあれこれきぬきたる男の来我かそきそくこまよひのうへまうとたまべこさつのふ纏との車のさるうぞもかうらゐるどとりきようろう【今物語】御月へいうぐひべきとのひたりられば女房迄そなくさりあへば内よりまろ我お出したりける【宇治拾】上ノ四 やぞそまんひとまゑなど本えて【同】九ノ五 たゝみあつうたゝおえて【清輔尚歯会記】高麗そしのたゝみ四帖はえそしの高三帖をあえて △考るにふるくたゝみとのへる八今のうすべりなる（はへ有） かうらいへりのたゝみのむうあをそしまやうめへ星の紋ひざやらふくうつうまうらえたる引ひろげてあれば【もとあきら】錦のそしきといへるみがくこまなしろせぬたり【玉の台】四 それよりゆふべてみしきらゝこうさねて【法】もき十九末丁まろい紋のもやへとかとこまゝ追のこりるうぬへ八るう【クラ手中】五十 へどミまいとんうにとまさりむうきさのうつゝけてうらのきのちしき【枕】六ノ廿五 屏風云ゝてみるどそふとこてかくとこまれば【千初枝】三ノ十二 そとの外に経営あらくよみむしろたゝまざうりのぐしてあえたり

たゝみ 【和名】細螺 之太々美 後撰 書入レ タヽミハ海螺のちいさき物之【同】十ノ九 蠡 和名 阿倍毛乃 シタヽミトイフコヲ隠セルカ【後撰】雑一 塩あるなし（日本忠見集塩ノナカリケル夜トアリ イマハ誤リ之）たゝみあへてと作りられど忠見「塩なくてもからき世中にいかでかはたゝみてミえるらん。追考【万葉】十六ノ言ヲ思ヘバ堪ゑる夜 うるべし【万葉】十六ノ（廿九熊史言シタヽミ）辛塩にもみるうへ

たゝみ 【タヽム】ノ条ヘ出ス **たゝみひろげ** **たゝみよそ** **おしたゝまる** ノ類モ

たゞし 但 【後カゲ】上ノ廿 云 たゞし今の後女子のために子ぢうえ家をとるらん物をもまんとのあひて【順】廿九 判ノ詞 ゐなでしこのこ人いづまもくいとよくしそせ人めりてし 判くあ「秋もあ君春をつん世ぐなぐのら うちかひあるあそぶるることまべたるもをこし 負にき也

たゞしえ 正 【土佐日記】此人国に必しもいひつかふ物にもあらざなりくなるぞたゞしえやうゆそうめのえるむけしる

ガラス使用

れ

〔今物語〕十二 当時たゞしかるべきおぼえある中にしづまりたる侍るとぞ

たゞびと

。ナホ人ト同ジ平人常人之 スベテタヾウドト音便ニイフカ 〔神代紀〕下十九 殆非常之人（タヾヒトナラズ） 〔竹取〕十三 きみんことふかしとてぞたゞ人にはあらず わらはしけれどことなりあひなば世のくるしびあひあひぬべかりけり 〔伊勢〕三段 二条の后のまだ帝にもつかうまつりたまはでたゞ人にて 〔若紫〕八 いとなやましげによみゐたる尼君たゞ人と見えず 〔スマ〕十二 又の中へのたゞうどにおぼしくだしてことひろきかどくしきやうにふと参りあへる おぼし除けるほどの事なれ

たゞす

糺 〔松〕九十六「いのりてもいのちをよそにするものをそらに糺の神なかりせば 〔夫〕十五 後成「人の為に糺のやしろのぶこそあれ 置もそらに知るらん 〔宇津保〕九「国つ神そらにしるところあるならばなぞかりごとまつやたゞさん 〔新古〕雑下（かへりみればかくはかりうき世なれどさかしきにこそ）

車より紀の衣をおしなべたるを検非違使のたゞさんとしければ云々 右衛門内匠「大そらにてるひのいろをいさめても天の下にはまたしらぬかな

〔馬内侍集〕「いのりくるおもひのちかごとたてゞたゞすの神もあるらん

たゞす

たゞよふ

〔神代紀〕下 其 彷徨（タヾヨフ） 〔古今〕秋下 うつせみの木のうれかげにたゞよひてよどむ 〔宇治〕十三 そのまゝにたゞよひのこり みちらんとのひあへり 〔同〕十八 旅のたゞよひありくもめづらしくこそなにならんさもまたそ 〔若紫〕六 さそひてもよそに

たゞよはし

〔若紫〕二 山の桜をはなさそひてこゝ庭のたゞよはしもあるべし 〔浮舟〕十六 例ならずたゞる月日星の光の見えしそのたゞよはしありとこの世の人おぼろくあまたおはしくて 〔相ツボ〕廿二 かとのかたちよし山のたゞよはひ真白に見るは 〔さらゐ〕六 庵のたゞよはしもかへりみる方にうけられたりありさまなり 〔帚〕十 あやしけるかしのみのたゞよはしもそよしておしはるの目にも耳のたゞよはしもひとで法ありうちくやうなり 〔あづま〕里三 いとしけよのつねの人げちかく親せらるとみどりひつくのはてだよはしもまえるもとまゐるへ

たま

誰 〔いせ物〕九十九段 云々 後にたまと知りにけり 〔万〕十五 一十三「あかず月の光の里のいのちのみぎりいざ我が妹を

玉ぞみがかむ 〔若紫〕四十九 かく人むかへなる里ときゝてぞかしたまをつからん 〔東や〕廿六 かくおもひてたまぞかねのさ こそありたま 〔古今〕哀三 よしこしきれ「思ふどちひとりかゞるありあふべき玉にもあそく夜衣きえ 〔さらゐ〕五十三 くさの紙のまゝうへひきしたる法の中の山にありけり 云々 あたらしき玉がさきしたとうるものゝさゝりなみ 〔後拾〕哀傷 左衛門一「山里にちりそぬべき花の玉に入りてくべきまつく 〔後撰〕秋上 よしのびこそとらひし枝やもぬる秋の世に玉すゝ虫ぞまつのうちにし 〔新後〕春上 後拾「あまのきりぎりすと世は山里にかゝる麦の見せてきまし 〔後撰〕秋上「秋の世にきやうどる人おのやくもたまをまつむしこそまるらん

たまえぐり

（タムグ、ラ井） 〔東やが〕一十七 えきざみにはちかりにつぎる玉は後ぞうかにかはあらん 〔あさがほ〕廿二 たまえくりてう見えと仕れとのあらむいろですさまでいと空音は

たまとのゝ

〔狭衣〕一上四十九 後とのふくざるもとこをしまひつらん

附 たまてあそぶるひ

〔姫〕十四 世の中に後いとふらんあへ人のやくはまさんするこそ宵へこれ後てよりのくるひかられ 人はさ思ふとまたれるらん

たまとらく

。誰ト定メタルナキ心也 秋にたまとゝうかくてんぞ待るゝ 〔同〕春上 後冷泉院内侍「法すにくる人も後とさきのりけりのあまし世のりさかれども

たまとらく

たまとあひて

〔後拾〕春下 源兼海「山里にちりそぬ梅の花

たまのひとゝ

〔栄花〕花の衣 五 かしまりていみじうあはれなる人ざまは大将殿のちかごとさるかたの人かおろかに見え給ふるはにあやしうおぼえん又とおぼしのあひたる

たまとらく

たまてあ たまの

〔若ミラ〕七十七 のちかしうちの後もく出でかしる 〔同〕廿八 あやうく見ひのかにもとあるまでたまもく 〔宇津保〕中ノ七十三 祖 さらぬだにもめぐりまことにらひにあるべきまゝあるをまつと思へるん 皆イカナルドノヨナト解スレバ叶エ安シ

たまもく

ともたまもくおちらるゝは深窓をれをまつ 是ハヒトリノ如クドチラニテモ一人ヲ先ノ心ト也エ

そ　つ

たまさかにて 契云 行出ノたまさかにて之半部ニ不ドシ 古今 恋下（義あるまじの詞花）人知れずこそひそかに風のおとにぞ
たまさかにてのみ待つるなかに 六帖 六ノ下 たまさかにあひて来ものゆく もちぬるにまちし積もりつ
ろひなり 栄花山 十三 内にもたまさかにて まして後く年ごろもさりませなるびにこそはおもふわびでありなむ

たそ 誰ぞ 彼 花宴 五 あなむつけたこは誰そとのまへ 後拾 雑二 大式成章 人の局をおびてたゝずみけるにたそ
とゝひはべりければ

たそがれ 白文 一ノ十三 語別至昏黒（タソカレニ） 夕貝 七「よりてこそそれかともみめたそがれにほのぐ見つる花の夕顔」 同 十四
たそがれ時のそらおぼろなり 松風 十三 たそがれ時はおぼつかなりし 蜻蛉 五 たそがれのおぼつかなきに 万葉集 五 たそがれ迄

たつ 裁 夫 七 恋（よるべ あらん）「夏衣たちきるものをおほ坂の関の清水のさむくも有かな」 古今 秋下 忠岑「錦たつひのもむろの山なれ杖の
の月かげめぐりあひて又たちきてるあらかきかる 同 七 定家「わがもみてぞ
おりふしたちきるなきこそあれ ▲裁八 他ヨリノ約自ノ約ニアラス故ニ タテル 多キ中ノ約之 タツル ノ約ナレ 立（タノ名）建ハ自ニハ タテル
他ヨリハ タツル より 帚 廿一 そのたゞなるのたちぬる方なのぞみて うちちらりなぞありまし よもぎふ 六十五 たちぬひなど
せぬ

たつ 建 家堂ナドノコト サカキ 四十四 こゝにたてられたる法堂の 夫 十九 定家「堂たてしきしおもひある菱原の
おびきそこのおもひやるる 同 廿二 将ハ 信実「あのづからちのこりたる門ぞしらむ家のそでたて
みかさはし

たつ 戸障子 屏風ナドニ云 木丁 帚 廿九 本丁の障子口にたてて えせミ 三 ひきたてたてたる屏風ども ヲトメ 廿八 屏風など
たてて 花宴 五 やをらのぼりておろして戸もおしたてつ 紅葉賀 廿七 引きそへたる屏風のもと
によりて

たつ 車馬ニイフ カゲロフ 四十六 広馬のはなやたゝせあひつぞくらせあへる えせミ 三 ひぢのつま戸にたてなまりく
ひまもなくたちあつまりたるさきをやくひたつきてたちまどふも

たつ 常ニ立ナリ 常ニ厨キノ 万 十ノ六「秋さればかりびこぞゆる立田山立ても居ても君をしぞ思ふ」 四段 さちてそゐて
立迄で 宇治 十「つゝめども立ゐにかるゝかたちのひくかすみてちあへ迄べ 夕貝 十五 うちやすらひてさる
に入りたまへとのひて 同 十六 立ゐくもまてさちろぐまるる迄べ 古今 ハイ「こひしきにおりくもここそあかときけそ
迄されどももえんちまる

たつ 其座ヲ退 クライフ 若紫 十二 まてちなひね 同 四十五 ありてちね ヲトメ 丸道なく覚えてこそうびぞ 後拾遺 恋下 花の家
難たずくをしたくるゆずる

たつ 立。名ノタツ 後撰 哀三 紀内親王「吾名はもちるのかみなにたちぬともあなし法の籬かる
あれでさびしきことにこそなきこしみなけ 拾遺 哀二 女ハ同ジ「思ふる

たつ 千載 哀四 俊成「あはれのきるまかの市にたつ民もたえぬおもひに身をやかへてん 古今 雑上 寛弘 ニ そろと
たゞのそでる川辺をさそく風によせてくえぬ浪かとぞみる 夫 十七 和泉式部集 さみのぼりくろにおるもの
川浪にのそぞ立あるをるも みまときへまゝれの一こうわひそん 好忠 卉月初「瀬ときたてる五月の沢のあやめぐさよそにかへ人のひくろ
ときぞみる 新勅 賀 八ツ聖山にかすみたつ木 前関白 千載 夏 兼経「五月やまこゑたる山にかすみたちこそりのとぞ
人にまつるゝ 夫 十二 忠度「まそみ山の尾にかすみのまずてのそきましてもぬれば袖かる 同 十二 判者俊成 朗光法師「おもち
男のいつさの山にかすみたてまつのやつまなるらん 同 法綸「あけぬに木きなみのあけにかすみはつるの也くへも
見えけらやなく 同 廿六 光房「ある山せきかゝのにかすみは秋よりさえのふれそやなくらん 同 日陰 季光「ちる
菱やはのそくやまちのちまるくあきにたつかすみのきよきあらんらん 後拾 秋上 花盛霞 鳥羽院御製「わかひかるひかれこそ
またさきらしのたつみもせぬ花のみさか

たつ 古今序 上にたゝんとかく

たつ ○顔立（顔ノ立ナリ） 風雅 神祇 後西園寺入道 「うごきなきいつきの宮もたてしちかひぞ君がまもりも」 うつほ 廿一 いなみしえは歌どもおほくたてて

たつ ○佐ニ子（ハルさ） 栄花 さまざま 一 かくて三かど一条東三条にて世のひめ宮へ 梅壺の女御后にたてせ給ふ 日光山 七 三月十日中まちあそびとて おほきおとゞのそだちさせ給ふ

たつ ○草木（ニ子） 神代紀 下二 天稚彦門前所植（タテル）湯津杜木（ユツカツラノ）之杪（スヱ） 古今 春上 そこにたてりける梅の花をおりてよめる 秋 古今（ハイタイ） 遍昭 「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひと時」 新撰 上廿 「[illegible]まで つもれるよゝやきみが代のひかりにちりくもれてるらん」 新古 秋上 寂蓮 「さびしさはその色としもなかりけりまきたつ山の秋の夕ぐれ」 後撰 春下 遍昭 「をりつればたぶさにけがるたてながら三世の仏に花たてまつる」

たつ ○毛ニイフ 文粋 五ノ廿八 返随身表 身毛皆竪（タツ） 堀河 俊頼 「よとのねの琴柏にむせぶ[illegible]あらしにや[illegible]」

たつ ○旅ニタツ カリ あるじ 四十 たちゆく暁は[illegible]おもひて 云々 「わかれてたつもうらめしき浦波の名残のうへに思ひ[illegible]」 古今 大伴黒主 「あまそゝぎ[illegible]がうちのよにたつぞ[illegible]」 同 離別 躬恒 「[illegible]を雲のたちうへ後の何地せん」 いせも 六十九段 あけば尾張国へたちなんとすれば

たつ ○煙ニイフ ○霧 ○雲 ○霞 新勅 秋上 在良 「天の河星合のそらもたちのぼる夕べぞそよその秋風」 いせも 八段 あさまのたけに煙のたつを見て 後撰 羅旅 風体抄 「秋霧の[illegible]とのみたちこめて[illegible]」 吹飯川の関 後撰 秋中 是則 「秋風[illegible]たちこめて[illegible]」 万 三ノ十九 「あまの川[illegible]たつ霧のたちゐ[illegible]」 同 春上 貫之 山桜[illegible]春 新古今 秋下 むらさめの露もまだひぬ[illegible]

たつ ○上ニダツ 下ニダツノダツ同意カ 新古今 五 「まきの葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ」 [illegible]

たつ ○波ニイフ 万 四 吉 「みなとかぜ[illegible]波たちてもゐて哉」 よする君 いせも 七段 波のいと白くたつを見て 千載 恋二 泰実 「わたつみの[illegible]たちくる波にあへずや せん」

たつ 後拾 雑一 為経 「ながらへてあとづまでせでこのそでたち月日ぞかへりきにける」 拾 恋一 兼盛 「あ[illegible]」 後撰 恋三 遠き所に侍りてたゞ人月にもあへどさやかに[illegible] 堀河百首 経信 「あふ坂[illegible]」 新古今 十二 此月ちさとまで宮人も待へ内にもきゝなるほどにつまつげそこぞ 古今 秋上 秋立日よめる 同 秋上 秋立日よめる

たつ ○春秋の来るにいふ 古今 春上 [illegible] 同 秋上 秋立月よめる

たつ 鶴 万 六ノ十三 「[illegible]なればたづぬくもなく[illegible]」 後撰 恋四 「あし[illegible]たづの[illegible]」 新古今 十三 沢みにたづのなく 夫木 「[illegible]」 たづのなくねを[illegible]沢をちかみ[illegible]ばかり[illegible]たづなくとつげるへ

たつ ○奉ルノ略 元日宴 経信 千五百番歌合 「九重にこそ[illegible]松がえたちならびむつるゝをこそ[illegible]」 六百番歌合 [illegible] 明日奉るを略してたつるといふ 此例日本紀の訓集まゝあまた見えたりたつるといへるは奉貢也

だつ 帚 無 そのこだつ物 夜嫁 ふるあるのふるちぎだつ物 あげまき 二十四 糸ふかさるべき所に花散りたるを御覧ず又ひさしのきもとさかりあがかゝりたるなりてまたつ

帚 四十 のとあつるゆゑだつさあひさるに 宗ツム 十六 めのとだつたち人々 よもぎふ 十 侍従もかの大弐のあひぞうちくらひつゝ 上 鶴ぞうち人々流せる そこゆえのよ 帚 廿五 ゐなかだつ柴垣して 若紫 十三 小おとぞうちにめしいでて よもぎふ 十三 さるまだ ひどのだつやもなく 椎本 廿八 昔おたちのほかしろくだつ人にならはるうりぬり 若菜 八 よるべのとある[illegible]

だちて侍らひぬ日ほゆんひ給〔重之〕一 道風朝だちていそぎかへりきこえけりとぞ〔うつほ〕上ノ九
ひしまたち并せ給ひし執中もあらぬ朝から〔古今六帖〕廿八 たびくだちてんやまとのそのさへまゐるさまもとせげに
あるかひらうめでたかりける〔椎本〕廿五 何かくだかる山ぶしだちてきこしてんとおぼしに〔拾〕六廿 御修法果てさせ給ふる
法師のやむごとなきをとりて〔とりかへ〕廿二 朝のほだちてあるやう侍りしに〔拾〕六十九 かとさだちたる人のやむごとなき
君びやうにて侍りけるをひにて〔とりかへ〕卅六 観音の院にまゐりてとにかくあまくだちてまうでてあるかひりけるを
〔枕〕三十三 をのこどもの千ぞありけるがあやしきものどもとぞあちたるを桁ぞきてげたるひとこうつくし〔同〕七十九 ねらへ給ぞあちるを
そぞえて〔同〕二十五 志ん阿弥陀そて東のさいだちくるやかりつくるとて〔とりかへ〕十七 風のうちそぞあちてふく夕暮に〔やまぶき〕
十九 えんだちたるしるえまえ人ぞ〔さとき〕十九 そそろぎぶちてのとおかし〔和泉式部〕十七 ひのさとけも妻加へあへやいとうは
らうどうしや

たづかゆみ

〔夫〕卅二 家集 信救法師「つの國にしたつかの白雲白ふるさきのそふえ花とりうゆね見えける
〔万〕十九四十一「手束弓手にとりもちて朝狩に君はたちぬるたなくらの野に

たづかなき

。タヅキナド心同じ
〔續紀〕十七之廿 宣命 拙久多豆何奈伎朕時尓顕自示給礼波
〔まとま〕四十八「たづかなきを并にひとり孫をぞるくくへきさまらへしなをさとひつ〔後拾〕四「思ひ出てよるく

たづぬ

尋

。宣長云スベテトフラフ事ヲ尋ヌルトハイハズ尋ヌトハ先ダチテ行シ人ノ跡ヲトメテ尋ヌルヤウノ意
或ハ早クアリシ事ノ跡ヲトメ求ルヤウノ事ナドニイヘリ尋ノ字ノ義ヲ考ヘテ知ルベシ

月ふる時ふさらきはてゝ出かるし中やたまえん。此哥ニテハ早ク契リ置シ跡ヲタヅ子テ驚カシヤル之〔よもぎふ〕十 世の
うち時かそぬ出ぶきそたづぬるに〔やまぶき〕六 此扇のたづねへ抜あらてえなる哉〔万〕廿ノ六十三「つるひのかげゆきさればひ
てたづねてきさとえその人にもあらん〔蓬生〕三 末摘るけてしもえたづねきてあらば〔夕良〕初 とくらえんとて
五条なる家たづねておもしたり〔帚〕 此のあでしこのちろたく侍りしべいくでたるねんと思ひあつる哉〔かげろふ〕
四十九 糸にかえあやしきふに此きてあるつる出あひて〔帚〕十三 絶ぬせくせあきるて尼ゆものさでたるねとり

たらんも〔いせ物〕上四十 その事のせうたづねまゐりたるおとゞもおとしがまとに〔うつほ〕十七 夫いかでこそ又ちうとたづねあるべ
給ひし〔帚〕四十八 ねせうのこそあまり小君えたづねあるべし〔かげろふ〕十七 御ありさま九たづねさせむの人〔同〕六十九 おりたちてたづ
ねあまえんもかくえすし かたき人のひきさき〔若紫〕生 玉綱 文ぞつりくまて いざことその人かの人にせきそのさへ見る以時事にて
〔相模〕七十 おそれをとらん所にたづねまゐりてとねがひあひしまゐらせにやつひふせせあひねなべし〔かげろふ〕四十三 たまさかに
たづねよせて〔夕良〕九 粉ひとひとつれたづねまゐらでいさうぐしかりける〔帚〕廿 為ねはずかさえとしもかく遂ぬびむと〔千載〕
悲三 あねまれ失ひ給時昌ちのはばそうにいうに三條の院のたゞしへおはしてたづぬる時をあるかえもつ〔新古〕能ひとり鳥嘆けるとほりを
たづね失ひてはえこのいまそやの方へくるとて〔夫〕廿三 家集 定家 見しけもせいにたづねおもうこいどとよひるそれくたの小野の
こがらしの夕〔後撰〕悲二 悲〔古今〕「中門の山下あけくれて鳥の乃たづねてこうつ鶴と云べしや〔万〕九 あまさかるつたへくらた
ねせけれど〔古今〕悲五 ほ「三輪の山いかにまちみん年ふともたづぬる人もあらじと思へば〔同〕雑上 たゞ房「君がおもひ
あきらの浜にみをくたづのたづねくるとぞなりとぞふきて〔新古〕春上 拾子内親王「名中しおもたのたよりにことと
よせてたづねやせましみよしの山〔拾遺〕秋 為む「おぼつかないづこなるらん虫の音をたづねば宿のかやこえてまいえん
〔山家集〕「かくぎに妻のさかりにかりたづね給ふべき五月ぞつづらし〔金葉〕冬 成元「かくぎに妻のさかりに郭の山の沼
のとまでたづねしまはさとよひ哉〔この〕

たつかぬき

〔新撰朝集〕下ノ九「前かゝる浜やたうえ志渡に行く鶴のたつゝきあひしたり

たつたがは

立田川

〔古〕秋下 读人不知「神なびのみむろの山をあきゆけば錦たちきる心地こそすれ」山城川たつた川とのなそう〔あるひ〕とぞ〔源氏之集〕九
幸さちるりけ生。宣長が説にこのたつた川は津國嶋上郡にて山城の歌にはあらず。此山は山城國乙訓郡にて是
も山城のあたりく大和のたつた川とは別也

たつくし

〔金葉集〕上「夕されなたつくしえは時きよるる君を大和にまるほどなしく〔万〕四十八「くさらへの入りほにあ
さるあしたづのあるとづくしなるにして〔同〕四十七「夕闇ハ路多豆多頭四月まちて

たづくみ ○手皷（タヅヽミ）ガ田皷（タヅヽミ）ガ 〔蒙求の哥〕末たづゝみどもうちて苗のかり笛ふく

たづち 田器 〔[illegible]〕（西園寺入道大政大臣）末庭 おもびておちずむろゐときつゆせへつまる田づらに出りまかし物を 〔夫〕十五 千五百 「たつちをもつゝやの田のこもをまろびぬるやわびしのをしかするらん 〔万〕九ノ十七 「我ぬ外に七月をくまで立田彦風の神を風にちらすなる 〔神名帳〕大和國平群郡龍田比古龍田比女神社二社 〔祝詞式〕龍田風神祭アリ

たつたひこ ○風ヲ司ル神ノ たつたひこは姫神くらう 工ハ秋ヲ司る神のよしくなり 〔古今〕秋下 「立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさとちるらめ 〔貫之集〕上十 「もみぢのぬさもちるか秋そつるたつた姫こそかへるべらなれ

たつたひめ 〔夫木〕四 家照 「立田姫花のおもかげまてやもむらさきはつゝみ べさくに姫との秋ぞそむる神ぞたつた姫ともいふかも賀茂たつた姫はいとあやしくなりけるがごとき秋の事は ○此哥判者清輔朝臣基の説ぞそむる神をよむはよろしとこそ候はめ「仕まへと云云

たづのむらさき 〔たづのむら雲〕六 「みてあるに松の林にこよひ手ちまだこませよたつのむらさきも我よりかのきまのその 〔貫之集〕上ノ十八 〔四月〕 「松かげ かのまろもるたづのむらさきもそこのかみのひとよりてひ我をまもらせなるれ

たつのうま 龍馬 〔夫〕廿二 実俊 「山さかふむろのそらけさにたつの馬ぞも今こえてしる

たつのこま 龍駒 〔夫〕廿七 「たつのこまも今もえてよるにはよしなるの頭に汲てこんかも

たづのき 田豆木 〔堀次〕首 仲実 「田豆の木にひかれておつる若葉にも時あるかかのまぢかけり

たつのみやひめ 龍宮媛 〔夫〕廿四 仲正家集 「龍の宮あまの羽衣もる浪にたつのみやひめかよひし物を

たつのとゆふ 〔長秋詠藻〕下 長谷 「すなをてみがきよにこそとりのうけし宝かもひたつのみやまふちかずみて

たつくり 〔夫〕廿三 素覚法師 「抹の浮きさらしけたるる雛りにこそはあやまざりけむ

たつま 〔大鏡〕五ノ九 ほどものいと興ありしきをひきた群をば太方のあまたよをあげよたまたま大群にかぐるはじめとかう

たづさふ ○携 又タヅサハル心トヨリ 〔万〕九ノ十八 「うまさけの神の社のみわの人のこえあるる岸にたづさはり二人入居て 〔同〕四年 大もみ八國もわかぬらつれのもとに携ふ伯父のとびてぞゆく 〔夫〕廿二 土御門内大臣男 山鳩の枝にかへたづさひぬる坂のみやまよりあらせよ 〔万〕二ノ九 たづさふ人しぞかし 人ぞ十一 〔同〕同 廿二 袖たつさはり 〔六帖〕五段 ふりてたちかへし鳩のたつさひくるはめぐりやるあるも 〔大九〕下ノ五 〔万〕十 〔赤人〕〔拾〕「人々といふ時の手との携げ くさものもと我をしたづさへりみれば 〔散木〕上ノ廿九 糸と竹との手をたくさへ此ほどにたづさへるぬゆくむしろにぬきてのぞえやさせゆひ 〔宇治拾〕十ノ九 弓矢にたづさへる物語しけるがゆゑに思ふもかりぬるもとまれ 〔和泉式部〕上 「あまのかるもくずのはたにたづさはるをよとみてしにあるる秋すきぞ

たづな ○（仙覚抄六 タヅキハ タヨリナリトアリ）〔万〕廿八ノ廿八 「こゝらはかくまでもきと人をいふとのべうとやらんたづなをしるそ 〔大鏡〕八 世の安まりもこゝろもはべるを 〔古今〕春上 よみ人しらず 〔猿丸〕十一 「遠近のたつきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな 〔蜻蛉〕十五 いとたづきなき心地すれば おもいにも 〔万〕四ノ十 「むらひろめてくるとひとくもあらぬつきまのこにたちかへれたづきもしらず 〔夕貝〕四十一 此人のたづきぞしらず思ふにたえけつべきこともあるをあるひ 廿八 又世のことをもなくなりぬればたづきのしきさへしほとりねがへしよう 〔万〕十八ノ廿六 「うつゝとの夢もあらげたりいつもすべのたづきのつかるるあり 〔東や〕六十一 かしこにもおやすくてたづきのあなんとせよ其のあや 〔夫〕五 「たづきのうきさへ山のよぶにあるまつぶひとつのみなこみありける 〔帚〕六 世にふるたつきもなく時世ありけりて 〔万〕十ノ八 「あらかしのかたは路にあるたつきをしらず中しものたつきあらじども

たつき 立木 〔新古〕雜中 西行 「ふるさとのその木のたつきになる鳩の友よぶ声のよごきる夕ぐれ 〔増抄〕立木也

たつくく 〔金槐集〕上ノ廿一 「あかまつたひかるときまての月をきるにたつまかちにむきとびゆるをしまらば

たつき ○斧（ヲノ）イヘ 〔著聞集〕十ノ十二 男のうちにぬぎてたつきそやそげて大殿ちかきりたりあり 〔夫〕廿二 家集 群行 「櫛づくいはかがおくの川上にたつきうつしうけさらまよるる 〔同〕同 後京極 「とりたるひそらの松のさびしき山にたつきのおとのかのぼるかる 〔夫〕廿六 〔新六〕四 為家 「うちでてるたつきの音のかはきをはかひきうぐ道駒世をこそうつ

ガラス使用

るゝ〔拾玉〕五「かゝえだをきりとがらせて千とせふる峯の松たつ花のまにこそ見まほしけれ」〔和名〕十五 鐇 廣刃斧也 和名多都岐

たつき 〔東や〕六十 我らゝちゝしてやゝのたつきのさとのくづるゝいとあやうし

だつし 脱屣 〔御代始鈔〕脱屣といふ文字ハぬぐといふ意也昔虞舜といふ聖人の天位をむさぼり給ふ心のなきことをあらはしたる
ようて位をさるゝ事を敝屣をぬぐがおなじくおもひめぐらし給ふとたとへたるところをぬぎすてたるにおなじ
去ぬる人ふたるべくてふ旧き事につきたる神之

たね 種 〔万〕十四上「かみつけのいかほの沼にうゑこなぎかくこひんとやたねをもとめん」〔蒙求の君〕花ちらハちらもちらなんたねのこそ
いるべし 籾まきてたるゐざらくいるべし〔夫〕五 久安百首「猪のをが小田の苗代あらしくつむもろのたねやきせたるかし」出お裳敏 まてきて侍り 一婦に松大家出
つらん〔同〕同 俊成「秋かりしむろのをしねを思ひ出てはるぞたる井にたねをかへしける」〔後拾〕
のたねつきべし子もちんはなて成えん。（大和山は貞觀太中將を勧修の山なり）〔神代記〕上 先以樹種而下ル〔夫〕五
堀河院百首 国信「いにしへの男が苗代水をまかせて今はたる井にたねおろしける」

たね 胤 〔栄花〕廿三 あるきめでたきわたりにもあやしかやよからぬたゝうちありあやし小人におもひおはしけること

たね 種。上ノ種ト義同じ 〔あづま屋〕卅三 さぞあらぬ守にものゝおもひのくれなゐにいとゞまろきてかれえべらん
〔古今〕序 やまとうたハ人の心をたねとして万の言の葉とぞなれりける〔夫〕廿七 僧正遍照（僧正のもとより）〔新勅〕
「千代ふくいはくなかでぞそ花の山がつのたねとならぬおなか〔あさうひ〕十二 たつせの観音のまゐる人かずしらぬとのなへどれバ
ゆかりも縁にをぶひてこそまちびたかゝめたねはえるハあらず

たねかし 。タネヲヒヤカスナリ 〔夫〕五 歌逢「猪のをが小田のうゑしろにまゐへつむろのたねやきせたるかしつらん」〔同〕同 俊成「秋刈しむろのをしねを思ひ出てまぞたる井にたねかしをとしける」

たねん 他念 〔宇治拾〕四三 念仏ハたねんなくかて死ぬまでバ

たな 店 〔崔豹古今註〕店ハ肆也所以置貨鬻物也〔土佐日記〕やまざきのたなゝる（此たなハ店ありとぞかぶけるべし）〔蒙求の君〕世 これぞそ
たなに女をゝりてあるゝ〔同〕取るにも見てうる△商人の家を出てたなといへるハ古書に例なし

。土佐日記へうつしあやはゞちるべし。古今の君ハ鏡の中といへるハ後人のあれひきしゝふたらば

たな 棚 〔神楽〕十二 宜陽殿の一のたな〔きぶむし〕七 あれハなるほどもてそのくさにあてまかせてあかへるほどまつらひこぞいへき
ゐまゆれたり

たなぐし 〔古今〕廿七 さもそろひえうきたる方ふまいてたちえたなぐし上よろひぞろひたて

たなはし 棚橋 〔万〕十一三 天なるやひとつたなはしいかでかもくらん若草のつまありといはばあしひもそへん〔古〕五四 しばかはしてとくでもつらんあしひもそへむ磯のあしも七重まへのたなはし〔夫〕廿六 旅 信実
「たなはしふめづくかなたるにてよひくしにも知る振る月〔同〕廿一 新葉「いさづらに月見ぞするを引の山のたなはし」

たなと 〔新古今〕十四 かりおもふくなれのちのたなとちるくまへあるによりきぞり
うけて。契云 極出て棚のかに板をそ渡したるといふべし

たなそ 手纏 〔夫〕八 右近大臣房家歌合「久かたの月のかつらのかげいち川風にやしたなそなるゝゝる〔夫〕八 右基「うらひ舟
ちらふたる天然さがくきてまりぞろぬるよハのかげまけ火〔同〕同 弘徽殿女御歌合 恵慶「あまさかるよ川の
たなそハきしにかりこぼれがちなるまがんなる〔後撰〕三 和泉「峯たなそつりのまなるハのうちもへくながれ日あらばくて
空かる

たなばた 。機織女なり棧のまへハ栅なるをゑにきいふと宣長いへり〔古語拾遺〕三 令天棚機姫神
織神衣二〔古事記〕上 阿米那流夜淤登多那婆多能宇那賀世流多麻能美須麻流

云く。おとハ未子をいへり

たなばた 。七月七月に祭ある織女星をいふ〔万〕八三三 ひとゝせにわたるぞくつめと天地のわかちしときゆ月のむちし川にむかひてたつ
〔万葉集〕ひこぼしにゐんたるハ七夕の星の名ゆて上にわけたるとかなゝかゝば籾つめでふ
ふ今の人七夕とかえてたなばたとよむのぞとゆるまで〔月清集〕に一三三をゝのよふもとて秋の夜よなけると
有て身七そ日に「七夕の秋の七月にちかきゆたきのひろねへえそらのけしきハ」とありまかれバ早くより七夕をた

なかきよこそことゝなり〔夫〕十五秋上「いくとせにこゝはましにかよふなるかはらすかくるたなばたの糸〔同〕（後久我大政大臣）「あひみてもなほあかぬ契やむすびおきぬるたなばたの糸〔和名抄〕一ニ 織女 兼名苑注云ーー和名太奈八太豆女 牽牛 爾雅注云ーー一名河鼓 和名比古保之 又以奴加比保之。たなばたつめのつ文字は助語之

〔東三条院五十之合〕たなばたひこぼしあふのよにありて〔後撰〕秋上（よみ人しらず）「なかひるかせとは我ぞなかねべしたなばたつめにあふやかかる〔詞花〕秋（元任）「萩の葉にむすぶ糸をもさゝがにのたなばたにとやまさへひくらん〔古今〕秋上（よみ人しらず）「あまの川もみぢをはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ〔有仁公家歌合〕「思ひやるわれにまさらんたなばたつめのまちつる年を「あかずこゝろまつとおけし時よりもたなばたつめの今やまつらん

たなか 田中 〔堀次〕稲妻（秋仲）「なるみや田中の里も稲妻のやどるかげはたのみてぞふる

たなた 棚田

たなれ 手馴 。手ナレ 手ナレ 通ジテイヘルカ〔好忠集〕くゝ〔夫木〕三十カケルハてなれより〔好忠〕二月終〔夫木〕三「春がひのたなれの駒のもよりもとちてん岡部のをざゝなへぬとるてば〔拾遺家集〕十三「君しらでたなれの駒の弓のかへりくるうも〔夫〕廿三さるまじきたなれの駒のあるうちとも〔詞花〕雑上（俊雅母）「夕ま方にさのゝ舟橋わたしつゝたなれの駒の弓のかへりくるうも〔夫〕廿三（六条定家）「むかしきくそのかたなれの駒みらば夏になれぬてねをもたてまし〔同〕十八（権僧正永縁）「さてやへてたてまつるうまの手なれぬるかこの人ぞゆく〔後撰〕恋二（小町姉）「つまご門の一むらすゝき手なれぬる弓も手なれのきぬるかな

たなとこ 〔神紀〕下廿六 掌（タナソコ）

たなつさ 棚ッ田〔夫〕十二（為家）「たなつ田の由に会ひのつき田ノ路てあのぞもるに小なりぬべきかな

たなつもの 〔寛宴〕「うけもちの神のもちるいつくさのたなつものぞとよりゐしる〔夫〕廿（正三位大貳倫兼仲々）「いつくさのあひざまたなつもりの池田の里に雲ぞなりつ〔神紀〕上（六十）水田種子（タナツモノ）〔夫〕卅〔堀太〕（百首 秋仲）「たなつものまもるその末ぞつかさ子どもそとものの小田にくさあひろえん

たななしをぶね 〔万〕一（九五）「いづくにか舟はてすらん安礼の崎こぎたみゆきし棚無小舟〔万〕三（十九）〔古今〕大哥所「しはつ山うちいでゝ見ればかさゆひの島こぎかくる棚無小舟〔いせも〕九十二段「あしべこぐたななし小舟いくそたびゆきかへるらん知る人もなみ〔古今〕恋四（よみ人しらず）「堀江こぐたななし小舟こぎかへりおなじ人にや恋ひわたりなん〔散木〕中（四十三恋）「雨はれにこぐ棚無小舟入江までこがるゝとまをさすりがちなり〔夫〕十六（為家内侍）「こぎかへる棚なし小舟なをぞうき難波のあしのはのいろのもとむれ。契沖云ちひさきふねにふなだなといふものなきをいふ。大きなる舟のたなのごとくのやうに板をうち付たるなり

たなうら 〔タナゴコロ〕母乞そいぶかしのよろづ莖葉の末にかさんとたなうらの内にこがねの大殿をつくらんとぞいひしたなごゝろのまゝにたゞいとよはひのかねどもる〔神代紀〕上（四十五）右掌（タナウラ）

たなゐ 〔堀川百首〕俊頼云注 たなゐハ種ヲヒタシテオク井ニハシラバたなゐ池トモイフ。其種ヲツケテオクヲ種方ストイフニ又種こヒトモイフ。貞徳説 なるゐト云ハ田ノ中ノ井ノ中畧ノ詞〔拾遺〕恋一（実方）「まだたねへたなゐの清水ぬるめれど秋のきやらんさてあせむやと〔堀太〕〔夫〕五（俊頼）「秋くれむろのきしねぞひさしくまでたなゐにかれをかへる〔同〕月〔堀川太〕（国信）「御の田がし萬代がよをあはせて今ぞたなゐに種おろしつる〔夫〕廿六（返る後）（長雅）「袖ひらくたなゐのいけのいよいよもるがまにざるらん〔続古〕恋五（兼内侍）「つきとまりぬばなりけりたなゐの清水いつかあさくやらんあきたりしなるゐの清水袖ひぬるとも

たなびく （ウスラカニナビク） 〔神代紀〕上（ニ）清陽者薄靡（タナビキテ）而為天〔万〕四（五十九）「ひさかたの雲たなびくもみもるうらもかずらくらん〔同〕三（十五）小山にたなびく雲の〔後撰〕春上（貫之）「春霞たなびきにけり久方の月の桂もはなやさくらん〔新古〕秋上（顕輔）「秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月のかげのさやけさ〔古今〕恋四（よみ人しらず）〔いせも〕百十三段「あしたなびくあまの塩やくけふりの風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり〔あつし〕（卅八）塩やくきふなり〔拾遺〕別（よみ人しらず）「たつまあてりが恋をまたばく白雲のたなびく山か

ら

ふやこもらん　散木　上六十四「たえまなのかけひのきりへたるびけどのどかにさる屋府の翁　同　月分　堀後度　夫　俊頼「あは雪もまだふる年のたるびけぐろはどけせるまゝとぞ見る　古今　大哥所　今への山ちゝけとべ春へのまとゝにさきびれ

だらに　陀羅尼　翻訳名義集　五十二　大論秦言能持集種々善法能持令不散不失　つれ〳〵草　九十　くうつれて　だらによみくり

たらちを　玉葉集　下「うらよふて身をなすごとなりそてぬ家はよるとるのりのくたらちを　万　廿三「多良知禰乃波々をわかれてまことわれ」旅のかりほにやすくねんかも　拾遺　哀　四　男

たらちね　。母ノ称　父之　十六「たらちねの親のかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいもにあはずして　古今　離別「たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ　好忠　十月終「炭がまの煙に身をやたぐへましわがたらちねもさてぞたえにし　夫　廿　夫木集　山家苦　法服慈献「たらちねのおもてて又逢べし小倉山昔の老ぞ名にのこれる　源為献集「かへりてはまづたらちねぞこひしかるふるさとにゝてあはんとすらん　同「世へとにあるりにゝはまどもたらちねのおもふなどさまほしく逢にみえつる。たらちめたらちをといへるは後世の云なり

たらちめ　千載　哀　顕昭　母の身まかりけるに「たらちめやさまりて末代をしましかゝるにくゞず会ありせば　拾玉　一六「たらちねもまたたらちめもうせはててたのむかげなきなげきをぞする

たらね　。テアラヌ　約之　吴竹　四十三「そまゝがにゝもおや〜たらねぞあさましかるや　柏玉　何もかもあれんともおもや〜

たらぬ　足ラヌ　。共ニ足ノ不足ニ出ス　たらぢ

たらう　太郎　いせもの　六段　太郎国つねの大納言　宇津保　四十九　中ねの御子のなゝ四の君殿の二郎なりなり　栄花　ころく　十八家の三郎我がるひとありて　いせもの　六十三段　三郎なりける子なんよき御男ぞ出こんとあはすれ　まくらさうし　六八　つらへるる八郎君へむかひ後ゆくく云々　大ね殿の太郎君と云あらびくる我

む

たらひ　盥　太平記　九「ぬきとりもなくつまゝやたぐれましなとなぐるかたらひありやと」よもぎふ　初　まちらけのしなれ杖の世がれ也大空の星の光をたらひのみづにうつしたる心ちして　枕　六十　初冬の云　れんざうありふみなどかへくたらひのみもなやなきごとあり　散木　下四十四　鞍るゝ事ありたりけるに水をとりて足のさきざきをあらひてかんとぞたらひそのを表ある事を云て「たらひしてありともへのかげにもく星のかげ　天　下　恵慶　屏風　七月七夕まつりたらひに水入て影見るところ　同　十　為光「夜星の留るるあなたげなるつゝつたらひのみやまの川波　同　十　参差又「逢だやる二の星の影なくうつるたらひのみなふうつはりへ　散木　あさ　家良「きにゆるかどもまるすゞねごとのたらひのみなふうぶ面づけ

たらひ　足ヲ延ヘ　タルミ　。不足ナク　ナリ　三宝絵　五　いと苦しかくにおのりちあや出るひあなど大臣といひてふにたらひのもへり　紀氏覧　卅一　何ともあるまじ〜たらひてぞ和〜あひそる　ゆきかへりや　声いとほそく苦〜げふん　むくつけきたらひておびまはらずあ　さころも　四十九　いがてやうしもたらひのひえ　栄花　初花　六十六条の中務宮云々陰陽道も医師のさよろづ〜おさまくしきてまでたらはせず　他文和おろかとの方世にまもくはおでそうおや〜まへん　万　十八廿　人々太良比多るでおひ

たむ　溜　タム　矯　タム　本語ナルベケレド多ク　タムル　タメテトノミイヘリ　タムルノ所ミルベシ

だむ　壇　タヅリ　共　だんとおちてえりのちんるのあいがくうて

だむ　綏　梅がえ　十七　だんのかうゝのひもをなびるまゝめ〜まて

たむ　端　うつほ　上六十六　ならの京の七大寺小布四みへえ云々

だんをち　檀越　三代実録　七十　為寺檀越施法　翻訳名義集　一ノ廿四　称一一者一即施也此人行施越貧窮　海　万　十六ノ廿二「檀越をやかるもないひそ氏戸等我課役ゝをくはさもなるかも　後撰　四六年　星ゑりへとそ女檀紙のりとりさゝぞ我かりて侍りけれ

たむろ　屯　。軍の陣どりをする所をいふ

たむる　周礼疏　曲者以火炙之木則濡可揉戻使直　橈屈也或作撓上字通撓撓古通　史記　平津侯伝　矯ヤワカシ　矯ト同ジ　弦　後拾　雑五　実方「ものゝのあづまちのまゆみあらふたるるかな

ガラス使用

らめ　六帖五下「みちのくのあだちのまゆみたむともひとそさかやまばくぞりける」散木中ノ五丈かへすがへす云「つくづくと思ひたむるぞくるしかりけるうみつゝつくもる。まひたむるは溜なるにや　拾玉四「人ごころ神のたゞすの森のかげんくもためてみよかし」天廿二西行「主のため雀弓たゆるまのつらくひくひはずしの下にけなるかな」

たむる　顕秋表上大江嘉言　風体五「萩の花よその嵐の吹くなればはぎの枝戸のあくる侍るくり」順五「なかれ
たむるみそぎは袖にうつし野のひるまにだにもあひみてしかな　天五為家「なたむる雲の山田にかずれきてはかしゆたへにちるかならん　後撰秋中よみ人しらず「鶴亀にかくある袖にうけたむて世のうきことの涙にぞゆる」天三定家「山への雲のなびきにあれて老のそぞをむ水の下にほしに　六帖六上「玉ぶさおのれみだりかたむるを」ぞもはなのえ秋の花かな

○附 **たまる**　應神紀六　弥豆多摩蘆豫佐弥餓伊戒珥（ミヅタマルヨサミノイケニ）　風雅冬内大臣「あれさかるのべのさゝら風さえてたはりもあへずふるあられかな　万十六ノ廿　みなれる池田のあそが　万十三ノ十九　まそかゝみ剣の池のえちすみおたまるみの雲くへみえ　いそ集四「つの国のまつの塩にふるあれば限りも志らにたまるつゆかな」後撰秋中忠岑「玉すへてさむくもあらねど身にしみてたまらぬ秋の雪とこそ見れ」堀川初度若菜仲実「世くべに出て雲の日つもれどたまらぬはすげの雲なりけり　赤染上　髪のうちなるとこにたまりてひくまたわび一尺そちのあまりたゝんと見ゆ　拾遺三下ノ十「流れぐしのなはぞゆきともたまりぬべしこのうへのもとぞまるゞ」

○附 **たまりみづ**　天卅六俊成「行方もみえぬ山の井にちるそのたまりみづもありにそかる

○附 **たまらず**　本ノ意ハ同ジケレドタモタヌマヘニ　近世ハモタヘラズトイヘル詞ゾ　宇津保九ノ六越前教家の女の事「此女がいへ来てかへりたのもしくえおうんとうく男あるをみど男もたまらざりきかごゝに五人すでにあるをさもとでも我たまらざりければよびて後ふみおほせざりけり

たむらのみかど　田村帝（文徳天皇をやまつる）年代略記　天安二年八月廿七日乙卯崩於冷泉院九月六日葬田邑山陵号田村帝

たんだい　探題　散木下ノ十九　おなじ寮にて探題のさまにたまゝせなかひろる小棲をくりてよめる

だんな　檀那　翻訳名義集四ノ六　秦言布施　若内有信心外有福田有財物三事和合心生捨法能破慳貪　是為檀那云　宇治拾三ノ十八　仏師どもだんなをも失ひて空なあわせて　つれづれ草五十七段　法師の葉下ばかだかへ檀那さとしもづく思ふべし

たんゐん　探韻　花の光初　此子たち上達部よ也えとなえ其名の皆探韻まふりてふを作うなる字ゆえねまとこまか学のぬれ寺この事ふ散さる例の人ふこともあり

たむらのなんとえ　古今集雑上　田むらの御時に女房のさうらひにて云々

たむく　手向。（佛ニモ神ニモイヘリ）山家集下「世をすてぬ心の中にみかくもをだにえたむけし神にぞのりし」天十五定家「立田山神のまにまにたむくとやぬさも紅葉の秋のかぎりなる」同八為家「住吉の神もまつとやおのが松がえたむけてぞあらむ秋のきよめそ」古秋下かねみの王「立田山たむくる神のあきぞとて秋のをののぬさとちるらめ　撰集抄九　観音堂にまゐりて法施などて手向侍りて

たむけ　手向。体ノ語　万四ノ廿六「周防なるいはくにさんをこえん日も手向よくせよあらきその道」同三ノ廿四「さゝなみのみちにみやらのてみぐぬささぐ　土佐日記　こだくらなにおもきぬ所ありかぢとりしてぬさたいまつらするに　古羈旅「たむけにはつゞりの袖もきるべしもみぢにあける神やかへさん」天廿四現六為家「みむろ山さそふ井の神さびて風のまにまにたむけなるらん

たむけ　峠　万十五ノ五十三「かしこみのさだめし物のふの多武氣にたちてもろもりつ。たむけある坂をならのたむけといひ坂山がまさに向となるごとく越路へ入る山のたむけなり。契沖云さる所にてたむけといひ手向山といふべしとなり

たむけ　手向。銭（ハナムケノ心ニ）後撰お「あじへのむけとはまれる様よふ坂近ちかしまあるん」夕良廿三伊せの家神やは月のついたち日にある女房のうらんにてたむけぐしとぞ後撰お「秋ふ

く旅ゆく人の手向にはもみぢをまさるぬさなかりけり（コレモオホカタヌサヲイヘリ）

たむけのかみ 倭名云道神 唐韻云禓音觴 和名太無介乃加美 道上祭一云道神 [三代實錄]廿二 元慶二年五月八日授越中国正六位上手向神従五位下 [万]十七ノ四十四「となみ山たむけの神にぬさまつり [後撰集]（東へゆく人によみてやるとて）「けづりこしやもさくあるらたむけの神にゐるぞまつる [拾]雑上 能宣（あづまへまかりける人のもとにぬさをむすびぶくろにいれてつかはすとて）「浅からぬちぎりむすべる心をはたむけの神ぞしるべなりける [よもぎふ]十六「たまかづらたえてもやまじゆく道のたむけの神もかけてちかはん [夫]廿六 貫之「わがこのたむけの神も数ごとにかゝるぬさもへとぞそれたりへ [同]廿六 能宣「別路につけてむこそおもへゆきたむけの神も数とやみん

たむけぐさ 手向草 [因]二十八「志らなみの浜松が枝の手向草いく代までかとしのへぬらん [夫]廿九「おきまつのうちの手向草まつるとふや住吉の神

たんざく 短籍 。短冊 [続紀]十ノ八 天平二年正月辛丑天皇御大安殿宴五位已上晩頭移幸皇后宮宴五位已上従踏歌且奏且行引入宮裏以賜酒食因令探短籍書以仁義禮智信五字随其字而賜物 [三代實錄]廿七 貞観五年四月七日己未式兵部両省奏文武官擬階短籍 [延喜大政官式]廿二 凡大政官考選文者云々 就曹司聽考選史持短冊筥 [同]廿九 凡成選應叙位者奏短冊後預書位記 [貞観儀式]九 四月七日奏成選短冊儀云々 若有不御覧短冊者云々 [江次第]五ノ四十八 最勝會ノ条 [拾]十六ノ八 おきまどうきて云く家のやけたりそていとあはれがりてあへぬかとぞさらせたまひ何のゆへんやくゆかばらんとかへるぞかなとこのへばまづよめりしとなん

だんし 檀紙 [今物語]八 たゞいまぞひろげて紅梅の檀紙ふみをえだにしておしてぞつゝみて [同]十三 だんしにやれ繪をせきせさせたるに

だんぎ 談義 [梁塵秘抄口傳集]そあらの東むかしの光にある所出て須のだんぎありてなげきをうらひてせ世ありし程をも後

だんず 彈 [盛衰記]四十九ノ廿一 だちれとけだちくたんぜらる

だんじき 断食 [平家]五ノ十三 廿一日が間一向断食にてぞ有ける

だう 堂 [松かぜ]二十八 故院のおほん堂たてゝ [すゞむし]三 だうのさまそうぞきて講師まうのぼり [夫]十九 定家「だうへぞしきしのびあへる涙のみびえてこのはのもりのひろきうる [さかき]四 男のはねんぜ堂をあかさるのゆくてにてらまたる小堂の

たうばる 。賜之 [催馬楽]刺櫛ハタウバリナクアリシカト契沖河社ニテ曰 雄略紀ノ相似ヲタウバリト點シタルヲ上ケリ 可考 [さかき]四十六 宮の御たうばりにも必ある加階などをこそせじ [吹上上]六ノ十 さうぞくのかづいなどをしきに いつこの人のとるかへのそだかへあとしもびさまを [若菜上]廿 寺ゟるそうりのつきてうのなにたのゝるふちたうに [大和物]正月の加階たうばりのことはじめかうたなれど

。たうばらん 賜ハランニ [しぶ]ホへ出ス [たうべ] 賜ヘ又食スルヿ共ニ [しぶ]ホ [たうべし] 給ヘリシニ [しぶ]ニホ

だうぢやう 道場 [太宗大夫集]四 おほしはしはた方紙でかじゆうにもつらゝてけしもあるまゆかぞ

だうり 道理 。道理ノ文字 [韓非子]又佛書ニ見エタリ [枕草子]十二（朱雀院ノ女三ノ宮）おほきさきの道理のまゝのうちて別ぢなが [狭衣]二下 卅（大将ノ女三ノ宮）さぞなりかわりねうくおもは見えこそ道理のまゝの御がはりなるへの御ありさまうちあるべうこそ [嵯峨院]二 さきごうのる道理とみながぞらしくおきそる人のまゝそへ云々 [柏木]十九 ごとをとしみもせあひ [帚]卅 世の道理をおもひとりてそうらになさなかりけり [若菜]十五 世の道理をもしやびとあまた [宇治拾]八ノ十 敏行冥途 しかたびへぞうやよそめでさるべきたひにあらねどもしちらへ

たふるゝ [さかき]五十 んうる道ばぐしとろ女々が給めなるをさへにくもつほれなどそゝめつ。注に戯ト云フ戲ハ倒ト云フ本ノ誤

たうつぎて 統継 [俊カゲ]下ノ十五 世をもたうつぎてるらひ末ニもあるべきかと [同]蔵開 仲忠は中門春宮も片時まうでさせ給はゞ召つかさせ給ふ疑ぬすら世の一ことあるべうく ふせねどことにあそびめるし。続ハトウニテン統緒ヲ継タルナランカサラハ図ノ部ナルベシ又とうつぎての誤カ

たうだい 當代 [明石]廿五 たうだいのみこゝろ [みをつくし]ハたうだいのかく位を叶ひねるに我思ひのとうれしく [玉かつら]廿五 たうだいの御母后とはなえ給しなさのいたまらとぞなるまん [東や]十三 たう

たいの御かしづき娘をえたてまつらんとの【狭衣】一上十三一条院たうだいのみかどの御きさい腹の二の御子ぞかし

だうぞく ○沙門ト俗人トニツ也【後撰】雜 ゆきゝだうぞくにおほくまうでまゐるに 僧正遍昭がもとに

たうらいのだうし 當來導師 【夕良】廿一 なもたうらいのだうしとぞをがむなる【細流】金剛蔵王ハ過去釈迦現世觀音當來彌勒なり

たうげ 峠 【堀太山】同内「足柄の山のたうげにけふきてぞふじの高根のほどはしらるゝ ○此訓未詳宣長ハタムケノ音便ナリト云姑クコレニ従フ

たうごく 當國 【玉かづら】十四 當國の受領の北方になりなまん

たうじ 當時 （サシアタリタル時ノコトヲ云） 【東や】十三 當時の帝のかしこき御なかなれば【宇治拾】五ノ十二 故主ノ従者ニイフコトバ 何事も申せ まさしくたのみてあらんずるぞまづ當時さむげなり衣きせよとて

たうじのくらうど 黨使の藏人 【祭ノ使】九 黨使人馬ノ所ニ とうじのくらうどまゐりてふとうじして

だうし 導師 【古今】哀二 ありのみつも寺にて人の業しける日真西法師の導師にていへりける言葉を歌によみて【夏のうらべ】十三 今は仏も見奉りて此導師おそくまゐりければ【幻】十三 法師ばらも導師のまうづる禄をめでて見ての御作法よりもさかしうせあひてことふるくなどありせ

たうめ 專 【古事記】上 汝者雖有手弱女人与伊牟迦布神面勝神故專汝往將問者云々【和名】專【日本紀私記】專訓毛波良 專之義也太宇女者手弱女之古語也今呼老女為太宇女故次於負耳【土佐】おきな人ひとりたうめひとり【同】下 あはぢのたうめといふ人のよめるうた【落窪の君】ゐうつとしたうめ

たうめ コレハ狐ノ名ニ云リ但【宇治拾】狐ノ自ラ子ヲムカヘテ云ルヲミレバ狐ノ老タルヲ云ニヤ【百錬抄】九 後三条延久四年十二月藤原仲季勘罪名配流土佐国於斎宮邊射殺白專女也【新猿楽記】野干坂伊賀專之男祭叩蚫苦本舞稲荷山阿小町之愛法鰹破前之喜【東や】五十七 弁尼詞 ふりそへさふらふなてんきこえらひのやうに思されて侍らんも今更にいがたうめにやとはゞかりてなん侍る【宇治拾】四ノ二 狐ノ詞 これはみてまうてよるめやすくなゐにこそ

だうしん 道心 【鈴虫】十四 其人はねむごろにきこえかはしたるなかりてひがくしよりのぞき【若紫】一 後おやのおきさきかりしよりのちまさにのぼりおはしける人そこ法師ばらをあつめけれ【蜻蛉】三十 又貴なるらん人おもひてかたらふとて説経せよと云ふに【帚】五十二 虫をひねりつゝ虫又言葉の道心おこしてつとむるなかに【松山】廿九 世の中の人のうたがふべくもある尼法師のえておこしたるいふに【須弁】十 此人のあまりたるものゆかしきまでのさまに【夫】十 かの姉社あけ合 寒抜「よどおほきかゝりむかへる年の暮れなどかへりたくんのおもひでそ有なる

ゐ

たゐ 田井 【夫木】十四 弘安元年 円定法師「ほそ江にはなまく田ゐの秋風によせてさ波の又かへるらん【夫木】廿五 秋六ノ九 家隆卿「山かげのまつのむさしぬにしるたゐにたゝぬ日もなし【同】七【堀太】俊頼「つまこふるしかこそなへの田ゐに引つゞきたこのてまなくとる早苗かな

たゐ 田居 るゐ 【今昔】廿ノ十一 農業の為に牛を飼けり 秋ころ田居に放ちけることを飼ひしに其牛子を生して田居に喰行け

の

たのむのかり 田面雁之 【いせ】十段「みよしのゝたのむのかりもひたぶるに君がかたにぞよると鳴くなる【千載】春下 俊成「春霞たのむのかりも今はとてかへる雲路に思ひたつらん【夫木】十二 後京極摂政「みよし野の里ならあさし秋の世に宜哉たのむの初かりのこゑ【同】十二「いかにせんみよしのゝ里の有明にたのむの雁の月に鳴なる

たのむ 頼之 【夕良】大 今年はさもありぬべきをいまひとゝせなどかたりて侍るなる「たのむるをたのむべきにはあらねども待つとはなくて待たれもやせん【後拾】恋二 男のはてといひおこせて侍りける【帚】十二 えんにこのましきことは目につかぬ所あるに手を折るべくもおぼえず たのむ方なく紀のいもうとなどちりたり【行幸】上三 律義たのむろけにて（あし）しかんとすらん【古今】秋下 遍昭「侘人のわきて立よる木のもとはたのむかげなく紅葉ちりける【後拾】恋一「たのむるに命ののがるゝものならば千とせもかくてあらんとぞ思ふ【枕】十五 人の家ぞく合せしける所にかゝる所にてさわぎしたうてせうとのおほむかけるかるの一ますへおのれの人さうおもひたへるかもとたのむるにさうらうたるもいひ出でさうさう宮たるに

〔下ガマキ〕九十三「きし方思ひ出るもくるしきを行末かけて何たのむらん」。案ニ人ヨリ我ニ其人ヲタノミニ思ハレムル之宣長云タムルニテアチヨリコナタヲタノマレムル之白宮ノ契リ玉フヲ云。スベテ倚頼ム心カ〔古今〕十五「山城の淀の若ごもかりにだにこぬ人たのむわれぞはかなき〔同〕同「今しはとわびにしものをささがにの衣にかかりわれをたのむる〔夕負〕十一 おもはねべく思ひしさまなるをたのみて〔蔵水〕一 たらひはさなのきこよげなるんもあたまはらんこう集めさくいとどこそらいへけれどたのみ申さる海にこそおりく〔相〕十四 かしあるさまをそれを申へるがら〔浜松〕二十二 そこに何事を今よりおもしろくやよろづ程に申へさあるべきを〔宇治拾〕五十 何事もやせ文ひとつに取りておらんぞるぞさて〔アカシ〕廿一 住吉の神をたのみそめ奉りて〔狭衣〕和 かく末に文をくたのみかくしのへり〔のせも〕十六 年ごろも十よく思ふ人ありける如くたびたびをたのみまゐらん〔蛍〕廿二 さてもむかしをあさりにかんそうてごとも宮ひろふるをあるがたのみかくぐもしのさびて〔弁川〕廿一 かかるたのみかからでありける如らひとのがきまゐるありそりて〔帚〕廿三 末人ありたのまれぬべくわれどもうち申すう〔ワカ子〕上廿 はかなきひとへにおきまさまるべき御にむつびのまし思へんとおもく〔若紫〕廿 さりみやうがとなからはやりとく待りしかど女は唯あるごとおのづからうつらへばへさせあひてんとたのみあれてあえさふらひつる如

附 たのみ

○体語

〔末弘〕十七「頼みのひとつとりかねたのみに〔好忠〕鳴内「何もせでありけるたのみにわびしかどわが身をいたづらに宿ぞしふる〔松風〕十七「かくいはと契りしたのみまて君が外ひなぬかあはぬをぞしころる〔相〕三 くもけりけるをたのんかへたるひとふみもたのみにぞくはからひあるに〔帚〕四十三 ありしながらの身にぞくかるたんかたのみもありけるたのみはずれてのみにてんとねてん〔弁川〕廿二 表向かたのみにての事りてんありつれたのみにつよからぬと笑ひあひき〔ワカ子〕上廿 此笛吹くるも久しとおもさまつけきぞ拍子そのへんたのみつよからぬと笑ひあひき〔ミノリ〕三後の世のへおぼすで其の望みをけれと思ふらへ思えるひてたのみをかけるはた中るまで〔蓬生〕十 程かくかけなくぬきてひさしうありおもひぬる人にたのみかけぬへ〔散木〕釈教中 廿 んとするてたのみかくるまでありと極楽に生まるべくいくなる今ある「その国の子のぶりもちまうるをかくにおなんのみすれさもぞる〔夫〕十二 建長八 衣笠仲長朝臣「あふ一日に

よだのきあのほかにただちうるのもいとぐるたのみは〔末弘〕廿三 かくたのみうてはもさびれるおもかなり

附 たのみどころ

〔信明〕廿五 世の中のたのみはなにせし相をえせえくやすらんと思ひし〔帚〕十三 ついの杯を西あやまれおもひかくへつり〔篤〕十八 たのみ西せくなしあひゆるすると思ひけくへく

あやかり

たのみ 田實

○頼ミニカケテコレラノ哥ニヨメリ〔古今〕物名 重「後まきのおくれて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞきく〔同〕十五 寄「秋風にあふたのみこそかなしけれわが身むなしくなりぬとおもへば〔好忠〕七月中「その上に岩やに掃ひまろり世の秋のたのみをよそにみえましや〔帚〕十三 年よのまほうけに秋のたのみ採りそきをあ

たのみひ

〔栄花枝〕十三 頼みたのみの男のたのみひして良からしたる者もあるに〔木工衆〕十六〔建武行事〕六月朔日の条

○契六人ニ頼マレムルトイフ心之。アテニサセル タノミニサセル タノマセノ意之。案スルニ人ノ我ニ其人ヲタノミニ思ハレムル心ニ

たのめ

〔いせ集〕廿二〔続古〕十四「松まちてたのめしこのみおかなるごとく浪のこえるは程ぞかなしき〔貫之〕下廿「ふる雪や花とさきてはたのめどもなごりはこそたのめつるあはれしれどもかくなるをかける如くつゆたのむ〔後撰〕十一 女に年経てくるしきことのかひつくりける女程にことだに待ちらせとたのめる如くこたのめしことの月ごろをまたのめつるたのみもしるべくなるを〔貫之〕上廿九「昔のたのめしも秋の程ぞかなしき〔後撰〕十三 たのめつつこぬよあまたにありぬればまたじと思ふぞまつにまされるめたのめしがたき浪の松にしもあるかなとおもへる〔いせ集〕二「ひとつもとたのめしこのあはせぬと思ひつるにかなしきはまつにも表白もまつにならひのうつる〔拾遺集〕「いかにぞひたのみつるも〔後撰〕雑一 小野「あるかざりの花たのめせで表中にもまつに桜にこそねらんとしのもたのめらむとつ〔拾〕二十六 何のいへありとしひのえとつけんあちらへさきつことありやまるむる〔後撰〕十二 人のたのめてこぬことに待ちつつよへつくらへし強ひたのめりる中ならへともおほえ年まちりもし〔同〕同 中の関白およびに侍りける宮にてはじめ夜鴨の上毛のあけるうるくたのめつつ女にかへりてよめる「やまもとのさねかつらをねりにまぎれつつ又はそをたのめ侍りけるへ〔貞〕廿 此世のそのまつらぬ数うるとまでたのめおもふに〔あそ〕四十 此ねたらぬさきはおならひおもひえんとこのあらむ

めり【三モつ二ー】十八 そらみなれめそとたのみわたるすらひあわのことごとものあひ出く【東下一】卅九（きえ入又ん侍へする時 さへさるふとのあさく）「うは
さうふたのみかくめるひとこそつれなき沼ぬやうけて君ぞん【狭】（三上廿）まちかくりはつゆ今そたへぬたゆく行ふの
めそあえん【帚】五十五 人ふうをやりしがたのめてくるころおぞもありたりし【大和物】二「むかしのたのめてきりしそあ川のきと
のふるき秋をぞややまさえん【新後】下三「こよひくるならきまそとてこのめつろうーたりしうくりごとふ詞へるって【万葉】三二（み二人）
もつみ出し一もうきまてそひがさきたのめーもそえてたゞふけぞゆく。【古今】別「うつくさく別をすもゆくうあふ坂ハ人をの
めするなふこそありけれ。【千載】別「うくりこんがと秋ハいつとのひおうト定めなき身ハ人たのめなり。【新】以（絶て）
出せり【山家集】下「わすれぬーたうの冬のきえゞうりたのめぬ人のまつうつやうなぞ【後拾】五一（兼宣）「まてとのひし秋もすぎ
ふなりぬる秋たのめーき郭ー声ハいつふぞ【新勅】五二（兼七）「いざうふのくき一波のこえぬらんたのめー郭ー未の松山

たのし 楽

【万】九ノ三 よ美のをぐくハあまごうふのたのーき【同】五十五 梓秋わつたぬーききへめ【夫】廿五（兼昭）「さく
らえの御代ち浅ふ身ーてたのーきを多くーふあめ人【同】卅（家集）「君が代をまちーもそる
くおわつ?里のうちち秋ゑざたのーさ【拾】（神楽）「さで波のうの山のながくてたのーゝるべき君の御代なる【玉葉】賀

たのーむ 楽

後成「よその日うけのろうかざーのそたのーくもあるうその?つの

たのーみ ○同体語

【夫】十七（寿永分 二和のえ）「たのーみやたうう代池ふふゝらん玉藻ふあてふうるものむらさる
【同】卅六 述懐（後九条内大臣）「たのーみこれまがえへかげとぞ戦世ふあふぢとみする人やうみん

たのめし

【山家集】下「のぞむう君あのましはふはいぞらありわぬ別つりせぞ【夕良】十九 法師あどをそ
へかうる方のたのりえたのりのゆへあおはべかれど【狭衣】二十 二六 池のもとさきねて昔のうけもさまら
ぬふ娃のあふぎうたのりえあゞゆてたく【うつほ】上四 いうけるなるよきてひあてたゞ一人たのりえたのりのとるうひて
【若菜下】四十四 たのりえちゃうぶも【夕良】四十六 ?てうみげふ物ーあひ一人のけん秋たのりえ人ゆゝく【大鏡】十六
君ん たのりえなくて世秋せこし身のふうえも是ハ父母をいふ

たのもしげ

【元永集】廿「ぞぶのいつふせそとう秋もたのもしげつみえそらにあのぶつ【夕良】廿九 いえとあ
はやん世とまとこのあもたのもしげあーや【帚】五十四 うとまぬやうとと思ふあへんへたのもしげ
なく【同】四十五 たのもしげふくらびやそーぞ【同】廿四 まとうええたのまずくたのもしげあえ方まなる【相ゞ衣】十三 きえと
たのもーげうするふとおぼみささあて【玉葉】雑（赤染）「?そよぐ萩のうへぞの音よりもたのもしげまえ世秋たのむる

たのもーどころ

【神代紀】上四十二 女所行甚無頼
【若菜下】十三 たのもー所ふこのりて物ー侍るあり

たのもーひと

タノムトコロナリ

【あるら】十六 此後のまけといひしたのもー人ぞ【同】十七 此たのもー人うゝうまけ【椎が本】廿八 そうるのほたの
もー人やかあひてやまさり【拾】十一（廿五）「初雪ふうぐてさ たのもー人の師よびていまくべ（岩城 万吉又）

たのも 田面

【夫】廿（みち）「山のとの竹ようあふ霧みてーて田の面秋やまのの三筋【風雅】秋下 四条「山川をうみくろ
みふはいすべたのもにうなくきぞまぶく【夫】廿三（中務のみこ）「さすみへとるあぜの田のもえむーさこあふ
さろころえてあくやとさぎれ（廿五）

たぐ ○ルタグ

【中務集】（人の家より滝流れたりするにとどめたる男あり）「いぞうへとてわらん川波のたえずまらて宿の延ねり
にうけう泊まりてよみ屏風障子の絵ふあ世てよみうりのでくるそわらん馬秋ぞでくる男の屋とい人
るゝ川波のたえさまらで さとるの千ふくて止るそこくといふ【万葉】九【古今】ゆふよりそく滝ふそくたゞく
我さみく宿のあまーがくてるの刈とめるゝにとるゝたえるハえとあらずをうるーたゞくらにはあるべー
【古今】雑下「思ひきやひなの別ふおとろへてあまのたえきりせんとは【万】九ノ十一（長歌）秋つけバ萩咲白玉をねがふ
馬太伎由吉氏をちこちに多くまとへたぐ【神代紀】下 即以千尋搆縄結為百八十紐【古事記】上 搆縄之千尋縄【万】三
「たけばぬれたなばみがえいもが髪この比みぬふそぐうつらん。撤（タグルトイヘリ）

たく 焚 香 薪

【土佐】甲一「山のかりにたけるあくもるさひころえこゝる里人【後撰】九十五 かーゞうこそ

きは尾花のたもとのへやまへん［明清集］為忠「わのみなる難波のあしびのうき世なるべきそむすより身経てかれらん」

たく 闌 ○日タケテハ［晩］ト 日夜 四時 齢 ［新古］秋上 家長「秋の月しのに宿かる影たけて尾ざゝが原に露ふけにけり」［堀川後度］賀「ちよ君の

よはひのたけぞかぞへらん ［夫］四 平泰時「まさけくきのあなしらくもぞかゝる ［同］九 伏見「まもとよことしけれど山かげをさして おもへるなりけり ［夫］廿三 鎌倉右大臣「ひとの

海波にたけゆく秋の夜の有明の月に松風ぞふく ［同］九 大良「夕風の夕たけまにさそはれて秋ぞちかづく月ぞ ［同］七十七

［拾遺］後京極摂政「さすがの月はうけくみゆ秋の雲のちぢなみだの月ぞふる ［拾六］一 信實「今さらに春の日かげはたけぬらん

やよひの月のえだにもすかもる ［古］抄五 一「ひとよふけても月だけたけぬくいさよひの月のみえぬ世の秋の風

たくろ 田畔 ［古今集］秋 小野のたくろにまかりける時に稲つむをみて 「山がつの田のたくろにおけるさまはまたちるもちる

遠ぢしもやまと女のたくろにたてるまだしき人まちえぬたちもしけぬめや

たくはふ 貯 ○蓄 ［万］九 たけかうつるの袖のまことのまなぐれにまだとりくたすなる ひさかたの 多久波比 おもはぬくいでよくまもる

はあまたぐく

たくらぶ ［方丈記］ たくらぶることにて昔と今とをたくらぶれば

たくはへ ○体語 ［松代］四 そのあしたのたくはへのさまもなきをあやぶびてひとく マハ畑ヲイフ

［祭使］廿七 ゆくまにたくはへ十にこさびたくはへよくまさりてたくはへたり

たぐへ ○ ［まつ］ノ事也

たくもち 田口 ［夫木］廿一 長統「山ろげのたくもちにそうぞうちたりともひとつのたくもちぞかへりみる

たくさ ○嘔吐 ［神代記］上十 則邪抄姫 因為吐 ［古事記］上 六 多具理

たくぬの ［夫］廿三 仲正「いつかまた藤かぬくらむたく布のこぼさくゆらしてかくの

［遊仙窟］三十 縈細葛 ［男丹］三月絶「こまのゝらの綱のふたつのたくぬのもとのまひとりありけり

たくる ［堀川後度］ 兼昌「うらひまのたくるとぞちてたくるえだたけの ［夫］十一 俊頼「ことのよの手せ

のあなたのたぐりたぐるにつけて都を見あかしみ

たくなは 拷縄 ［万］三十 四 赤人 たくなはのながきいのちを ［中務集］廿六「たくなはの夜の月ぐらしくてあだなるとなれ

かるらん ［後撰］恋一「世の海にたくなはえても猶あまた うきしのぎさらにうきよはなくもあらじ ［夫］廿一

「あまのたくなはくるしきにくる人もなくたく縄のたくなしたるたくにも ［夫］一 五 よみ人しらず「たくなはの千尋の浜のくりかへし

こゝろにやなほまの世のつきせぬらん ［同］廿三 長岳大臣「たくなはおほせのたくなはなくなひとつのたくなけれんな

［同］［拾六］三 家家「海人の底のふかきもそこにみやよりもとのたくなはのなかにおなじきのくさん ［同］廿五 長岳内大臣「ちかさちのあまのたくなは

いとまなきもの世をうけしのあまのかゝる ［新千］恋三 為氏「世のうきあまのたくなはの家ぐるひをもひなくるおそれも

るし

たくむ 巧 多々 体語ハ次ニ出

たくまし ［白文］十八 愛才心倜儻 ［盛衰記］世のくろきまけのるにてひとはすこしたくましきにぬる袖の

［夫］廿六 寂蓮「むかしの人のまとりとあたりのたくましきぞえなくたびの

たぐふ ［玉葉］十五 恋「とへるへとおもひたゝとのきえ波のあらたまのまことのきくたとへる ［新后］十七 古「よもすがらの枕の下にきこえぬやさむきその世のあはれなど

へんかたさしてかへる

ふく古 六帖 ［後撰］上 恋「あの日くさのなかのたぐふのたよりにたぐふ ［夫］ 家居 もろくもかなしきさそふあくべきのやる ［日本紀］九 いはくらにまちくぬ 貝倍

［後］一 四十一「年へつるとまやのまだてうきなみのかをきゆるおもひにたぐへまし ［宇鏡］九「ねざめよりもなくなくしやたぐへまし

たゞちのとひのありやと ［新六］ 家家「よそひとのたぐふる風の八千峰のまつあまたなるみふるくべよ ［拾遺］上 七「うき世と

のきたなとのまよへ松風にたぐひてたぐへのまなにむかるる ［仁徳紀］十一 淅 致喩 區茂餓菝多 愚譬氐亭 豫摸 ［五四］十五

「かかる此国もあらぬものしたぐへくさひ白紅てたぐひてをらん ［同］ 羇旅 仲丸 年のへくえらぬまうてたちざり

けき我此国よりここ使まりといけるにたぐひてはるかときるえのさくたすりぬるに ［夕貝］廿九 けるやにさぶひてあさひ

まりるえとの ［椙］四 内のみかの旅のまゝ世のこのしのほとけたまあらへまへおもゝあの風のかた

とひて人なるものとかうし 家ゞさま五 あるふでも法性寺ちうくあんなのかたとおぼえへたるひのぞえもこそぐ

もえなうかるやろらん云々 栄花 殿上花見 あろ人ふもりもたちまえとせしの羽の袖のここちへたぐへつべらなれ

たぐさ 古事記上十九 天宇受賣命手次繋天香山之天之日影而為鬘天之真拆而手草結香山之小竹葉 中世ふりそね物之

たくさのえら どり 堀太 天 十六 承仲 おもふにたゞてたくさのえなにかりかざしてよへであくられわきのいたる 顕

たくさ エ 雄略記廿二 大君ふ 柯抱倶都柯倍麻都羅武騰 わごいのちもながくもがともひし 抱倶滌 播夜阿多羅陀倶滌播夜 拾 二十五 たくさのあやをそめたるやしけさ 云々 夫 廿五 田 土 廿 加 そぶらく ふ袖をふのふびくにたくさうつ重縄のたゞ一筋ふ 同 月 信実 かりちまきさきなやちふあかひつへんありくる くるたくさされた 同 月 今まだたくさひくやまきそのつなこしのふさうらそそあふきの山とよむかね 同 月 西行 秋篠集 すまさき つるひのたくさやそでぬらん村あるかとねはさざりの山 新 五 森の中のたくさの方のあやはうやまも世てつくりおはなきで 散木 下廿三 わ今まむちへこたくさをつぎさりしもき コレハ木工ノ類カ

たくさつき 相承 廿 ちりしえたくさつきさに宣旨ふくそてにするわらたなつくらせあふ

たくみ 巧 古今序 文屋の康秀ハ詞ハたくみにて 散木 十 圭 つきそそのさ仿りたる あけくれのねをぞもる我たく ふうゑくらうすくむもをかさるへぞえるに

たくみどり 巧鳥 散木 下四十 藤野 鳴小松ねたくみぞるにはあへぶぞわるまの高廈ろ 続千 鶯 たくみどり ○心ハカハラヌドモナドハ俗トハサカヒサマカハレリ 土佐 若紫 下今井 拾遺 上 春之

たぐひ 類 恋しう来しとあるもぞ 粘撰 上 春之 なかまいけるもあやなかひとつのなびも我たぐひあり名あらん 不叢 廿一 古ウタ くさまらてぐひへおやくして もうくらん 末 公 廿八 あやつらうごとへぶものきるべき袖のたぐひ 土佐日記 下 こちやりみえとひけるも云土佐の まゆをたひけるも云 着まべしありしものなるたぐひかゝてあすありよいひてよめるかな云々 罌 民 十七 ふれやさね

や

に拘しあへうる我たぐひふうきそあく あけまき元 甲八 つぶへのやうにひがくしたへのたぐひやゝ又世ふあべくあら かげろふ上 七 月の まふうくなりしたんうりしさらへのまづくともよのつねゆくたぐひあるまり ここ十 土 世ふ枚ひあるまじきんを絶るそざると まかろ 廿 げふたぐひあやからぬことぞいかのここあつかまへりさんうし 千載 院 いくそよとかぞへきりけるれ時や君かよえひ のここひうきうん 栢つぶ 京六 世ふたぐひなしとえなありあひ 多良七 米哉のいろくさだなたく我るまそふやしもちひあくる さあかふたぐひあし カゲ日記 中ノ中三 いくの絶のとちびしくまるしうものやまく 遊仙窟 四入 間火足 山家集上 たぐひあるえ花の萬我をとまるへし池のうべこにうつしてぞみる かげろふ日記 中十三 あのまるしとおりきさいみ まさ 歩すしくふまとあるえはるりふかく思ひあへりたふへてき神我ぬるさるねとのすたるひあし 栢つぶ 二 うつけるえはんだくの たぐひあるえをたのここふてきうらひあく かげろふ日記 三（男君女君ヲ尋子三来レ後女ハ多伯） むかしも法光せしちえおえおへつくまろくのりしやご たぐひあるく思ひあり咲へさ世し今のとさくまりでぬべしとうちて云々

たぐひて たぐふに同

たくも 牡吉 今 入関白 ふる雪にたくものけぶりかさえさくさびしくもあるか塩がまのうら 後拾 恋二 実方 浦風 ふるひえはふうる里のあまのたくものそのうつりこころよりさそへ 新続古 恋一 九条大臣 うらびうぼえいけふせんところに このあまのたくものからおもひきるらん

だくる 保元一 己わどの者をくべ矢だくるみふ 散木 十 矢たくるうるとしいふもをこかまし 是雅言ニハアラザルベシ 飯ダクナ 又ダクチナナト云

たくせん 託宣 拾遺 タクセンアリ 住吉のここあうへのいえく住吉の神のたくせんとぞ 後拾 雑六 神祇 長暦年 まこいうえまづうら施宣して云家ニ主補親をゆして云 栄 晩まろ星 十二 其比いせのたくせん うぢのひて云々

たやさし ○令絶ナリ 絶エ 絶エ 別ニ出ス 千載 序 かつらの我たやさずらんがためにそ云々 続紀 廿五大 多夜須久 国王 廿五 とふのへだ耳ふたやさし 続紀 十四 多夜須久行止所念

たやすし ○容易ク 坐而 白文 六ノ七 易為興所牽 詞花 雑上 よゝふつむる男のたやすくあひ

なしべ 古今序 今このことをいふにつかさくらゐたかき人をばたやすきやうなればいれず 契云 憚リテ評判セズハシ見ベキ也

たま 玉

万 ふみおける玉 ますく玉 浦にある玉 涙の玉 夜光る玉 手にまく玉 波の玉 紀 天木 神代紀上 瓊 古事記上 やさかのまがたま 万 六ノ卅二「おほきみをあへたまはずあまのつりせむ」 天木 かきつ波かくし波にもとでせりえは 新六 五 あまの「いゆしふかきの玉ひろひのちいさき 四 釈教 法師大心「流まよふ一の玉ぞさけおどろいて五濁の雲のたなびく。龍女の仏になれる法華経の級 事なり

たま 。霊

拾 十七「たづねゆく波まくしもがもつてにても玉のありかをそこと知るべく 古今 哀 おもひ「まをたのむ だふきくそでけて玉よりもあひなるなにかなるとうてる 栄花 夫 廿一「あるがの玉たえずにのれかへて おもひとだにもいはせて 明 十七 さふあかくがうてたまやゆえかくなられるといふ 源 氏 もちしかもきえよそ そのいもまのあかさらんよふかくみえべき玉むすびせよ おもひ 廿一「あるがえひひあふづて のせも 百首 おもひまずゆしたまのあかさらんよふかく もすたなれむすびそめよきさるひのつま

たまそら 地層

万 十六ノ六「玉拾ひかきて提まろむろの手にとるやあがのりて かえたんらん 同 十八ノ廿八「初春の そつねのけのあぞえたにてるうらふゆくぐ玉の子 堀太 子日「玉そえをまのたろねにたを すめて玉のをとるがくさるをべらし 猿の玉 別ニ出ス

たまはる

。賜ル 。人ノ上ニ 物モラウタル イフ 克 のせも 百首 いとまいとまおぼゆなどもやいかとても心さへ ありなれたまありて 相撲 たまふ 花 そま 花人他の夢まとるてあかりあふ 夕貝 四十 局うごちうくあかりてさふらふせ あかりて 同 四十七 その長ひとろでうせてさくやまてよと德どもまたばそれたまらふどと 万 四十五 いは へのえれのまませるきびの酒やもえでまとへるねえたまぞ賜良牟 秋えだのられつくらぶふ あかるまろう 同 八年「あふねえたまうん

たまはるむ

。賜フライヨク敬メイフ詞之 。クルヽ人ノ上ニツケテイフ詞之 拾 十五 よへつおよふあかもと 後撰 別 三月だろまふ

発後の岑君うへ西国に下り侍りけるに扇のうらに 玉あしき 廿二 ろくどもへ中宮の渡方よりはなちみえへ送ども又みを てあり侍る 同 廿一 ふ人の中にもなど言ひたる声てえうしまして 蔵名 一 さるべきや侍るあらせてんや 同 日 たえ搦へ世に の見中のかせたりし宮をいりつ御くたえて侍りしえとをかぞへうた白かむを 同 日 さまざまにかたえぞこねうど侍るぬ べくや玉とくしたまのをせよ

たまかきさき 玉ニ瑕 玉ノキズノ如ク 附ス

たまへ 手習 十十 かのこときすぎさるえと思ひつけのくらべ。コレハダヽアガメイフ常ノ人ヲ動カシイフ詞ノ人のへ人のへ ナドハ あつかく出せドオノレガ上ニイフタヘト紛ハシケレバ此ニハココニ出ス

たまへ 。コレハ貴人ニ向ヒテハ又ノガ身ノ上ニツケテイフ詞之。真淵云 出雲国造神賀詞ニ 恐美恐美申賜久云云 大殿祭詞ニ 殺給清給 。是ハ自ラトモ動カシイヘリ 人ノ上ヲ敬メイフ事ニハあへり あへたまふ ト動カセドミヅカラ上ニハかかる あへり あへたまふ トイハズトイヘド 東や 七十 さる侍りありあへりとどうゆしくへ 。是ハんらズモレウツシ誤リカ 真ノ約知リトイフヨリウタタル例ナシ 。見聞 思ノ下ニツヘテイヘリ

たまへ 花のえん 十 後代の例ともうりぬべくぬへのへしふ 多貝 廿三 昔みのへし女房の見ゆて侍る 栄花 十三 花ぼ人まかりける武士人のへしける 同 廿四 物思ひにやすひつくやと 日ちくえのへしきどきす 中務 廿六 谷中もあちのりぬべくうえなへつ 後拾遺 下五十三 波上そらどうえ給へるとてまかう できうあり 古今 九 いかでうる人をえなへいつけくも出くときえ世のかれぐそうゆひあへらまぬべかれば 同 四十五 ありさまなふへのそ侍りしへ 浮舟 八 人ていかでろえぞうつぞうごまびそのあへえなへうずうでいかでうへ年をまし なべてふぞまうく侍りしかう 三十七 かのぬこくちがえをうえ拾えのへまかりえたとく 同 廿七 もえなさりしま人まどや 明石 十四 ありうびて侍る程につみあまりぬるにや文のえのへねも及び侍らぬうまことさふ え 夕霧 廿三 こうへ出くをさるくよりえのへもつらび 同 廿五 つひにむまへく人のへ人で 花上 下四十三 あやしえ 人のえのへつかさくえまうのかりこざうつ我 夕貝 九 のしえのへうる事ともや侍るしえうふえつのてつうりので 同 十四 案内のころよろしくえのへおえるうごう 同 十三 のまそくんがそばにふえのへあくうん 夕貝 八 ところへ久乃

こひてなんなど給へて 帚四 女のこれはしもとなんつくましきはかたくもあるかなとやうやうなん見給へしる

給へ （是ハ敬シテスハウケ玉ハルトイヘハウク約也） 宿木十三 この大徳たちの法文なと[illegible]給へ 浮舟九 又法師そのほかのひかりと雲居下と思ひ給へらる 同二十

当 帚廿八 主の姫君をかしつきてと給へて **思ひ給へ** （思ヒヲ思ウト音便ニイヒタルヽ多シ） 帚廿一 さりとも見えひたるとけと思ひ給へしぞ 同二十 [illegible]ことゝけるそとおのう[illegible] 蜻蛉 十三 こゝろさかしきものと思ひ給へしもうひるえ世にまてりける 蜻蛉 廿六 また琴のひたふるにやとこそ思ひ給へつるを 夕顔 四 かくてもありぬべきのかなしさはかりにて思ひ給へまし 帚廿四 たゞなほよきとやうやうなん思ひ給へぬる 宿木 廿三 何のあさきやうなる心さかりもたえてくるしきうちなどにも思ひ給へらるゝ 桐つぼ 七 いとかくさうらふもかたはらいたしと思ひ給へまかでなんとも思ひ給へる あらすゝみて関じうやうにうちえませんかな 帚十 ふかくもうちに思ひ給へぬ[illegible] 明石 廿三 又かくそくしとも思ひ給へば 帚廿五 うちからふへきかなしきも思ひ給へさりしなと 同四十四 かくあさましうてさうらふへさらん 末つむ 廿 いかでかはかくせん 帚十八 思ひつゞけても思ひ給へぬかな 同 同かくしくをしへたつることも思ひ給へてしかなと思ひ給へて 夕顔 廿五 つらくしとやとん 明石 十三 と思ひ給へぬ[illegible]とも ゆるし 朝野羣載 三 宮各奈良太神宮乃厚御顧廣御助可有止念給倍天 宿木 十一 うちにいて思ひ給へて 同廿八 うたよりもおもひ給へぬる[illegible] 帚廿四 今より後はましてこのみるもんやうなるへうきなき 末つむ 五 此琴のねにつけてこそ侍らんと思ひ給へらるゝ秋の夜さへひにさそれ侍りてなん 同 七 あはれもうしらぬ[illegible]くらうさく 絵合 廿 人よりまさりてもあつかひ給へしかば 帚廿 そぶらさむくやとも思ひ給へらるゝ 末つむ 十九 故おもへらし ところぞ思ひ給へらるゝ 宿木 廿三 我ひとり給へるのみこそに思ひ給へらるゝ 同 廿八 ことに思ひ給へらるるに思ひ給へらるゝ 明石 廿三 [illegible] 蜻蛉 廿六 おもてもなくも思ひ給へらるゝ 夕顔 五 実にも思ひ給へらるゝ 桐つぼ 三 中くさうらふへきをおもひたまへらるゝ 宿木 四十五 まことにくるしき心をも思ひ給へぬへき 高 廿一 さそ さほとすぐすべくもあらぬに思ひ給へらるゝ 須磨 十五 今は世をおもひすつるまでも 末つむ 十九 ゆめさしもせざらん もひきたまへてかのまへにいでゝ 須磨 六 ゐて侍りし余世にもなかりしほどのさまもつらからず 帚廿七 徽上るも思う見えておなく[illegible]のみ 宿木上七 かくにも思ひはべらんはるかにたのむへき 夕顔 廿五 心とまるる人なれば思ひたまへらるゝことこそまつりなれ いかゞはなどなりけん

きつゝそにに 同十八 示せられおかしやうでやらなくよそにたまへるまさきのおもとさけらは給七こ 桐十 えさるんもおもへらはなとおもひ給へ[illegible] 宿木廿二 かくるもあなかちにえかなへなむ 同十二 哀惜ら思給へつゝみなくさめかたうおもひ給へらるゝなと 夕顔 四十 惜ら思給へ[illegible]させひ 帚四十二 のちの世のやうなども思ひなかきさまの[illegible] 宿木十六 私ての御相業帯ありもおもへなさまさしとを 同四十 齢の末にやうやうまかり侍りぬめるをりおもひ給へ 帚四十二 なにひるくおもへすまじかりしを 同四十四 此二つのことおもひ給へなりしはかなるに 明石廿七 思ひなぐさまず侍るゆへなん 夕顔 六 病者のことおもひ給へあつかひ侍るほどに 葵 十九 只今の身にも思ひ給へあまりて うえ 行幸 六 此まゝにも侍らんとやうやう思ひ侍りてなんほとのほとに侍るを 桐つぼ 十二 今まで命長くさらにうらう[illegible]やうやうかく あるうちに 同十一 かしこまりて思ひ給へぬへくもさふらはずとも思ひかへしてさうらはるれ 帚十六 えたのむまじくと思ひ侍る 末つむ 十二 心のうちにこそたゞのふたつかしう思ひ給へれど 同 十四 つらくるんかしこみは侍ることゞもの心ならず思ひ給へらるゝことなれ 蜻蛉 十六 侍うさうくもしあかはかなくよりつかはるゝことにもありける。此給ヘハイカバモシハ誤字ナランカナクヨリスゲニクヘウケタル例未考

たまぼこ

万一ノ廿九 玉鉾のみちゆきくらし 古今 哀四 よみ人しらず あまのせの「玉ほこのみちはつねにもまどはなん人をとふとも我かと思はん」。契云玉鉾ハ道ノ枕詞也是ニ三ノ義アリ 玉ハ物ヲホムル詞ニ 神代紀下大己持命廣矛をもちて平けたまひし国なりて道をもつくりたまひしゆゑに又矛の尖に似たるゆゑに 類聚 四十三 鉾擬之本とよめるは擬ノ直きすべて鉾をたゝむるに似たればたまぼことはいふ 文選 鮑明遠か詩 直如失之毛詩 周道如砥其直如矢 髪も依て直きゆゑにたまほこのみちとはいへり

たまどこ 玉床

万二ノ甲「家にきて我が屋を見れば玉床のほかにむきけり妹がこまくら」 同十九「あまとりのすむ家にたまどこおきてひさしくもねん」

たまどの 霊殿 宇津保 六 むかしも猶おほくたまどのにのりけん人のたましひをとひおきて 栄ノ 霊屋（タマヤ） 別ニ出ス

たまぬく 金葉 哀上 五十六「人せぬかぬるきみかびねのよすがまよひてたまぬくかたつもきみ（?）」 山家集 上一「夜みちの（?）」

をゝやまのゝとまにたまぬきかくるさゝがにの いせ物語 百五段「白露はけなばけなゝん消ずとて玉にぬくべき人もあらじを 後撰 秋中 よみ人しらず「秋の野におく白露のきえざらば玉にぬきてもかけて見ましを

たまる **たまりみづ** **たまらざと** 共ニ前ノたむるノ下ニ附ス

たまをしく 後撰 秋中 文室「秋の野におく白露をけさ見れば玉やしけるとおどろかれつゝ 万六ノ廿四「あらかじめ君きまさんとしらませば門にやどにも玉しかましを 初音 二 玉しきたるおまへゆゑよりそめ見ねばおぼつかなみがえずしめくる 壬生二品中「又やみんまたやみざらん白露の玉おきしける秋萩の花

たまかづら 玉鬘。（今のかづらなり） 万二ノ廿三「人はよしおもひやむとも玉かづら影に見えつゝわすらえぬかも 後撰 恋 四ノ七「月代へてもかげに見えける玉かづらもたえぬなりけり いせ物語 廿一段「人はいさおもひやすらん玉かづらおもかげにのみいとゞ見えつゝ 新拾遺 恋五 為家「玉かづらかけにねしよの手枕にすゞしき 髪生のなけれをたまかづらといふ いせ集 共（あへ申く人ふちをやとぞやるとて）「かづらあしもあるく玉かづらたむけの神にあるぞうれしき 蓬生 五十（つかはしけるかづらのおちたりけるを拾ひてつかはすとてよめる）「玉かづらたえてもやまじゆく道のたむけの神もかけてちかはむ

たまかづら 玉葛 後撰 恋六「ふることゝ見るならばとも玉かづらたのまれたへしとおもほゆるかな 同 同「玉かつらたのめくる日のかずはへてたえずもへだてぬなりけり いせ物語 百十八段「はふきあまたになりぬれば玉かづらたえぬ心のうれしげもなし。コレハ葛也

たまがき 玉垣 好忠 十月中「みむろ山木葉ちりしく嵐よりあらはに見ゆるよものたまがき 夫七 恵慶法師「卯花やたまがきまでも咲ぬらんをるにかゝるか賀茂の川波

たまがしは 玉柏 催馬楽「この山にしげくにおひたるたまがしはとよのあかりにあふがたのしさや あふがたのしさ 堀川初度 四位 千載 冬「深山辺の時雨てけらし玉柏 夫廿九 家集 後京極「玉柏まさきに風にたゝずてすゞえに霧やまずたてつらん

たまがしは 。是八石ノ一之 堀川初度 初恋 後京極 千載 恋一「難波江のあしに埋るゝしたばかる年へてだに人を恋や

夫廿三 みなと 家長朝臣「しらせずや思ひ入江の玉がしは舟さす棹の下にこそふれ 同 同 同「かりそめの浦の入江のたまがしはをとぞろのゆくへだにたえね玉がしはあさましとぞ思ふなる 同 廿九日「よしさらばたえね玉がしはまさとぞふかくぞおもふなる

たまく 後カゲ 下ノ四十 たまく咲つるけざ朝臣はあやうに集りてあなまこのんをそゝして 初秋 下キ たまくあらせあへとおせしかどゆるしのまじられだとうりゆえ 撰集上 下四十九 たまく對面のあひだぐて侍りしかば

たまだれ 万七ノ三「玉垂の小簾のまとほしひとりゐて見るしるしなき夕月夜かも 古今 雑上 敏行「玉だれのこがめやいづらこよろぎの磯の浪わけ沖に出にけり 拾遺 恋一 よみ人しらず「玉だれのうちとのたへまに人を見てかけけるやまのもかげたえぬ月ぞまたりし 拾遺 恋一 よみ人しらず「玉だれのこすのひまもる…とけるやとみてしよりつゝ人をたえてもふこと 西京雑記 昭陽殿織珠為簾風至則鳴 夫廿二 簾 よみ人しらず「むかしたりしとあるさまもあれどもいづれのひまもりてみるよもぎる 同 同 万十六ノ廿六「玉だれのこすの…をいとはぬらんとぞおもへど

たまだすき 。枕詞又たゞたまだすきともいへり 万一ノ十六 玉手次畝火之山のかしはらのひじりの御代ゆ 古今 ハイカイ よみ人しらず「ことならばおもはずとやはいひはてぬなぞ世の中のたまだすきなる 未詳 十七 玉だすきかけてぞしのぶ 同 恋 為家 新六 五「袖ぬらし沢辺のころもさえてたまだすきかけてぞしのぶ 夫春一 信実「袖ぬらし沢辺のこゝろさらになにだにかけてぞわたりなき世の中のたまだすきかけずやちぎりよもうと 夫四 知家「ねきそ今ぞしめゆふ玉だすき雲ゐる山の初桜花。契玄 万七 玉だすきかけぞふ山とうけるをべらねびの山とよむるを 六帖にあやまりてその玉だすき雲ゐる山と訓しより後にはそのあやまりを傳へし

たまづさ 玉章 日本紀竟宴歌「ゆふしでにおもみこゝろねたまづさのたよりにもよしなきゆふべを 古今 秋上 友則「秋風に初かりがねぞきこゆなるたがたまづさをかけてきつらん 拾遺 恋四 よみ人しらず「ゑかくてもたゆくむすびあへてよ 万二ノ廿七 玉梓の使のいへば梓弓おとにきゝつる

たまむすび あかひ 廿二「たまつゝむすびとめむみぐるしきたまむすびきめよまたなびかへ いせ物語 百十段（むかし男みそかにかよふ女ありけり それがもとよりこよひ夢になんみえたまひつるといへりければ男）「思ひあまり出にし玉のあるならん夜ふかく見えばたまむすびせよ 袋草子 四

「あさみつねしは種ともえらねどもむすぼほれてゆきやらぬへのつま 狭衣 三下廿三「たまさかにひのかげにおさうかねばこそむすぼほれびや
せずもあらずへのつま

たまのはこ 玉ノ箱 夫 廿二 大納言実方「鶯の子すがらさいね玉の箱あけてあくるねあかでぞあらなる

たまのには 玉ノ庭 夫 廿 仲実「朝花のちらくにさけば山桜の垣根も玉の庭と見るらん

たまのとぼそ 好忠集「あしたかはつゆひかり玉のとぼそもあふべゆへやへむぐらにこもりて

たまのとこ 玉ノ床 山家集 下「よもやまむしろ此玉の床さてもかゝらん後は何にかはせん

たまのを

玉緒。俗ニイフ 万 十二廿七「うちひさす宮ぢに君もあふまでは玉の緒ばかりあひみてもこひしわたると 古今 恋三 友則「したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれん人なとがめそ 新古 恋一
忍恋 式子内親王「玉のをよたえなばたえねながらへばしのぶることのよわりもぞする 万 十二三「うちひさすやちふあへりとくつ
ねに玉の緒のあはずへいひこゞえていぬる夜しぞなかりし

たまのを

玉緒（あたれつらぬる　たまをぬる） いせも 卅五「玉のををあわ緒によりてむすべればたえての後もあはんとぞ思ふ 新六 五
行家「う稲よりたかくはいそぐれのつら玉の緒とけていつかあひみん 古今 恋一 さ
むく月毎にかけば玉の緒をとけてこたちよあらまでまてあるこそなり

たまのを

。契云 玉の緒のみじかくおもつづる玉ご先ハ短キ物ゆへにいへりあれバまだしのやどといふなり 良材集
ゝバシとのふんやう 後撰 恋「まちつゝ浪月をまどかの稲におのれのあくく玉のも此をなすへらも玉の緒のたえなん
万 十二廿八「ゆくにゆくと恋いたれば玉の緒もおこなはず玉ぐるのあまのかよふまで いせも 卅四「ゆくにゆくもなほへ死なましものを
うるべうすまるたまの緒だえつ 万 十四 東歌「さねらくは玉の緒ばかりこひしくは玉の緒のふしの高根のなるさはのごと いせも 三十段
「あふことは玉の緒ばかりおもほえてつらき心のながくみえらん 古今 十三「あふことはなにのまちつの緒のたつ人よしあなのへの
滝つせのごと 拾遺 恋一 よみ人しらず 続後撰 恋三 貫之 貫之 下 六「ぬきみだる涙のたまもとまるやとたまのをばかりあはんといへ（あれよりまみ 図）
なん

たまのを 玉ノ緒。是ハタヾ短キ心ニヤ 古今 長歌 玉の緒のみじかき心おもひあへず

たまのをごと 玉緒琴 夫 廿三 為家「みだれつる玉の緒琴のことぢにもえぬ音たてる秋のかぜかな 新千 秋上 太政大臣
「玉まどよたむけの庭のあまとおく玉のをごとのよく此ならべば 拾遺愚草 中「いくぞえに
おさまる袖もちるそねる玉の緒にこの秋のしらべぞ

たまのをぐし 堀百 雑廿三「さしつるかづらむもつ紙今たつてふ玉ぐしは玉のをぐしぞ神さびにける

たまのをやなぎ 玉緒柳 新古 雑中 西行「山がつのかた岡かけてしむる庵のさかひにたてる玉のをやなぎ

たまのかんざし 拾遺員外 下「よはまのをるものしぶきは白妙の玉の　かんざしいかでさしそへん

たまのよどの

昊夜殿 栄花 峯の月 六 おそしまきとやどの戸ぶつる音はかあるべきを（あかつきのひきぬる音よりもひどしあはれき）「おもひやまむしやへあるまる
なまのよどの　さ残てぞよし 同 七「あかそそやはとすらん おくりなほしなまのよどのに

そひふしおもふ

たまのよどこ 昊夜床 右京大夫集 廿三 小松内方「みだれてし玉のよどこに塵つもりてありし枕をみるぞかなしき 六帖 六「な

たまのうてな

玉臺 玉葉 雑四 上東門院「ひげだにもとまらざりける雲の上ぞ玉のうてなもとたどらひえん 六帖「な
せんに玉のうてなも八重むぐらえへらん所にふたりこそねめ 拾遺 恋 よみ人しらず 加茂保憲女集
なる秋のさへ 夫 卅 後京極「百敷や玉のうてなにてる月のひかりぞそへ
うてなにみがきたつらひよろづ代とのへなり 夫 廿三 殿ふもこといとて玉の

たまのうゑき

玉ノ植木 夫 廿九 隆季「和泉なるまかでのちぬの玉の植木にさける白雪 同 同 後京極「冬
さえぬ梢か玉のうゑ木のえだの紫は 同 同 為家「はごろもをかさねて玉のうゑきのおもかげもさの梢にさるん花ぞする 寂蓮集
「さむ月も玉のうゑ木のめとまてこのの庭にありぬのみ

たまのおび 玉ノ帯 夫十三 為家「しらなみの玉の帯ばかりうれて雲かゝる海のおもかげ

たまのまがき 玉ノ籬 夫廿一 為氏 仙家秋興「ぬきとめぬ露もまたとせ数ありあえて玉のまがきにかゝる秋の風（セウイ）。はなは貫之乃

しらぎく

たまのこゑ 玉ノ声 夫廿三 家集 雅宣「あきかぜの露にのこれるたまのこゑいかにもさむき秋の夜の月

うた集たる歌どもにかゝんとてよめると云々

たまのあみ 玉ノ網 夫廿四 覃行「天の川みなぎりてゆく浪うけて玉のあみそさゝでくめのいと

たまのきず 玉ノ瑕 史記 亀策傳 白玉有瑕 さごろも 十九 いとうらなくもあるこそそうかるれと玉のきずにおぼさるゝも まうらひ 廿九 あさぢはらなどいみじうおぼえてこそなさせ給ふこそくちをしく

玉にきずあらん世にも住まじとのみ 栄花 月の宴 十五 玉にきずつけたらんやうにおぼえさせ給ふ

たまのゆくへ 古今 哀傷「うつせみのからは木ごとにとゞむれどたまのゆくへを見ぬぞかなしき

たまのみどの 夫十四 俊成「くもゐなる玉のみどのの初霜にまがひてさける白菊の花

たまのみやこ 玉ノ都 夫十九 建保三年 光明峯寺入道摂政「いさぎよき玉の都をかさねてやあけたつ秋のひかりみるらん

たまのみぎり 圭三品 中「むらさきの雲のうへにすみて玉の砌のおもしろくもあり

長秋詠藻 中「君が代をのどかなりとや見るらんもたまの砌につきぞさやくらん

たまのすがた 玉ノ姿 夫三 俊成「きぬげなる柳のえだにさく梅の玉のすがたをみするなりけり

たまくら 手枕 和泉式部集 上「世にとまるべくも傍さむく寝たる夜はたまくら数多くしてぬる 夫廿二 万四 よしもすゞ「大君のみことかしこみたまくらもまかず上にてのちきぬらも 夫廿二 家集 伊勢「あかりせばその手枕もひたすらにうらみさらまし 新古 巻三 夏「みじかきはひとへにくるしあさつゆのたまくらの

かりねはくさまくらせまし 夫廿二 信実朝臣「おのづからかく世をふるも手枕のあかぬ契りたのむやくさん 和泉式部集

下「ゆめぢの名ごりにぬるよ人ふようけたまくらの袖もかはらじ

たまくしのは 新古 増抄云 玉くしは榊ノ名也 風雅 神祇 俊成「春の日も光ことにやてらすらん玉くしのはにかくるしらゆふ 新古 登蓮法師「やまとにはまくらの玉くしのえにてうしろみのやまの神かげ 新葉 神祇 為定「神風やのどかなる世の

玉ぐしのはこそ 風雅 雑上 為家「玉くしのはさしてみえけるすゑの世も神のたまくしのえの枝もあらんさゝ

たまくしげ 玉櫛笥 夫廿二 万四 家持「あけたらばたまくしげあけてあけばたまくしげあけむもいもにあらば あれば 夫廿二 馬房「鏡山流るゝ月の影みえてたまくしげのあらぬ鏡とぞみる

たまや 霊屋。廟 名所「……みるべのみことのみたまに二丁ばかりさりてたまやといふ物つくりてつひにおさめ

つれてこゝにおはしはせんとせきをあけて

たまやなぎ 玉柳 俊頼集 いまだみなきこえねのすぐなるをかきつらねたまやなぎのえだにかけてかみなふのはなのえにふれ

ゐにぐらん 温庭筠詩 注 藻苑有御柳如人形号曰人柳一日三起一眠 夫木三 具氏「いさゝかしこそ絶えぬ玉柳ひまなく枝のなかに

たまはつかえ 玉松枝 万二十「三芳野の玉松が枝ははしきかも君がみことをもちてかよはく 玉葉 賀 長方「すみよしの松も千とせのいはひにて玉の松がえにうつる月かげ 玉檀玉柳の例あれば

玉松といへるは宣長が説に山の根にはふ玉松といふなるべしとの

たまはつる 玉奈ノ灵 幻花 曼殊 好忠 十二月「たまはつる年のをはりになりにけりなほやかへるともなくあらたまとせん

たまはくず 玉巻葛 後拾 秋上 恵慶「あさぢはらたまくずの裏風のうらがなしかる秋はきにけり（葛カヅラ 手ノ八ガ ヤウニ巻スアクレバイフナリ） 散木 上九 晩風如秋「夕されば玉まく葛のうら風にかへる秋かと思ひけるかな 夫八十五 百番

思ひけるかな 千載 雑 廿 なき人の足通「やまのはにある世の中にしのぶるにかくれゐるぞかし

後拾 杉「玉くずの葛しげくもしはさるらん葉におく露にかゝるぞあはれ

たまふり 。常ニ人ヲアガメイフ 万五ノ廿七「あをによしならの都のさかりなるときのたまのこゝろこそあれ 万葉 初 つり

殿に出てまどゐし給ふ中なるの君もさぶらひなむ 万五ノ十五「万代にいまし給ひて天の下まをし給はねみかどさらずて」

○**たまへ** **たまへん**ハ姑息ヘ和ニ出ス

たまふ 賜。**たまはる** 前ニ別ニ出ス

たまはる

○自ノ上ニ云ヘテイフ詞ニテ是モ人ヲ敬スル之 古今ノ和ニクハシク注シタリ 帚廿九 いみじうたまはるとのり 須ナ五 かゝる法の給はるにつけて 末摘廿一 あそびたまへるをいかゞはせんとぞ思ひぐる 志く 帚四 法のしによろしう覚ゆるもあるものなれど 古今五 思ひ給へかうがへしほどありさまをも給はるかな 帚四十五 なるぬやうにたまはるべき事なる 若紫八 いとく人もたまはりて 蓬生九 いとたゞく物きこえたまはりとて御はらからたまはる さかき 里今まで見えたまはることなむあるべきを 若菜廿五 世るの名残にてたまはりけるよしをたまはりたまはる 帚廿七 いかで給はんと思ふたまはる我 今にえこそ 同 先よりたまはりと思ひたまふる 東屋四十四 にさぶらふやはと思ひたまふまじかりけるにたまへ 同四十七 思ひたまふる御心をも 身ちかく侍る身ざまにて 若菜廿一 法侍もまゐりまたはりと思ひたまふる 同九十二 情けなく紀のつま ふさにたまはる さまざまも見えまゐりてたまへりける 同四十 法四十九日まゐりてやすかごとを思ひたまふこと侍るべし 出雲七 若もたまはりて 次ぬ月日やへだてたまはんと思ひたまふるをかへすのことよりもいふべき侍る 印 いとあやしきことを思ひたまふ まで 夕顔廿七 人にもさぶらはじと思ひたまへしを惟光なり立てさは侍る 空蝉廿三 あやしうたまはりくそろくとも 思ひたまふる 手習ー五 うしろめたう思ひたまへ ト一ハ六誤リ之古本ハ うげん廿三 かのことかへりたる心と思ひたまへれば

今本ハ給へるべト一六八誤リ之

たまはるも 玉衣 夫卅四 五百首たまはん 雅有「たまはるなむ我をはらへとなげきけむ雅光のことあやかりたりもなき」

たまさか

遊仙窟 邂逅新交 同十 勝遊勝境 拾玉二「たまさかにも君咲ける花の君が代にあるぞ今日ちたび のちたび 六帖三「陸奥にありといふなる玉川のたまさかにてもあひみてしかな」同九ノ上「たまさかに [illegible] 人の生死ありそつの [illegible] 六帖六ノ上「たまさかに [illegible] 小大君廿一「ちるひてもありとたのみしへまさかに神の御さかるかど

ゆもありとん 外ト八遊行など イフホドノコナリ 紀氏 昔続古今哀「君さゝぞ及びてうらやむたまさかにもあはまし時もやすさゑねと 義孝下ノ十六 おぼろげの都の物の音出まゐさせどたまさかに立つまゝりのあとをひらきあれど 国ヲリ中卅四 たまさかに里にありて 中せらるを今千度は出で侍らるべきまりさきそこらし 帚十五 ひさしきたえどえをもかうらるきさるべくとも思ひたまへど 末摘九ノ三帖 此たまさかなる法けしきのまうり給はで 新古哀一長方「きのくにやゆらの湊にひろふてふたまさかにだに たまにあひみてしかな 玉かつら五十七 山への方るくなりてそありけるゆかりのたまの人も あはれとおもふに見たまへ法師やしのたまひけるのはたまさかに人をいとこちみて 若菜廿七 たまさかなる こぞりのほどくりのたまさかなりしたくそれそゆかり

たまき

推古紀九 如鐶死端ヲ訓ニ 和名四ノ二 鞲 多末岐一云小手也 仁徳紀廿 𢱢手纒而縊死 三代實録 手纒二百具。共ニ宣長ヒケリ 万十五ノ十三「吾妹子がかたみのたまきのいくつともたへん 夫廿一為家「妹が くるいと井の里のたまきも山よりくだるにやどりぬるかな 四季物語正月 小車のさでまつることあるとたまきの見えしかなしき

古今ーなまきへ列ね之

たまきはる

○古来の説にたまきは魂之きはまるハ極なりて人のいのちなる腱之を述ふなりといへり 拾遺哀傷上「たまきはる命はまだいもきはまりぬ世ふいひあへるたまぎはる 万代集五哀傷 家隆「たまきはる命やは もつかりの我ができたればいひたくひて 新六帖四 哀傷内大臣「たまきはる命をうくばりけまゐるをもつるはすらんをとひそこひ やまの宮ハ 古事記下九 多麻岐波流宇智能阿曾 万一ノ廿四 霊尅内の限りはたひらけく 夫十二 定家「秋の月なまきはる よのなかそちのゆめうつで知るへ今ぞまつむ 万一八公「たまきはる内の大野にうるなめてけさあすまでのうらまげの 拾遺貞外上「君はやおほせぬきてのもとたまきはるよそのたふ香

たまきぬ

玉衣 夫九 長承三年 よしとんおもんた「白妙の春の玉衣いかさくやらるとでしこの玉ぞやねねん 万四ノ廿三「玉衣のさゐさゐしづみ家の妹にものいはずきにて思ひかねつも

たまくら

玉床 夫卅二 俊成 よみけて あふ事「玉床ちれむなしの床に生ふる苔は君がまつかげの 散木中ノ六十四「玉まくらの

衣のそでぬれかゝるこの君ゆゑしほくてよそふたゝびねん 天木十 俊頼「たまづさの天のたまゆらさよひさへなみだれや

まさしかるなり淺小竹 千載 羇旅 崇徳院「ねざめの枕もながるゝかむごとに玉のゆらにもたえぬこゝろか

たまゆら しばし心之

神紀上八四 瓊響瑲々此云奴儺等母母由羅尓」緒瓊之音（ヌナトモモユラ）毛真操々

古事紀上廿五 奴那登母母由良尓 冢解三 紀三 手玉玲瓏（タマモユラ） 瓊響瑲々

ヲヌナトモモユラトヨム 万十五 人丸 下廿一 六帖 卅九 風雅 玄「たまゆらにきのふのゆふべ見しものをけふのあしたにこふべきものか

あらぐ玉の緒ナドアルヲ思フニ物ニ付タル玉ノ相フレテ鳴ル音也サテ其音ノカスカナルヲ以テシバシノ事ニトリテカク云ヘルナラン後ニ

露ノ玉ユラナド云テシバシバカリノ事ニスルモ幽ナル意ヨリ轉シタル也 堀初 秋 師時「久かたの天のかぐ山かぐらきくれたまゆら

きえけるものゝめぐり 同 雪 師頼「ゆきてみたまゆらやまんふる雪のかくはつもりぬこゝに白山 同後玉 七夕 後朝 たまゆらさ

天十一 家持 秋風に川浪たちぬしばしまちたまゆらもよう 天廿三 恭愛「女の袖の玉ゆらもこよひもえてこがるゝ 新勅 雑三 後京極「玉ゆらのつゆ

沖かぜに月の霧 新古 哀 定家「あはれなり此ほども淺もさだはかなしある人こゝろる宿の秋風 新勅 雑三 後京極「玉ゆらの

まくらひかりて山陰に出たちゝある秋萩の露 風雅 秋中 後京極「おほよそは羽田の面の秋風に露なりやどる

青のいろのま 方丈記 いかなる玉ゆらも心をなやますべきもの 夫廿六 具親「ねざめ

のなき中に清かりむすびてのあかつきもとしさての玉露

たまかづら

好忠「峯に月やけさくらくにさらでん形のたえひのやの玉かつら 堀初 春雨 肥後「つれづれとながめて

そふる春雨の糸もまね衣の形の玉かつら

たまくしげ

天廿三 万十八 「塩にゆへ玉さくはしく我むまの住めこげんとるて出りせば 夫廿 家隆「万代に玉くしく

我のわかのうけ春の日、我ものどろゆてなさむ 同 同 季経「二百歳やまくしく夜の津に淀は出りと我をとて

やどる月なす 同 同 家集 長明「あま遠にゐるみこのまのあさぢかなきまくしし行の村雨の雲 同 十二 西行「夕露の玉くしく

小田のかけずもらく玉と玉と露に月のどとやどする

たまかづらのまつり 青ヲ 寛日 公美根元 そもそも人に魂魄の二ツのたまあり云 ふなきの八離遊の運魂をまつるさくの体の

中府にしづめる物語あり宇摩志麻治命の時よりおこるとぞ

たまちひ 竜

末谷廿七 父ミこのうしろめでたくぞひぢひちんたまつひのあつまりなりどおぼさるて 夫卅六

あ家「いつまでかゞぢにやどるたまちひのえも見ねばかくありきたのまん 国ヨシノ 中キ七 中納言 頼

ゆかよりあなたに侍るちよ手此竜もあくね見えくだりて 同 中キ九 さもせんとさるてまうこそとたいりしかば竜をた

むづめんとたびくぐて出ありくぞり我見あへんと兵清我もあいたりしが 古仙堂 精霊 天 八 西行「あがらへぬをたくの

たまちひのきつるらんとふくは我に堂とびらふ

たまひ 常ノ敬語大ガラ詞ノ間ニハサミテ云詞故イサカ書ツク全例メシルベシ スマ 罕ておひるてよひかんばかり 天ナグ

初 んくかる人のありさるぞもそえてひくさねるにつけても 見カリ手玉フ心之

たまも 天廿八 家集 兼之「いつくまもく我くらしてあろ川つこうりてよやとく玉藻うろうん 同 永承四年 伊勢大輔「池

の方ちくさのひさーくさらぬれば、底のたまも、光りみえたり 同 同 祐子内親王家歌合 美作「雲の池にひと

ものこもる蓋にあそむ玉のかがみぞうつりけり

たまもどれ

拾遺 恋一 読人「あまもどれ糸のたくまふに人をこそくとけるんしもなるひろけてん 天 卅二 家隆 内々

「たくしそてふりぬる衣のあもとどれとたかいえへぬくりになるうね

たけ 嶽

万五ノ廿五「このたけにひまとふりさらしまつらさまよ 姫 和名抄 十五 嶽 高山名也 美太介

若紫 四 ふじの山をふぐーのたけなどくりきさろあるもあり

たけて 闌 姑 たく 本に出ス

たけ 茸 天木五 教長「松がねのたけゑ白けべのもち紫衣神にこたへて山おろし此風

たけ 夫卅六 家持 言語の部「物やかみ神にあけたのたけえとくあのぶさらぬ淀なりけり ○ ホトライ

同 日 日「物思ふ人のたけぞさぐさけるようにく月代みがゆあらして

たけ ○ 人セイライフ いせも 廿三段「つゝゐづゝゐつゝにかけしまろがたけすぎにけらしな妹見ざるまに 古今 初のほ

ガラス使用

さるかん世をしもぞる 玉かづら 十 たけたく めづけ 別 あく箱二

附 **たけぐち** 初秋 下 六十五 たけだちよりはじめ次女のきよらなるかたちにならびなし 大和物 六 たけぐちひとよりはまさりたる人の髪こけたりけるを見る男が いせ物 九 けしきあらぬおとこのたけぐちなる うつほ 下 生五 翁人はなふのむすめのくちきよげなるたけぐちひとしくかきつらをそへてせする 三寶繪 三 随身馬ぞひのくちたけぐち 同 五 君だちのとあまたひとつれて来りあへるさまぐ物なげなりたけぐちそろそろふ物しあへ かふときもあひてひとあまたにまりちゐるまひおどし大臣といえんにたちひまくり

附 **たけとぐる** ○タケトヂヌトニツライヘルニヤ 玉かづら 上 十三 さうらいひて云々たけ姿でのひろくゝげゆで

たけばしら 竹柱 夫木 卅 喜多院入道二品のみこ 「なさくてはしば木芽のふせやのたけばしらたえむだにくに世をへてや」 同 同 久安百首 親隆 「たかやぶくかやがこの竹ばしらふしよろづ代に藤根めでたし」 同 廿三 喜偶偏衣 為家 「大井川岩のとまやのたけばしらうかりけるよのふしや旅りなりけん」

たけがき 竹垣 夫木 九 従家々 「日ねふる雪にまをるゝ山里しくそ白さけろ我がたけがき」 同 廿一 為家 「山がつのさつきてかひくゝ竹垣のうちにそけても世をやすまず」 同 廿四 「尾山のさとのたけがきあしゆより」

たけうら 竹うら **たけのは** かはりの秋の月のさびしさ

たけのうら タケノウラ 二

たけなえ 朗詠 更衣 宿釀當招邑老酣

たけうま 竹馬 夫木 廿七 新六 五 知家 「竹うまにおひふしなれしそのかみのよるふさごもおもとれやする」 同 同 家集さぶらひ侍けるに たけうま西行 「たけうまを杖ともけふはたのむかなわらはあそびをおもひいでつゝ」

たけのは 竹葉 夫木 廿二 久安百首 隆季卿 「竹の葉にはかなき露のうつろふを見るにつけてもはかなきぞする」 同 同 俊成 「たけの葉にかくる菊をそへつるもはらからさかづきのきみぞみむとこ」

たけのそふかゝるころも 夫木 卅六 家集 六条院宣旨 「たけのそふかけし衣のさゝがりは虎ふすとのべもむつましきかな」

同 同 隆祐朝臣 「竹の葉に衣かけし山中への人の仏となれる世ぞありける」 拾玉 二 「衣をば竹のさ枝にかけおきて虎に身をなげし人をぞおもふ」 宇治拾遺 七ノ六 「ちかきころ唐人竹の林にありけれどもさびしき衣をぬぎてかくる」 金光明経 捨身品 摩訶薩埵園中をあそびありきし時虎の子を産て餓たるを見て衣を脱竹の枝にかけて虎に身をあたへたりと

たけのと 竹ノ戸 夫木 卅 家 顕氏卿 「ふし見山ねざめともよはあるせ竹の戸に風もあきさむの時もきこゆらん」

たけのはやし 竹林 万 十九 四十三 「みそのふの竹のはやしにうぐひすはしばなきにしを雪はふりつゝ」

たけのとほりひ 夫木 十八 六百 季経卿 「あまたたび竹のとほりびかけつゝも三世の仏の名をぞとなふる」

たけのかけひ 夫木 廿三 為家 「山もとの竹のかけひをつたふ水のよりくる世をもよそにみるかな」

たけのよりつな 夫木 廿一 法眼慶融 「うかれしに竹のよりつなちからなくかけてもふるふしの川浪」

たけのだい 右家歌合 十四 「まくらなる大の竹のだいのほとりこそありけれ」

たけのその 竹園 夫木 廿五 光明峯寺入道二品家五十首 祝 前大臣 「ちとせへぬ竹の園なる鶯はいく万代のちぎりまつらん」 同 同 為家 二 「さとりある竹のそとの万代にへても見えぬのどけさぞあげん」 同 廿二 家隆 光明峯寺入道二品家五十首 「そのかみ竹のそのふの末をあ竹のそのはなれの菊の白ゆふ袖ゆく千代迄にぬれてぬらん」 拾遺愚草 賀 韓吹 「つくづく行末遠く見ゆるかな竹のそのふの千代のふかき」 新後撰 雑下 よみ人しらず 「さらにこそ竹のそのふの末をあふみふるふる枝にけふをことぶるらん」 同 廿二 「竹のそのふの末までもくるのたからなれとやんごとなき」 史記 五十八 梁孝王世家 索隠曰 今城東二十里臨新河有故臺址不甚高俗云平臺又一名脩竹苑

たけのまがき 竹籬 夫木 廿二 新六 二 衣笠内大臣 「わがおけべ衣に二衣にうつろひぬ竹のまがきのきくぞさくの花」

たけのさえだ 拾玉 三 「いろくぬはぬひの衣さ我あれとや竹のさえだにかけてほす」 同 六 「風そよぐ竹のさえだにはかなくもあられたけのさえだにあだなるものを」 新後撰 雑秋 読人不知 「さよふけてあらしの竹のさえだにむすぶ露のかたちしる雪」 月清集 上 「ふるほどぬる嵐にたゆむ鴫の竹のさ枝にしばしのくこゑ」 夫木 卅八 光俊 「よのほかそへ竹のさえだのたぐひをりやねにかくるのこまりをるらん」

たけのつゑ
竹杖 〔後拾〕賀 前大僧正明尊九十賀し侍けるに宇治前太政大臣竹の杖つくらしめる返りごとによみて侍りける

たけのみやこ
竹都 〔大和物〕二 このゝ秋之のおやしはまた西六竹の都となんいひける 〔散木〕中五 伊勢の秋宮に侍るれいかく「きえいかゝる竹の都の名のみえて千代ふるすゑをそへてぞまゐる 〔同〕下土 （い生本作りたるところ正月ふん八日秋之あり去年あひぬと呼そてよそかく）かくし「名へたゞ竹の都もちゝゝすまつ来めのかゝるまゝみのえしゝをを

たけのひ
竹樋 〔狭〕四中二 山よりうらつうに落くる水残（お国）不のゝく年のひゞもをくるぞにゆきそやりつくまちうけたるさめも氷のくさびくるたらんにはあひへいのゞとんかそげゐるさるかなりみし（嗜峯し）

たけし
猛 〔竹取〕古 たけくおもひつる宮つこ丸もものにおそ（酔）ひたる心地してうつぶしにふせり 〔同〕月 おもらんとする（印本）とかの國の人来なばたけき心つかふ人もよもあらじ 〔古今〕序 たけきものゝふの心をもなぐさむる ちゝおくれり 〔夫〕廿三 よしつね「ものゝふの八十宇治川のえびすと猶おそろしきるのたけくもあらうる 〔神代紀〕上十三 有武健（タケシ）陵物之意 ○スベテ此動ノ詞〔たけく〕ト同ジヤ

たけく
○俗ニデキタ・デキタ・デキナイニアタルカ〔ミテクレ〕ノ注ニ宣長云利運ニ思フニスベテ此〔たけく〕ナイフ詞注釈シガタシ乖ニアリ考合セテミツカラ心ニアヂハヒ知ルヘシ 注ヒガコト〔芳手〕ノ注ニ宣長云強クヨキ事モアラ子バト云心之作詞皆此意ナリ 又たゞたるをいふはねをのゝあるもナドイヘル所アリソレハタヾヒタスラニ泣コトヲイヘルニテ泣ヨリ外ニハツヨクヨキシカタモナキヨシニイヘル詞也 〔ミテクレ〕十六 げにかくおもしのゝむらのさりとでめたるをもいとたゞくやうくにひるなり 〔横〕上十六 女院のおはしまして宮おはせむ后ゆるもあるあはれをんようにおぼしたり大ねのあかさうちにほつとかよとうきまうひがさくおやしたるとおやしたけく見えさせ給ふ 〔まくら〕上九十五 うつぶせさせたまへれどもいとたけくそのえをあはひる 〔蓬生〕十 かゝる時あのさまにさくたけく世残おはしまし 〔まくらのさうし〕十六 古はてうちのとでは候ふそまどうつまさのあるうしかくうつまうりたるくへもたゝくいへとあまうにうそ 〔狭衣〕四ノ下廿四 さりともむけむふへえをあち字へあるど とたゞうあがさうて物うう〔まくらのさうし〕廿四 うの宮ゆもさうそをたまうのあひ

くいさきつくまやしうきどたゝくかとづもどかも 〔後拾〕雑三 （山ぶのぼりて法師になりて侍りける人につかはしける）長能「何かそのみのいろにしもたけからん残ふる元山ぶにまませるよ 〔拾遺〕七物名 まさけ 浦相「いへどもつらきたくまなるとえあすづさけからぬねこそなかれ 〔散木〕上五十二 〔堀太〕ゑ「あさひさすとをかへの毛のむらさきへたけからぬ身に世残ぞうらむる 〔さくき〕五 ゆきけなるのそなきんゆもたけかねぞとうあはなげきやきまゝひてゐさうし山のあるはけえぬひとんかくし 〔かげろふ日記〕上十三 たゞ死ぬるあかゆもかなと思へどかゆしるそねべ今より後さけくはあらにともえかくえ人でにこかわらんいまどうんうしと思ひてあるに 〔うちとけ〕十五 このさこかえてものゝやうにふりそへてあるをそたゞ死んぬ後ともしと思ふべし 〔籠うち左〕 二ふつよういぬどたけくぬあほぼしゝもゝひて 〔同〕十三日ぶ方くけうせひらぼのはんおどりて 〔夕だり〕十五ニの詞名のたけうくだもりぬべきを 〔同〕廿六 ねるくあるもたけうもむや 〔同〕十五 なるのたけき法名あるらん 〔巻ノ五〕十二 何のあおべうはくゑけうゝん 〔月宴〕五十五 そのきしのまきよけあめでうけまべらけうゝぬ法ひとつ郎をおぼさそうべし

たけのこ
笋 〔赤染集〕一 笋をきさうるえへふおこせて「おやのため昔の人もぬ残る残竹の子ふよりえるもめづらし かへし「あき残つけさくぬくこそ秋のためなるめでたきさうりあるゐとこそきけ 〔いせ集〕十三 梅の木のくさうらるたくんえぬく

たけきこと
〔よりかへ〕三十九 我が家の君ひとの人あれなふたけ死のくるにまして十月の山のあるきあをいとこゑうの法山にも侍るなる 〔同〕四十五 人もあやぞやまもめんをこそたけ死とふおかきとふ此人のかくのあふにけし死んぬるあからんかしとゆまどうつ法しうて 〔よるのねざめ〕十三 とぞぬ残のえたけ死てと にさく物しのふ 〔浮舟〕十八 世宮と去りぬいふずくんづるしくかのよのおぼさんことあどやおかすきこたゞ死ゐるあるれべうだりゐうなく 〔花宴〕中四十二 何のえへつようう法云君の大夕死ところへ只思ひのれうりとだふ法に法しめさるえだりふこそ ぅく 〔玉かづら〕九 ゆげのくさなるやとも何のたゞ死と云あらん 〔よもぎふ〕十 さもうひ死のかあんけきるゝあまりに法の残 〔あやし〕十 亥ふ後の朝とのえ残残んかぐくとてたゞ死たるもあらじ 〔狭衣〕二ノ廿 いとどうるえなきうてよおやかふくうるけし死うるさへさのあふ名もたゞえるすあみせじと思へがまことが法しや 〔蓬生〕三 人々あへふひの君残ふのさうへべき死るあかし

あしねばたゞえたる事は集中そのかみ〔あし〕四十二 まそでのつまくみのやまべこゝのかはおもかげをひきてうすれがちに
たえたる事とあれど源氏にもかぎり〔まあらひ〕十 君ひあまる也よへはまろひをのみたけさいなみえつけのよ〔拾遺〕
二十下五 文二尼二十三ノト オボス西 人ゆのあまかせんも只今さらにいふべきたゞかならねばたゞたえたる事とは侍ゆまだたゆみのまよあるぞさ
なりかねし入たりし君を今追なりつるかなんぞいかなるまに義まとよともおがしくらく〔同〕二十下四十 大殿ノ源氏ノ君ヲ
トラヘ王ヘルトコロニ 汝汗も溶もひとろに流まてまさりてたゞえたるとえはいとかくまびしさえゆゆまなるをせぬひそとおぼしらりさる
汝けしえの

たけあむろど 〔夫〕二十 山家 光俊「道うへてたが世なかゝる宿なるらん竹あむむ門のまへの浮橋」

たけあむろえ 〔夫〕廿一 定家「庭の面ふ茂のふしぶてあまえて世にふりにける竹あむる垣」

たけまつがえ 〔夫〕二十六 〔新六〕二「今年まて心あかねこが国の竹箕がえいくよねざめの風をきむけき」〔夫〕十七 忠房「ひまなくあらみ垂のまがえの下さえてよるみくふりかへことゞれあまりなり」

たふ 塔 〔万〕十六ノ八「香ぬれる塔によりそ川またれくそうふかふあるいふえぬやつこ」〔ゐなかわらは〕十三 昔あ塔ぶたふ〔栄〕物くらべ 十 多宝の古塔を二尺ばかりに作りさげえたてさせあひて

〔赤染衛門集〕宝塔品「大宮にたゝるのたふの教まて法のあゆぞさなをいとけゐる」

たふ 答 〇契云 その報うほ之 當ノ矢ヲイルトイフガゴトシ 宇治拾遺ノ書入 落窪ニ多シ。案ズルニ此契説ハワロシ 俗ニ意趣ヲカヘス 返報ノ意之 〔落窪〕四 これがたふにいとどくてうしるせて後は悦びほどそ来ざりりあへりましやまのえ老ひしへ〔同〕二 ひとむそいろかくさまざくみ語うえ言をせさせるもぬるにぞ哉〔同〕十六 いとどうらまぬひとあひてなぞうとあまそへの心をばおひまさらん〔拾〕十六 いとどうらまかとおもひてまうさまり

〔四条大納言集〕「たふるえへくしそれぬとあるへくのうへをば思ひまさらん」

ありそうるくだそりゐたる女ぞもちよりも男はまさりてうましこれがたうへ心せんぞらんとあらふんづかひせらるをもかくえたは〔宇治拾〕三ノ廿 汝むづかしがりてその僞を返えらひてきそまにに此僞あくしんをあこしてとまし此国のあた
ありて世言をせんとてせましてはまべ〔同〕十三ノ十四 ゑたしえぬ哉を世しるべそのまするあぐりてこゝさん

ぞるぞとそ火を山のごとくたきこゝまた〔盛衰〕廿五 答の矢を射その敵を討捕て〔長門本平家〕八 今なしかたかえ
せられたり

たふせ 答和 〔長門本平家〕八 ことにをあらびいてぬけくとらまてうち合せられることを安らね

たふのそい 答拜 〇コタヘノ礼之 〇〔花〕拜賀来ル人ニハ主人南階ヨリ下リテ答拜揖讓ノ作法アルナリ 〔やどりの木〕七十九 ありそたふのそいしあ

たぶ 賜之 〔続紀〕十三ノ廿 大政大臣止之仕奉止勅止部礼 數々辞備申仁多夫依弖受賜多婆〔続紀〕廿三ノ廿一 朝廷助仕奉利多夫事乎〔雄略記〕夫人名 香賜此云舸拕夫〔万〕二十 乃多婆久 〇宣長云 このたぶはたまふをたぶといひたまひをたびたまふんをたまむたまへをたべたまふるをたぶるといふく〔やどりの木〕七十二 布ゐみどりの衛をさへおそてたぶ〔古事記〕三 ちちよりおやまやぶるりあり〔宇治拾遺〕一ノ十 質のこぶくしくぶぞとそ今くくぐくの勢にみげつけたりたまへ〔万〕十七ノ二十 吾皆し尋まよくたまへあしくろびのあしと夜へわがせ勤参捷べし

〇〔附〕**たなん** 賜バンノ約也 〔初秋〕下ノ卅八 王昭君ノ事ヲ さりともるまでおのくふるるたなんやのたのみ〔発心〕上ノ四十 宮をそまりつるにもたなんとて枕がみにおいて二所ふしあへり〔同〕上四十九 此胡たびどりのえとまやあをそびけるをを制してたなねたまへとて老へねやたびばらく〔竹取〕十 勅令 此女もし來まゐらずらるあらむべき義にへくふふゞりのたなせぶらん〔栄花〕四十一 寂寞 去女引つくろひて仏の御子にさらるへば仏のあるらしたべとあまとはりくく〔同〕五十 はるつかのとをいとおあらけかるさよりの箇ことそおあまりくく儘おの君の和ことにはは陰えんふちうべくゑえて〔さまゝ〕ト同 賜ト給ト給 オノガ上ニツヘツイフト 食スルト四様アルカ。たうぶ たうび 賜フニモイフベキカ 〔竹取〕上府とりをよびよりしてむまるぬを我をとべとふ〔ら〕をかえん〔催馬〕楽 「鶴のこれまろふたゝうぞらんまふを
あさくらし」

たぶ 〇飲食スルコトナリ 〔忠こう〕廿三 きのあえくしとぞそつろれふかし にへくあまうまうでさくかぞたぶるつのぞみてくて〔続紀〕廿五 黒記白記乃御酒食信恵 〔夫〕十 熊宣原集 此かへ九月だり

ガラス使用

良伐 後拾 雑三（ヒガキノカガミニ）詞書云く みなたべんとすくおよそこひ侍りければ云く 拾四ノ廿一 常陸わこえゆへなきど仏のなかなる
ためのまくらのとたふとみるなどいふれおぼえて ぞとうことはもたべざらんなどかさらねばことをとりて
侍りとのへば 落窪 下ノ一 仲正向 ひと日あさ使しくたべなひて對面なりけるを 同 下ノ廿三 兵のなこのもとのしひあくるに
夜中とべく物も覚えでたべなひにけりや 拾遺 雑玉 桜葵の衣裳の肩より松をえしにたくたべ物をぬしく侍り
けるに 催馬楽 酒飲 酒をたうべてたべゑうて 古今 玄 さぶらひゆくをのこどもの酒たうべけるに 目 雑別 云よう人の
衣のこども酒たうびけるついでに「めるとりにくく 目 日 かんなりのつぼにつ あかむにあさてたうべて云 後撰 雑一 殿上法
名まかりあんとしけるよ酒たうびけるついでに 宇治拾遺 七ノ五 大将なきに亜しのどかなくらんてたべとて二ツいとかうえしたる陸
奥紙につつみてきせたりければ たうぶトモ 動カレイフベキ之 落窪君 四ノ九 わきさまなきえんのなきつれなどてなとりよそひ
しいで

附 たりぶ

。常ニ人ヲアガメイフ玉フト同 落窪 八 おかしきのかとあるしたるなんごひざりにはべりたうぶ 同
九 うりきしてやまんなるなどひざうかり座敷ひたてなちかうびるるなどおどしのさいと
あらし 土左日記 えせべのゆえまさらなんとこちより出でうびし日よりくかしとなるかひてる 三宝絵 中 妙法あのべての
大とこのうちやに侍りかるあえねとるんるなぶ侍りたうびし 嵯峨 四 あのかたのあと侍りたうぶ人なり

附 たうぶ

。是ハ負ある ナド二同ク 自ノ上ニツヘテイフ詞之 此詞イヤトヨ
梅花笠 廿三 桂川のそうに負ある衣裳えと侍りたぶそこにはえなるへんなそ同比侍りたうぶなり

たふとく

。尊貴之 夫木 卅四 建長七年 仲恭 「たちち禰の鏡のつくまの三芳神のよし世の神とえるもたふとし
神代紀 下ノ卅四 赤珠のまつへありとへいいへくともなぞ 舉膂贈比志多輔婚 句あり 竹取 廿三 翁
勅答詞 此十五日に返月の都よりかくや姫のむかへにまうでくなる たふとく問えせ宮への 此十五日は人ぐあはりて月の都
のしまうてくへこゝうへさせんとゆくに 多良 廿八 あえこうてふとくて経うちよえたるに 万三 廿 今ふきなれは湯ゆしあるらし
若紫 三 いとたふとえたのきたり 三の川 初 後の世のためにとたふとえるのどもをあちくせさせあひつく 長嫁 十 さび

たえはきえのいたふどみのまう浅せ玉せあひつて 催馬楽 呂 あたかたぶとんなのそふとさや

たふとむ

。尊 え安寺たそ 初もうまいあれるけんおしまひりとみえあひてよりことよあるらくらこびあひて
えうひ 卆 法文あことよみをらひあへずふとびぬえくあふにあり

たふる

。牛馬ノ死ヲイフ 和名 二 斃 多布流

たふる

倒 拾玉 二 世がへたる殿の上の人まつたるとえなをてたふれぬりのは我身なりけり 栄 廿三 たふてかさ
あらしみひせおつべきあとと 挾 下ノ十 荻の上風のあらしにに吹こしたるに織ゆえを残るくもあ
上げて床子も倒きれしことにしくなもあら よはぎふ 五 八月廿日あらしあ年々ごろ みるたふれ
ふしあかひ 九 又足つきの世だ所えむ それる中にもたふれまろびつ 物見に出るも 夕良 三十 きあの七々えに物に門
ふけくよろびひたふれて 続古事談 一 梅の中に仏像有り五首えて風ふきてふかれてたり

たぶれ

宇治拾 十五 孔子泣いて里離ゆさよくおとしなるまや轅をふとびとりちつし鐙をふみはづし
ふみはづし世の人孔子泣ようとまて といふなり こそふ 土 衣の山まかくし みたふれ
歴朝詔詞解 光仁帝宝亀二年二月己酉永手大臣薨 トキノ詔ニ 逆言 加 狂言 タワゴトト 云訓へえことゝ書紀に狂心此死の詔どもにたぶれた心 万葉 七 に多波和射と有るを見え玉へ 韻狂 狂 態 ノ

たぶらかし

枯木 十六 日ことかくとんのそへとごけるごの人のふたぶらかして方にせむるやうも侍るなるとぞ

たぶやり

盛衰記 卅七 さてたぶやりに乗て仏前にそろへて

たぶて

飛礫 ツブテ 万 八 廿三 「たぶてにもなげこしつべき天の川へだてれば かもあまたすべなき 落葉 二ノ中 すさまし
ねごの人うえひえきこぬかとたぶてをうちまえ中納言殿の人々もらだちて云 かねそと
あのふるやうに車になげかけて

たぶさ

。俗ニ手フトイフ手巻 万 廿 「ふたほくたぶさの彼 後名家 かの國をとてかくゐるべきにはなのうたべさの
血をきしあやして琴の緒ならつく 曾丹 四月始 「ふくさまひしあさくの岩中ゑきつらたぶさをひぢて結ひ

あつまりも【後撰】十五【遍昭】五【天和物】六「をりつればたぶさにけがるたてながら三世の仏に花たてまつる」【契沖】序注（新下集 袁撰けがら）はしたるたぶさはふれど極楽の西の風ふく秋の初花【堀川初度】百首 長房「衣うつはちの音にぞたのむなるたぶさに まきのたくひやあるらん【天】五（道綱母集）詩句はいふ文人のふところにまり梅子かむおさへ人々のたぶさにのこりて云々

たふさぎ 【和名】十九 褌 唐韻云 松毛乃之太乃太不佐岐 一云 水子【神代紀】下 着犢鼻【雄略紀】十三 乃嬶 集采女使脱衣裙而着犢鼻露所相撲 ○韋昭云今三尺布作之形如牛鼻者也【宇治拾遺】三 あらはなのまきたぶさぎにさき【万】十六 無心所著歌「吾がせこがたぶさぎにするつぶれいし吉野の山にひをぞさがれる【同】廿二 ふくし（ヒイヘ）【長門本平家】四 木の皮をはぎてたぶさぎにして【発心集】五 水錬のわざめてたりけりかやうの有さま あやしき人たふさぎをあてありし たうる【古今著聞】大千 能登守ら唐巻染の小袖にたぶさぎかきてからあやおどし のよろひきてたちをさふ花おりて

たふか 踏歌 【さうし】注 女たふかは毎年正月十六日男たふかは正月十四五日之毎年はあらし【年中行事歌合】真廿「この ごの春さそをとめる雲のかよひぢてこそ線の白き身すれ【拾】四十三 内宴たふかなど此あたりに【拾芥】廿七 男たふかありけるを

たぶせ 田廬 【万】八 四十五「しかとあらぬいほしろを田かりみだり田ぶせにをれば都し思ほゆ

たこ 【和名】十三 脊瘡 陶隠居曰驢有九種其驢瘡馬脊瘡（俗云 多胡）

たご 田子 【栄花着聞】十五 ゆきとこしふりてたごはこのとこなりしぞやなけたり【題季集】「たごとかさ山田のさ苗 ひきてのちたて植ゆる田子のけしきは【夫】十二 後京極【千五百番】「いねがてにいそのかのあるたごの仮廬よそにおく てのあきぞひきする

たごのうけ 【夫】七 家隆「時しあれば田ごのうけなへみづたも猶いとるべくやさなへこころらん

たごし ○手輿 【和名】十五 唐令云腰輿（和名太古之）

たえ 絶 ○【たえ】【たゆる】ハ別次ニ出ス【たやすし】モ別ニ前ニ出ス ○カニワタリテイフ男女ノ中ニイヘルモ大方ハ万ノ一ニカケテイヘバ混シ出ス【椎本】十九 んにけくいふくとかたくもとよきまへまで【帚木】十三 たへぬとうせあらうそ あひそめて【同】十六 あはしにうしろでも見ひてたへぬ御心けしきうろ【詞花】雑上 たえはてる男の五月ばかりにかひこけば ますてありけるに人をやるとて【花のえん】たえぬる人もあらんなど【清少】すゞろなるおもふこころつるを郭公【万】十七「ひさかたるこの海のはまもこそひけべつ人 あとうたくる（叶ズルニ タエセジ 意カ）【後拾】雑五 赤染「ちよ経るのうらのしほぐきぞたえせぬ家の風かとありける（タエセヌノ例ニテ為ルノ）命絶ゆるにもあるこそのたえずさのたと契らざりけん【万】六 十五「ゆきごとあるよ世の川のこころあるのたちまちほ はきなりのえん【新葉】神祇 為量「神代よりたえずふるへとふかくもさくたえざるぞやかさく川浪【古今】恋二 忠岑「風ふけばなおそにとるよきやのたえてはよさる【椎本】廿一 いと人目のたえぬるも【蜻蛉】廿七 こにありしなるもたえさまでなあだけやべつるを

たえま 絶間 【夕顔】十一 大殿にはたえまおほかつ【あふひ】廿五 たえま遠かれど【後撰】恋二「よそにみてあやなくこひむ いまよりのたえま【同】下「今のまたのむるまでも白雲のたえまはいつ うあらんとさらん【拾遺】恋一「よしのだま系のたえまに人をみてよけるんと見ひけて【同】廿四 いのちだ かりけるにおとうらかのみちの橋のゆのたえまは【蜻蛉】十 なみあるともたえまるくつらく

たえぐ 【相栄】廿二 あふいこのに二三日あるとたえぐにはらでありど【夫】十二 後京極「年へまし雲ゐの月のおぼえげ えまでそあてたえぐ青かたの空の光【帚】廿五 たえぐのすとれね袖にやうあへにうちふれ 六下六 ありことさへたえぐにかるへ【詞花】恋下（男のたえぐになりけるにいひつかはしける）【古今】恋五 藤原興風 女「見しやまてにけひのあのたえにかなりしゆくわざのかれをと経【古今】廿二 いと遠ければあのそげるなるたえぐにしへて【新古】上 春 式子内親王「山ふ かみ春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水【式子内親王集】「かはらぞえみくやどるあのうへにえたえぐみかく

ガラス使用

香の稲妻

たえ 絶（死ヌル／イフ） 〔新古今〕恋一 式子内親王 「玉の緒よたえなばたえねながらへばしのぶることのよわりもぞする 〔今昔物語〕雑下 人の許に侍りける女に係りける人てうらみんとしければ 〔あさひ〕十五 内に[illegible]なく
たえ入りてよみける 〔のせも〕四下 [illegible]たえ入りにけり[illegible] 〔夕貝〕廿九 いきたえてたえはてゝなくなり 〔栄花〕
八 [illegible]たえいりぬる[illegible]

たえたる ○是モ絶倫 意力 ガバリトハナレタ 〔うつほ〕八十二 このたえたる心にうつろひもひなし
○契云 絶倫ノ心 一向ニ サッパリ 一圓ト カイシキ 一向ハナレキッテ 〔古今〕恋上 〔のせも〕六十一 「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

たえて [illegible]のどけからまし 〔古今〕恋二 〔六帖〕〔夫木〕 「風ふけば峯にわかるゝ白雲のたえてつれなき君が心か 〔古今〕
〔大和物語〕四 「[illegible] 〔同〕下六十 やんごとなき[illegible] 〔初秋〕下九十二 「たのめども[illegible]
[illegible] 〔桜上〕上ノ廿 [illegible]たえてつれなき[illegible] 〔同〕
[illegible] 〔土左日記〕 [illegible]ことにたえて[illegible]
たえてことづても[illegible]六月になりぬ 〔竹取〕十一 [illegible]たえて[illegible]
侍るを[illegible] 〔帚大〕 [illegible] 〔同〕廿一 [illegible]たえておもひ
[illegible] 〔浮舟〕廿三 [illegible]たえてせば

たて 経緯 〔万〕八ノ廿二 「経もなく緯もさだめず[illegible] 〔堀川初〕紀伊 匡房 〔唐〕
[illegible] 〔後撰〕秋上 [illegible] 「秋の夜の[illegible]
[illegible] 〔和泉式部集〕上 「[illegible]秋の[illegible]
[illegible] 〔万〕七ノ九 「三吉野の[illegible] 〔和名抄〕 緯 [illegible] 織横絲也 [illegible] 緯
則経可知

たて 蓼 〔夫木〕廿八 ホタテ 水タテ アヲタテ ヤホタデ イヌタデノ

たていし 立石 〔あさひ〕十三 [illegible]たてる[illegible]人にのみ[illegible] 〔夫木〕廿二 家集 [illegible]
[illegible]たてる[illegible] 〔同〕三 〔同〕[illegible]
谷川や[illegible]たてる[illegible]山の[illegible]

たて 楯 〔和名抄〕十三ノ廿 楯 和名太天 〔万〕 「[illegible]
〔イホヌレ〕 [illegible]たて[illegible]

たて 〔神代紀〕上ノ十二 所植此云多底婁 〔吹上〕下ノ廿七 [illegible]たてる[illegible] 〔古今〕[illegible]
梅の花[illegible] 〔同〕秋上 [illegible] 「女郎花[illegible]たてる[illegible] 〔同〕
〔源氏〕上ノ八 「女郎花[illegible] 〔後撰〕[illegible] 〔大和〕六 〔遍照〕十五 [illegible]
さふけゝるたて[illegible] 〔吹上〕一ノ下 [illegible]山の[illegible]桜
さる世てたえく[illegible]

たてる 次ノ**たてく**ノ所ニ附ス

たてまし 〔夫〕廿七 家集 〔新六〕二 鮎二 「[illegible]山川の[illegible]小鮎のたて[illegible]世[illegible]

たてぬき 〔夫〕廿二 家集 「里人の[illegible]たて[illegible]

たてく 〔源氏〕六ノ下ノ十四 服[illegible]たて[illegible]

だてら 〔狭衣〕一ノ上 四十二 法師ノ身カ 童ノ身 法師だてら[illegible]
[illegible]

たてまつる 奉 常ノ敬語 〔きりつぼ〕八 御[illegible] 〔土佐日記〕[illegible]
〔きりつぼ〕八 [illegible]たてまつり[illegible] 〔相示〕七ノ五
[illegible]たてまつりたまへ 〔あげまき〕七十六 五六日[illegible] 〔夕貝〕四 惟光の[illegible] 〔のせも〕

ガラス使用

八帖 人のゆくへおもひてたてまつりて 古事記上卅三 登与美岐多々麻都良世 きうかせ十 一の宮をみたてまつらせたまふにも
帚四九 うへにもいとたてまつらん そをも十七帖 人々さけわたてまつりたまひたるおほみきさけたまひあり 拾遺雑下 以ちの
まうとうにみたてまつりたることのなくなりにけるがうち 同 天暦の御時一条摂政蔵人にて侍りけるに帯おけて御碁
あそばしけるまけたまひてうち 枕四十六 めづらしきものみたてまつりて 若紫四十二 御文たてまつり給ふ かくことにたてまつりてん 後撰恋下 遍昭
をりつればたぶさにけがるたてながらみよのほとけに花たてまつる

たてまつれ

奉マツラセヨ（約メタル也） 若菜上十五 又の日は御みきたまへり 紅梅十四 たまへりしとて 宿木二十三
御使まうでたまへり

附 たのまつる

土佐日記一 ぬさたいまつらする

附 たてまつりもの

高光 たてまつりもの かくとこしと云ふの宮にとひあつるに橋のかりたる桜の実をとりてそれにおほせたてまつらんとて 蒙求 郎胡四十九 標せをそひしいはぶる伏あればたびつくはゆまわりののたてまつりせんなどいひてのち
是七常ノ敬語ニ異ナルコトナシ但見何トイフ折其祠ノ間へオキテ六リ見玉ヘ何ナド云ル類之

たてまつる

岑ひろふ廿五 其人とく参りたてまつりたる 松風九 ろまりたるどもを見たまりて 宿木十二 むつびろげの人の見たまりやるにあたなもあらはれし 同十 見たてまつりたてまつるかたきとて 手習二十 御たてまつるらぶるに 同廿 見たまりいけたり

たてまつる

是ハ衣ヲ着セマヰラセ又ハ輿馬車舟ナドニノセマヰラセ帳ニ入マヰラスルナド其コトトリマカナフコヲ云リ 枕六二 たまりたる御そに 同九二 わざのあつやかなる御衣たてまつりて 同五十五 しろき赤ねの御ぞのりよのすけたるうちき又たてまつりたるもあまたたてまつりて 白えも十六帖 ここいやさしの天の羽衣たてまつりてあかうさけしたてまつりそれ 狭衣五 御装束の宮一のたてまつりしに 若菜上十二 あさぎきぬたてまつりいかへく 可笑下八十 さてみなたてまつりて 狭衣十四 御帳たまふへの柱のもとにおし出けたちも

あさし 所々やつしたまりひつくろひて 宇治拾三十三 大嫗ごぜんの御へたまりたるまくりをれば 同十三五 帝の御せとみゆち
おうりたまへて 枕九十一 鶉ノ三ヲ 法にたてまつるをわすてくる党にたまりて アカレ十二 秋のあけがたそぬさるれ木の丹に
まれにそ例の考てを込のたりし四五人おかりてたまりぬ 同十三 氏族のたちにはやとくおやし上ちと乗りよりお車に奉
まうつるとて 大将下 御車にたてまつりてぞ出むかへの人をまきてぞたちおはしまして泉のあたりへり 浮舟十二 御ついで心のあわぬ
はでなる車にて今もとより更に馬ゆへたまりたる 案ルニ召サセ奉ル召セヲ略シ御帳ハオロシ奉リ トリマカナヒ奉ル心ノ上ヲハブキタルニヤ 枕三十三 神ハ八さくにするがおほきみの花のはしに奉るなどいとめでたし

たてぶみ

手本初 まさの紙たてぶみにてくろ木草の花にたてけるなり 浮舟五 又はとくくりてたてぶみなりける
てうく此たてぶみそのへばけり女の手にて

たてく

専ニスル心也 ム子ト心進ミ 俗ニ見識ヲ立ルト云心ニモカヨヘリ 帚木十 あまめくりて助をたてく 画合七 冷泉院 西ノ一ヲ云リ たてく好ませたまへばにや二なくかきせたまふ 同廿七 いとよしありてあはきつけに西をみんたてく好ませたまへば 乙女五 学問をたてくもおほしけ言ばおんふとぎにくまつけあひしどおかへるにかしこくらん 狭衣廿七 ものくれも紙たてく お心しめとるに 聖分十 親みなどの御ぞうまをもいかも左右方さうるをおたてくぞも又かどうかさんの心おり あげまき四十二 そのへくも気に必ずしてかでしのまや一にまさんとおひさうきうまめにらど 宮一十三 たてする所旧よりいとさけぐる人の本性あて 帚六 中の品になる人の心くおのがし此たてくるおおむれもんえる 枕三十六 清行成ト中ヨリ いまし人そくおうし心気るとたてくたるるあなくてたゞおりそるるやうるるを時くさのそ知りたるに 蓬生十 さもおなびものあるんたゞそれもあるまで法名をの心もおいそかくたてくするはんならんとおとえつぶやく 柏木四十五 あやしう情をたてくる人はぞぞ物しあひるえば 散木下十 色好みくたてくる人の男かぞへるにいかあるべからむてたへむ也てよめる

たてく

此タテイハ イヒタツル ナド下ニスヘテイフスデイ之 東や四十四 せあてそのうしたてて

たてあきら

立部 野わき九 ひそぞろふ在みせてさるとおもふいやうの物 さく宮九廿五 月のほどしくまねるとて

もとのやどにかへりけるを 拾 十二ノ七 たてまつるあやしげのうきみをひきちて 宇津保 たてる柱に立並びてさゝへ

やぶりたぎり

たぎ

○タグ縄ハ 拷縄コレト與ヘ 中務集 人の家より滝おちたる所に打ながめたる男あり「いろぞふる色さへ紛らん川波のたぎつをまとはす岩の花より 契沖河社ニ云 大凡カヤウニカケル詞書ハ皆屏風障子ノ繪ニ合セテヨメルナリ いろぞふるぞ紛らんト八馬ヲトメタル男ノ滝ヲイヘル〆 川波のたぎつをまとはすトハ馬ノタヅナヲクリテトムルヲたぐトイフ 万葉十九 二十二「へナ世世にみるたきの白浪とヨメリ 古今ニ「あまのかはらへこぎよせよとヨメルモ たぐるトイフニ滝ニツヘテ道コク我せ人カク宿ノ花ノ見スグシガタクテ馬ノ引トヾメラルヽニトヨメル〆 たぎつまどはすトあらるヲ写シタルガヘタルニモアルベシ 以上 古今 雑下 四五「おちひきあへひろの別れにさとろへさそあまのるゑそへきのいさりせんとは

たぎ

彈棊 後漢書 梁冀傳 梁冀能挽滿彈棊 注 挽滿猶引強也 藝經曰 彈棊 兩人對局 白黒棊各六枚 先列棊相當 更先彈也 其局以石為之 又 老学菴筆記ニ見エタルモ大抵コレニ似タリ 但局狀如香炉蓋 トアリ 又案ズルニ 西京雜記ニ云 成帝好蹴鞠 群臣以為勞 帝曰 可擇似而不勞者奏之 家君作彈棊以獻 拾芥抄 天暦殿上ノ条 圍碁彈棊盤 在大盤所 古事 四上五 たぎのく 雅季 ニ 碁すぐ 六 たぎのさんずるほどこそりはべれ あかきさへひるさもなし

たき

瀧 新拾 雑上 「山ふかみ椅をさしてながれくるたきのゆくてに落つるもみぢぞ 古今 雑上 遍昭「水上のこゑひとつの紙流れくる滝ちとをゝくの糸ゆぞ有ける

たきどの

瀧殿 松風 六 にしのたいの大かくらの南にあたりて瀧殿のくんだんなどおとらず面白きところ 後拾 雑四 大覚寺のたきどのを見てよみ侍りける 右衛門深湊

たぎる

万 九 廿「川の世のたぎるを見ればなみもちりぞたぎりておちくるも見ゆやどるまりしもせド 散木 下ノ廿六「たゞみなる岩ぞとゞむる みつまだ 新古今集 廿六「花をとさ山水をたぎりつゝゆくあさぎの川もたぎりつゝ落ちくる あかぎへつゝすゝ 後拾遺

「九 たぎりて流るゝさるる水のやどりに 後拾 雑六 非秋「わくかはたぎりて落る瀧つ瀬のおちぶるみどりあまの足ひとそ 散木 中 四宮もびしさ 大鏡 六廿 水堂の南東にあるたきの山川のみち 宗祐 三「おちたくてよる瀬にみるたきのたゞりて人をやうにおかくなる 宇治拾 三 二三 たぎりつゝゆくおのてふかうる

たぎつ

万 七 廿三 落沸 ○湯ニタギルノ 新拾遺 秋一 ならくつゞく ぬる 拾 秋一「ゆそ一かゝりのおぬ袖うちがれてたぎつんあり 古今 恋一よみ人しらず「もみぢ葉の山のまがれてたぎつんぞせきぞうねつる 同 雑上 よみ人しらず「それちたぎつ滝のこゝろ年流れありむにならしかなるあまの 新千 秋上 読人知らず「あまの川あし女袖ぞとのれる たぎつ瀬に袖はぬれつゝ 式子内親王集 下にのこせるてるくどめてたの袖これたゞつつまきるなり

たきつせ

○沸ッ瀬ニヤ 前ニ出ス 後拾ノ哥ヲ見レハ たぎりておつる瀬のせナヨメレハ 滝ナ瀬ノ心カ 滝ノ訓モ沸ヨリ出タル 訓ニヤ 古今 春「ふる雪ちるぞけぬらし足引の山の滝つせ音まさるなり 同 恋一 よみ人しらず「滝つ瀬の中にも淀はありてふをなど我恋のふちせともなき

たきのおとみ

瀧 岩壺 夫 十九 甚 夫木 拾遺 秋 三「あらしふくみねのもみぢのながれたる滝のうへさへみゆるかな

たきのいと

滝糸 風雅 雑上 公定之「松の音もとはぶる秋風に滝のいとさへひくらん 拾遺 雑上 貫之「ちのかずはさしも滝の白糸 風雅 雑上「もとぢのなれてたきのいとよりおちくるこゑあり 後拾 ○たきの白糸 続後拾 秋上 意覚「滝の上におほむまとべば白糸をよどみなく落ちぬるかな 新後撰 夏 為氏「手のきえさしてよるも月夜も年ごとに絶えずちる

たきのなみ

新拾 雑上 公之「あまたとちて風やふきこく岩まを滝の音のきこえちりける

たきのせる池

夫 三 五 甚順「立田川たきのせにかよふこと人つゝいのりくらし一八君がためとぞ

たきぐち

滝口 夕皃 花 大かうの滝口にありけるかはいとつゞくおちるをして 注 蔵人被官ナリ 院ニテ八武者所ト云 清涼殿ノ滝ノ下ニ勤番スル故ニ此名アリトゾ

たきまくら

頼政集 下ノ大「世をもちあへきとなりて落る瀬の我なをたつ滝枕より 拾玉集 山家 師頼「山里八

ガラス使用

ねざめの床のさびしきにたえまなき音あるは滝浪のうちなり【夫】廿六為家「いつをせんたえのいはせの能登はえらやうぶらくぐりつゝ世代

たえあらし

【栄花月宴】たえあらしの音のみしきりなるけしきに四位少将よびよせてたえぞく絶えさせてくれば又ある我が出づたる滝あらしとぞ

たきゞ

【後撰】哀 村上御製「山人のこりる薪は君がため多くの年をつまんとぞ思ふ【夫】廿八哀 後【新六】五「いつかせんとひとおひとりにそふくまん世の薪けつくるもなし

たきゞつく

【法華経序品】佛此夜滅度如薪盡火滅（ホトケコノヨメツドスコトタキヾツキテヒキユルガ如ニ）【玉葉】釈教 法性寺入道「人たまびのりにあへ日またたのむるたきゞつきゆく縁にのこりて【玉ちる】上八三 秋たきゞつきぬる世のまとひはむろを【後拾】雑六 若律師慶暹「常よりもよのうきことぞ哀なるたきゞつきゆく法のまとひは【後撰】哀傷 法住「いにしへの薪もきのふ代りつきてぬるをみるぞかなしき【孟子】尽 滕文公「たきゞつきゆくものにこそ…なりにけるやなむごろとみるぞかなしき

たきゞこり

【栄花初花】十五「家の世講おこなはせ給ふ月おほくぞ春の日にあそばしけれどいとかしこき六位衛府などしたり水などの仕へまつる数々ら僧たくさんにて花たき人さまぐおはしましめでたうたうときに【同清末】十二薪ごりのまりさく心をたてまつるらしたきゞこりあまたかへらくる

たきしめ

炷【源蛍】十二 えならぬ炷をひたきつくたえのゝけぶりぞきなひて【宿木】四九 よのつねの香のうつれたきしめたるゆかも似ぬほかおり白ひとつの代

たきもの

【大鏡】三【夫】廿二 よくあはせ「たきものゝこのしたけぶりふすぶともわれひとりをばしらせやは【拾遺】哀傷 三条院入道大臣「たきものを雲のえにかよはせてたえず思ひのけぶりをたきものゝこのもなきつゝるかわきさらん【夫】十二【古今六帖】上 十二まうらん【拾遺】三 くさぐのたきものごもらぬえ香あまたさまに百歩の外をもなくまえ白ふさとふことにせよあなり

たゆ

絶【堀河初冬】残雪 匡房「道たゆといとひし物を山里にきゆるはをしき冬の雪かな【万】三十四 春の雲もまなのたゆがくもあらばさけるなる山ふたゆる月あらめや【玉ちる】四 なかなかたゆる時なく【拾遺】雑上 業平「松風のふくにかひなきちちはくとたえ

たゆたふ

不定見者【万】ユタノタユタトモヨミテユタクノヒハ詞ニテタユタフト同シユタクト動クサマヲ云フ【万】二廿二 大船ノ猶頭（タユ）（案スルニ此万ノ文字 ○猶頭メ不変ル ヲ見テ解スベシ イニツカヘリ）【万】七【六帖】三「大海に嶋もあらなくに海原のたゆたふ波ふたてる白雲【同】十二 廿八【同】三「大船のたゆたふ海にいかりおろしいかにせばかも我が恋やまん【同】十二 廿「あまの雲のたゆさひやすらんあらば【同】十九 廿九「あまの雲のたゆたひくまば【六帖】二十「こともふのきこんとおもひくちしの底の白雲たゆたひより【万】二十六「大船のえつる泊のたゆたひにものおもひ痩せぬ人の子故に【同】十二 廿二「白妙の君をとおもふつゆあれぬいのゆふあをばたゆたひけりて【宿木】見ずごもよふたるびくまさのくもたひふあよふ我なれど定むる【同】三二「この世えりよらせる妹よ山川のたえくのまだまてとおもたくる君【浜】九「ことの縁にひいでむらすゝつるで縄をたゆたんこまうらめや【玉ちる】上十六 んよるとく秋わひのへてもまたふこの言もつくぞ【玉ちる】六 よるくゑびふことたかるいたゆひる心くつるたゆたひつまがくしくも出てぬれどにさく【浜】七廿六「小あまりひくまの縁のたえくまるはさはなるままにつよるの浦なる【名所】四 かゆくる代りるんこと我ちとくにさへとひとまたひしひなどの【寄蜂】三 かいにむかしげませぬうそのあかひまでとふるこまのこぶつくりまのあとの心くつるまはれぬもつるかきさへたゆひけ【東堂】十三 いざやこまやひとたゆひたるを【紫日記】五十六 たゆたひどもたゆたひて【和泉式部集】上 二「のりしくのの風にたゆたふがるあまにあくぞとむるも花をとそつるまこは灯の前にえかくよくといふ人を

たゆむ

【続紀】廿五 無怠緩（タユマル）【文選】怠（タユミ）油断（ユダン）【まくらのさうし】十六 中世あるる者 病スル所ニ 立つくまさるやふえくあへだらまし～うくおひいひとて女房のたくむ又さるえぞねやどのとめのそだつる【枕】六 廿六 あつまりてすそまとめたまはむれやきそひゐて【カゲロ】十七 くわう法たゆそのまだまさるり【夕良】十七 たゆまはさはうるあまけだあもたゆまるるこそうしろめたけれ【枕】四二 ひつまごもたゆはばつゞひせらる【同】廿二 女房のさうぞく裳からあひざのおにあひおまがおうしうてもらふらうる【同】二十五 たゆまりてあさうしの日のなひ【同】五廿一 いとまよねえ待ちのけにはべるめうをたゆませあないとんえ

よく侍る庭也 [わか紫物語]廿六 二言ぬやといへんと思ひてたゆみ給ふ [夕霧]十七 かくうらみてたゆみてまどひなく侍るべ [赤染]八十

わかうたてたゆめあへるといひしけるにわかなからふゆて我方へいふなり [夕ぎり]廿七 仏のけのたゆめなるはや [枕]十八

こまかなよのかせんとこらんとおもふにへつひせちをもおかしくはいとつゝまうく何ともおもひたちぬやうゆてたゆめ給も

おかし [やどり木]卅八 さてもあさましうたゆめくくゆりきこえずしかどに [落くぼ]一 [illegible]てよひあるまにべもあそせし

たゆまでふしたり [落窪]十七 月ほどへてのほどやをとのみおほたゆまたりつる [枕]廿七 そのたびくくりてすりひこえまゝかゝわし

おのつからもやかやまえんとおもたるまつるに露へ来よ名も我ゆへつけたるん [新後拾]恋一 [illegible]うら風のむかへ塩

ぜふせく来のたゆむ時なく身もなかまつく [続千] 尺数 定家 「こゝろ人岩尾の時はちゝへともたゆますぎのあるうちの沖来

[すなだうら] 二（妻ヲラン） 見えはふうぬとく世あるとと思ひいりあへるさ人のたゆまるをとゞ（ケクロ）めてうら

たゆまらく

はちしとおもへば

たゆく

〇支体ニイヘルハダルキ之心ニイヘルハタルキニテ行届カヌ意之 [初つ花]七 まみえぞものしたゆげにて [同]右のと

うるしげにたゆげなるまでに [あさひ]廿 ほまえ我のしたゆげにしておげさく [古今]恋一 [六帖]五ノ下 「やよともこそもこゝのの

えんちへなまやまるもたゆくなるかもしもちらく女郎花ろ旅 君がすむりぬる人の [仲文]

廿二返し 「なにもたゆくたくうひうもの二ろねばれぬるものすやくなりや [萬葉]廿六、[寝覚]六上 「ひろ袖ほうつらうへつまと

みひたゆくつゝやおほずし 扇子の花 [宇治拾遺]十ノ廿三 みひるたゆくもあらば [重之]十三 「天の原ふるたるかなるの羽た由

ときてかくせそのえるもえさくろくるなる。 [古文記] 為手とへなするあまへおのづからうふをうふたゆからばもあら絵

とくそをもてぶへく我らへりそるよりいやさく [かうる]下ノ三 あやしくたゆくおろかろうる本性ゆて [紫日記]廿六 たゆみぬんさてしえ

たゆきひさく [かげろふ]十三 ちかはじん やく放ちあるたるにん安くてくるものひそうしまようりけんうしと見ろ中やものろかたゆく世

づらぬんのさくやしく [若葉のえん]下 「君によりたゆげに袖もひちはまてべるまし よりしもえことをつまに [曾丹集]百首 春

「ろらぬもこぶ [illegible]のゆきのうみにひろさまてせへうさ人ありてひびきえるる [古今]恋三 小町 「こゝるめなるみのほとがなりをうちうら

はなんやうるようてあまの中たゆくくる [狭衣]二上 廿九 のひるてゆきとも しそのえぬまるぞとんぐる しけう

め

「夏にだにきえぬ夜の秋やつもるらん時のなかえてこそためなれ [万]十二廿八 京師（ミヤベ）邊君者去（イニシ）之乎孰解（タレトケ）可（カ）言（ワカ）

紐（ヒモ）緒（ノヲ）乃結（ユフ）手（テ）懈（タユキモ）毛

ため

為

[拾遺]一 百廿 「こひあへるえ後ろまるゆきせんいひける月のためこそくるまで流ゆくかしなき [万]五ノ十一 「旅のとみならも今もも

えてしつまかりしきふ心の都ふゆきえてこん [うつほ]廿 かの藤のためまでこそしもおやしやかりまり出る人

[うつほ]廿八 此折のきよらをつくしあらんとまつるため [帚木]九 きえだちの底ためゆゑへ [同]八 此歩ためゆゑへ上が上をうり出ても従

あく渡ゞさんてすか

ため

揉 [たむ]ノ訓二 已ニ出ス

ためらふ

[きりつぼ]五 やためらひてあるせごとつくへ侍也 [かげろふ日記]下ノ上 いまぞうるうるえくてとうつためらひく 日ごと

[蛙]八 かえくらにまだりん侘ためらひ侍るほどに [タマツノムラ鳥]五 宰相涙我こそばしてとそえりうそのも

のあへのど こらく 涼宰相かけくためらひて 日ごろ [狭衣]二下 廿四ホリ川殿狭衣天ヘノボリ玉フトカナシミ玉フ所ニ ためらひて室和子きりかへべ [あげまき]十一 こちれ

かえくまだりうそや海きうら侍るをためらひく [蓬生]中廿七 笑えおきれ人と只あへつまぞどこまだりん侘のひとあやしうれく里

つまだためらひ侍るぞきくらえ [少女] 日ごろいるれ侍りてきく今すゝあるとすごしてためらひく系の侍らん [発心集]

六千モクテしける我ためらひつゞゆるへ [白文]廿八ノ四 晩起ニ臨ミ健且間ニ行 [風雅]雑上よ数人 梓弓ためらふ程に

月かげのちの我のこえきく人まぬろうる

ためし

〇注様体之。 本心ハ例 字ノ名也

例

〇[拾遺]賀 ムニ 「万よろくまぬく [後拾]冬 「年くまくまゆくこふうぬまへ花のためしに流ずらん雪

たゆしほい此の方をもまうべし [きりつぼ]三 こゝろくのいぞまとむ系我のためしと君我れるうかるを [落くぼ]四 女の男よはまれなる

あうて揉まきのためしもひろめくべうまゆくに [同]廿四 やうくあまのまくにもあちえけうくのてうろうづきふ

かてあらまし たゆしもゆきうとおやうつみくさ [帚木]まきその女流のひとこぶうすて初つぶの安衣のあゝはせそのよろく

はよあらは世あまるうるりのふあるしてへのそしうまをもえそぐうる世なる世のためしなもうりぬ笹のかるてなし [きりつぼ]二 のよ

なり［栄花］十 後の世のためしにやこんせぬく君びとびとするのぞかへなく［同］二九 うのはなをしへこそあるべきためし
ものありけれ［枕草子］三巻 「花のさかりは古のためしにまさるも事ふるもあるらむ 十一 ［野つゞ］ たちまち紀氏ほまれ侍らば

たみ
［新勅］賀 前関白 「初春の花の都に松をうゑて民の戸とめる千代ぞしらるる」［新古］賀 民のかまどに六線人
［竟宴哥］国経 「おほきさきたまつくりのかまどのあるをふりさけて民のかまどのたえぬべき
なり［夫木］三十五 後一条入道関白 「いつまでと秋まつの衣ねさきかけてあかまたたみぞなのひまありなん［同］月日 「むらさめに紀世乃こと
まりはやく民のちからをたすけやあがる［同］名家 「いつはりて民のなびかさん小田のなへ苗にまかせぬはなさく［同］
夜逢 家集 「世中を治まる民ぞ豊かなるよろこびあるわれのえ［同］十七 日 「秋稲の香稲田のなへ苗里つゞきの民の
同 救ふるよの民ぞなる［新六］五 家 「秋さむるにまさる民のさとよ見ゆる音もさびしくおもふる

たみのやつこ
［夫］廿二 行家 「ふちもたみのやつこのくるしむるも衆のまぞやまとめね

たみのかまど
［拾遺］貞外上二 「国にあるたみのかまどのけぶりをも外山のすそのかとぞたえらるゝ［同］廿二 ［玉葉］六 為家基政 「昔よりたちこそ嬉しき民
花の都にいまらく民の戸にあるちよぞしらるゝ［夫］三十五 光明峯寺入道摂政 「初春の
戸のかりにさきは孫子の里［夫］九 後一条入道関白 「千代までも民のかりやたえざらん秋田の朝けの

たみのつき
［夫］五十五 為家 「思ひなきは民のつきのなかりおほけなくかのやまとむ同じく

だみ
言イナマルヲ云。本語 だむナルベケレトたむトイヒシ例未見及バズ［白文］西舌 金氏村中ノ一病夫生涯
落性靈 迋 ［拾遺］七 物名 たみだみ 「おもふまでやしるまたくのうちかへみてこそおもひしられ［夫］二十五
［山家］下 「常ゝ田舎の谷の果ての里ど　だみたるまをぞ見ぬるなり［為家］十四 治ぞしたて［千載］十七 かそひいやしく
ここそだみて［野つゞ］十 おろくかみたることびさる消ぞのとだみたりかる［東鑑］三 都わらちのまちとしだみたる言

たみる
ゆて［風雅］序 だみたるあとの葉にはくあひさるよざみりをのびあらんや
［夫］三十六 為家 「萬代の田まちにひげをむどてつの露はまる一宿そしぞなふ

だみさう
△彩色スルヲ云 金ダミ 銀ダミナド今モイフ詞ナリ［正治百首］花光 「いはそてすゞしもゆ浦の月をまきはさみ

さるむかし［源氏］ 源氏絵十巻 たみにたる料帋につけさく

たどろく
［源氏］浮舟 文の色もたどくさくも甚しう大文字りちとなくありけれ［帚］十四
さやうるらんたどるにたえぬべき人めきこなり［浜松］二 二十 つくしを見ずとまたおぼつかなくつゞらく
ろがひきのおひのおくてもたどくなり［散木］中 四十八 初恋 「風吹へたどろく高の松きしやまに人の恋ぶ
かたく［夫］九十二 後京極摂政 「たまのなかのたどろく雲のた人すより星みへそむる村雨の空［慈鎮］九 十六 たどろくかけてしも
オそこふとまろき人［堀初] ［散木］ 「福谷かつたふでの橋ある心ぞ都さてたゞくたどらあるのなり

たどぬく
［慈鎮］十八 三十 たつほぬりつとやくとやどにとてたゞぬくみちとそ

たどろ
シカト キウト之 ［竹取］上 二十四 つろく後つきの中にいきしうなりもえそひて［国ゆつり］下 四十七 家の春ぞへ
くまりたる月うくそぬ夜すりのゆふてしに人たしろまてなきなく　てありもてさへいとさふるきまさなめく
まりしからあるう［古今］序 物ほうにしてもきもありたしろまらば［夕良］五十一 たどろまらぬどもえひとさまざまにまでへ
ゆやとさてぬきしうば［落窪］上 五十七 八月ずりつにさへれかりしどたどろゆるきぞらけてあまたらば［芳忍］廿人へつそへ
てもかたどろにはきにて［夕良］ 十四 たどろにその東秋ぞこ年し［葵氏］た見ましてもそ知らぬたどろうのあく
いとあやたるにあどりはのりたらん［宇治拾］六ノ二 たどろに妻のためにゆ仏経をかきて人ぞるとふべきなりとて［方丈］十四［拾］四十八 寂山の雨
「たどろよろうにひきをたてまつりをぞ休みにもり暮ぞ夜ぞへききや［楊子雲長楊賦］覧其切 焉

たどるむ
［神代紀］上 二十三 辛苦降 ［同］下 廿一 嬰 羅 困 厄［白文］廿二 過 蒙 見 窘
て此道をたどろむとて 歌のさ きぐ 作 つなむくなり［竟宴］みことのりをうけ
○是ハ好ミ嗜ヤウニノミ聞ユレド此道ヲ己レガ業トスル心ニヤ猶用学ノ心ヨリ轉シ来ルカ［今昔月物］七 私家の名を
たどるたしこそ甚あゆる人なり

だしきぬ
出衣之

だじゃうてんわう
［義の子ら系］廿 其秋太上天皇はみぐらゐにつき法後さまして

ひ

たひ 鯛 〔六帖〕あこぎの島にひくたひの〔拾六〕三 為家「いせのあまのつりの浦の桜鯛のあかぬなごりにたちやかへるらん 〔和名抄〕十九ノ三 鯛 太比〔万〕十六ノ十八 鯛つりかこ〔同〕十六ノ廿六 鯛願ふ（タイネガフ）われにな見せそ

たび 度 折ト心エテヨシ〔クラ記〕上ノ卅八 例のかうやうのさるべき所ハなにとなくあまたたびのぼり上下べちのろくなどたまひ あたして〔紀貫集〕わきまへ院の御事ハかみな月の十日あまりのころよりのついでも面白かるべきたびの るまりけれバ〔梅〕四ノ十一 たびにまかりける人にいかなるらんとむねのつぶれて〔同〕九ノ廿三 あはれなど あるたびの待をもとてげにえかうまゐるを〔同〕九ノ七 よかるべき袍きころもたびの旅人になるかうまゐる 年すぎたる〔栄花着裳〕五 法花経一部あまた経四十九巻をさくせうせさせ給ふ みたびのほ 法ゝをすてたゞしくちんにのまゝてつかうまつる〔枕〕十 たびごとにめづらしからんをいかゞへせん〔枕〕十ノ卅六 人の良に とり見えてようのゆるへたびごとにめでたしともおぼえつゞけしことこそ見まほしけれ〔狭衣〕三下ノ四十八 法ありさる状 たびごとに微ことえ法なをさごろしにまよさぬるのめろゝくば

たびかさなる 〔古今〕長三〔西せん〕五ノ八 嬢のくつまよりかよひ侍るをたびかさなるをたびかさなるとへ 〔六帖〕三 あふことをあこぎの島にひくたひのたびかさならば人もしりなん〔散木〕十一 あまたへやきに 紅ひ侍るをたびかさなりてたゞならず侍れバ〔続紀〕廿八 多比重宜久

たびく 〔いせ物〕十三段 よろこびてまつにたびくるとねまれバ〔相撲〕十三 かくこれ侍ごとゐびくうけあかりめりぬのぐ ゆく人ゆをかへり侍らんとて立ちのきぬ〔狭衣〕三下ノ四十八 大殿も神殿に来り 〔東屋〕二 みの尾君のもとより乙母ぬの方ゆのあひしさあるをたびくめのあゝしおとせ侍れど〔枕〕四ノ廿四 雪山ノ ふえ さかたそゆるるゐ入てまかれいへバ 法隆たびくかさぶみてかくてへんつうはつりそぐさゞわざなりけきとの使人 ふあざえふの子見えつゝあれたびく子よきとあへさまゝるゝし〔秋玉〕四 あふもえさりきいのちあへちの山よ又たびく浅のなをを みんとて〔拾玉〕二ノ一 冬の秋るゝ海のその千ゆ秋風のたびく葉をあこぎらゐんぬるゐ〔山家〕下 暮ゞ〔明法〕廿 ゑんよりくもとめさでめぬゝつ べきかとぞのほてころざるみれバめやまきえぬどふとうひくのるほざりなしぬほとふらひのろさゝりぬ

ることと悦びきこえたまふ

附

このたび 此度 〔古今〕序 かくこのたびあつめえらばれて山下水のたえず浜の真砂の数おほくつもりぬれバ〔同〕旅 此たびハぬさもとりあへず手向山もみぢのにしき神のまにまに〔宇治拾〕五 ぞ 此たびハまけにけり〔宇治拾〕八ノ十 このたびハ但ゆてめさるべきたびにあらねどもしるしにいまへよりてめさるゝなり

そのたび 其度 〔散木〕中ノ廿一 山路らくかりてそのたびゐへの海とのゝさひをうらをとひくのかみせかひし るれ見ひのそてらぬてよめる〔宇治拾〕二ノ廿三 乃試ねいさく見かりたるに見えたにそのたび出旅 吹やうらく

いつまのたび 〔栄花浅海大縫〕十三 いづれのたびのほかりきこゆろへひとつ車にまさりひとつとおもに それよそ〔万〕四ノ廿三 みたびぞ見ればさへかくまゐりし〔千載〕秋下 基俊「たちゐるにかへりてかうから あまもりたびハ午こひまさのまへむる〔奈良使〕五十九 ひとたびかさとかちらふ

たび 旅 境ヲコエテ行ヲ云フハ常ノ又近キトコロニ行テ居ルヿヲモ常ノ住居ヲハナルレバシカ云ヘ〔拾〕別 能宣 「草枕さまのこうやかとまくらの恋のかたひとう蓋まもる〔後拾〕菱原為政「水ひたの白糸えへてむすぶれさ 起枕のあはたちやるらん〔拾遺〕十 旅までにして侍りける

たびね 〔拾遺貴外〕十二「立ちぐるむましまとむろゝしまぐく旅寝の山に見やちるらん

たびつと 〔天〕十六 清輔「たびつとにえるゝれいとかろくと浜をおつらさやこ見へぬ〔万〕廿ノ廿二 旅と℃まづびえたりね ひへのもおえせし衣にあつつえゆそり

〔後拾〕十五「旅なめ夜のあはそひやら波し〔山家集〕上 たびねの床に涙る月影 さえぐゝなゐへたびねさらふにたとひやら波し〔新古〕十六 二十 わ川のまるのうへをえつるかりたびねの袖もつゆぞうゝ見 衣〔古今〕羇旅「思ふどち春の山べにおもむきてそこともいはぬたびねしてしか〔帚〕廿 内るさうのたびねもすさま かゝるへく〔同〕十四 女遠近たびねハねかひとうしえく心ぞさるべえを〔推〕廿四 んやりあるたびねのやどりハ

たひところ 〔栄花根合〕卅 正月八日又やけぬ冷泉院に中宮もとりこらせたまひぬ皇后宮ハ東香殿上あがりき

おもしまた宮こへのつかひはおもしまかくたびかなしなどいふ所の僧上人道清言ありやなきとひ
あひたるもひとなし［源］十四 かゝる旅なりともいとかくはおぼしけりとも［蓬］十六 例ならぬ旅ゐのほどいとこゝろぼそき
びなき［荻］十三 巣ノ宮御方イヲ大将こともなく海上にあるをまちて旅ゐなれくわびしく思ひやらせんとて

たびのまゐ

［夫］廿三 師時公「旅の空あはれをそへて雪ふかき篝すゝろぎりてのぞきける

たびゐ

［日本紀竟宴］「ほのぼのやわが袖さへて波の上のおきをふしてたひ居まちけるかな［関屋］初とまりの
旅ゐもえしらずに云々 旅まさるならば又もあまたにたひゐするほどこそあかなかなひて［東屋］四十一
まちうとのあはせるかどの山たひゐにおくるしとこそ云［散木］上 小山の辺に満ちて花ぞわきまでゆく人まねる旅ゐ
あのなかにくらべたけるつぎに旅ゐしける取てある［同］かしなれの秋の小旅ゐしてあのはへを見ましらましとまひとく
［夫］廿六 堀川右大臣「山里の苑の旅ゐへ常をしくにぞせんとなりけり このうたは関白ゐなにはとなるかへんと
あやくてゆりあへに常の時ひたるを守てと云

たびのそら

［撰］十二 隔しき旅の空はいかにはかなくものやけん［同］十三 秋 院「かく旅の空にはあらん秋
にあくられにけるを［拾遺］ましらに［六帖］弘恒［恕恒］「吉からの重きひとはかなく方をたびの空にや
まさらさえ［後拾］廿十 伊勢大輔「さよふかくたびの空にてなくかりはおのが羽風やねさむらん

たびやどり

［夫］廿六 為遠「ひまもなく物思ふ時の旅やどりいかなるまゝなら月のさやらん［新古］廿五 清輔「へ
あやしき馬をもの見えるをも旅のやどりのあるやうなど人のまるをおかしやら
ましく 云々

たびやつれ

［夫］廿五 季経「うき月もあるくたびやつれまとひつゝなにおもどなくるらん［月詣集］成範「ゆきかれ
のまびしなどむかしたびやつれは見るからにすみつゝ［玉葉］旅 為家「すまし眼旅のやつれにひとりびと
へく朽こひしみそくれの空

たびごろも

［拾古］別 ゐてなくまかりけるへに旅衣つくりてとて 貫之「秋萩の下葉衣あきてくさまつ雨そぼちける

くさまくらも

たびごゝち

［古今］秋下 兼覧王「秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞ旅心ちする［撰］五 まちらこゝのへく
家をたびの心地ありやまた里をたくみたる年月のほどおもひめぐらさるべし

たびありき

［続世継］序 やうこの方へたびありきし侍りしに

たびゆく

［古今］羇 「ことしげくかく秋の萩に錦たちて旅ゆく人をとゞめまし［夫］廿二 寂然 素意「秋風に吹きあかしの
里に旅はあはれ一たびゆく人の道ならねもなし［同］同 義孝 菅兼「逢坂やたびゆく人のたちのみならに
一名もしらず「蝉の声にやたる山の木の下やたびゆく人の宿りなるらん［同］廿八 定家「葛城
木のまの山路の村しぐれたびゆく袖をぬらしつるかな［寛元］八 雲のかかれるきしかも「大空を山へたのむまゝ月にたびゆく
雲をあととや思ふらん［拾遺］別 右大臣「旅にだにあてしとおもひし人もなくなりける［夫］廿六 恋草「旅を
ゆきしわたこのあまりものくにそまさ一すめやけさこそ

たびにまかる

［拾遺］別 旅にまかりけるに云

たびまくら

［関屋］三 関屋よりさてつゞけるたびぢなる人のまをのつきぐしきひねくりちも
のまみしらるるさちかしとん宮

たびねざめ

［義経］上 女あの宮うぶ末のゝかく侍りあつひてゆくにつまでかあやまさまへしなどつまびも
とゞめよれどたびねざめしけ旅ゐまろん［拾遺］十五 年はつかとおもへたびねざめにせよとは
あてゝひそろあまるさつらん［夫］廿六 能光「あまり眠るまのまむ野のあさたちぬかまゝのそらやられつ旅
おとゝ

たびびとち

［和泉式部集］上「あまりなきるは旅の中にみをぞもえたびびとの遠くなりけり

たびびと

田人［家百首］武田へものうたてくるを守てしらずて

たびひら

平［家百］全［後撰］雑三 峯雄「おしみてぞ守りたひらはなきりでん山の端なくも月もみえらじあ

［玉佐旨施］

ぬ

かの國までたひらかにねがひける [うつほ] 上十五 昔ハ人のかくたひらかなる世にもあらざりしかどのるをかゞみひなかみ
物とるかひたりけり [六帖] 六ノ上「君が代をつきせぬ菊の花なればたひらかにこそ白ふべらなれ [栄花] 四十六 東宮の御
代をたひらかにおはしますべきとのみおもしく [玉かつら] 四十 まして大臣もくたひらかにおはしまさばとそれ営みたまへなど
さむ [廿衣] 四ノ下 四十六 いとかくたかゞいのちたひらかにあるしもなべて君びつくつねにおえさせたまひなん [散木] 中ノ十三 父の維信ツクイシ三
ナラリト云ニ 見ゆるもたひらかにのみつくられなんやがてかへりたまひぬべきなうにおかくなりけむどもこそありなとかまに [同] 十六「ありし
浪のひくあかりけむあまでゆもたひらかにありけるあるを [萬葉集]「おきごかある荒礒にたつ浪なり巴え
たひらけくこそその見が國ら、わ也 。コレヨリ以下ハ子ノウムヿニ云リ [うつほ] 七 女にてたひらかにへしるひとなかぶら [栄花] 廿 たひ
らかにあるのありなそぬ也べ [栢木] 女三ノ子ノウミ玉フ所ニ くるしきさまなるをたひらかにとたゆにゆぞ好まれむなきまらん [同] 十三 めづらしき
ゆるのたひらかにこそあれてあしよ也ほにゆきしおほかれに [栄] 六十八 初琴をやんごとなきおもてもちひて御産たひ
らかにまつ教化したる

たひらぎ

[栄花玉のむら] 十 此殿のけたひらぎたるさまなるを

たびしかはら

・[谷川士清日] 日本霊異記ニ礫ヲ タビイシトヨメリ タビハ飛ト通ス 飛礫ノ義ナリト云リ。雅望按ルニ
谷川ノ説正義也其余ハ皆臆説ナリ云ニ足ズ [古今著聞] 廿二 川のほとりなるものどもひのきたえねまや
岸の中より水のながるらん たびしかはらもとゆふきとても云フ 此文石ト云歌ヨリ たびしかはらトツヾケタルヲモテ証トスベシ
石瓦ト云ヲ 賤キモノニナゾラヘ云ルハ今テノ世ニ賤キモノハ 常談ニ子コモシヤクシモトエルニ同ジクナヘテノ人ヲサシテイヘル
ヿナルベシ [元輔] 廿九 弟なるひと人もありこの世のたゞはしまりあけるゝに みやくらんなのちかたのむくまかゞ也と
わらぬたびしかはら [夫木] 九 たびしかはらどまでよろこびもよなる法師ありなまりみゝともちるを [拾] 女房恵風
ざれで其里よりくるものともなくえかへることたびしかはらとの浪ぐいつかこれをかなくきたりし・・英之ガ白川
大殿の東の子の日の亭にて 草枕たびしかはらまで松の千年もえへとのをいのりて

たもと

[古今] 恋二 [未詳] 廿「からころも……

す

なりたゞかくぞえぞろつくのみ [拾遺] 雑 よみ人しらず「これたゞでうつくといふひとのわかるゝかたらなんかうもゆ
[清輔] 恋二 清正母「ふりさけぬ君がきけのまや思ひたのみとほこけぬおもひゆかなり [山家集] 上「よきかこともつまもながたとぶ
ふひでハことゝもどき月のやどるだにかぞ [古今] 雑上 よみ人しらず「うまでさ我かゆつはんやも衣たのむと思ふにたもとよそますを
[和泉式部集]「これがれへおのぬまたる夜ぞよこでぬそでかまもうちむる [同続集]「かり衣うまにもそかるのかかなべても
とよくしもおもしとぞおりの [東北院歌合]「たのむくさるものゆかぶむしのこの衣の袖もそかちてぬる [万] 八 廿六 [拾遺] 秋
秋たちていくかもあらねばこのねぬる朝けの風はたもとさむしも [夫木] 十二 後京極殿「月残るいろ秋のむらあまもみて菊
のたゞもとたる比

たのむ

[新古] 釈教 寂然「すたつきのふかき罪にまつむあきらかせぞたのめ今ひとりのむとみよ [新後] 釈教 寂然「いつさまの
心あるじ思ふにてたのむる法のはことゝまりなれ [長秋詠草]「思ひ出をかさねるひのむかしも恋のぞてべ
佛よろこびかよふ [続紀] 廿七 欲保社稷 [月清集] 上 此法にうけてたのむる我しなくなてんたるがなり [柿] 十二 以下ぞ
世のゆたのむべきさりあるべかり [好忠] 四十八 世我たのもちゆあんかえぞうりありはやくかゝるさせあそ [画合] 廿三 齢
たらでつくさりある身のぶり世にぬけぬるおのかくいはんたのむきぐありすり [人丸] 下 [拾遺] [万] 十一 千草ぶかれ
秋の是もとるいのちをもたがこゝろとうやつけまのうるきくに [栄花花衣] 四十 そいたゞ御命をおほせくく 今たに
たのむ世のゝはらぬるをそれなうらんぜざらん [帚] 九 えんでかあつしきいらまでもつゝむひをおまちへものまかむおなり
とまへえてたのむとかく女のたのもんゆつあしえなうらでなり [同] 吉 こゝまてええたのがすぐたのもしげなる
かつるるる

たすく

助

万ニワタリテ云リ [菊ノ安] 下ノ十 人の命我たゞしくとおのれ一てはかるゝーたゞのうるへ [帚] 九 かゝる事をにたすけ
けれゑもたゞにのびさゝ [文良] 四十 又そうくたもけらまゝあひて上二条院へまいりあひたる [同] 日
惟光そひたまもけくおかしまうさうする [同] 四十 以人のたつけみかし思ひたるをもそてこたもけつきさゞらんに [かげろふ] 一 一部
おさつぐれにゆるもかひたまとまてまうりあへよゝそのま あまに [蓬生] 十二 九衣のうもようがひさすましけれバきのき

837
13
79

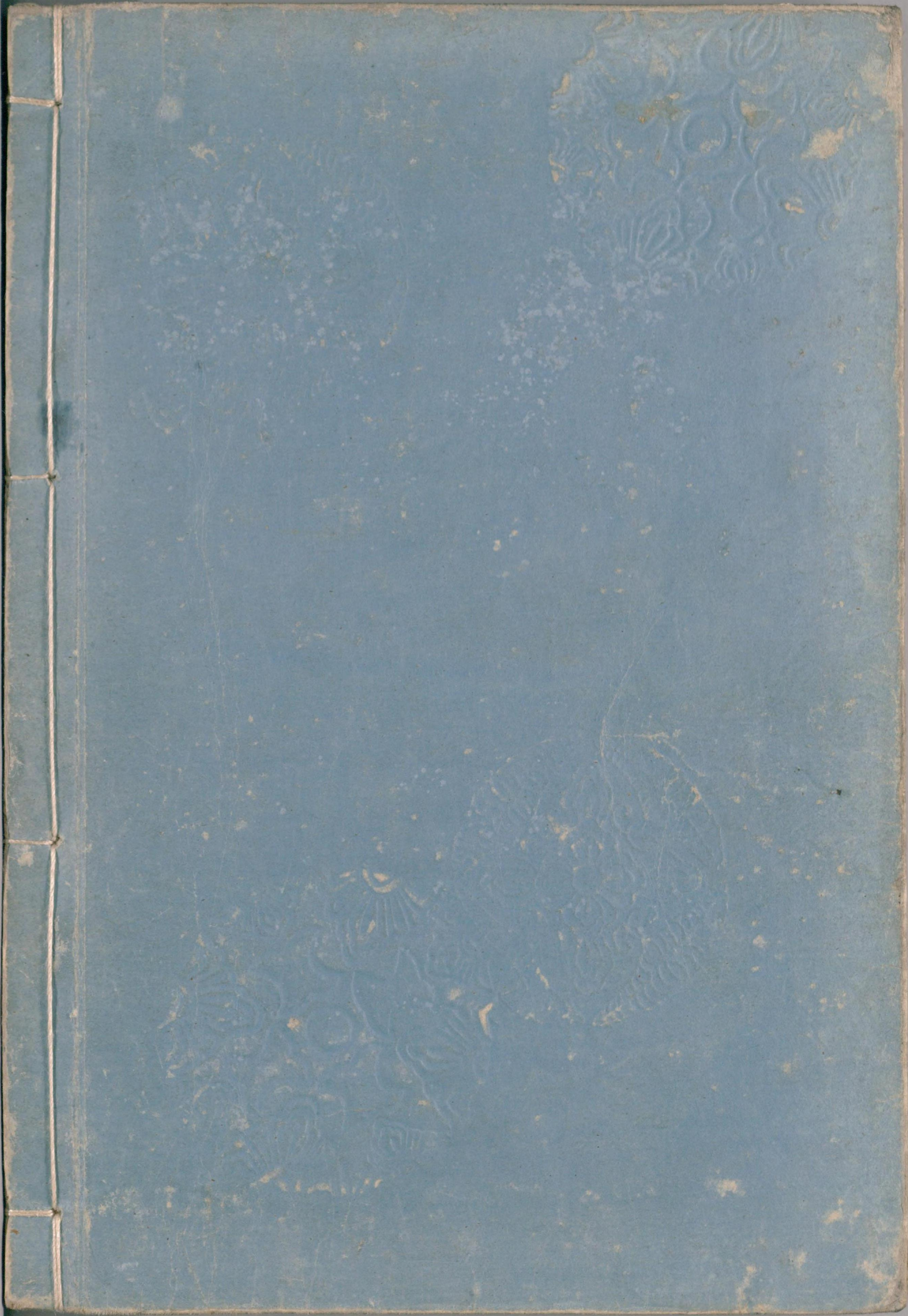
ごもたすけてとらくわけさるゝぞ 文徳実録 十ノ十四 今ハ毛ヵ才ヵ菩薩ノ相助ヶ護賜ニ依天 末四 廿八 翁門をみあけゆるはへよりてひろたたすくるいとらくあり 桐ノ壺 おほやけのかためとなりて天の下たすくる方にてみれば 續紀 廿九ノ十六 先乃皇我御灵大助給比慈給比撫流物奈禮

たすけ

助体語 あかし 大神のたすけにかゝるべかりけるこの君を愛めて 同 七ノ一 海にます神のたすけにかゝらずは塩のやほあひにさすらへなまし 山家集 下 大浪にひかれ出たる心地してたすけ舟なき沖にゆらるゝ 平家物語 四ノ卅四 汀へたすけ舟どもいくらもありけれども

たすき

万 十六ノ七 母にうだかえ揺襁（冬ゝ斉多） 芳院 下 十三 二宮のあざやかなるかの袖のひとかさね織物の表衣たすきかけの宿たる冬今ぞこしの白きあやの宿を一くさ摺をかへてたすきかけてものとをかしく 云々 松 八ノ十三 ろゆえお尼ふそきする児のえいとうつるーたすきかけにゆひたる腰のゝみの白うをかしげなるふようなる 同 八ノ三 ろゆえ紐のとどうくえたる児の二つばかりなるが白うくるーえ紐が二藍のうすものあかず夜のみゆくてたすきあげたるぞひかすもいとうつくし 落窪 十 たゞ姫君のたすきかひなくるむすびつれぞうつくしげさそひてえへる 和名抄 十二ノ廿 襷 襅 多須岐 大祓詞 六月祓手襁挂（タスキカクル）伴男 夫 十四ノ二 永仁大嘗會 後光々 天てらす日うけのたすきかけてまくものぞやそのゝ神 延喜式 十五ノ十三 内藏寮 機覆并襷襅（タスキヌノ） 神代紀 上 十八 手襁此云多須枳 万 十二ノ廿六 玉だすきかけねばくるしかけたればつぎて見まくのほしき君かも 己 二十五 たすき ノ十二 出

雅言集覧巻之七 終